

鳥取県米子市

BAKU ROU MACHI  
博 労 町 遺 跡  
II

2022.3

一般財団法人 米子市文化財団



1区鎌倉～室町時代の畠と低湿地（南東から）

鳥取県米子市

BAKU ROU MACHI  
博 労 町 遺 跡  
II

2022.3

一般財団法人 米子市文化財団

## 序

当財団では、令和2年度から3年度にかけて米子市の委託を受け、啓成小学校校舎等改築工事に伴い博労町遺跡の発掘調査（第2次調査）を実施しました。

調査の結果、弥生時代終末期から古墳時代前期と古代の集落跡、中世の畠跡などを検出しましたが、古代においては、官衙に関わる遺物が出土しておらず、第1次調査で確認された官衙は第2次調査地までは広がらないことが明らかとなりました。また、縄文時代晩期と弥生時代中期から後期の遺物が出土しており、新たに人々の活動の様子を窺い知ることができました。今回の調査によって、日野川左岸の砂丘地での集落の形成や人々の活動について、貴重な一資料を得ることができたと思います。

この度、調査成果をまとめ、発掘調査報告書として『博労町遺跡Ⅱ』を刊行することができました。本報告書が、今後、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財に対する理解、関心がより深まることを期待しています。

最後になりましたが、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ、ご指導・ご助言をいただきました関係各位に対し、心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

一般財団法人 米子市文化財団  
理事長 杉原 弘一郎



## 例 言

1. 本報告書は、米子市が計画する啓成小学校校舎等改築工事に伴い、令和2年度から3年度にかけて米子市博労町4丁目地内で実施した博労町遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、米子市の委託を受けて一般財団法人 米子市文化財団が実施した。
3. 島根大学 総合理工学部地球科学科 自然災害軽減教育研究センター 酒井哲弥氏には調査地内の地層堆積について現地指導及びご教示を頂き、玉稿を賜った。記して感謝いたします。
4. 出土遺物を整理、評価するにあたり、縄文土器を鳥取県とっとり弥生の王国推進課 濱田竜彦氏、石製品の石材鑑定を鳥取県とっとり弥生の王国推進課 高橋章司氏、陶磁器を米子市文化振興課 佐伯純也氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。
5. 本発掘調査における各遺構面の空中写真撮影、自然科学分析、出土金属製品の保存処理は業者に委託した。また、金属製品の透過X線撮影は鳥取県埋蔵文化財センターの協力を得た。
6. 本報告書に掲載した遺物の実測、浄書は、一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室で行った。
7. 本報告書で使用した遺構、遺物写真は調査担当職員が撮影した。
8. 本報告書の執筆及び編集は、高橋と京嶋が行った。なお、文責は執筆箇所の末尾に記した。
9. 発掘調査によって作成された図面、写真などの記録類及び出土遺物は、米子市埋蔵文化財センターで保管している。
10. 現地調査及び報告書の作成にあたっては、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします（敬称略）。

岩佐武彦 梶浦由佳 角野貴信 國田俊雄 佐伯純也 酒井哲弥 下高瑞哉 高田健一  
高橋章司 徳永 隆 中原 計 濱田竜彦 濱野浩美 平山晃基 水村直人 渡邊正巳  
米子市立啓成小学校

# 凡例

1. 遺跡の略称は「BKRM II」とした。
2. 本報告書におけるX、Yの座標値は世界測地系の平面直角座標（第V系）で、図中ではm単位でX-〇〇,〇〇〇、Y-〇〇,〇〇〇と表記した。方位は座標北を示し、レベルは海拔標高を示す。
3. 本報告書における遺構名（記号）及び遺構番号は、下表のとおり発掘調査時のものと一部変更している。遺構記号は、下記の記号を用い、遺構番号は、第4層層準の遺構は先頭に1を、第5層層準には2を、第6層層準には3を付け、数字を付さない第2層層準の遺構を含めてそれぞれ1からの通し番号とした。SB：掘立柱建物、SI：竪穴建物、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝状遺構、P・SP：柱穴・ピット、SX：その他
4. 本報告書における遺物の縮尺は以下のとおりである。  
土器・陶磁器：1/4、土製品：1/2・1/4、石製品：1/1・1/4、金属製品：1/2
5. 遺物番号は、遺構ごと、時代ごとに通し番号を挿入中に付したが、複数の遺構からの出土遺物が含まれる挿入図では図中での通し番号とし、キャプションと図中に遺構番号を明示した。本文、遺物観察表及び写真図版でもこの遺物番号を踏襲した。
6. 遺物実測図のうち、須置器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで示した。
7. 遺物観察表の法量記載における（ ）は推定復元値及び現存値を示す。

旧遺構番号	報告遺構番号	旧遺構番号	報告遺構番号	旧遺構番号	報告遺構番号	旧遺構番号	報告遺構番号	旧遺構番号	報告遺構番号	
古墳時代 竪穴建物		古墳時代 竪穴建物		古墳時代 掘立柱建物		古墳時代 土坑		古代 甕・碓化甕		
SK309	S1301	SK316	S1309	SI3304	変更なし	SP301	SK301	SK204	SK201	
SK309-P1	S1301-P1	SK316-P1	S1309-P1	SP320	P1	SK303	SK302	1区かまど跡	碓化甕 201	
SK309-P3	S1301-P3	SK317	S1310	SP321	P2	SK304	SK303	2区かまど跡	碓化甕 202	
SK309-P4	S1301-P3	SK317-P1	S1310-P1	SP322	P3	遺構番号なし	SK304		井戸	
SK309-P5	S1301-P4	SK317-P2	S1310-P2	SP323	P4	SK328	SK305	SK201	SE201	
SK309-P7	S1301-P5	SK317-P3	S1310-P3	SP324	P5	SK328	SK306		土坑	
SK310	S1302	SK317-P4	S1310-P4	SP325	P6	SK329	SK307	SK202	変更なし	
SK309-P2	S1302-P1	SK317-P5	S1310-P5	SI3305	変更なし	SK330	SK308	SK203	変更なし	
SK309-P6	S1302-P2	SK318	S1311	SP326	P1	SK331	SK309		溝	
SK310-P1	S1302-P3	SK318-P1	S1311-P1	SP327	P2	SK333	SK310	SD209	SD201	
SK310-P4	S1302-P4	SK319	S1312	SP328	P3	SK307	削除	SD211	SD202	
SK310-P2	S1302-P5	SK319-P1	S1312-P1	SP329	P4		溝	SD202	SD203	
SK310-P3	S1302-P6	SK321	S1313	SP330	P5	SD301	変更なし	SD208	SD204	
SK310-P5	S1302-P7	SK324	S1314	SP331	P6	SD304	SD202	SD102	SD205	
SK311	S1303	SK325	S1315	SA301	変更なし	SD305	SD303	SD303	SD206	
SK311-P1	S1303-P1	SK325	S1316		SP350		その他		竪間溝状遺構	
SK311-P2	S1303-P2	掘立柱建物			SP332	P2	SK301	変更なし	SD213 ~ 215	竪間溝群 201
SK312	S1304	SB301	変更なし		SP333	P3	SX201	SX302	SD216	削除
SK312-P1	S1304-P1	SP306	P1		SP334	P4	古代			
SK312-P2	S1304-P2	SP307	P2		SP335	P5	掘立柱建物			
SK334	S1305	SP308	P3		SP336	P6	SI3301	変更なし	中壁	
SK334-P1	S1305-P1	SP309	P4		SP338	P7			甕	
SK313	S1306	SP310	P5		ピット				竪	
SK313-P1	S1306-P1	SP311	P6	SP428	SP301		SP201	P1	品 1	品 101
SK313-P2	S1306-P2	SP312	P7	SP437	SP302	SI3302	SP202	P2	品 2	品 102
SK313-P3	S1306-P3	SP314	P8	SP470	SP303		SP203	P3	品 3	品 103
SK313-P4	S1306-P4	SP315	P9	SP478	SP304		SP205	P2	品 4	品 104
SK313-P5	S1306-P5	SP316	P10		井戸		SP206	P3	品 5	品 105
SK313-P6	S1306-P6	SP317	P11	SK301	SE301	SI3303	変更なし	P3	南北並置	変更なし
SK314	S1307	SP318	P12	SK302	SE302		SP207	P2	東西大堀跡	変更なし
SK315	S1308	SP319	P13	SK305	SE303		SP208	P1	南北大堀跡	変更なし
SK315-P1	S1308-P1	SP313	P14	SK306	SE304		SP209	P3	SD101	低遺構 SD101
SK315-P2	S1308-P2	SP305	P15	SK308	SE305		SP210	P4	SD103	SD102
SK315-P3	S1308-P3	SB332	変更なし	SK320	SE306	SI3304	変更なし		中壁	
SK315-P4	S1308-P4	SP302	P1	SK322	SE307		SP211	P1	溝	
SK315-P5	S1308-P5	SP303	P2	SK327	SE308		SP212	P2	SD01-16	変更なし
SK315-P6	S1308-P6	SP304	P3				SP213	P3	SD117	削除
SK315-P7	S1308-P7						SP214	P4	SD118	SD17
SK315-P8	S1308-P8						SP215	P5		土坑
SK315-P9	S1308-P9						SP216	P6	SK01	変更なし
SK315-P10	S1308-P10						SP217	P7		
							SP218	P8		

# 目次

序	
例言・凡例	
第Ⅰ章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	3
第4節 調査体制	4
第Ⅱ章 遺跡概観	5
第1節 自然・地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の概要	15
第1節 調査の方法	15
第2節 調査区の層序と堆積状況	16
(1) 更新統以前の堆積	16
(2) 完新統の基本層序	16
第Ⅳ章 検出した遺構と遺物	25
第1節 縄文時代晩期～弥生時代後期	25
(1) 縄文土器	25
(2) 弥生土器・石製品	31
(3) 小結	34
第2節 弥生時代終末～古墳時代後期	38
(1) 竪穴建物	38
(2) 掘立柱建物・柵列	64
(3) 井戸	70
(4) 土坑	78
(5) 溝	81
(6) 地層出土遺物	88
(7) 小結	92
第3節 奈良～平安時代	98
(1) 掘立柱建物	98
(2) 竈・硬化面	100
(3) 井戸	101
(4) 土坑	102
(5) 溝	103
(6) 畝間溝状遺構	105
(7) 地震痕跡	105

(8) 地層出土遺物	108
(9) 小結	108
第4節 鎌倉～室町時代	113
(1) 畠	113
(2) 里道・大畦畔	115
(3) 低湿地	117
(4) 地層出土遺物	118
(5) 小結	118
第5節 江戸時代	125
(1) 溝	125
(2) 土坑	131
(3) 小結	131
第V章 古環境復元と人間活動	133
第1節 博労町遺跡の砂の特徴	133
(1) はじめに	133
(2) 方法	133
(3) 結果	133
(4) 考察	134
(5) まとめ	136
第2節 古環境分析	137
(1) 分析試料と分析方法	137
(2) 花粉分析	141
(3) 植物珪酸体分析	148
(4) 種実同定	148
(5) 鉍物分析	152
(6) 考察	152
(7) まとめ	157
顕微鏡写真	159
第3節 博労町遺跡における人間活動の変遷	167
(1) 縄文時代晩期の地形環境と人間活動	167
(2) 内浜砂州の安定と初期開発	167
(3) 行政施設の設置と砂州の液状化	168
(4) クロスナの活用と飛砂被害	168
(5) おわりに	170
第VI章 まとめ	171
遺物観察表	
原色図版・図版	
報告書抄録・奥付	

## 挿図目次

第1図	調査地位位置図	1	第42図	2区SI311出土遺物	58
第2図	1区調査風景(北から)	2	第43図	2区SI310出土遺物	59
第3図	米子市周辺の地質図	5	第44図	2区SI312平・断面図	60
第4図	米子平野と弓ヶ浜半島の地形区分	5	第45図	2区SI312出土遺物	60
第5図	現米子市の地形と調査地	6	第46図	2区SI313~315平・断面図	61
第6図	大山西・北西麓の縄文時代遺跡の分布範囲	7	第47図	2区SI313出土遺物(1)	62
第7図	大山西・北西麓の主な弥生時代遺跡	9	第48図	2区SI313出土遺物(2)	63
第8図	博労町遺跡第1次調査出土の小型倭製鏡(1~3)と船形土製品(4)	10	第49図	2区SI314~316出土遺物	63
第9図	博労町遺跡第1次調査出土の石帯(1)・銅製帯金具(2~5)・石製錘(6)	11	第50図	2区SI316平・断面図	63
第10図	博労町遺跡第1次調査出土の鉄製紡錘車	11	第51図	1区SB301平・断面図	65
第11図	第2次調査の地区割図	15	第52図	1区SB302平・断面図	66
第12図	博労町遺跡と米子低地南部の層序模式図	16	第53図	1区SB301・303出土遺物	67
第13図	博労町遺跡第7層上面の地形復元図	17	第54図	1区SB303・SE305平・断面図	68
第14図	弓ヶ浜半島(砂州)の新砂丘の分類と内部構造概念図	17	第55図	2区SB305ほかPit出土遺物	68
第15図	1区地層断面図(縦横変倍)	18	第56図	2区SB304・305、SA301平・断面図	69
第16図	2区地層断面図(縦横変倍)	19	第57図	1区SE301平・断面図	71
第17図	縄文土器(1)	32	第58図	1区SE301出土遺物	71
第18図	縄文土器(2)	33	第59図	1区SE302平・断面図	71
第19図	弥生時代の遺物	34	第60図	1区SE302出土遺物	72
第20図	古墳時代遺構全体図	35	第61図	1区SE303平・断面図	72
第21図	1区古墳時代遺構全体図	36	第62図	1区SE303出土遺物	73
第22図	2区古墳時代遺構全体図	37	第63図	1区SE304出土遺物	74
第23図	2区SI301・302床面遺構断面図	38	第64図	1区SE305出土遺物	74
第24図	2区SI301・302平・断面図	39	第65図	2区SE306平・断面図	75
第25図	2区SI301出土遺物(1)	40	第66図	2区SE306出土遺物	75
第26図	2区SI301出土遺物(2)	41	第67図	2区SE307、SD302平・断面図	76
第27図	2区SI302出土遺物(1)	43	第68図	2区SE307出土遺物	77
第28図	2区SI302出土遺物(2)	44	第69図	2区SD302出土遺物	77
第29図	2区SI303平・断面図	45	第70図	2区SE308平・断面図	77
第30図	2区SI303出土遺物	46	第71図	2区SE308出土遺物	78
第31図	2区SI304・305平・断面図	47	第72図	1区SK301~303平・断面図	79
第32図	2区SI304出土遺物(1)	48	第73図	1区SK304、2区SK305・306平・断面図	79
第33図	2区SI304出土遺物(2)	49	第74図	1区SK303、2区SK306出土遺物	80
第34図	2区SI305出土遺物	50	第75図	2区SK305出土遺物	80
第35図	2区SI306~309平面図・床面遺構断面図	52	第76図	2区SK307~310平・断面図	81
第36図	2区SI306~309断面図	53	第77図	1区SD301平・断面図	82
第37図	2区SI306出土遺物	54	第78図	1区SD301出土遺物(1)	83
第38図	2区SI307・308出土遺物	55	第79図	1区SD301出土遺物(2)	84
第39図	2区SI308上部の集石	56	第80図	1区SD301出土遺物(3)	85
第40図	2区SI309出土遺物	56	第81図	1区SX301出土遺物(1)	86
第41図	2区SI310・311平・断面図	58	第82図	1区SX301出土遺物(2)	87
			第83図	2区SD303平・断面図	88
			第84図	地層出土遺物(1)	89
			第85図	地層出土遺物(2)	90

第 86 図	地層出土遺物 (3) .....	91
第 87 図	第 1・2 次調査の古墳時代遺構全体図 .....	93
第 88 図	奈良～平安時代遺構全体図 .....	95
第 89 図	1 区奈良～平安時代遺構全体図 .....	96
第 90 図	2 区奈良～平安時代遺構全体図 .....	97
第 91 図	1 区 SB201・202 平・断面図 .....	98
第 92 図	1 区 SB203・204 平・断面図 .....	99
第 93 図	2 区 SK201 出土遺物 .....	100
第 94 図	2 区 SK201、1・2 区硬化面 201・202 平・断面 図 .....	100
第 95 図	1 区 SE201 平・断面図 .....	101
第 96 図	1 区 SE201 出土遺物 .....	101
第 97 図	1 区 SK203・SD204 出土遺物 .....	102
第 98 図	1 区 SK202 平・断面図 .....	102
第 99 図	1 区 SK203、SD201・202 平・断面図 .....	102
第 100 図	1 区 SD204・205 平・断面図 .....	103
第 101 図	1 区 SD203 平・断面図 .....	104
第 102 図	2 区 SD206 平・断面図 .....	104
第 103 図	1 区畝間溝群 201・202 平・断面図 .....	105
第 104 図	第 1・2 次調査の砂層断面 .....	106
第 105 図	地層出土遺物 .....	107
第 106 図	第 1・2 次調査の奈良～平安時代遺構全体図 .....	109
第 107 図	鎌倉～室町時代遺構全体図 .....	110
第 108 図	1 区鎌倉～室町時代遺構全体図 .....	111
第 109 図	2 区鎌倉～室町時代遺構全体図 .....	112
第 110 図	畠 101 上面に見られる生痕 .....	113
第 111 図	1 区畠 101～103 断面図 .....	113
第 112 図	畠 103 低湿地地の根株痕 .....	114
第 113 図	1 区南北里道平・断面図 .....	115
第 114 図	1・2 区大畦畔断面図 .....	116
第 115 図	畠 101～105・南北大畦畔出土遺物 .....	117
第 116 図	低湿地 (SD101) 出土遺物 .....	117
第 117 図	地層出土遺物 .....	118
第 118 図	第 1・2 次調査の鎌倉～室町時代遺構全体図 .....	119
第 119 図	博労町遺跡と錦町第 1 遺跡の位置関係 .....	120
第 120 図	江戸時代遺構全体図 .....	122
第 121 図	1 区江戸時代遺構全体図 .....	123
第 122 図	2 区江戸時代遺構全体図 .....	124
第 123 図	1 区溝断面図 .....	126
第 124 図	1 区 SD04・07 平・断面図 .....	127
第 125 図	2 区溝・土坑・耕作痕断面図 .....	128
第 126 図	1 区 SD02・05～08 出土遺物 .....	129
第 127 図	2 区 SD10・13・15 出土遺物 .....	131
第 128 図	第 1・2 次調査の江戸時代遺構全体図 .....	132
第 129 図	石英、長石、岩片 (石英、長石以外の粒子) を端成分に取った三角ダイアグラムへの鉱物 組成分析結果のプロット .....	134
第 130 図	石英と長石、火山岩片、その他の岩片を端成 分に取った三角ダイアグラムへの鉱物組成分 析結果のプロット .....	134
第 131 図	米子市博労町遺跡南方の地質 .....	135
第 132 図	試料採取地点 .....	138
第 133 図	SD101 地点断面図 .....	138
第 134 図	畠 2～5 地点 (畝・畝間地点) 模式図柱状図 139	
第 135 図	試料採取状況および鉱物分析試料採取地点断 面図 .....	139
第 136 図	花粉分析処理フロー .....	140
第 137 図	植物珪酸体分析処理フロー .....	140
第 138 図	イネ科花粉の粒径比較図 .....	142
第 139 図	SD101 地点花粉ダイアグラム .....	144
第 140 図	畠 4 畝地点花粉ダイアグラム .....	144
第 141 図	畠 4 畝間地点花粉ダイアグラム .....	145
第 142 図	畠 2～5 地点花粉ダイアグラム .....	145
第 143 図	SD101 地点植物珪酸体ダイアグラム .....	149
第 144 図	畠 2～5 地点植物珪酸体ダイアグラム .....	149
第 145 図	目久美遺跡 1 次調査の花粉分析結果 .....	154
第 146 図	目久美遺跡 9 次調査の花粉分析結果 .....	154
第 147 図	遺跡周辺の地形 .....	156
第 148 図	内浜砂州・中浜砂州の地形断面模式図 .....	169

## 表目次

第 1 表	大山西・北西麓の縄文文化遺跡の分布地区分類 .....	8
第 2 表	博労町遺跡基本層序表 .....	21
第 3 表	器種別組成 .....	31
第 4 表	深鉢の分類別組成 .....	31
第 5 表	深鉢の突帯形状 .....	31
第 6 表	鉱物組成の分析結果 .....	133
第 7 表	分析試料一覧表 .....	137
第 8 表	同定・検鏡対象分類群 (同定分類群と推定母 植物の関係) .....	140
第 9 表	SD101 地点花粉化石組成表 .....	146
第 10 表	畠 2～5 地点花粉化石組成表 .....	147
第 11 表	植物珪酸体化石組成表 .....	150
第 12 表	種実同定結果 .....	151

## 原色図版目次

- |   |                     |   |                           |
|---|---------------------|---|---------------------------|
| 1 | 1区西壁地層断面第1~7層 (D地点) | 1 | 1区低湿地東端地層断面南部 (合成)        |
|   | 1区東壁地層断面第1~7層 (E地点) | 4 | 1区弥生時代終末~古墳時代遺構全景 (北西から)  |
|   | 2区東壁地層断面第1~3層 (南から) | 2 | 2区弥生時代終末~古墳時代遺構全景 (南西から)  |
| 2 | 2区南部地層断面第4b~7層      | 5 | 2区鎌倉~室町時代遺構全景 (北東から)      |
|   | 1区北西部第7a層の砂礫        | 1 | 1区江戸時代遺構全景・米子城遠景 (北東から)   |
| 3 | 1区低湿地西端地層断面 (合成)    | 6 | SB301 周辺第6a層出土弥生土器赤彩甕     |
|   | 1区低湿地東端地層断面北部 (合成)  |   | SD301 出土弥生土器特殊壺、管玉、畠出土磁器碗 |

## 図版目次

- |    |                                   |                           |                                |
|----|-----------------------------------|---------------------------|--------------------------------|
| 1  | 2区東壁地層断面 (南部) 第3~4層               | SE301 埋土断面 (南から)          |                                |
|    | 2区東壁地層断面 (北部) 第1~7層               | SE302 検出状況 (西から)          |                                |
|    | 1区東部地層断面第4a~7層                    | 14                        | SE302 埋土断面および底面検出状況 (北から)      |
| 2  | 弥生時代終末~古墳時代遺構面の空中写真 (合成)          | SE302 完掘状況 (南から)          |                                |
| 3  | 2区北部第6b層上面遺構検出状況 (東から)            | SE303・304 検出状況 (北から)      |                                |
|    | 2区北部第6b層上面遺構検出状況 (西から)            | 15                        | SE303 埋土上部遺物 (14ほか) 出土状況 (西から) |
|    | 2区南部第6b層上面遺構検出状況 (東から)            | SE305 検出状況 (北から)          |                                |
| 4  | SI301・302 床面検出状況 (南から)            | SE305 埋土断面 (南から)          |                                |
|    | SI301・302 完掘状況 (西から)              | 16                        | SE306 完掘状況 (南から)               |
|    | SI303 床面検出状況 (南から)                | SE306 埋土断面 (合成、南西から)      |                                |
| 5  | SI303 完掘状況 (南から)                  | SE306 底面水溜 (南東から)         |                                |
|    | SI304 遺物出土状況 (南から)                | SE306 底面水溜 (北から)          |                                |
|    | SI304・305 完掘状況 (南から)              | 17                        | SE307 埋土断面 (西から)               |
| 6  | SI305 遺物出土状況 (西から)                | SE307 完掘 (北から)            |                                |
|    | SI305 遺物 (5) 出土状況 (南から)           | SD302 遺物 (1・2) 出土状況 (南から) |                                |
|    | SI304 柱穴 P2 (南から)、SI305 床面の遺物 (8) | 18                        | SE308 埋土断面 (西から)               |
| 7  | SI306~309 床面検出状況 (東から)            | SE308 完掘 (西から)            |                                |
|    | SI306~309 完掘状況 (西から)              | SK301 埋土断面 (南西から)         |                                |
|    | SI310 床面検出状況 (西から)                | 19                        | SK302 検出状況 (西から)               |
| 8  | SI310・311 完掘状況 (北東から)             | SK302 埋土断面 (北東から)         |                                |
|    | SI310-P4 内礫出土状況                   | SK303 埋土断面 (北から)          |                                |
|    | SI312 床面検出状況 (西から)                | 20                        | SK304 埋土断面 (南西から)              |
| 9  | SI312 遺物 (10) 出土状況 (東から)          | SK305 埋土断面 (東から)          |                                |
|    | 2区北部竪穴建物完掘状況 (西から)                | SK306 埋土断面 (西から)          |                                |
|    | SI313~315 床面検出状況 (北東から)           | 21                        | SK310 埋土断面 (南西から)              |
| 10 | SI313 遺物出土状況 (北東から)               | SK307~309 検出状況 (東から)      |                                |
|    | SI313~315 完掘状況 (東から)              | SK307 埋土断面 (西から)          |                                |
|    | 2区第6b層上面検出遺構完掘状況 (東から)            | 22                        | SK308 埋土断面 (南西から)              |
| 11 | SB301 検出状況 (北から)                  | SK309 埋土断面 (南から)          |                                |
|    | SB301 完掘 (北から)                    | SD303 埋土断面 (南から)          |                                |
|    | SB303 柱穴断面 (合成、南から)               | 23                        | SD301 検出状況 (南から)               |
| 12 | SB303 周辺第6a層上面遺物出土状況 (北から)        | SD301 完掘 (南西から)           |                                |
|    | SB304・305、SA301 検出状況 (東から)        | SD301 埋土 A 断面 (西から)       |                                |
|    | SB304・305、SA301 完掘 (西から)          | 24                        | SD301 埋土 B 断面北側 (南から)          |
| 13 | SE301 検出状況 (南から)                  |                           | SD301 埋土 B 断面南部 (西から)          |

	SD301 東端 (SX301) 遺物出土状況 (西から)	40	1 区江戸時代遺構面の空中写真 (左上が北)
25	SB201 検出状況 (東から)		2 区江戸時代遺構 (北東から)
	SB202 (上から P1~3、南から)	41	SD01 検出状況 (南から)
	SB203・204 検出状況 (南から)		SD01 埋土 A 断面 (南から)
	SB203・204 完掘 (南から)		SD02・03 検出状況 (南から)
26	竈跡 SK201 検出状況 (南から)	42	SD02 埋土 D 断面 (南から)
	竈跡 SK201 埋土断面 (南から)		SD03 埋土 E 断面 (南から)
	竈跡 SK201 完掘 (南から)		SD07 土留め遺構 (南から)
27	硬化面 201 (北から)	43	SD07 土留め遺構 (西から)
	硬化面 202 (南から)		SD07 水利管理遺構 (東から)
	SE201 (東から)		SD07 水利管理遺構 (西から)
28	SE201 埋土断面 (西から)	44	2 区北部第 2・3 層上面検出状況 (西から)
	SK203・SD201 (南から)		2 区第 2・3 層上面 (南西から)
	SK203 埋土断面 (南から)		SD10 埋土断面 (東から)
29	SD203 (西から)	45	SD15 埋土断面 (南から)
	SD205 (南から)		SD11・13 合流部枕群 (西から)
	SD204 (南から)		SD11・13 合流部枕群 (北から)
30	畝間溝群 201 と SD202 (南から)	46	SD11 埋土断面 (南東から、下部は第 3 層)
	畝間溝群 201 の地層断面 (南から)		SD13 埋土断面 (南東から、下部は第 3・4 層)
	畝間溝群 202 (南西から)		SK01 埋土断面 (東から)
31	鎌倉~室町時代遺構面の空中写真 (合成)	47	縄文土器 (1) (2)
32	畠 101・102 検出状況 (南から)	48	縄文土器 (3) (4)
	畠 103 検出状況 (東から)	49	縄文土器 (5) (6)
	畠 104 検出状況 (東から)	50	縄文土器 (7)、弥生土器・石器遺物
33	畠 105 検出状況 (東から)		S1301 出土遺物
	畠 102 畝間断面 (南から)	51	S1301・302 出土遺物
	畠 102 畝間断面 (南から)	52	S1302・303 出土遺物
34	1 区畠全景 (東から)	53	S1304 出土遺物
	畠 101 全景 (西から)	54	S1304~306・308 出土遺物
	畠 102 全景 (北から)	55	S1308・310・311 出土遺物
35	畠 103 全景 (南西から)	56	S1310・312・313 出土遺物
	畠 104 南部 (北西から)	57	S1313、SB301・303、SE301・302 出土遺物
	畠 103 大型鳥状畝 (東から)	58	SE303~307 出土遺物
36	畠 102 造替え部分 (北から)	59	SD301・302、SE308、SK303・305 出土遺物
	畠 102 造替え断面 (北から)	60	SD301 出土遺物
	畠 102 造替え以前 (北から)	61	SD301、SX301 出土遺物
37	1 区南北里道北部 (東から)	62	SX301、地層出土遺物 (1)
	1 区南北里道南部 (南から)	63	地層出土遺物 (1) (2)
	南北里道北部の礫 (南から)	64	地層出土遺物 (3)
38	畠 104 北部 (南から)		SE201、SD204、SK201 出土遺物
	畠 105 全景 (北から)	65	地層出土遺物
	2 区東西大畦畔 (東から)		畠 101~105・南北大畦畔出土遺物
39	2 区南北大畦畔 (南から)		低湿地 (SD101)、SD05 出土遺物
	2 区南北および東西大畦畔 (南から)	66	SD07・10・13 出土遺物
	畠 105 内 SD102 (西から)		

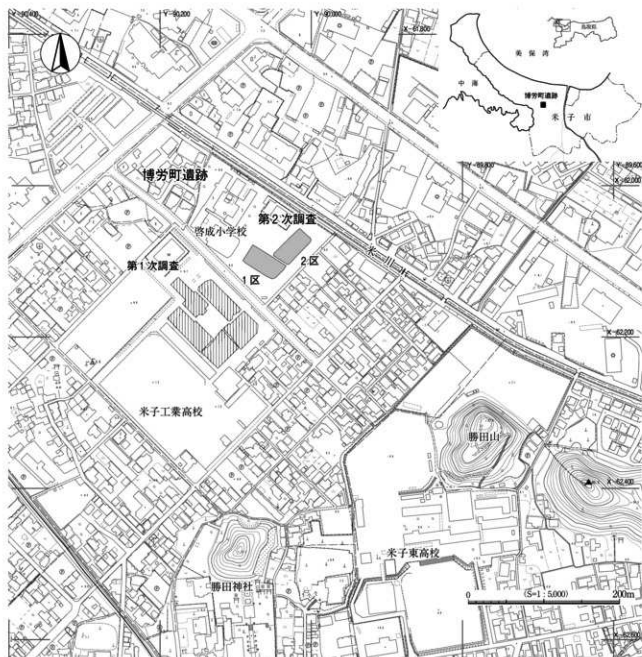


# 第I章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、鳥取県米子市博労町4丁目地内において計画された啓成小学校校舎等改築工事に伴い、工事対象地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。

平成19年度から平成20年度にかけて、工事対象地の南西側に隣接する米子工業高校の校舎改築工事に伴って実施された第1次調査では、古墳時代から近代の遺構、遺物が多数検出され、工事対象地にも遺跡が広がるのが推測された。そのため、工事に先立って工事対象地内の遺跡の有無及びその範囲を確認する必要が生じ、米子市文化振興課が令和元年度に実施した試掘調査では、中世と近世の



第1図 調査地位位置図  
(米子市施設等図2千5百分1を用いて作図)

畠跡などが検出され、土師器、須恵器、陶磁器が多量に出土した。

この結果を受け、米子市と米子市文化振興課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、発掘調査が必要との判断に至った。そのため、米子市は、一般財団法人米子市文化財団に発掘調査を委託することとなり、令和2年度は令和2年4月1日付で米子市と契約を締結し、令和2年8月19日付で文化財保護法第92条に基づく発掘調査届を鳥取県知事に提出した。令和3年度は令和3年4月1日付で米子市と契約を締結し、これらに基づき当財団埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

## 第2節 調査の経過

発掘調査は、工事対象地の3,000㎡を対象とし、令和2年9月25日から令和3年5月31日までの期間で現地調査を行った。

調査対象地は小学校のグラウンドである。試掘調査により、第1次調査と同様に湧水が顕著な砂質土であるとの所見が得られていたため、調査区外周にウエルポンプの排水設備を設置し、掘削壁面は大型土糞で押さえて養生することとした。

排土置場の確保とウエルポンプの排水能力を考慮して調査区を1区と2区の2つに分け（第1図）、1



第2図 1区調査風景（北から）

区→2区の順に調査を実施した。1区の調査は、令和2年9月25日に着手し、令和3年2月3日に終了した。その後、業者委託による1区の埋め戻し及びウエルポンプの撤去、2区のウエルポンプの設置を行い、2区の調査は、令和3年3月8日に着手し、令和3年5月31日に終了した。

調査成果の公開や啓成小学校児童への教育活動として、令和2年11月11日には6年生の理科の授業で調査地の地層の見学・説明を行い、令和3年4月20日には6年生による発掘体験を実施した。また、令和3年5月11日と13日には1年生～5年生の遺跡見学を実施し、令和3年5月20日から22日にかけては啓成小学校区の方々を対象に遺跡見学会を実施し、55名の参加があった。

### 調査日誌抄

令和2年度

9月12日～23日	1区大型土糞設置に伴う立会
9月25日	発掘器材搬入、1区重機による表土掘削開始
10月1日	発掘作業員稼働開始
10月1日～5日	調査地及び周辺環境整備
10月6日	発掘作業員稼働による1区近世遺構の調査開始
10月12日	1区近世遺構面ドローンによる空中写真撮影
10月13日	1区中世遺構面まで重機による掘削開始
10月26日	1区中世遺構の調査開始
11月11日	啓成小学校6年生理科の授業で調査地の地層見学

11月17日	1区中世遺構面ドローンによる空中写真撮影
11月19日	1区古代包含層掘削作業開始
11月24日	1区土壌分析試料採取
1月13日	1区古代遺構の調査開始
1月15日	1区弥生時代終末～古墳時代前期の調査開始
1月21日	高根大学酒井教授調査指導
1月28日	1区土壌分析試料採取
2月2日	1区弥生時代終末～古墳時代前期遺構面ドローンによる空中写真撮影
2月3日	1区調査終了
2月27日～3月3日	2区大型土葬設置に伴う立会
3月8日	2区調査開始
3月8日	2区近世遺構面まで重機による掘削開始
3月9日	高根大学酒井教授調査指導
3月10日	2区近世遺構の調査開始
3月17日	2区近世遺構面ドローンによる空中写真撮影
3月18日	2区中世遺構面まで重機による掘削開始
3月22日	2区中世遺構の調査開始
3月30日	2区中世遺構面ドローンによる空中写真撮影
3月30日	2区古代包含層掘削作業開始

#### 令和3年度

4月12日	2区弥生時代終末～古墳時代前期の調査開始
4月15日	2区土壌分析試料採取
4月20日	啓成小学校6年生発掘体験
5月11日	啓成小学校1・3・5年生見学
5月13日	啓成小学校2・4年生見学
5月20日～22日	遺跡見学会実施 参加者55名
5月26日	2区弥生時代終末～古墳時代前期遺構面ドローンによる空中写真撮影
5月26日	2区調査区際の堅穴建物跡拡張調査開始
5月31日	発掘器材撤収
5月31日	全調査終了

### 第3節 整理作業の経過

出土遺物の整理作業は、令和3年度に実施した。現地調査終了後の令和3年6月から整理作業に着手し、出土遺物の洗浄と注記、接合作業を行った。その後、遺物の実測、トレース、写真撮影を実施した。

一方、現場で作成した記録のうち、後述の遺構実測支援システムを用いて作成した平面図は、

Adobe Illustrator のデータに変換して版下図を作成し、手書き断面図は同ソフトでトレースした。写真図版を含めた本書の編集・版下作成は Adobe 社の Creative Cloud を用いて行い、年度末に報告書を刊行した。

#### 第4節 調査体制

##### 令和2年度

事業主体	一般財団法人 米子市文化財団
	理 事 長 杉原弘一郎
	常 務 理 事 先瀧達也 (一般財団法人 米子市文化財団事務局長)
	埋蔵文化財調査室
	室長兼調査員 小原貴樹
	非常勤職員 田中昌子
事業担当	統括調査員 高橋浩樹
	調査員 京嶋 覚 (令和2年9月～)
	調査補助員 永登朋子
調査指導	米子市文化振興課
	濱野浩美 佐伯純也 平山晃基

##### 調査指導・助言・協力

米子市文化振興課 鳥取県とっとり弥生の王国推進課

##### 令和3年度

事業主体	一般財団法人 米子市文化財団
	理 事 長 杉原弘一郎
	常 務 理 事 先瀧達也 (一般財団法人 米子市文化財団事務局長)
	埋蔵文化財調査室
	室長兼調査員 小原貴樹
	非常勤職員 田中昌子
事業担当	統括調査員 高橋浩樹
	調査員 京嶋 覚 (～令和3年6月)
	調査補助員 永登朋子

##### 調査指導・助言・協力

米子市文化振興課 鳥取県とっとり弥生の王国推進課

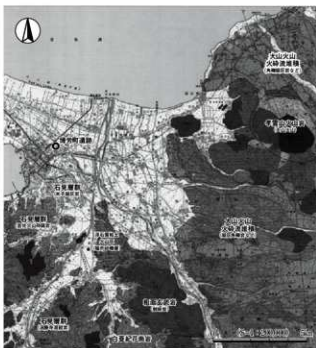
(高橋)

## 第II章 遺跡概観

### 第1節 自然・地理的環境

博労町遺跡が立地する米子市は、標高1,729 mの大山北西麓に広がり、中国山地から続く丘陵性山地や大山火山に由来する火山性台地と、その間を流れる河川によって形成された扇状地や平野を中心とする地形をなしている。米子平野の南部には、中国山地から続く標高100 mを越えるドウド山・行者山・高山などの丘陵性山地が並び、法勝寺川や加茂川がその間を流れ、そこから北に平野を区切るように50 m前後の小丘陵が点在する。

これらの山地は、新第三紀の中新世に、宍道低地帯東端の南縁部に堆積した石見層群と総称される凝灰角礫岩や流紋岩の岩体で構成されており、平野部でも湊山に近い加茂神社境内の露頭や、勝田山丘陵に近い、字「大岩北」の地名が残る本遺跡第1次調査地で岩盤が検出されている。



第3図 米子市周辺の地質図（(地質調査所 1962)に加筆）

日野川と法勝寺川支流の小松谷川に挟まれた標高226.5 mの越敷山（鮮新世玄武岩）の麓から北には、大山火山に由来する標高20～50 mのなだらかな長者原台地が延び、大山山麓から壺瓶山（鮮新世無斑晶安山岩）に向かって、佐陀川と宇田川に挟まれた大谷台地が北西に高度を下げて延びている。

これらの台地は、第四紀の更新世における大山火山の活動で生じた火砕流によって堆積した大量の碎屑物により形成された地形である（第3図）。

また、2005年に米子市域に含まれた宇田川流域の淀江平野も、大山火山の一部である孝霊山の西麓に位置し、古淀江湾から潟湖、沼沢地へと地形環境の変遷過程が明らかにされている（中村唯史ほか1997、渡辺正巳ほか2000）。

博労町遺跡の調査地点は、中新統の岩体である勝田山丘陵に隣接する弓ヶ浜砂州の基部に位置し、地質学的な地下層序は、中新統上の埋没段丘を構成する更新統砂層が標高10～20 mにあり、その上位に堆積した完新統砂層上に立地している（中村唯史ほか2001）。隣接する米子低地は、第四系基底面では中海に通じる内湾環境にあったと思われる（赤木三郎1989）、最終氷期の海面低下で陸地化した後、再び内湾環境になり完新統の中海層の堆積により陸地化していったとされる。



第4図 米子平野と弓ヶ浜半島の地形区分（(井上貴史ほか1997) 図1-7から作図、●が博労町遺跡）

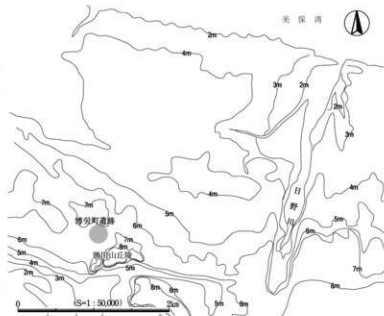
旧米子市域の低地部は、第4図のとおり米子平野と弓ヶ浜半島からなり、博労町遺跡は弓ヶ浜半島の三つの地形区分のうち内浜砂州に立地する（井上貴史ほか1997）。また、弓ヶ浜半島の砂丘区分では、内浜砂州は上面がクロスナで被覆される新砂丘Ⅰに相当し、クロスナ上面には新砂丘Ⅱが形成されている（豊島吉則1975）。

第5図で示した現在の地形でみると、勝田山丘陵から標高6~7mの微高地が幅約1kmで北西に延びており、博労町遺跡はその基部に位置している。この微高地が地形上の内浜として認識されているが、次章で詳述するように、その地下の地層には中浜砂州上の新砂丘Ⅱの砂層も堆積しており、地形区分と地層は必ずしも一致しない。

砂丘形成が活発化する時期には、河川による砂礫の供給が活発化し、砂州形成が進行するとともに、海面低下による汀線の後退があり、砂州や海浜からの飛砂が顕著になっていたとされている。

中海の有機炭素埋積速度の解析（三瓶良和ほか1996）によれば、3,000~2,500 cal BPに埋積速度が最小となり、この有機物供給量の減少傾向が縄文時代晩期~弥生時代前期の海退に対応しているとされる。また、東郷池の年輪堆積物の分析（福沢仁之ほか1998）でも、3,000~2,800 cal BPに海水準の低下が認められている。縄文海進以後の海退傾向の中で、繰り返される気候変動によって砂丘形成が進行し、この遺跡の考古学的な発掘調査の対象となる最古の砂丘は、縄文時代晩期ごろに形成されたと思われ、それ以降、人間活動が活発化している。

（京嶋）



第5図 現米子市の地形と調査地  
(国土地理院電子国土 Web のデジタル標高地形図から作図)

#### 引用・参考文献

- ・赤木三郎1989、「米子市久米第一遺跡の地形・地質」：『久米第一遺跡 資料編』米子市教育委員会編、pp.1-8
- ・井上貴史・赤木三郎・本名俊正1997、「地質・地形・土壌」：『新修米子市史』第6巻自然編・地学編、米子市史編さん協議会編、pp.5-44
- ・三瓶良和・松本英二・徳岡隆夫・井上大栄1996、「中海における過去8,000年間の有機炭素埋積速度」：『第四紀研究』第35巻第2号、pp.113-124
- ・地質調査所編1962、「地質図（米子）」
- ・豊島吉則1975、「山陰の海岸砂丘」：『第四紀研究』第14巻第4号、pp.221-230
- ・中村唯史・徳岡隆夫・赤木三郎・岩田文章1997、「淀江平野の地下地質と淀江潟の復元」：『汽水城研究』No.4、pp.59-68
- ・中村唯史・重松信治・徳岡隆夫2001、「弓ヶ浜砂州の地下地質」：『鳥根大学地球資源環境学研究报告』20、pp.189-194
- ・福沢仁之・加藤めぐみ・山田和芳・藤原治・安田喜憲1998、「湖沼年輪堆積物に記録された最終氷期以降の急激な気候・海水準変動」：『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』9、pp.5-17
- ・波辺正巳・中村唯史・荒川賢丈2000、「淀江平野の完新世古環境変遷」：『鳥根大学地球資源環境学研究报告』19、pp.31-

## 第2節 歴史的環境

大山山麓の遺跡では、大山由来のローム層中の始良 Tn 火山灰 (AT) (約 2 万 9 千～2 万 6 千年前) を挟んだ上下で、後期旧石器時代のナイフ形石器や尖頭器などの石器が多数出土しており、米子市では諏訪西山ノ後遺跡でローム層からナイフ形石器や石核など 21 点の石器遺物が出土している。

約 7 万年前に始まったヴェルム氷期 (最終氷期) は、約 2 万 1 千年前に最盛期があり、海面は現在より -80 m 低下して隠岐諸島まで陸続きだったとされる (徳岡隆夫ほか 1990)。約 2 万 8 千年前には、大山火山の最新活動があったとされ、大規模の火砕流が発生している。極寒の環境が続く中で、大山火山や始良カルデラの火山活動の影響を受けつつ、この地域の旧石器時代の人間は活動していたと思われる。最終氷期が終わりを告げるころの 1 万 5 千年前には、縄文時代草創期の所産とされる有茎尖頭器が大山山麓や丘陵の裾部で出土しており、継続して人間活動があったことがうかがわれる。

多くの考古資料が確認されるようになるのは、後氷期の温暖化が進んで海面が上昇していく縄文時代早・前期に入ってからで、美保湾から地中海に続く湾入部に面した目久美遺跡や陰田遺跡などで、当該期の土器や石錘とともに多くの魚骨などの動物遺体が出土している。目久美遺跡の打欠石錘は大型品が多く大型網を使用した可能性があり (坂本嘉和 2003)、魚骨にはマダイ 34 匹が含まれるなど、高根半島沖までの外洋での漁撈活動が想定されている (井上貴史 1986)。

また、大山山麓では伯耆町井後草里遺跡など標高 470 m の高所での人間活動も確認されており、温暖な気候のもとで通年の活動が可能であったと思われる。丘陵上では前期ころから落とし穴を用いた狩猟が盛んに行われており、県内で発掘された約 4 千基の落とし穴の約 94% が大山山麓周辺に集中しているという (久保穰二郎 2013)。また狩猟で用いられた石鏃などの石器の石材は、早・前期から黒曜石が中心となり、外洋交通の活発化により、隠岐諸島の島後から石材を調達していたと推定される (稲田陽介 2018)。

このように、米子市域周辺の地域において、打欠石錘を用いた漁網による漁撈技術や、落とし穴と黒曜石製石鏃を用いた狩猟技術を共有する集団関係が、この早・前期に成立していたと思われ、その活動領域も確立していたと推定される。

中期以降もこうした関係と領域は継承され、後・晩期はすでに確立していた領域の拡大とともに、特に晩期には法勝寺川流域の平野部に面する丘陵裾部に新たな活動領域が成立し



第6図 大山西・北西麓の縄文時代遺跡の分布範囲 (実線: 早・前期、トーン: 中～晩期)

第1表 大山西・北西麓の縄文文化遺跡の分布地区分類

地区	立地			縄文文化遺跡	
	大地区	中地区	小地区	早・前期	後・後期(弥生前期突帯文土器出土地を含む)
A	古中海湾南岸			目久美・藤田第7・藤田小大田・久米第1	後・後期(弥生前期突帯文土器出土地を含む) 目久美・大谷・藤田第3・久米第1・米子城 第21・22・長谷川3・4・藤田第1・博多町 新山山田・吉市渡田・吉市力ハラケ田・吉 市河原田・吉谷銭神・吉谷中馬場山
B	1	加茂川流域	加茂川中流域	新山山田・吉谷銭神	
	2		加茂川下流域		観音寺磐石田
C	1		法勝寺川中流域		標高大谷・埴矢石・埴内海邊西・福成草里・ 清水谷・才の木・松杉谷・福成大坪上・清 水川六反田
	2		法勝寺川上流域	八金小ブケ・八金清水田・藤徳	
	3		小松谷川中流域		大徳丸山・天万・宮尾・天眞土井前
	4		小松谷川上流域	口朝金	朝金第2・口朝金・天王原・越敷山・金田 堂ノ脇・御内容向田
	5		長者原台地		青木・青木稲場
D	1	日野川下流域左岸	越敷山・越敷野	坂長柏葉塚・坂長越敷野原	坂長第7・坂長第6・坂長下門前・坂長前田・ 坂長ジツテ・尻田平・坂長柏葉塚・坂長越 敷野原・金田ノ谷平・小町石磯ノ上・小町 第1
	高塚山		代・三郎野	鶴田中墓山・鶴田寛平ノ墓・宇代橋平・代・ 三郎野	
	3	日野川下流域右岸	長者原台地		諏訪山古墳・諏訪東テング原・諏訪山山 崎
	4		精蘆川・佐陀川・ 別所川・大江川	奥中峰・泉前田・尾高御建山・上樋方・岸 本下ノ原・貝田原・長山馬籠	大下原・奥中峰・泉前田・百塚第7・喜多 原第4・尾高御建山アンズ原・日下堂平支群・ 上樋方・石州府古墳群・岸本下ノ原・久古 第3・善原第6・長山馬籠
	5		日野川中流域右岸	笠原ヶ成・佐川第1・2	真野ヅヤ原・下山南邊・井後草里・神原
E	1	大山西麓高原	西山麓・弥山火砕流	満山川・自水川・ 駒形陀川	林ヶ原・下山南邊・井後草里・上中ノ原・ 蓬し原
F	2	淀江灘沿岸	宇田川下流域	龍岡第1	龍岡第1
G		藤木川流域	弥山火砕流・孝霊山外輪	藤木法大師・庄田墳墓群・塚田・藤木焼田	藤木法大師・藤木焼田
H		阿弥陀川流域	弥山火砕流	阿弥陀川・蛇の川	茶畑山道
I		名和台地	名和火砕流	蛇の川・名和川	大塚前田・茶畑山道・茶畑六反田・辨平弘 法堂
				茶畑第1・吉御堂新林・金巻ヶ平・登尾山・ 門前上原敷・門前第2・名和焼田	門前上原敷・門前第2・名和焼田

ている(第6図、第1表)。

この時期、北部九州や瀬戸内沿岸の地域から弥生文化が波及し、縄文時代から継承してきた活動領域に近い米子低地や、法勝寺川埋積谷低地に面した丘陵裾部での稲作水田が始まったことと関連していると思われる。

弥生時代前期から中期初頭の遺跡では、イキスタイプといわれる突帯文土器が共存することが多く、縄文文化と弥生文化が共存している(濱田竜彦 2008)。突帯文土器を祖型とする中期前葉の逆L字形口縁の瀬戸内型甕や、板状の長原タイプ土偶が祖型ともいわれる(小林青樹 2002)中期後葉の分銅形土製品が、県内では米子市周辺の地域で多く出土する特徴(註1)は、瀬戸内沿岸地域との濃密な交流関係を示すとともに、この地域に色濃く残る縄文社会の風土を示唆しているのではなかろうか。

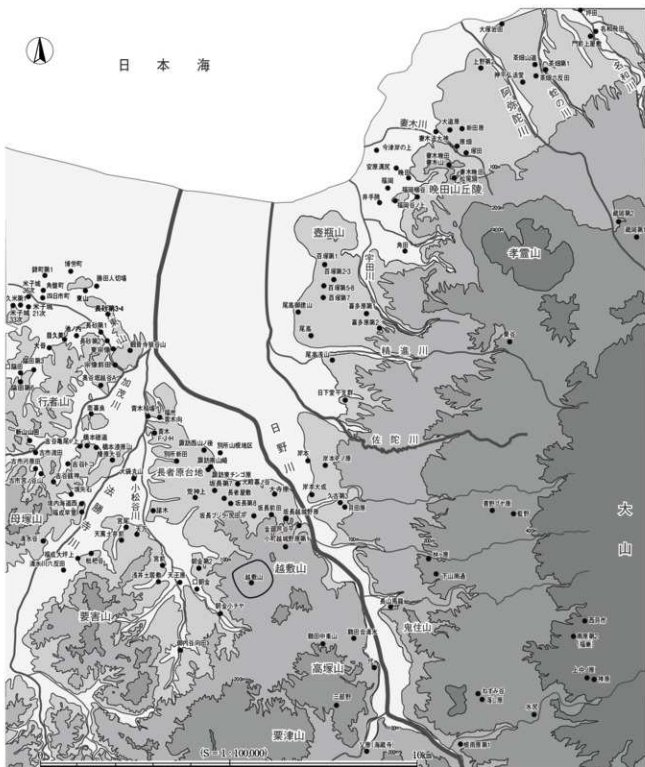
弥生時代中期後半の居住域は、長者原台地の青木遺跡や、標高100mを越える越敷山遺跡群や妻木晩田遺跡などに見られるように、縄文時代以来の狩猟・採集の活動域が転用され、大山西麓の標高500mに近い地域にも見られる。この時期の温暖化の気候変動が影響していると考えられるが、この時期から多数見られるようになる大型の竪穴建物や掘立柱建物の建設に伴う大量の建築材の確保や、中期後半ごろの土器生産の活発化(註2)からみる消費活動の増大および人口増加、生産活動の多様化に伴う分業体制の発達など、この時代の社会環境の変化がその背景にあると考えられる。

弥生時代後期になると妻木晩田遺跡や尾高浅山遺跡、日下堂平支群、伯耆町友原墳墓群で四隅突出型墳丘墓が発掘されており、集団関係を象徴する墳丘墓群の造営が始まり、政治性を帯びた集落景観が見え始める。また、後期後半以降の西日本では、準構造船などの船舶(註3)や、航海技術の進歩による海上交通の発達を背景にして地域間交流が活発化する時期であり、本遺跡をはじめとして、日本

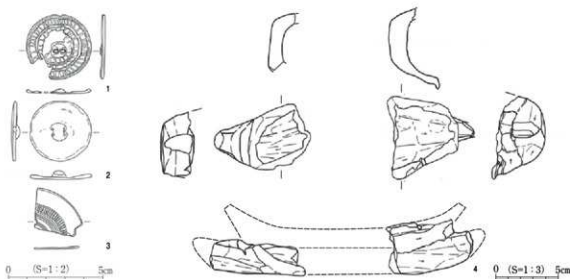


海沿岸の砂丘上で人間活動が活性化している（第7図）。

土器様式においても、中期後葉以降に萌芽していた地域色（松井潔 1997）から、瀬戸内沿岸地域と一線を画した山陰地方独自の様式が確立していき、日本海沿岸地域との文化交流が重視されていったことを推察させる。本遺跡の第1次調査では銅製の小型倭製鏡が3点（註4）も出土しており（第8図左）、異なる世界の威信財が持ち込まれていた。他地域の思想や異文化と対峙することにより、自らの地域社会の位置づけを一層強く認識することになったと思われる。



第7図 大山西・北西麓の主な弥生時代遺跡  
 (国土地理院 web 公開の 2万5千分1地形図を用いて作図)



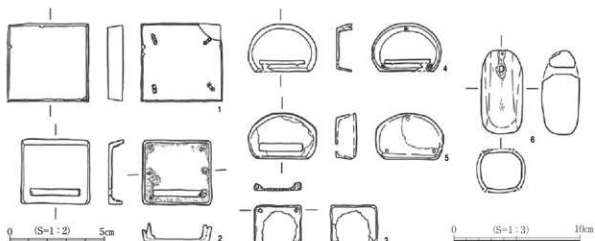
第8図 博労町遺跡第1次調査出土の小型倭製鏡(1~3)と船形土製品(4)

一方、法勝寺川埋積谷低地に進出した弥生文化を擁した諸集団は、平野部における河川水利を軸にした活動での利害関係によって、広域的な共同体として結合し、地域社会の重要な構成単位となった(註5)。ヤマト王権との関係を示唆する三角縁神獸鏡をそれぞれ有する前方後方墳の普段寺1号墳と、それに先行する方墳の2号墳(普段寺古墳群調査団編2008)、西伯耆で最大規模の前方後円墳である三崎殿山古墳や画文帯神獸鏡が出土した前方後円墳の浅井11号墳がこの平野を見下ろす位置に造営されていることは、近畿地方や瀬戸内沿岸地方の外部権力を背景として、この地域社会を統治しようとした有力集団が登場したことを意味している。

古墳時代中期以降、地域社会の安定や発展は、外部権力との政治的關係に左右される側面が強くなり、そうした関係を掌握することが集団間の関係性においても重視されるようになる。後期になると集団関係を象徴する古墳群の造営が一層さかんに行われるようになるが、それらの立地は縄文・弥生時代以来の居住や狩猟・採集などの活動領域の中にある。

この時期、北部九州との関係が想定される式内社宗形神社周辺の宗像古墳群・東宗像古墳群では、北部九州系の横穴式石室や堅穴系横口式石室の要素をもつものがあり(角田徳幸1985)、日野川下流域の石州府1号墳を中心とした石州府系石室の分布範囲では金銅装頭椎・圭頭大刀が分布するとして、宗像・遠賀川流域との類似性が指摘されている(大谷晃二2019)。また、淀江平野に面する向山古墳群では石馬・石人が出土した石馬谷古墳などがあり、いずれも北部九州地方との関係が深い有力集団が存在していた。こうした有力集団のもとで、後の領域的な支配単位となる地域社会のまとまりが形成されていったと思われる。

日本書紀の記載によれば、北部九州や瀬戸内沿岸地方には、天皇直轄地としての屯倉が置かれ、ヤマト王権との結びつきが強化されている。この時期の東アジアにおける緊迫した国際情勢を背景として、北部九州の勢力とも連携した、日本海沿岸諸地域の統治への動きが加速しつつあったとも考えられる。中海に面する入江に隣接した陰田第6遺跡から陰田小犬田遺跡にかけて、6世紀後半から8世紀後半にかけて、狭隘な丘陵斜面にテラスを造成して官衛的な施設が存在している(鳥取県教育文化財団編1996)。丘陵の古墳・横穴の副葬品から推定される、6・7世紀の鉄鍬・刀剣類など鉄製品の活発な生産活動の痕跡からみて、海上交通を通じて東アジア世界に直結したこの地域の緊

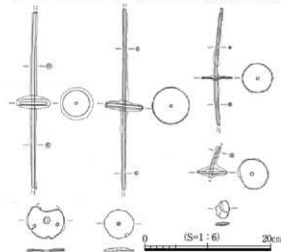


第9図 博労町遺跡第1次調査出土の石帯 (1)・銅製帯金具 (2～5)・石製錘 (6)

張感が看取される。

一方、7世紀に入ってヤマト王権に導入された仏教や道教思想に基づく世界観が、7世紀後葉には地方にも波及していき、王権との関係を重視した有力集団は上淀廃寺や大寺廃寺など古代寺院を運営し、新しい統治理念に基づく地域社会を構想するようになる。中央の都城を中心にした国郡(評)里の領域的な統治の網が、従来からの地域社会の領域を覆うように敷かれていく。領域的な支配体制の下で、安定した地域社会を維持していくためには、制度的な社会システムに順応していく柔軟性が必要であった。

米子市周辺は伯耆国会見郡(淀江平野は汗入郡)として統治されたが、長者原台地の長者屋敷遺跡周辺に郡庁が置かれて、里(郷)として位置づけられた各領域からの徴税を行うとともに、制度に則った秩序維持のための行政を担った。各領域の地域集団の動きは、郡司を中心とする官吏集団による行政的施策の中に埋没して見えにくくなり、地域社会の実態はしだいに不鮮明になっていく。古代の本遺跡周辺は会見郡半生郷または「伯耆国風土記逸文」にある餘戸里に当たると思われる。本遺跡の第1次調査で確認された8世紀から9世紀後半の建物群は、「厩」「厨」の墨書土器や、3点の土馬と壺蓋に用いられる兵庫鎖、石帯(1)と銅製帯金具(2～5)、石製錘(6)(註6)などの官衛的な要素をもつ遺物(第9図)が出土していることから、こうした郷や里の行政施設として機能していたのであろう。そこでは、鉄製鎖や鍛冶工房に関連する資料が出土していることから、伯耆国



第10図 博労町遺跡第1次調査出土の鉄製紡錘車

の庸・調に指定された鉄・鍛(織織勤2003)が生産された可能性があり、また、7点出土している鉄製紡錘車(第10図)は、郡庁付近で行われた庸・調布生産に供される製糸作業を各郷の集落が分担していたことを推測させる(註7)。

律令体制下の地域社会は、在地の有力集団の成長を背景に、平安時代末期以降、荘園公領制へと移行していき、名主層が地域社会の中核を担うようになっていく。しかし、鎌倉・室町幕府は承久の乱や南北朝の動乱を経験しつつ、守護・地頭の職を定めて伯耆国の統治を進めていく。その過程で、在地豪族層の守護代や

地頭職の権限が高まり、伯耆国河村郡東郷荘で見られたように、従来からの荘園・公領の私領化が進んでいったと思われる(註8)。

その後、戦国時代の16世紀になると、近江佐々木氏の庶流で出雲守護代に就いた尼子氏が、山陰全域に勢力を張る戦国大名となり、米子市周辺はその直轄地になるが、毛利氏との戦乱を経て尼子氏は滅亡する。毛利方の兵糧攻めの一つであった濱の目合戦の舞台となった「神田浜」(『雲陽軍実記』)は本遺跡に近接した浜方集落周辺であったと推定される。

山名氏・尼子氏・毛利氏などの戦乱の舞台となった中世山城の米子城は、1591(天正19)年、吉川広家によって近世城郭としての築城が開始されるが、1600(慶長5)年の関ヶ原の合戦後に、論功のあった中村一忠が伯耆国の領主となり、築城と城下町の建設を行う。その後、大坂夏の陣後の1617(元和3)年に池田光政が鳥取城主に任ぜられ、因幡・伯耆両国を支配することとなり、鳥取藩の所領となる。1632(寛永9)年以降、城代となった荒尾氏による自分手政治が始まり、都市を支える農山村を近郊に配し、流通基地としての米子湊を擁する近世商業都市として発展していく。

今回の調査地に近接して流れる米川は、戸上から浜橋までの第1期工事区間が1714(正徳4)年に開通しており、博労町遺跡周辺は近世米子近郊の農業生産地として開発が進んだものと思われる。

(京嶋)

#### 註

- (1) 瀬戸内型甕については(秋山浩三1992)による。分銅形土製品については、(三木雅子2004)によると、県東部の青谷上寺地遺跡で集中して出土している以外は、分布域としては大山北西麓から米子市域に集中している。
- (2) 孝霊山北西麓の大山火山起源の石安山岩礫と火山灰からなる段丘が地下に埋没する地形上にある福岡遺跡では、総数312基にはる粘土探掘土坑が密集して検出されている。時期は弥生時代前期中葉～後葉、中期後葉、後期前葉～古墳時代前期の大きく3時期あり、弥生時代中期後葉が数量と探掘範囲・密度でも最大で、最も盛んに探掘が行われている。付近の福岡柳谷遺跡でも同時期の粘土探掘坑が検出されている。
- (3) 大阪府久宝寺遺跡では古墳時代初頭の準構造船の一部が発掘され、兵庫県袴狭遺跡でも古墳時代前期の準構造船の船団を線刻した板材が出土しており、古墳時代中期の船形埴輪の原型はこの頃まで遡ると考えられる。本遺跡でも準構造船の船形土製品(第8図4)が出土している。船首と船尾の堅板で舷側板を固定するタイプである。鳥取市秋里遺跡でも類似した土製品がある(鳥取市教育委員会編1976)。
- (4) 第8図2・3は第5層出土、1の資料は古代の溝からの出土とされているが、出土地点からみて弥生時代終末～古墳時代初頭とされる整え建物に帰属する遺物と考えられる。湯梨浜町長瀬高浜遺跡では古墳時代前期とされる直径1.8～3.5cmの素文鏡・鸕鷀文鏡が10点出土しており(鳥取県教育文化財団編1983)、1・2はその系譜であろう。3は直径5～6cmに復元でき、他の2点とは異なる重圏文系の小型倭鏡である。
- (5) 筆者は、米子低地南部で発掘された弥生時代水田の灌漑システムを復元し、丘陵小谷の浜流を水源とする灌漑と、平野部の河川からの灌漑が併存していたと考え、後者の灌漑システムで水田経営を行う集団がより大きく、強固な集団関係に発展する可能性を示した(京嶋覚2021)。
- (6) この石製鍾は権衡資料として扱われており、東北では古代後半の官衙風建物群に集中するという(菅原祥夫2012)。鳥取市秋里遺跡にも類例がある(鳥取市教育福祉振興会編1996)。
- (7) 鉄製紡錘車は全国の出土事例から麻糸の製糸に使用されたとき、都府近傍の製織工房に周辺集落で製糸された綿が納められるという分業体制があったとされる(東村純子2005)。
- (8) 『伯耆国河村郡東郷荘下地中分給図』は領家と地頭の土地争いをしてきた東郷荘で、1258(正嘉2)年に土地を東西2分したことを示す史料である。第IV章第4節でも述べているように、本遺跡周辺を指すとみられる「伯州勝田庄」に地頭に補任されたことが記された『民経記』1233(天福元)年5月記の紙背文書や、1354(文和3)年10月の『佐々木文書』足利尊氏補判下文に伯耆国「神田庄」が守護代だったと思われる南條氏の私領として書かれていることから推察される。

引用・参考文献

- ・秋山浩三1992、「弥生前期土器-遠賀川式土器の地域色と古備-」:『古備の考古学的研究』上、pp.75-110
- ・稲田陽介 2018、「石材利用から見た山陰縄文石器群の地域展開」:『隠岐産黒曜石の獲得と利用の研究』鳥根県古代文化センター研究論集 第19集、pp.111-141
- ・井上貴央 1986、「日久美遺跡より検出された動物遺体について」:米子市教育委員会編『日久美遺跡』、pp.129-138
- ・大谷晃二 2019、「石州府1号墳の金銅装頭椎大刀」:『国家形成期の諸問題 白石太一郎先生傘寿記念論文集』、pp.413-418
- ・角田徳幸 1985、「法勝寺川流域および日野川下流域における横穴式石室とその系譜」:『鳥根考古学会誌』第2集、pp.47-70
- ・京嶋寛 2021、「鳥取県米子平野における弥生時代水田の灌漑システムと集団関係」:『鳥取県立博物館研究報告』第58号、pp.103-116
- ・久保権二郎 2013、「鳥取県内の落し穴の様相」:『中四国地方における縄文時代の落し穴』第24回中四国縄文研究会資料
- ・小林青樹 2002、「分銅形土製品の起源-岡山県総社市真壁遺跡出土の分銅形土製品からの出発-」:『環瀬戸内海の考古学-平井勝氏追悼論文集-』下巻、pp.19-31
- ・坂本嘉和 2003、「鳥取県内出土の石鏢について」:鳥取県教育文化財団編『井園地頭遺跡・井園地中ソネ遺跡』、pp.173-175
- ・菅原祥夫 2012、「石のおもりと土のおもり-古代推衡の地方普及をめぐる-」:『福島県文化財センター白河館研究紀要』、pp.23-32
- ・徳岡隆夫・大西郁夫・高安克巳・三梨昂 1990、「中海・宍道湖の地史と環境変化」:『地質学論集』第36号、pp.15-34
- ・鳥取県教育文化財団編 1983、『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』VI
- ・鳥取県教育文化財団編 1996、『除田遺跡群』
- ・鳥取市教育委員会編 1976、『秋里遺跡』I
- ・鳥取市教育福祉振興会編 1996、『秋里遺跡』
- ・錦織勲 2003、「伯耆国からの貢納品」:『新修米子市史』第1巻 通史編原始・古代・中世、pp.552-556
- ・濱田竜彦 2008、「中国地方東部の凸帯土器と地域性」:『古代文化』第60巻第3号、pp.83-98
- ・東村純子 2005、「律令国家形成期における鉄製紡錘車の導入と紡織体制」:『洛北史学』第7号、pp.98-123
- ・菅段寺古墳群調査団編 2008、『菅段寺古墳群1』
- ・松井潔 1997、「東の土器、南の土器-山陰東部における弥生時代中期後葉~古墳時代初頭の非在地系土器の動態-」:『古代古備』第19集、pp.40-67
- ・三木雅子 2004、「分銅形土製品について」:鳥取県教育文化財団編『名和乙ヶ谷遺跡・名和小谷遺跡』、pp.47-48

### 第三章 調査の概要

#### 第1節 調査の方法

啓成小学校校舎等改築工事は、老朽化が進む啓成小学校の校舎整備とあわせて、米子市が取り組みに力を入れている保育園と小学校の連携を進めるにあたって、啓成小学校の敷地内に東保育園の建設用地を確保することで、米子市で初めての保小連携型の学校整備を行うものである。

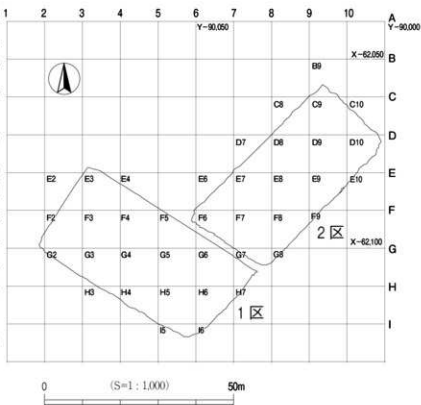
今回の調査は、啓成小学校の新校舎の建設に伴うもので、新校舎の建設地である現グラウンドの南側から南東側にかけてのL字型の部分を対象とした。

調査を実施するにあたっては、事前協議により、調査時に生じる排土を場内処理することとしたため、排土を仮置きするスペースの確保が必要なことと、地下水を排水するためにウェルポンプを設置することとしたが、排水機能の関係上、広範囲の調査は不可能であることから、調査区を2つに分け、南西側を1区、北東側を2区とした(第11図)。調査は、1区→2区の順に行い、1区の調査終了後に1区の埋め戻しを行い、2区の調査を実施した。なお、調査区内の堆積層が砂層であることから、その壁面の崩落を防ぐために大型土嚢を設置した。大型土嚢は、調査区周囲の幅約2～4mを掘削しながら設置するもので、立会調査を行いながら設置を実施した。

調査にあたっては、遺跡の地理的位置を把握し、遺構測量の便宜を図るために、業者委託により公共座標に準拠した10m画のグリッドを設定し、グリッド単位で調査を行った。グリッドは北から南へ向かってA～Iとし、西から東へ向かって1～10とした。グリッド名は北西側の杭の名称をとって呼称した(第11図)。

検出した遺構と遺物の記録には、遺構実測支援システム(CUBIC製 遺構くん)を用いた。また、写真撮影は、35mmの一眼レフカメラを使用し、リバーサルフィルムとモノクロフィルムで撮影した。さらに、一眼レフデジタルカメラを使用して撮影を行い、全景写真には必要に応じて6×7判ローニカカメラを使用し、リバーサルフィルムとモノクロフィルムで撮影した。

(高橋)



第11図 第2次調査の地区割図

## 第2節 調査区の層序と堆積状況

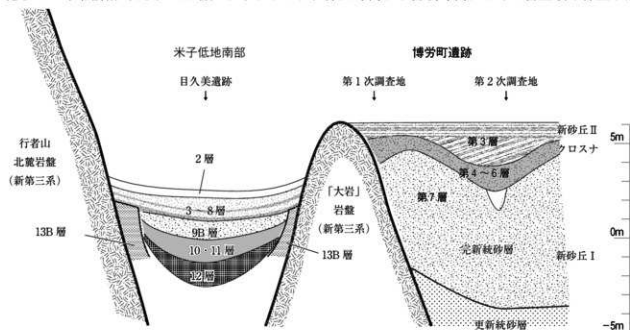
### (1) 更新統以前の堆積

博労町遺跡が立地する弓ヶ浜砂州基部の更新統以前の地層について、山名巖氏は皆生海岸から米子旧市街にかけてのボーリング資料から、地表下-50 m前後の第三系基盤岩を覆う第2砂礫層を更新統としており、その上面が完新統基底面になるとしている（山名巖 1964）。この砂礫層は、三位秀夫氏が中海湖底堆積の上部更新統とした弓ヶ浜層（三位秀夫 1962）に相当し、豊島吉則氏が鳥取砂丘や北条砂丘において、大山ロームで被覆された更新世の「古砂丘（砂州）」（豊島吉則 1975）とした層準に対応すると考えられる。また、中村唯史氏らのボーリング調査により、弓ヶ浜砂州基部の地表下-10～-20 mの埋没段丘を構成する更新統砂層（中村唯史・重松信治・徳岡隆夫 2001）がこれに相当すると考えられている。

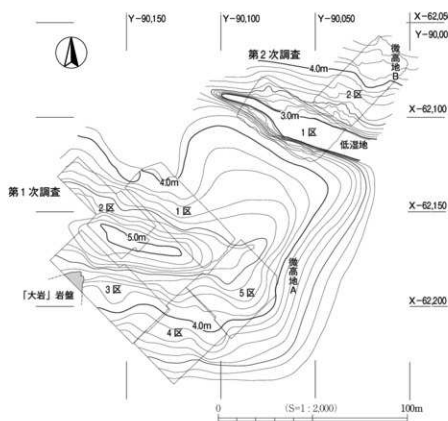
また、遺跡南東約 200 mの勝田山丘陵は流紋岩などの新第三系で構成され、その一部と思われる岩盤が第1次調査3区で確認されている。第1次調査地には「大岩北」、その南側には「大岩」の字名が残されていることから、勝田山丘陵と一連の岩体である可能性が高い。したがって、遺跡周囲の第四系基底面は勝田山丘陵を構成する岩体裾部の複雑に起伏をなす地形が想定され、更新世の砂州・砂丘形成はこの地形に大きく影響されたと推定される。

### (2) 完新統の基本層序

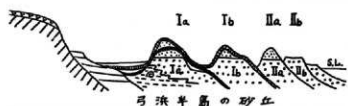
米子低地南部の目久美遺跡周辺では、標高 2 m 以下で更新統砂層と同一層準とみられる灰白色～黄灰色粘土層（YS13B 層）の埋没段丘が確認されており、その上位の標高 0 m 以下には縄文時代早・前期の海成層（YS12 層）が堆積している（京嶋覚 2020・2021a）。この地層は中村氏らのいう完新統泥層に相当する。その上位には縄文時代から弥生時代にかけて、干潟堆積から湿地堆積へと陸成層に変化していく堆積相（YS8～11 層）がうかがわれ、弥生時代から古墳時代にかけて古土壌や作土が形



第12図 博労町遺跡と米子低地南部の層序模式図



第13図 博芳町遺跡第7層上面の地形復元図



第14図 弓ヶ浜半島(砂州)の新砂丘の分類と内部構造概念図  
(豊島吉則 1975)より抜粋

対応できる。この第3層は第4層上面に厚く堆積して地形の起伏を消失させている。

第2表の本遺跡基本層序について最上位の層準から特徴を記述するが、各層準の地層は地区や地点により色調・層相に変化があり、個別の色調・層相は地層断面図に記載している(第15・16図)。

#### 第0層

1956(昭和31)年の啓成小学校米川校舎建設の着工に伴う整地工事などで持ち込まれた客土で、河原石などの礫や真砂土が主体となる。

#### 第1層

黒褐～灰オリーブ色を呈する細粒～粗粒砂質シルトの作土である。細～中礫を含み斑鉄が見られる。啓成小学校が当地に移設される以前の近現代の水田および桑畑の作土で、調査地全体に分布する。2区の一部で上面に畝状遺構が確認されたが、1区では水田と推定される部分もあった。

#### 第2層

灰オリーブ～黄灰色を呈する極細粒～細粒砂質シルトの作土である。細礫を少量含み斑鉄が見られる。近世の作土である。下位の第3層と類似する地点もあるが、ラミナは見られない。

本層中ないし下位層上面で本層と類似する埋土の溝状遺構が検出され、江戸時代後期の遺物が出

成されている(第12図)。

今回の調査で確認された後述の第0～7層は、完新統泥層より上位の層準に相当する。最下層の第7層は、中村氏らという完新統砂層に相当し、豊島氏による砂丘形成過程の新砂丘Ia(弓ヶ浜半島では内浜砂州)を構成する砂層最上部である(第14図)。

この第7層上面の地形は第1次調査3区の新第三系岩盤(大岩)北東部を最高所(標高約5m)とする微高地Aと第2次調査1区の低湿地を挟んで北に高度を上げていく微高地B(標

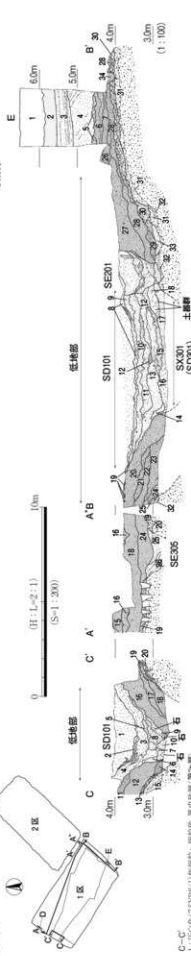
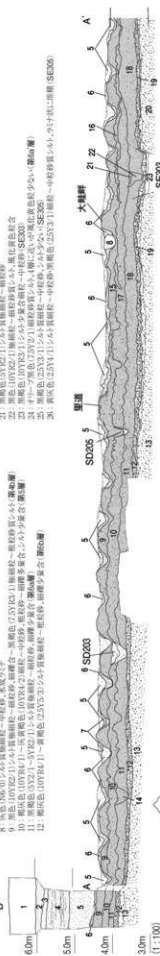
高4.5m以上)に区分され、第4層上面までその地形が遺存していた(第13図)。

第4～6層は新砂丘Ia上に形成された古土壌および作土である。いわゆるクロスナ層であるが、新砂丘Ibに相当する砂層は挟みせず、第3層が新砂丘IIを構成する砂層に対



D-A-A'-A'

- 1. 現代堆積土(礫層)
- 2. 成土層(7-5)を以てSE317の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 3. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 4. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 5. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 6. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 7. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 8. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 9. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 10. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 11. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
- 12. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)



- B-E-E'
- 1. 成土層(5)を以てSE317の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 2. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 3. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 4. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 5. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 6. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 7. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 8. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 9. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 10. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 11. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 12. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 13. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 14. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 15. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 16. 成土層(5)を以てSE315-2の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
  - 17. 成土層(5)を以てSE315-1の層位に一般砂質シルト(礫層を含む)
18. 黒褐色(23YR2/1-2)粘土質砂土、中粒砂
19. 黒褐色(10YR2/2)細砂、細粒砂、中粒砂(礫層を含む)
20. 灰褐色(7.5YR4/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
21. 灰褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
22. 灰褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
23. 灰褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
24. 灰褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
25. 灰褐色(10YR6/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
26. 黒褐色(2.5YR2/1)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
27. 黒褐色(2.5YR2/1)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
28. 黒褐色(2.5YR2/1)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
29. 黒褐色(2.5YR2/1)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
30. 灰褐色(10YR4/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
31. 灰褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
32. 黒褐色(2.5YR2/1)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
33. 灰褐色(10YR5/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)
34. 黒褐色(7.5YR3/2)シルト質中粒砂、中粒砂(礫層を含む)

第15圖 1区地層断面圖(縦横変倍)



土していることから、当該期の畠作土と思われるが、第1層の耕起に際してほとんど消失している。

#### 第3a層

黄灰～灰色の極細粒～細粒砂からなる淘汰の良い風成層である。第V章第1節の分析により、花崗岩由来の石英・長石粒子の割合が高く、風による運搬により火山岩粒子が失われたとみて、日野川が運搬した砂を起源にすると考えられる。層厚40～80cmで、平行ラミナが顕著に観察され、上部に糸根状斑鉄が見られる。上面では江戸時代後期の溝・土壌が検出されている。

基底面は下位層上面の風による削剥作用のためか不整合となる部分が多いが、それほど時間をおかず連続的に堆積したと思われる。

#### 第3b層

灰～灰白色の極細粒～細粒砂からなる淘汰の良い風成層である。層厚20～120cmで、1区の低湿地部で最も厚くなる。北から南ないし北東から南西に傾斜する斜交ラミナが、特に層厚の厚い部分で顕著に見られ、微高地Aと微高地Bの間の低地部を埋めた砂層である。

上面にはごく薄い有機物の堆積が見られる部分があったが、植生が形成されて活発な生物活動や土壌形成は見られない。人間の活動痕跡も確認できなかった。また、基底面付近では下位層の生物擾乱の影響が及んでいた。

#### 第4a層

灰～黄灰色を呈するシルト質極細粒～中粒砂の作土である。層厚は10cm以下で、確認できない部分も多く、特に地形の低い部分で見られる。上面には直径1～2cmの生痕が密集して認められ、下位層上部が顕著に生物擾乱を受けて形成されたものと推定する。

畠の耕作が停止した後に、後述のように下位層上面で樹木の成長が見られたが、飛砂の影響を受けて十分な土壌形成に至らなかったと考えられる。

#### 第4b層

細礫や中礫を極少量含む黒～黒褐色のシルト質極細粒～中粒砂からなる作土で、層厚は10～40cmである。腐植を多く含む。上面では畠の畝と畝間溝、畦畔・里道が全面で検出されており、耕作により細片化された中世磁器や土器が出土していることから、中世の畠作土である。糸根状ないし管状の斑鉄が少量見られるが、下位層に比べると少ない。上面の畝および畝間には生痕が顕著に認められる。

1区北東部の畠102では畝間溝が飛砂で埋まった後に、その上に畝立てした痕跡が確認されており、黒色シルト質極細粒～細粒砂の新时期作土を第4bi層、旧畝間溝を埋めた灰色極細粒～細粒砂を第4bii層、旧作土を第4biii層として区分した。

1区の低湿地南縁には樹種不明の樹木の根株痕が複数遺存しており、本層上面を這うように枝状に伸びる根または地下茎の痕跡が確認された。低湿地に近い個所では木質を残すが、それ以外では鉄酸化物の斑鉄として確認できた。これらの植物痕跡は本層上面ないし最上部で確認されており、第3層の飛砂堆積初期の生物擾乱が活発化した時期に、低湿地を中心にして耕地から、ススキ・ネザサなどが繁茂し、中低木の先駆種が混じる森林植生へと遷移しつつあったことを示している。

#### 第5層

細～中礫を含む黒褐～褐色を呈するシルト質細粒～粗粒砂の古土壌ないし作土で、層厚は10～30cmである。腐植を多く含む、高所では黒色主体の色相で、糸根・管状斑鉄が顕著であるが、低地

第2表 博労町遺跡基本層序表

層序	層相	特徴 自然現象	主な遺構・遺物	第1次 層序	時代
0		客土、校庭整地土		I	現代
1	黒褐～灰オリブ色 細粒～粗粒砂質シルト	作土			近現代
2	灰オリブ～黄灰色 極細粒～細粒砂質シルト	作土	↑溝・竝列 瓦・陶磁器	II	近世
3a	黄灰～灰色極細粒～細粒砂	風成/平行ラミナ 有機物・斑鉄			
3b	灰～灰白色極細粒～細粒砂	風成/斜交ラミナ 有機物・斑鉄・磁鉄鉱粒			
4a	灰～黄灰色シルト質 極細粒～中粒砂	生物擾乱 植物炭(有機質)・生痕		III-①	中世後期
i	黒色シルト質極細粒～細粒砂	作土、腐植質	↑竪・溝		中世
4b ii	灰色極細粒～細粒砂	風成			
ii	含細～中礫黒褐～黒褐色 シルト質極細粒～中粒砂	作土、腐植質	↑竪・溝・畦畔 甕・白磁、瓦質土器	III-②	古代 古墳後期
5	含細～中礫黒褐～褐灰色 シルト質細粒～粗粒砂	古土壌・作土、腐植質 植物炭痕(鉄酸化物)	↑溝・土壌・竪状 土師器・須恵器		古墳前期
6a	黒褐～灰褐色シルト質 極細粒～粗粒砂	古土壌・作土、腐植質	↑竪穴・井戸・溝 縄文・弥生土器、 古式土師器	III-③	弥生前期
6b	黒褐～灰黄褐色シルト質 中粒～極粗粒砂	生物または物理的擾乱、 生痕・液状化		III-④	
7a	含細～中礫灰黄褐～黄灰色 中粒～極粗粒砂	河成 液状化、塊状		IV	縄文晩期
7b	灰白～灰黄色極細粒～ 極粗粒砂	海成・風成 砂州構成層			

部に向かって褐色傾向が見られ(註1)、第V章第2節の分析により軽石が風化した細粒と推定される風化黄色粒が顕著に観察できる(註2)。

本層上面および本層内では1区 SE201・SD205や2区 SK201・SD206などの古代の遺構が検出されており、層中からも古代の遺物が出土しているため、当該期の地層であろう。1区北西部では第4b層層準の地層が厚く、これに被覆された第5層上面で竪状の遺構が観察されており、作土化されている。しかし、第V章で報告する本層の花粉・植物珪酸体の分析によれば、下位の第6a層と共にシバ・ススキ・ネザサなどのイネ科植物が卓越しており、調査地周辺には草原植生が広がっていたと推測される。

なお、2区では第7層上部から第5・6層に貫入する砂脈が、作土である第4b層基底面で不整合になっていることが複数箇所で見られた。第7層の液状化による噴砂が本層上面の段階で発生したことを示している(註3)。

#### 第6a層

細～中礫を少量含む黒褐～灰褐色のシルト質極細粒～粗粒砂で、腐植を多く含む古土壌ないしは

作土である。第5層と同じく低地部にかけて褐色が進み、風化黄色粒が目立つようになる。

本層中からは、縄文時代晩期を上限とする多量の古墳時代以前の遺物が出土しており、本層上面および層内から古墳時代の遺構が構築されていると思われるが、地層観察によっても不明瞭である。ただ、1区の本層上面付近で古墳時代後期の遺物が複数の地点で出土していることから、上面が当該期の遺構面である可能性が高い。

基本的には第5層と同じくイネ科植物の草原植生で形成された黒色土壌であるが、多くの遺物の存在から人為的に加工されて作土化された部分が多いと思われる。

#### 第6b層

黒褐～灰黄褐色を呈するシルト質中粒～極粗粒砂で、細～中礫を含む。層厚は10～20cmで、第6a層の土壌形成の過程で、第7層との層理面付近で生じた生物擾乱が顕著に認められる部分を本層としたが、後述のように第7層上部で生じた液状化による物理的擾乱の可能性もある。古墳時代前期以前の遺構の多くは本層上面で検出した。

#### 第7a層

灰黄褐～黄灰色の中粒～極粗粒砂で、円磨した細～中礫を多く含む砂礫層である。層厚は20～30cmで淘汰は悪く、下位の第7b層との層理面は不明瞭である。2区南部から1区北東部にかけて、低湿地の北縁部のみ分布する。特に2区南部では鉄酸化物の沈着が顕著に認められ、土壌水の滯水があったと推定される。前述した液状化により塊状を呈したと思われるが、第V章第1節の分析により、本来は河川によるイベント的な水成堆積物と推定されるため、この付近が河川の影響を受ける環境であったことを示す。

直上の第6層中から縄文時代晩期から弥生時代前期の突帯文土器が出土していることから、堆積時期はそれ以前と考えられ、米子低地南部や米子旧市街（京嶋覚2021a・b）で比定したYS9B層に対比できる可能性がある。

#### 第7b層

灰白～灰黄色を呈する極細粒～極粗粒砂で、比較的均質だがラミナは見られず、場所によって淘汰不良の地点もある。1区の低湿地南側の最高所（標高約4m）では極細粒～細粒砂で風成の砂丘堆積（註4）とみることも可能だが、2区北端の最高所（標高約4.5m）では中粒～極粗粒砂と粗く、海成の砂州堆積の可能性もある。

本層は主として安山岩やデイサイトなどの火山岩由来の砂粒が多く含まれており（註5）、2区の本層上面付近では第7a層と同様に液状化による砂脈が各所で確認されている。

（京嶋）

#### 註

- (1) 鳥取環境大学角野貴信氏（土壌学）のご教示によれば、一般的に土壌中の水が多くなることによる鉄分の溶解・集積や、侵食による低地への移動によって褐色することが考えられるという。
- (2) 第V章第2節の分析結果から、日野川が供給した堆積物中の軽石が風化し、飛砂に含まれて当地に運ばれたと推測できる。とすれば、第5・6a層は風成堆積物を母材の一部として含んで形成されたと考えられる。
- (3) 第IV章第3節で詳述する。
- (4) 鳥根大学自然災害軽減教育研究センター酒井哲彦氏のご教示による。

- (5) 真方昇氏によれば、弓ヶ浜浜境群のうち中浜・内浜堆積物には外浜に比べて火山岩類が多いとされている（真方昇 1991）。

引用・参考文献

- ・京嶋覚 2020、「米子市目久美遺跡の基本層序と古地形復元」：『伯耆文化研究』第 21 号、pp.1-13
- ・京嶋覚 2021a、「米子低地南部の堆積環境からみた低地遺跡の動態」：『鳥取地域史研究』第 23 号、pp.61-80
- ・京嶋覚 2021b、「米子旧市街地における弥生時代遺跡の堆積環境と古地形復元」：『伯耆文化研究』第 22 号、pp.22-34
- ・真方昇 1991、「弓ヶ浜半島「外浜」浜境群の形成における鉄穴流しの影響」：『地理学評論』64A-11、pp.759-778
- ・豊島吉則 1975、「山陰の海岸砂丘」：『第四紀研究』第 14 巻第 4 号、pp.221-230
- ・中村唯史・重松信治・徳岡隆夫 2001、「弓ヶ浜砂州の地下地質」：『高根大学地球資源環境学研究报告』20、pp.189-194
- ・三位秀夫 1962、「山陰国研の概報」：『第四紀』3、pp.47-48
- ・山名巖 1964、「山陰地方における第四紀末の諸問題」：『鳥取県立科学博物館研究报告』第 3 号、pp.1-18

## 第IV章 検出した遺構と遺物

### 第1節 縄文時代晩期～弥生時代後期

#### (1) 縄文土器(第17・18図、第3～5表)

第5・6層や古墳時代の遺構から出土した、縄文時代晩期後半の突帯文土器を報告する。なお、本稿では内傾接合に象徴される縄文土器の系譜にある土器を突帯文土器として一括する。したがって、口縁部に突帯が巡る深鉢だけでなく、製作技術が縄文土器の系譜にある鉢、浅鉢、壺類もこれに含めて報告する。また、本遺跡から出土した突帯文土器は小片が多く、口縁部形態を中心に濱田(2013)分類に基づいて、分類、整理を行った。

##### i) 深鉢形土器

深鉢形土器(以下、深鉢)としたものは、すべて口縁端部に突帯が巡る。口縁部は水平で、意図して波状を呈するものは確認できなかった。また、器形、口縁端部の形状、突帯の形状、突帯の位置、刻目の有無と形状により、以下のように分類、整理を行った。

##### ①分類

###### (大別)

深鉢の口縁端部や突帯には、刻目の有無による違いが認められる。この点に着目して、深鉢を以下のように大別した。

**I類** 刻目突帯が巡る深鉢のうち、口縁端部に刻目があるものであるが、本遺跡では出土しなかった。

**II類** 刻目突帯が巡る深鉢のうち、口縁端部を刻まないもの。

**III類** 無刻目突帯が巡る。口縁端部を刻むものはない。

###### (器形)

濱田分類では、口縁部が外反し、僅かに屈曲ないし湾曲する肩部を有するものを**A類**、砲弾型を呈するものを**B類**とし、さらに**B類**には口縁部が内湾するもの、ほぼ直立するもの、外に開くものがあるとしているが、本遺跡出土土器は小片が多く、口縁部の角度が確実ではないものがあるので、ここでは細別は行わなかった。また、口縁部が僅かに外反するが、肩部が不明瞭なものがある。**A類**と**B類**の中間的な形状を呈しており、別に類型を設けることもできるが、口縁部が外反する土器片には、破損により肩部が観察できないものもあるので、ここでは別の類型とはせず、肩部が不明瞭なものについては全て**B類**の範疇とした。

###### (突帯の断面形状と位置)

突帯文土器の深鉢には、口縁部のみ突帯が巡る一条突帯文と、口縁部と肩部に突帯が巡る二条突帯文があるが、本遺跡から出土したものは、ほとんどが前者の一条突帯文の深鉢である。したがって、以下、一条突帯の断面形状と貼り付け位置について分類を行う。分類に際しては、突帯の断面形状をa～fに大別し、その貼り付け位置や形状により細別を行った。

##### a類

貼り付けた突帯を上下から押さえ、断面形が三角形を呈するもの。

**a1類** 端部を面取りした口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたものとしたが、**a1**

類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

- a 2 類 端部が丸い口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。a 2 類のうち、比較的、突帯の低いものを a 2-1 類、突帯の高いものを a 2-2 類とした。
- a 3 類 端部を面取りした口縁端部に接して突帯が貼り付けられたものとしたが、a 3 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。
- a 4 類 端部が先細りする口縁端部に接して突帯が貼り付けられたもの。a 4 類のうち、比較的、突帯の低いものを a 4-1 類、突帯の高いものを a 4-2 類としたが、a 4-1 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。
- a 5 類 端部が先細りする口縁端部の上部に突帯が被さるように貼り付けられたものとしたが、a 5 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

#### b 類

貼り付けた突帯を上から押さえ、断面形が下さりの三角形を呈するもの。

- b 1 類 端部を面取りした口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたものとしたが、b 1 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。
- b 2 類 端部が丸い口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。b 2 類のうち、比較的、突帯の低いものを b 2-1 類、突帯の高いものを b 2-2 類とした。
- b 3 類 端部を面取りした口縁端部に接して突帯が貼り付けられたものとしたが、b 3 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。
- b 4 類 端部が先細りする口縁端部に接して突帯が貼り付けられたもの。b 4 類のうち、比較的、突帯の低いものを b 4-1 類、突帯の高いものを b 4-2 類とした。
- b 5 類 端部が先細りする口縁端部の上部に突帯が被さるように貼り付けられたものとしたが、b 5 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

#### c 類

貼り付けた幅広の突帯を上から押さえ、断面形が垂れ下がるような三角形を呈するもの。濱田分類では a 類・b 類と同様に突帯の貼り付け位置や形状により c 1 類～c 5 類に細別がなされているが、c 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

#### d 類

貼り付けた突帯を下から押さえ、断面形が上向きの三角形となるもの。

- d 1 類 端部を面取りした口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたものとしたが、d 1 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。
- d 2 類 端部が丸い口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられたもの。
- d 3 類 端部を面取りした口縁端部に接して突帯が貼り付けられたものとしたが、d 3 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。
- d 4 類 端部が先細りする口縁端部に接して突帯が貼り付けられたもの。

#### e 類

貼り付けた突帯に明瞭な後縁をつくらず、断面形が半円形（かまぼこ形）を呈するものであるが、e 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

#### f 類



口縁端部を短く折り曲げて、突帯をつくったもの。また、口縁端部を肥厚させるようにつくられたものであるが、f類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

(突帯の刻目)

濱田分類では、I類、II類の突帯に刻目を施す際に用いられた施工工具やその施工角度により分類を行っているが、本遺跡出土のII類の突帯の刻目は全てヘラ状工具によって施文されたものである。したがって、濱田分類ではH類とされるヘラ状工具による施文についてのみ細別し、報告する。

## H類

ヘラを押しつけたり、ヘラを横に滑らせたりしたものがある。前者をH1類、後者をH2類とする。また、H1類はヘラを押しつける角度の違いで刻目の形が異なる。

H1 a類 ヘラをねかせて、片側に押しつけるように刻んだもの。平面形がD字状となるものと、逆D字状となるものがある。

H1 b類 ヘラをあまりねかさずに、押しつけるように刻んだもの。平面形は菱形になるものが多い。

H1 c類 ヘラをねかさずに、突帯に差し込んだもの。

H2類 ヘラを滑らせるようにしたもの。横長の楕円形ないし紡錘形となる。

## ②深鉢II類

31点が出土した。本遺跡出土深鉢の中で最も多く、深鉢全体の67.4%を占める。以下、突帯の位置と形状による分類別に報告する。

### 突帯a 2-1類 (第17図10-9)

9点が出土した。4は口縁部が外反し、器形A類の可能性が有る。桂見Ⅱ式に相当する土器である。それ以外は器形B類で、反転実測した口径は1が17cm、2が28cm弱、3が27cmである。突帯の刻目は、4・8がH1 a類、3・5・7がH1 b類、1・2・6・9がH1 c類である。器面調整は、外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されるものが多い。2は外面には粗い擦痕が残る左上がりと横方向のナデ調整、内面にはヘラ状工具によるナデ調整が施され、3は外面には粗い擦痕が残る左上がりと横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されている。また、1・3・8・9には内傾接合が観察され、2・3には積み上げの単位が良く観察される。

### 突帯a 2-2類 (第17図10・11)

2点が出土した。いずれも器形B類と考えられ、反転実測した口径は10が27cm強、11が28cmである。突帯の刻目は、いずれもH1 b類である。器面調整は、いずれも外面には粗い擦痕が残る右上がりと横方向のナデ調整、内面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整が施されている。また、いずれも内傾接合が観察された。

### 突帯b 2-1類 (第17図12～24)

13点が出土した。17は桂見Ⅱ式に相当する土器、18は外反傾向にある口縁部片で、いずれも器形A類の可能性が有るが、確実ではない。17・18以外は、器形B類と考えられる。12は口縁端部と胴部に二条の突帯が巡るもので、反転実測した口径は12cm強、突帯の刻目はH1 a類である。12以外の反転実測した口径は13が16cm強、14が20cm弱、15が26cm弱、16が24cm弱で、突帯の刻目は13～15・17～19がH1 a類、20・24がH1 b類、16・21～23がH1 c類である。器面調整は、外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されるものが多い。

また、16・18・23・24には内傾接合が観察された。

#### 突帯 b 4-1 類 (第 17 図 25)

1 点が出土した。25 は口縁部が外反しており、器形 A 類の可能性がある。反転実測した口径は 21 cm 強で、突帯の刻目は H 1 b 類である。また、内傾接合が観察された。

#### 突帯 b 4-2 類 (第 17 図 26・27)

2 点が出土した。いずれも器形 B 類と考えられ、反転実測した口径は 26 が 18cm 弱、27 が 29cm 弱である。突帯の刻目は、いずれも H 1 a 類である。27 の外面には粗い擦痕が残る左上がりのナデ調整が施され、内傾接合が観察された。

#### 突帯 d 2-2 類 (第 17 図 28)

1 点が出土した。28 は口縁端部が外反傾向にあるが、器形 B 類と考えられる。反転実測した口径は 19cm 弱で、突帯の刻目は H 2 類である。器面調整は、外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されている。また、内傾接合が観察された。

#### 突帯 d 4-1 類 (第 17 図 29)

1 点が出土した。29 は器形 B 類と考えられる口縁部片で、突帯の刻目は H 1 c 類である。

### ③ 深鉢Ⅲ類

15 点が出土し、深鉢全体の 32.6% を占める。以下、突帯の位置と形状による分類別に報告する。

#### 突帯 a 2-1 類 (第 17 図 30~33)

4 点が出土した。いずれも器形 B 類と考えられ、反転実測した 33 の口径は 24cm である。33 の外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施された。また、30 には内傾接合が観察された。

#### 突帯 a 4-2 類 (第 17 図 34・35)

2 点が出土した。いずれも器形 B 類で、反転実測した 34 の口径は 20cm である。器面調整は、34 の内外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整が施され、35 の外面には粗い擦痕が残る左上がりのナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されている。また、いずれも内傾接合が観察され、34 は積み上げの単位が良く観察される。

#### 突帯 b 2-1 類 (第 18 図 36~40)

5 点が出土した。いずれも器形 B 類で、反転実測した口径は 36 が 15cm、37 が 20cm、38 が 36cm 強、39 が 37cm 強、40 が 32cm 強である。器面調整は、36~38 は内外面とも横方向のナデ調整が施され、39・40 はいずれも外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されている。また、36~40 にはいずれも内傾接合が観察された。

#### 突帯 b 2-2 類 (第 18 図 41・42)

2 点が出土した。いずれも器形 B 類で、反転実測した口径は 41 が 17cm 強、42 が 23cm である。器面調整は、41 は内外面とも粗い擦痕が残る横方向のナデ調整が施され、42 は外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面にはへら状工具によるナデ調整が施されている。また、いずれも内傾接合が観察された。

#### 突帯 b 4-1 類 (第 18 図 43)

1 点が出土した。43 は器形 B 類で、反転実測した口径は 25cm 弱である。器面調整は、外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されている。

#### 突帯 b 4-2 類 (第 18 図 44)

1 点が出土した。44 は器形 B 類で、反転実測した口径は 24cm 弱である。器面調整は、外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されている。また、内傾接合が観察された。

#### 口縁部・肩部・底部 (第 18 図 45~48)

45 は直立気味に立ち上がる深鉢の口縁部である。突帯が剥離しているため、刻目の有無及び突帯の形状は不明であるが、剥離痕から口縁端部に接するように突帯が巡っていたと推測される。反転実測した口径は 23cm で、器面調整は、外面には粗い擦痕が残る左上がりと横方向のナデ調整、内面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整が施されている。46・47 は二条突帯の深鉢の肩部片で、いずれも刻目突帯が巡る。突帯の刻目は、46 が H 1 b 類、47 が H 1 c 類である。48 は底部片で、内傾接合が観察された。

#### ii) 鉢・浅鉢形土器

##### ①分類

鉢・浅鉢形土器(以下、浅鉢)には、形状や調整に違いが認められるものがあり、以下のように大別した。

##### A 類

口縁部が外反したり、屈曲ないし張り出す肩部を有するものであるが、A 類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

##### B 類

碗形、鉢形を呈するもの。調整により、次のように細別する。

B 1 類 丁寧なナデやミガキが施されたもの。沈線による文様を伴うもの。

B 2 類 粗い擦痕が残るなど、深鉢と共通する調整が施されたもの。

##### ②浅鉢 B 1 類 (第 18 図 49)

1 点が出土した。49 は口縁部外面に 1 条の沈線が巡り、内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施されている。

##### ③浅鉢 B 2 類 (第 18 図 50~65)

16 点が出土し、口縁端部に刻目突帯が巡るもの(50・51)、口縁端部に刻目があるもの(52)、口縁端部に突帯及び刻目が無いもの(53~65)がある。

50・51 は口縁端部に接する位置に刻目突帯が巡るものである。反転実測した口径は、50 が 7cm 弱、51 が 14cm 強である。突帯の刻目は、50 が H 1 c 類、51 が H 1 a 類である。器面調整は、いずれも内外面とも比較的丁寧なナデ調整が施されている。

52 は口縁端部に刻目があるもので、近畿の篠原式段階のものと考えられる。反転実測した口径は 19cm 強である。

53~65 は口縁端部に突帯及び刻目が無いものである。53~56 は直立気味に僅かに内湾しながら立ち上がるもので、反転実測した口径は、53 が 16cm 強、54 が 19cm 弱、55 が 18cm 強、56 が 22cm 弱である。器面調整は、55 は外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整、56 は外面には粗い擦痕が残る左上がりのナデ調整が施され、内面にはいずれも外面よりも丁寧な横方向のナデ調整が施されている。また、53~56 にはいずれも内傾接合が観察された。57・58 はやや外開きに内湾しながら立ち上がるもので、

反転実測した口径は、57が16cm弱、58が24cm強である。器面調整は、57は外面には粗い擦痕が残る左上がりのナデ調整、内面にはヘラ状工具による横方向のナデ調整が施され、58は外面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整が施され、内面には外面よりも丁寧な横方向のナデ調整が施されている。また、いずれも内傾接合が観察され、58は積み上げの単位が良く観察できる。59～64は外傾気味に立ち上がるもので、反転実測した口径は、59が18cm強、60が20cm、61が20cm強、62が22cm弱、63が27cm強である。器面調整は、外面には粗い擦痕が残る左上がりあるいは横方向のナデ調整を施したものが多く、61の内面には粗い擦痕が残る横方向のナデ調整を施している。また、59・60・62には内傾接合が観察され、59は積み上げの単位が良く観察できる。65は直立気味に立ち上がるもので、反転実測した口径は20cmである。器面調整は、外面には粗い擦痕が残る左上がりのナデ調整、内面には外面よりも丁寧なナデ調整が施されている。また、内傾接合が観察された。

### iii) 壺形土器

#### ①分類

壺形土器（以下、壺）としたものには、大きさや形状、口縁部や胴部の装飾にバリエーションがあり、濱田分類では、以下のとおり分類されている。

#### A類

相対的に中・小型品で、丁寧なナデやミガキによって調整されている。文様の有無で細別されるが、A類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

#### B類

相対的に中・大型品で、口縁部や胴部に突帯が巡る。調整により、次のように細別する。また、突帯を刻むものについては、深鉢に用いた刻目の分類を用いる。

**B 1類** 丁寧なナデやミガキが施されたもの。相対的に中型品である。形状、大きさ、突帯の数や刻目にバリエーションがあるが、B 1類に相当するものは本遺跡からは出土しなかった。

**B 2類** 粗い擦痕が残るナデなど、深鉢と共通する調整が施されているもの。相対的に大型品が多い。突帯が口縁部に巡る。

#### ②壺B 2類（第18図66）

1点が出土した。66は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部からやや下がった位置に断面形態が下さがりの三角形を呈する刻目突帯が巡る。突帯の刻目はH 1 a類である。反転実測した口径は10cm弱で、内傾接合が観察される。

#### iv) 東日本系土器（第18図67）

67は東日本系の土器と考えられる肩部の破片で、外面には6条の平行沈線、内面にはヘラ状工具によるナデ調整が施されている。

#### v) まとめ

本遺跡から出土した突帯文土器群は、深鉢については、ほとんどが器形は砲弾型を呈し、刻目突帯を巡らせたものが多く、深鉢全体の67.4%を占める。また、刻目突帯の刻目のほとんどがヘラ状工具によるもので、いずれも小振りのD字あるいはV字状に施文されている。浅鉢については、古市河原田式に見られる逆「く」字形のものは認められず、いずれも碗形を呈するものである。桂見Ⅱ式に相当する深鉢2点と近畿の篠原段階の浅鉢1点が含まれているが、以上のことから、そのほとんどが古海式の範疇におさまるものと考えられる。

第3表 器種別組成

器種	点数	%
深鉢	48	72.7
浅鉢	17	25.8
壺	1	1.5
合計	66	100

第4表 深鉢の分類別組成

分類	点数	%
I	0	0
II	31	67.4
III	15	32.6
合計	46	100

第5表 深鉢の突帯形状

突帯形状	深鉢									細別合計		大別合計				
	刻目突帯						無刻目突帯			点数	%	点数	%			
	I		II		III											
a	1	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%	17	38.6	%
	2	0	0	%	9	31.0	%	4	26.7	%	13	29.5	%			
	3	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
	4	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
	5	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
b	1	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%	25	56.8	%
	2	0	0	%	13	44.8	%	5	33.3	%	18	40.9	%			
	3	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
	4	0	0	%	1	3.4	%	1	6.7	%	2	4.5	%			
	5	0	0	%	2	6.9	%	1	6.7	%	3	6.8	%			
c	1	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%
	2	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
	3	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
	4	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
	5	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
d	1	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%	2	4.5	%
	2	0	0	%	1	3.4	%	0	0	%	1	2.3	%			
	3	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%			
	4	0	0	%	1	3.4	%	0	0	%	1	2.3	%			
e		0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%
f		0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%	0	0	%
合計		0			29			15			44			44		

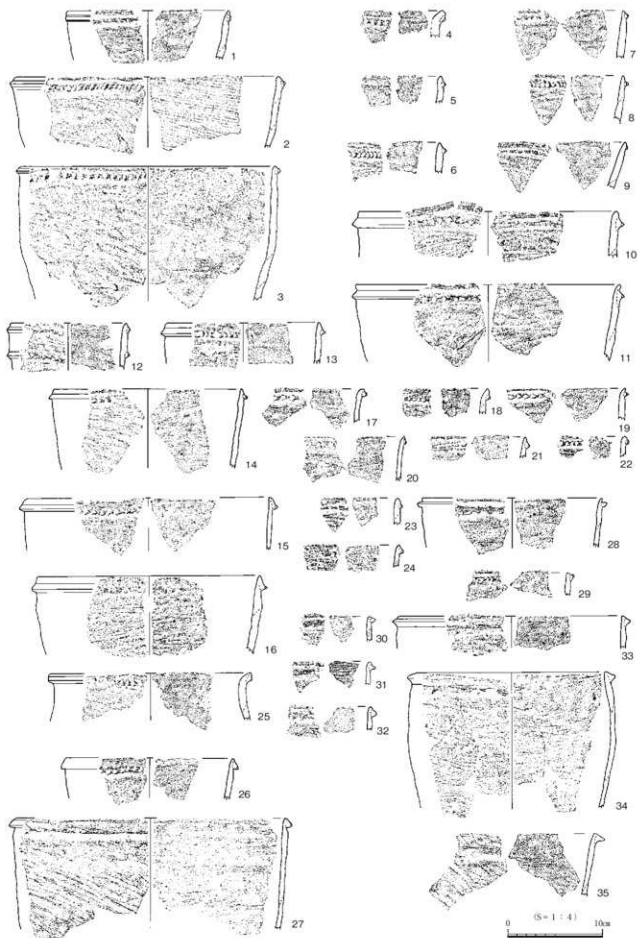
(濱田 2013) を基に作成

## (2) 弥生土器・石製品 (第19図)

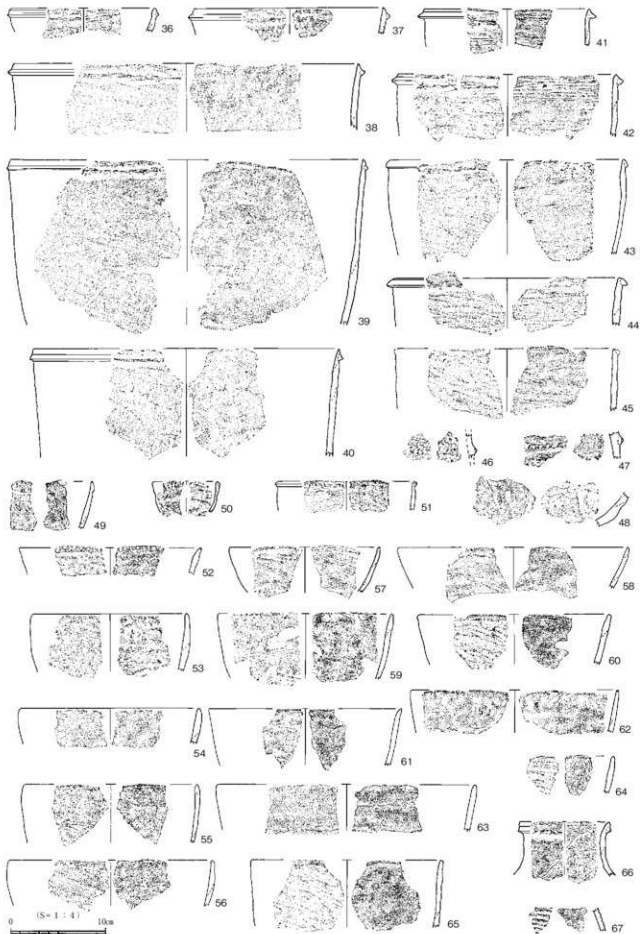
第5・6層から出土した、弥生時代中期中葉から後期初頭頃までの遺物を報告する。なお、本節で報告したもの以外に、第2節で報告する古墳時代の遺構 S1304・308・310・312 から後期初頭の土器が出土している。

1は中期中葉の広口壺の口縁部で、大きく外反し、端面には刻目目、内面には斜格子文が施されている。2・3は安山岩製の石鎌で、2は撥形、3は短冊形を呈する。いずれも基部は横方から打ち欠いており、平坦面をなす。4・5は磨製石斧である。4は安山岩製で、破損後に楔として再利用している。5は閃緑岩製の太型蛤刃石斧である。

(高橋)



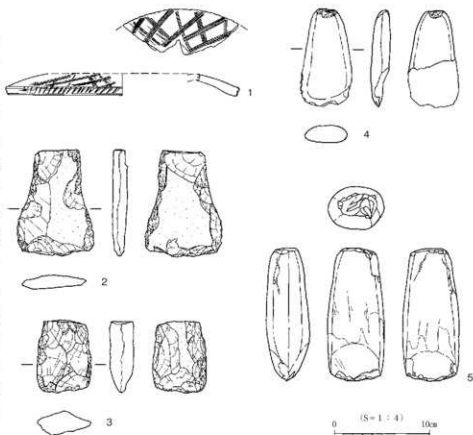
第17図 縄文土器 (1)



第18圖 縄文土器(2)

### (3) 小結

おもに第5・6層から出土した縄文時代晩期から弥生時代の遺物を報告した。第1次調査ではこれらの時期の遺物は出土しておらず、次節の弥生時代終末が最古の資料とされてきた。しかし、今回の調査では1区の低湿地を中心に、少なからず資料が得られたことで、この地での人間活動の開始期が縄文時代晩期まで遡ることが明らかになった。このことにより、当遺跡の西400mに位置する錦町第1遺跡における人間活動の開始期とほぼ



第19図 弥生時代の遺物

一致することになり、内浜砂州基部における縄文時代晩期以降の人間活動が広範囲に進展していたことになる。

弥生時代の遠賀川式土器は出土しておらず、弥生土器としては弥生時代中期中葉を最古として、後期初頭から後半の土器が少量出土しており、集落形成に先立って何らかの活動が周辺で行われた可能性がある。

また、これらの資料は、基盤となる第7層の砂州構成層の最上部が縄文時代晩期に近い時期であることを示しており、この時期に砂州形成が途絶え、風成砂の供給を受けつつ(註1)第6層以上の土壌形成が始まるような自然環境の大きな変化があったと推察される。その要因は寒冷化の気候変動による汀線の後退や、河川水の侵入による植生の変化などが想定されよう。いち早く植生が発達した低湿地を中心に、人間が進出して何らかの活動を開始したと考えたい。

(京嶋)

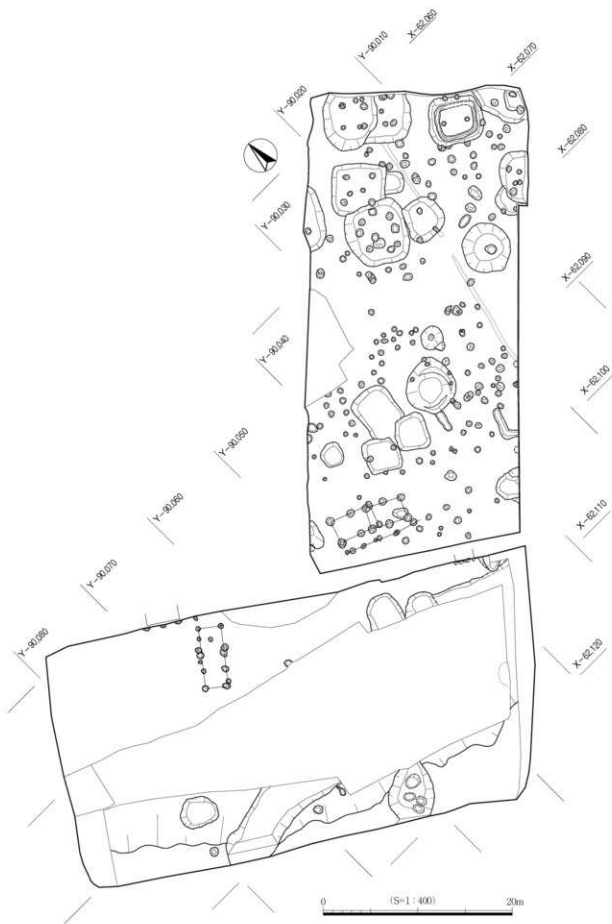
註

(1) 低湿地に近い第5・6層中に多く含まれる風化黄色粒は、分析により鉄酸化物で黄色を呈する軽石の細粒とされ、飛砂と共に運ばれたと考えられる(第三章第2節参照)。

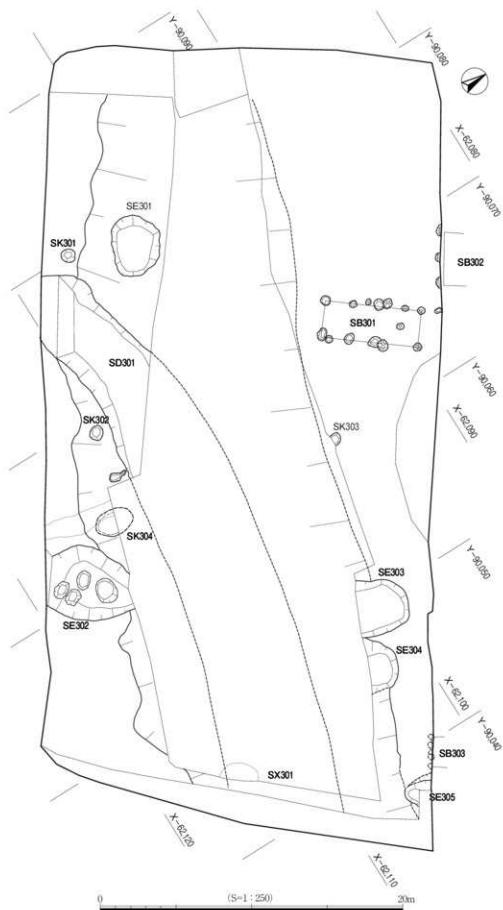
引用・参考文献

・濱田竜彦2013、「第17節 第4a層下面710溝出土の土器・土製品」:鳥取県教育委員会編『本高弓ノ木遺跡(5区)1』pp.83-114・pp.123-130

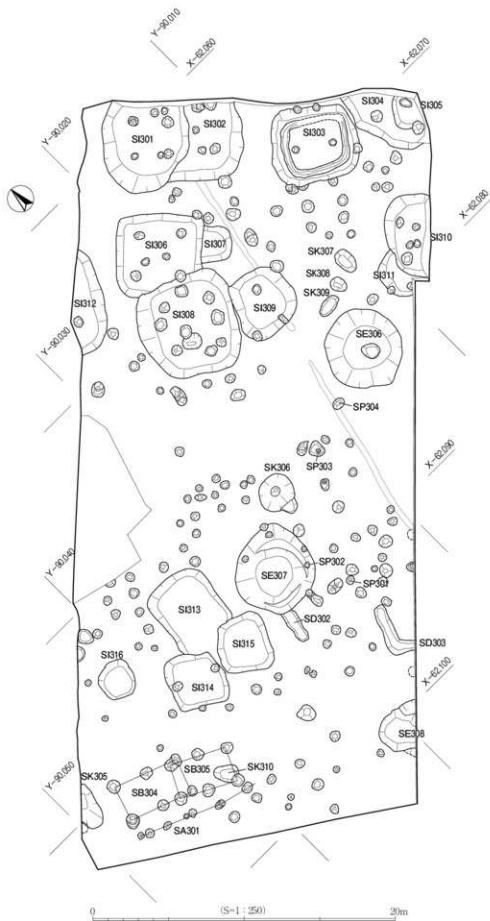




第20図 古墳時代遺構全体図



第 21 图 1 区古墳時代遺構全体図



第22图 2区古墳時代遺構全体图

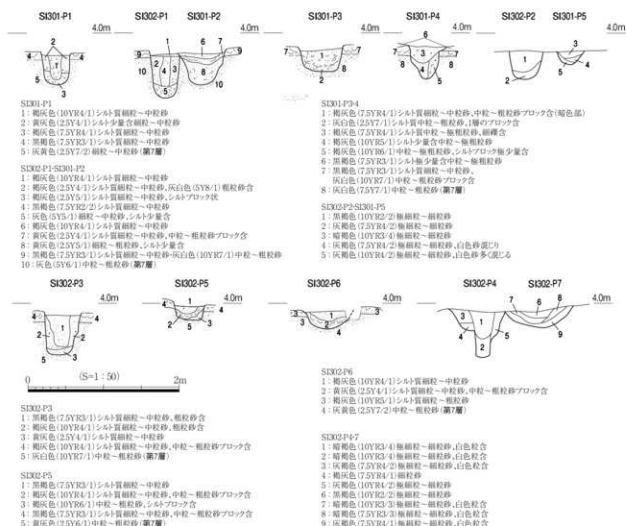
## 第2節 弥生時代終末～古墳時代後期

### (1) 竪穴建物

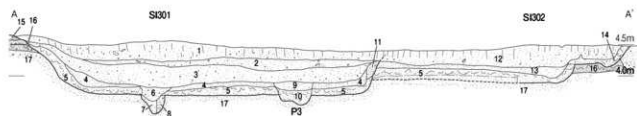
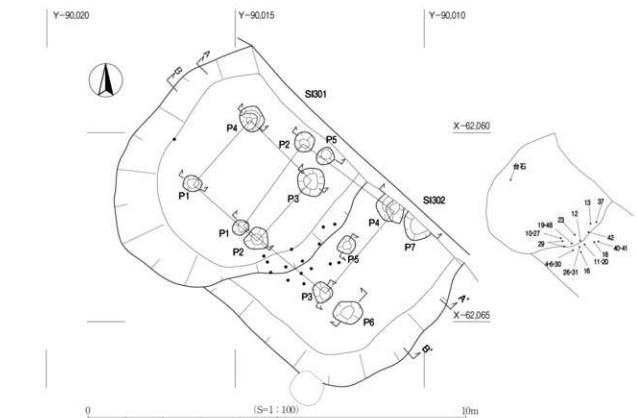
2区の第6b層上面で16棟が検出された。2区北部に集中する12棟と、南部の4棟の小型竪穴に二分される。建替えにより、同時期に併存したのは、2区北部で4・5棟、2区南部で1・2棟であろう。

竪穴は、本来は第6a層内から掘り込まれたことが地層断面の観察で明らかになっている。竪穴底は第7層であるが、その上部には第7層の砂にシルトが混じる擾乱層が堆積し、その上に貼床がなされている。擾乱層は第6b層に類似しており、竪穴加工時の堆積物を含みつつも、建物廃棄後の生物擾乱により形成された可能性があるが、後述のように第7層上部の液状化による物理的擾乱の可能性もある。床面の柱穴は擾乱層上面ないしは貼床上面から掘られている。

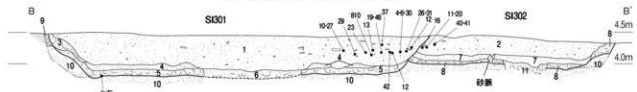
竪穴の平面形は2～6mの方形ないし隅丸方形、または長方形が多いが、多角形の可能性があるものもある。いずれも砂層を掘り込んでいるため、肩部が崩落して本来の形状が失われているものもある。床面の支柱穴は4基と2基があり、小型の竪穴では柱穴が検出されないものがあり、建物と断定はできないものの、掘削形態や床面整形に共通点があり、同様の建物遺構として報告する。



第23図 2区SI301・302床面遺構断面図

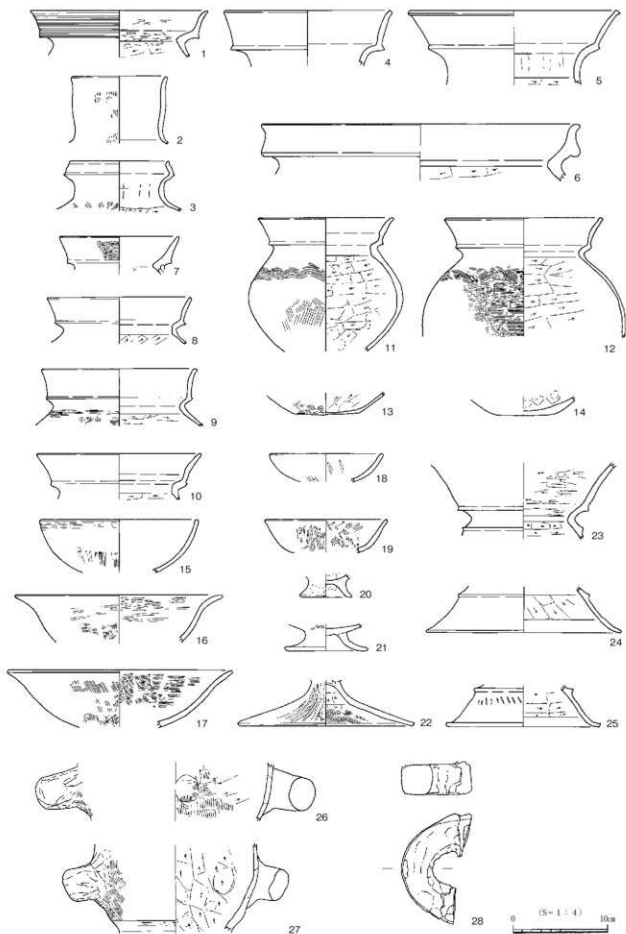


- 1: 黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒～粗粒砂, 細～中礫含, 糸状管状痕跡多い
- 2: 黒褐色(7.5YR3/1)シルト質中粒～粗粒砂, 細～中礫含
- 3: 黒褐色(10YR2/2)中粒～粗粒砂, シルト少量～中礫含
- 4: 黒褐色(7.5YR2/1)中粒～粗粒砂, シルト少量含, 肥床小
- 5: 黒褐色(10YR2/2)シルト質中粒～粗粒砂-赤灰色(5Y7/1)中粒～粗粒砂, 加工時埋積小
- 6: 褐色(7.5YR4/1)シルト質中粒～粗粒砂, 細礫含
- 7: 褐色(10YR5/1)シルト少量含中粒～粗粒砂
- 8: 褐色(10YR6/1)中粒～粗粒砂, シルトブロック少量含
- 9: 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒～粗粒砂
- 10: 赤灰色(10YR4/1)中粒～粗粒砂, 上部にシルトブロック含
- 11: 褐色(10YR4/1)シルト質中粒～粗粒砂
- 12: 黒色(7.5YR2/1)シルト質中粒～粗粒砂, 礫礫含, 埋鉄
- 13: 褐色(10YR4/1)シルト少量含中粒～粗粒砂, 肥床小
- 14: 褐色(10YR4/1)シルト少量含中粒～粗粒砂, 細礫含
- 15: 黒褐色(5YR3/1)中粒～粗粒砂, 細～中礫多含(礫6層)
- 16: 黒褐色(10YR3/2)シルト少量含中粒～粗粒砂-細～中礫(礫6層)
- 17: 灰黄色(2.5Y6/2)中粒～粗粒砂-細礫(礫7層)

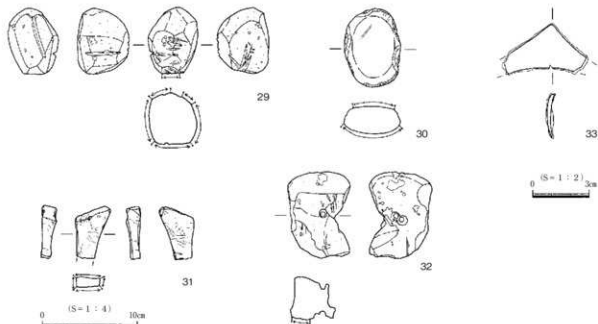


- 1: 黒褐色(7.5YR3/1)シルト質細粒～粗粒砂, 細～中礫含, 糸状管状痕跡多い
- 2: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂, シルト少量～中礫含, 埋鉄
- 3: 黒褐色(7.5YR2/2)細粒～中粒砂, シルト少量含
- 4: 黒褐色(5YR2/1)細粒～中粒砂, シルトブロック含
- 5: 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒～中粒砂-褐色(10YR5/1)中粒～粗粒砂, 加工時埋積小
- 6: 黒褐色(10YR3/1)細粒～粗粒砂, シルト少量含
- 7: 黒褐色(7.5YR2/2)シルト質細粒～中粒砂
- 8: 黒色(2.5YR2/1)シルト質細粒～粗粒砂-赤灰色(2.5Y6/1)中粒～粗粒砂, 加工時埋積小
- 9: 黒褐色(10YR2/2)シルト質中粒～粗粒砂(礫6層)
- 10: 褐色(10YR6/1)中粒～粗粒砂, 細～中礫少量含(礫7層)
- 11: 黒色(10YR2/1)シルト質細粒～中粒砂-赤灰色(2.5Y6/1)中粒～粗粒砂, 8層と類似(SI302:P6)

第24図 2区SI301・302平・断面図



第25图 2区S1301出土遗物(1)



第26図 2区SI301出土遺物(2)

SI301 (第23～26図)

平面形が検出面で5.7m×6.1m以上の楕円形をなすが、B-B'ラインの床面幅は4.9mで、本来方形であったと推定される。検出面から床面までの深さは0.5mである。主柱穴はSI301-P1～4と思われ、直径0.4～0.5m、深さ0.4～0.5mで、確認された柱痕跡は直径15cm、柱間距離は2.1～2.3mである。床面には炉穴などの中央穴や貯蔵穴などは検出されなかった。SI301の床面西壁際で台石・磨石が、東壁際で敲石が出土した。

1は弥生土器甕で、口縁下端部が僅かに垂下する。また、口縁部外面には平行沈線が巡る。

2～28は土師器である。2～5は壺で、2は長口壺である。3は口縁部がく字形に内側に屈曲し、端部は僅かに外反する。4・5は複合口縁の壺で、4の口縁端部は丸くおさまり、5の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ肥厚している。6～12は甕で、6は大型の甕である。7～12は複合口縁の甕で、8～11の口縁端部は丸くおさまる。12の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。また、11・12の肩部外面には波状文が巡る。13・14は平底気味の底部である。15～17は高坏の坏部で、15は内湾しながら立ち上がり、16・17は口縁部が外反する。18～22は低脚坏である。18・19は坏部、20～22は脚部で、22は大きく八字形に開く。23～25は鼓形器台で、23は受け部、24・25は脚部である。25の外面には列点文が施されている。26～28は瓶で、いずれも環状の把手である。

29～32は石製品である。29は軽石製の磨石で、表表面、左右側面、下端面の6面を使用している。30はデイサイト製の磨石・敲石で、表表面に磨痕、上下端部には敲打痕がある。31は凝灰岩製の砥石で、下端部が欠損するが、長方形に加工した素材の表表面及び左右側面を使用している。32は軽石製の自然石である。加工痕或使用痕は認められないが、何らかの意図で採取・使用されたものと推測される。

33は用途不明の鉄製品である。

SI302 (第23・24・27・28図)

平面形が検出面で5.5m以上×5.5m以上の方角をなすと思われ、A・Bラインの断面観察から

S1301に切られていると判断した。検出面から床面までの深さ0.3mである。主柱穴は配置と深さなどからS1302-P1～4と考えた。直径0.4～0.7m、深さ0.4～0.6mで、確認できた柱痕跡は直径20cmである。柱間距離は2.7～3.0mである。床面で検出されたS1302-P5～7は浅く、埋土の堆積状況から柱穴ではないと判断した。

S1301とS1302が切り合う部分を中心に、両者の覆土中から完形に近い土師器が多く出土した。また、鉄鍬をはじめとする鉄製品が少量、モモ核2点が出土している。

1は弥生土器甕で、口縁部外面には7条の擬凹線が巡り、頸部外面には列点文がある。

2～48は土師器である。2～8は壺で、2～4は口縁部が内傾する。5は複合口縁の直口壺、6・7は複合口縁の壺で、6の口縁端部は平坦気味となっている。7の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。また、7の肩部外面には波状文が巡る。8は小型壺で、口縁部が欠損するが底部には台が付く。9～23は甕である。9～21は複合口縁の甕で、9・10の口縁端部は丸くおさまり、11の口縁端部は平坦気味となっている。12～20はいずれも口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ肥厚している。また、11の肩部外面にはヘラ状工具による文様、12・15の肩部外面には櫛横平行線、13・16～19の肩部外面には波状文、14・20の肩部外面には列点文が施されている。21は複合口縁が退化したものである。22・23はく字形口縁の甕で、23の体部下には穿孔がある。24～30は高坏である。24～29は坏部で、24は内湾し、25～27は口縁部が外反する。28・29は段を有し、口縁部が外反する。30は脚部である。31～35は低脚坏の脚部である。36～38は鉢で、37・38は片口が付く、外面は被熱し、多量の煤が付着している。39～44は鼓形器台で、39・40は受部、41～44は脚部である。45は蓋のつまみの部分である。46～48はミニチュア土器で、46は碗形、47は甕形、48は高坏形を呈する。

49は黒色磨研を施した短頸壺で、口縁部内面が欠損しているが、受口状となっていたと推測される。

50～53は鉄製品で、50は鉄鍬、51・52は刀子、53は釘である。

### S1303 (第29・30図)

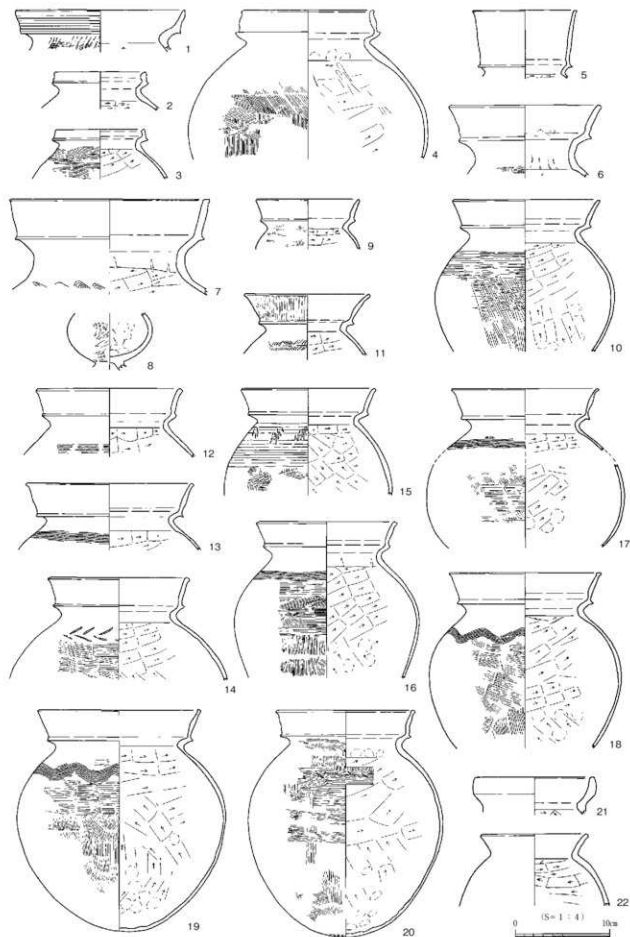
平面形は検出面で5.8m×5.0mの隅丸長方形を呈し、床面までの深さは0.2～0.3mである。床面の外周には幅0.5m、深さ0.1mの周壁溝が検出されており、この溝の外縁が壁面になっていたと思われる。床面の規模は4.4m×3.8mである。主柱穴はP1・2の2基で、直径0.3～0.4m、深さ0.3～0.4mである。P1で確認された柱痕跡は直径約10cmで、柱間距離は約2.5mである。床面で炉跡や土坑などは検出されなかった。

ほぼ床面上で敲石などの河原石材のほか土師器高坏・甕などが出土した。その他、外面にタタキ調整が認められる甕片を含む多くの土師器や、針状の鉄製品などが覆土から出土している。

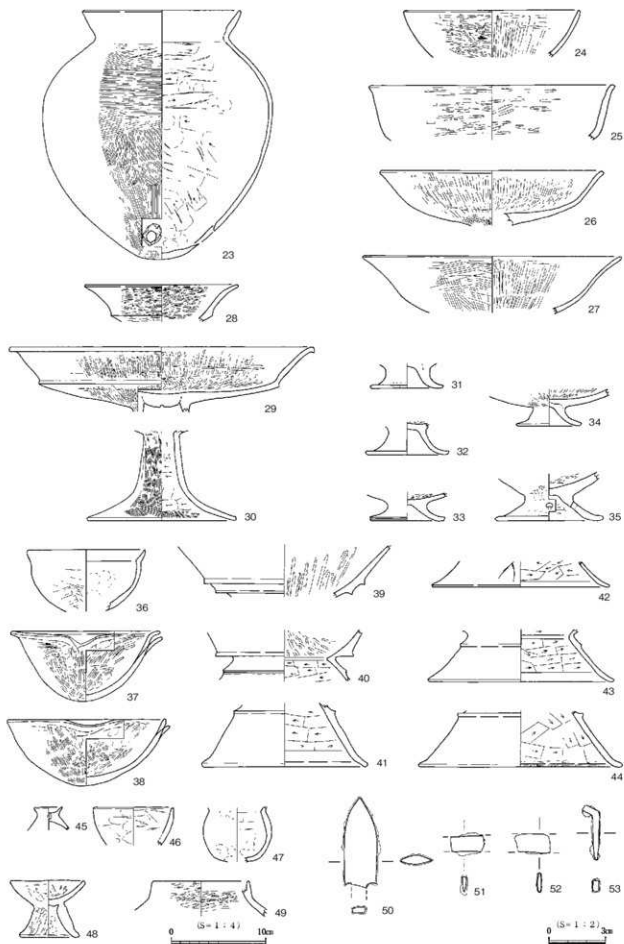
1は弥生土器甕で、口縁下端部が僅かに垂下する。また、口縁部外面には平行沈線が巡る。

2～21は土師器である。2～4は複合口縁の壺で、2は小型の壺で、口縁部が僅かに内傾する。3の口縁端部は丸くおさまり、4の口縁端部は平坦面となっており、平坦部には1条の沈線がある。5～8は複合口縁の甕で、いずれも口縁端部は平坦となっており、5の平坦部には1条の沈線がある。7・8はさらに端部を外方へ僅かに肥厚している。また、6の肩部外面には波状文、8の肩部外面には1条の沈線が巡る。9～15は高坏である。9の坏部は緩やかな段を持ち、口縁部が外反する。10の坏部は内湾気味に立ち上がり、11～15の坏部は口縁部が外反する。16～18は低脚坏の脚部、19は鼓形器台の受部、20は小型器台の受部、21は蓋のつまみの部分である。



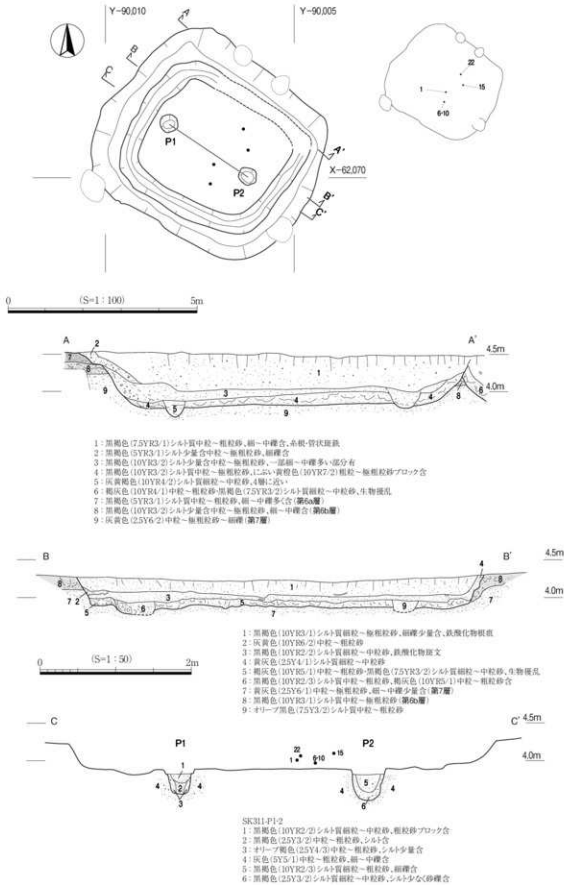


第27图 2区S1302出土遗物(1)

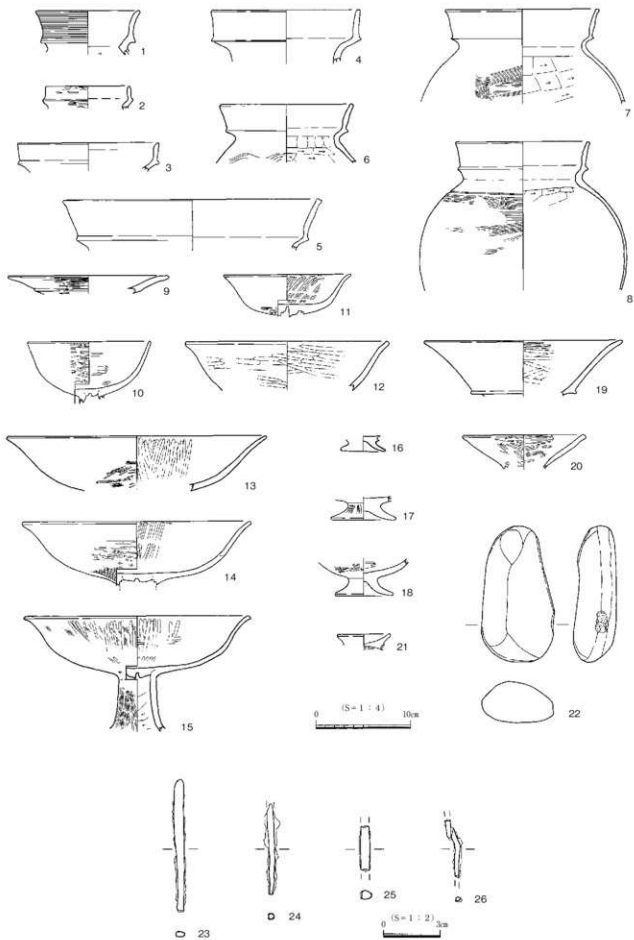


第28图 2区S1302出土遗物(2)

X-62.065

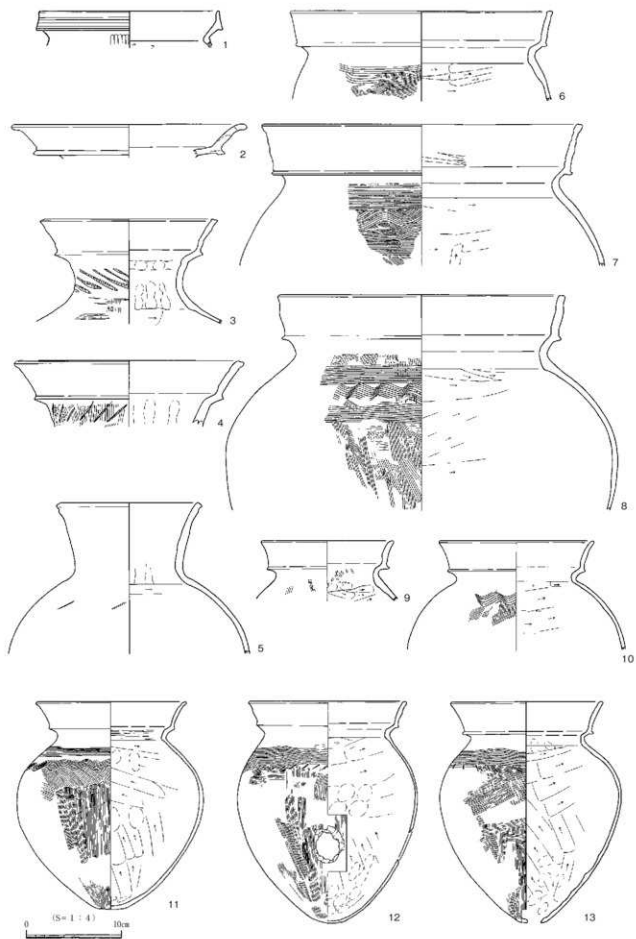


第29図 2区SI303平・断面図

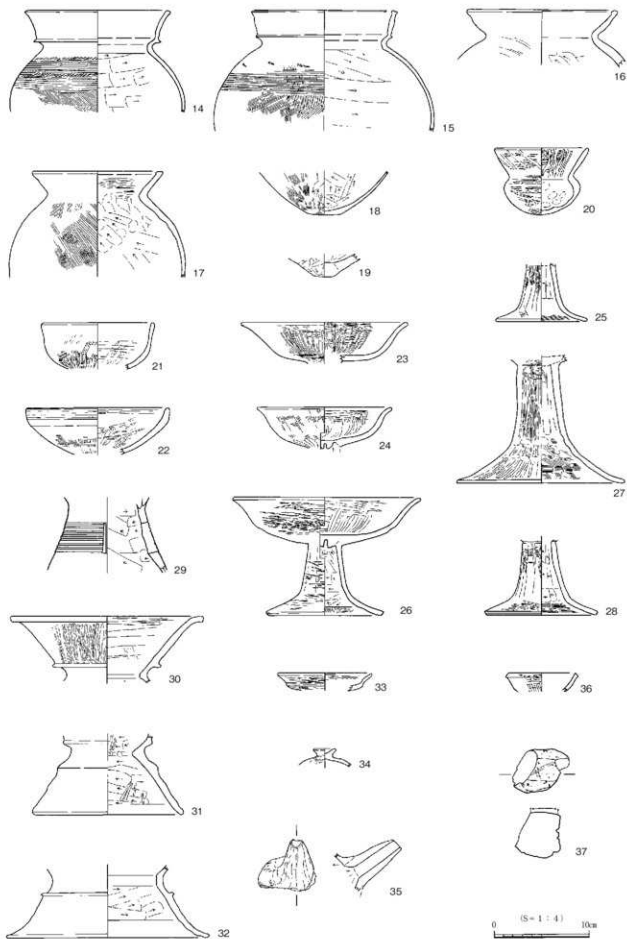


第30图 2区 S1303 出土遗物





第32图 2区S1304出土遗物(1)



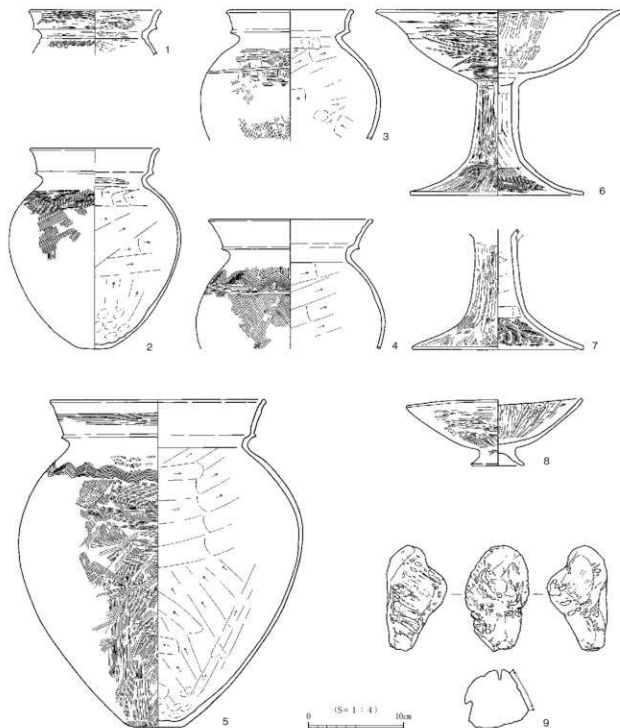
第33图 2区S1304出土遗物(2)

は直径約0.7m、深さ約0.6mでP1で確認された柱痕跡は直径16cmで、柱間距離は2.8mである。

床面南側の壁際で完形に近い土師器甕・高坏などが複数出土した他、覆土から布留系甕や小型丸底壺などが出土している。

1は弥生土器甕である。1は後期初頭の土器で、口縁部は僅かに内傾し、口縁部外面には4条の擬凹線が巡る。

2～36は土師器で、2～5は壺である。2～4は複合口縁の壺で、2は口縁部が大きく外反する。3・4の頸部外面には櫛状工具による刺突文が施されている。5は直口壺である。6～8は大型の複合口縁の甕で、6の口縁端部は平坦気味となっている。7・8の口縁端部は平坦となっており、さらに外方



第34図 2区 S1305 出土遺物



へ僅かに肥厚している。7の平坦部には1条の沈線がある。また、6の肩部外面には櫛描平行線、7・8の肩部外面には波状文と櫛描平行線が巡る。9～15は複合口縁の甕で、9～12の口縁端部は丸くおさまる。また、10の肩部外面には波状文、11の肩部外面には波状文と櫛描平行線、12の肩部外面には櫛描平行線と列点文が施されている。11は平底気味、12は尖り気味の丸底となっており、12の体部下には穿孔がある。13・14の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。また、13・14の肩部外面には櫛描平行線と列点文、15の肩部外面には連続押し文と櫛描平行線が施されている。13は平底気味となっており、底部には穿孔がある。16・17は布留系の甕で、16の口縁端部は丸くおさまり、17の口縁端部は水平な面を持つ。18・19は平底気味の底部、20は小型丸底壺である。21～28は高坏である。21の坏部は僅かに外傾し、22の坏部は内湾し、23・24・26の坏部は外反する。25・27・28は脚部で、27はハ字形に大きく開く。29は器台の脚部で、外面には8条の沈線が巡り、4方向に方形の透かし孔がある。30～32は鼓形器台、33は小型器台、34は蓋のつまみの部分、35は注口土器の注口の部分である。36はミニチュア土器で、碗形を呈する。

37は軽石製の自然石であるが、何らかの意図で採取・使用されたものと推測される。

S1305はS1304のA-A”ラインの地層断面(第31図)で、S1304覆土中から切り込む遺構として確認され、地層観察用甕を掘削して平面でも確認した堅穴である。地層断面で確認した部分をコーナーとする隅丸方形と推定され、南西から北東にかけて3.0m以上の規模である。床面はS1304より約0.15m低く作られている。床面には浅いS1305-P1があるのみで、調査範囲内で支柱穴は検出されなかった。

完形に近い土師器甕・高坏・低脚坏が床面で出土している。

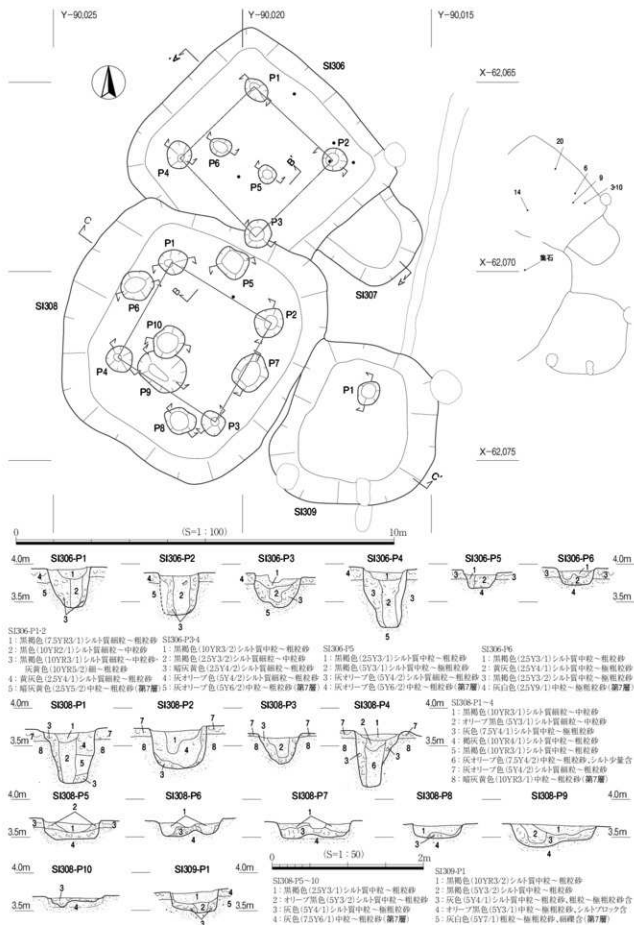
1は弥生土器甕である。口縁下端部が僅かに垂下し、口縁部外面には平行沈線が巡る。また、肩部外面には1条の沈線が巡り、列点文がある。2～5は複合口縁の甕で、3・4の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。2の肩部外面には波状文と列点文、3の肩部外面には1条の沈線、4・5の肩部外面には波状文が施されている。2は平底気味で、5は平底となる。6・7は高坏である。6の坏部は外反し、6・7ともに脚部はハ字形に大きく開く。8はほぼ完形の低脚坏である。9は軽石製の自然石であるが、何らかの意図で採取・使用されたものと推測される。

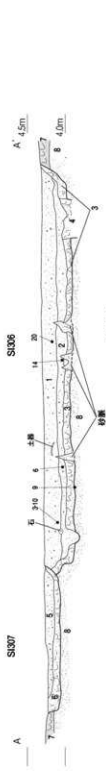
S1306～309(第35～40図)

S1306は平面形が5.6m×5.5mの方形を呈し、床面までの深さは0.2mである。床面で検出されたP1～4が支柱穴で、直径0.5～0.6m、深さ0.4～0.7mである。いずれの柱穴でも直径15～20cmの柱痕跡が確認できた。床面では他に2基の浅い小ピットが検出されたのみである。

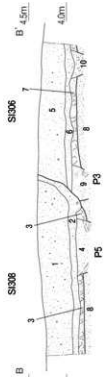
床面からは土師器甕・器台・低脚坏などの他、鉄製品が出土した。覆土からは弥生時代終末期からの土師器、磁石などが出土している。

1～18は土師器である。1・2は壺で、1は複合口縁を有し、2は口縁部がく字形を呈する。3～9は甕である。3は大型の複合口縁の甕で、口縁端部は丸くおさまる。4～7の口縁端部は丸くおさまり、7はさらに外方に僅かに肥厚している。8の口縁端部は平坦となっており、さらに外方に僅かに肥厚している。また、平坦部には1条の沈線がある。9は球形の体部である。10～13は低脚坏で、10の口縁部は僅かに外反し、11は内湾しながら立ち上がる。12・13は脚部である。14は鼓形器台である。15・16は小型器台の受部で、15は内湾気味に立ち上がり、16は段を有し、口縁端部が肥厚する。17・18は甕で、17は口縁部、18は環状の把手である。

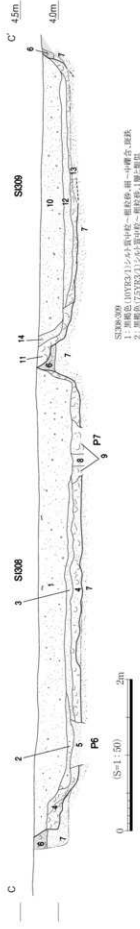




- S1306-307
- 1: 黒色(7.5YR2.7)シロ小質中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒鉄
  - 2: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒鉄
  - 3: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒色(10YR5.1)中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 4: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒色(10YR5.1)中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 5: 黒色(10YR2.7)シロ小質中粒～粗粒砂、黒確合、黒鉄
  - 6: 黒色(2.5Y3.1)シロ小質中粒～粗粒砂、黒色(10YR5.1)中粒～粗粒砂
  - 7: 黒色(10YR6.1)中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒工時要層
  - 8: 黒色(10YR6.1)中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒工時要層

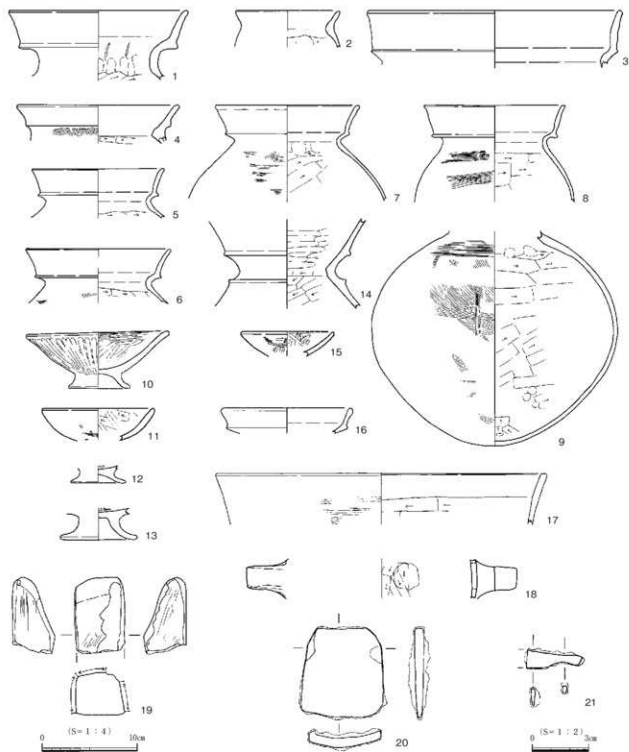


- S1306-308
- 1: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒鉄
  - 2: 黒色(10YR2.3)シロ小質中粒～粗粒砂、黒確合、黒鉄
  - 3: 黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒色(10YR7.1)中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 4: 黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 5: 黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒鉄
  - 6: 黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 7: 灰白色(2.5Y7.7)中粒～粗粒砂、黒色(10YR2.2)中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 8: 灰白色(10YR7.1)中粒～粗粒砂、黒確合、黒鉄
  - 9: 灰白色(10YR7.1)中粒～粗粒砂、黒確合、黒鉄
  - 10: 灰白色(7.5YR6.1)中粒～粗粒砂、黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～中粒砂、プロケ合



- S1306-309
- 1: 黒色(10YR2.1)シロ小質中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒鉄
  - 2: 黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 3: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 4: 黒色(10YR5.1)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 5: 黒色(10YR2.1)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 6: 灰白色(10YR7.1)中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒工時要層
  - 7: 灰白色(10YR7.1)中粒～粗粒砂、黒～中確合、黒工時要層
  - 8: 黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 9: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 10: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 11: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 12: 黒色(7.5YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂、黒工時要層
  - 13: 黒色(7.5YR2.1)シロ小質中粒～粗粒砂、灰白砂、プロケ合
  - 14: 黒色(10YR2.2)シロ小質中粒～粗粒砂

第36図 2区S1306～309断面図

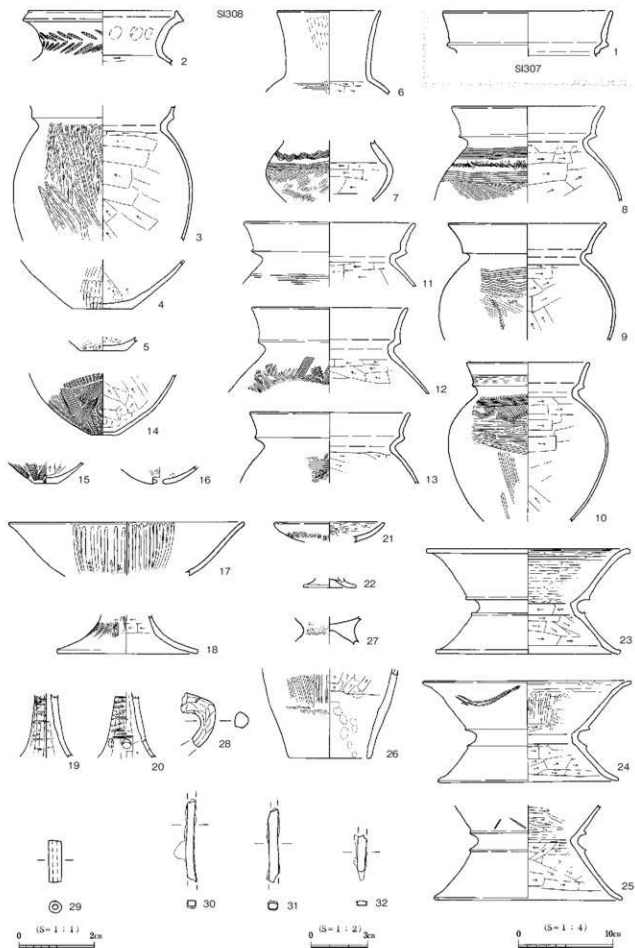


第37図 2区S1306出土遺物

19は安山岩製の砥石で、下端部が欠損するが、長方形の素材の表面及び左右側面を使用している。  
20・21は鉄製品で、20は鉄斧、21は刀子の基部である。20は袋部の折り返しの痕跡が認められ、袋状鉄斧の可能性はある。

S1307はS1306を切る2.2m×1.9mの隅丸方形を呈する小型の堅穴である。貼床は認められず、擾乱層までの深さは0.1mほどで浅い。内部に明瞭な遺構は認められなかった。土師器甕・高坏・器台の細片が出土している。

1は複合口縁の土師器甕で、口縁端部は丸くおさまる。



第38图 2区SI307·308出土遗物(1:SI307, 2~32:SI308)

SI308はSI306を切っている堅穴で、6.7m×6.5mの隅丸方形を呈する。床面までの深さは0.4mである。主柱穴はSI308-P1-4であり、直径0.5~0.7m、深さは0.4~0.7mである。すべての柱穴で直径15~20cmの柱痕跡が確認できた。柱間距離は約3.0mである。他に6基の浅い小土坑が検出されたが、用途は不明である。

覆土から土師器壺・甕・高坏・器台や注口土器、棒状鉄製品を含む鉄製品や碧玉製管玉などが出土した。また、北寄りの覆土上部に、花崗岩を少量含む安山岩・デイサイトを主体とする河原石を集積した遺構（第39図）があり、使用痕は見られないが被熱して変色したものを含んでいた。

2~5は弥生土器である。2は後期初頭の壺で、口縁端部は内傾し、頸部外面には羽状文が施されている。3は複合口縁の甕で、口縁端部が欠損するが、口縁下端部は僅かに垂下する。4・5は底部である。

6~28は土師器である。6は直口壺、7は小型壺の体部で、7の肩部外面には波状文と櫛描平行線が巡る。8~13は複合口縁の甕で、8~10の口縁端部は丸くおさまる。11~13の口縁端部は平坦となっており、11はさらに外方へ僅かに肥厚している。14~16は底部で、14・15は平底、16は平底気味となっており、穿孔がある。17~20は高坏で、17の坏部の口縁部は僅かに外反する。18~20は脚部で、20は円孔が2ヶ所穿たれている。21・22は低脚坏で、21の坏部は皿状を呈する。23~25は鼓形器台で、24・25の受部外面には線刻がある。26は瓶の底部、27は台付の底部、28は環状の把手である。

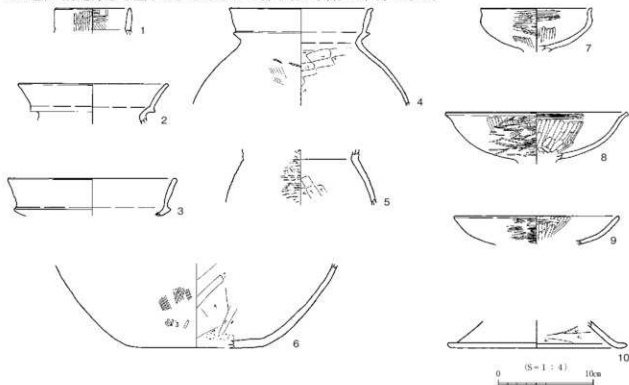
29は碧玉製の管玉である。

30~32は鉄製品で、いずれも断面長方形の棒状を呈し、長頸鎌の頭部の可能性があるが、不確定であり、棒状製品としておく。

SI309はSI308の東に接して掘られた堅穴で、4.3m×4.0mの丸みの強い隅丸方形を呈する。SI308との切り合い関係は不明である。



第39図 2区SI308上部の集石



第40図 2区SI309出土遺物

床面を整形しており、深さは0.3mである。床面には直径0.6m、深さ0.3mのP1が検出されたのみであるが、直径12cmほどの柱痕跡が確認されたことから、建築に関わる柱穴と考えられる。

覆土から土師器壺・甕・高坏・器台などが出土した。また、S1308・309からモモ核が7点出土した。

1～10は土師器である。1は直口壺である。2～5は甕で、2～4は複合口縁を有し、いずれも口縁端部は平坦となっており、4はさらに外方へ僅かに肥厚している。6は平底の底部である。7・8は高坏の坏部で、7は大きく内湾しながら立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。8は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。9は低脚坏の坏部で、浅い皿状を呈する。10は鼓形器台の脚部である。

#### S1310・311（第41～43図）

S1310は平面形が5.4m×3.0m以上の隅丸方形を呈し、床面までの深さは約0.4mである。床面には直径0.5～0.6m、深さ0.5mのP1・2があり、いずれも直径18cmの柱痕跡が認められた。柱間距離は2.5mである。他に浅い小土坑が3基検出されている。

床面からは土師器壺・甕・高坏・低脚坏・器台が出土しており、覆土からも弥生土器・土師器などが出土している。

第43図の1～4は弥生土器である。1・2は後期初頭の壺で、いずれも口縁部が内傾する。また、2の頸部外面には羽状文が施されている。3は複合口縁の甕で、口縁下部部が僅かに垂下し、外面には平行沈線が巡る。4は平底の底部である。

5～30は土師器である。5～7は壺で、5は口縁部がく字形に内側に屈曲する。6は複合口縁で、口縁端部は丸くおさまる。7は外反しながら立ち上がり、口縁端部には水平な面を持つ。8～16は甕である。8は大型の複合口縁の甕で、口縁端部は平坦となっている。9～12の口縁端部は丸くおさまり、9の口縁部内面は浅い凹状となっている。13～15の口縁端部は平坦となっており、14・15の平坦部には1条の沈線がある。16は布留系甕の口縁で、口縁端部を内側につまみ出している。17は小型丸底鉢で、内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。18～21は高坏で、18・19は口縁部が外反し、20は内湾しながら立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。21は脚部である。22～25は低脚坏で、22・23の坏部は内湾しながら立ち上がる。24・25は脚部である。26～29は鼓形器台である。26・27は受部、28・29は脚部で、27の外面には波状文が巡る。30は小型器台の受部で、内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。31は土玉である。

32はデイスイト製の敲石で、上端部と下端部を使用している。

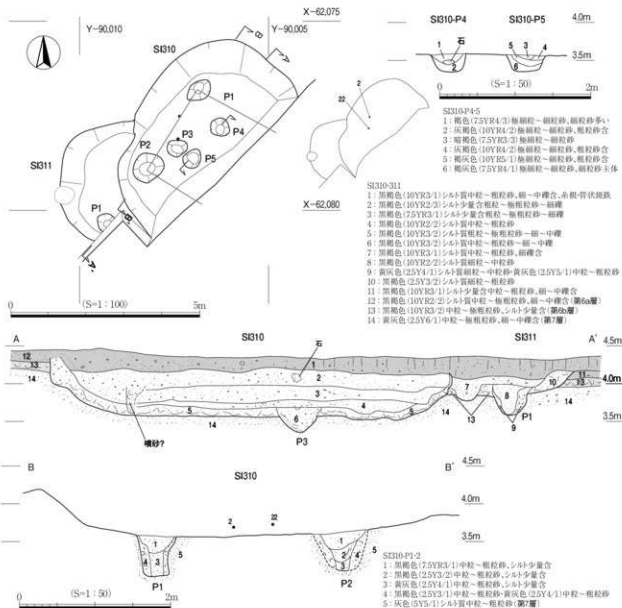
S1311はS1310に切られる小型の堅穴で、一辺3.0m以上の丸みの強い隅丸方形を呈すると推定される。明瞭な貼床は認められず、擾乱層までの深さは0.2mである。床面南寄りに直径0.5m、深さ0.4mのP1があり、直径18cmの柱痕跡が確認された。

覆土から土師器甕・器台の他、鉄鏝が出土した。

第42図の1～3は土師器である。1・2は複合口縁の甕で、1の口縁端部は丸くおさまり、2の口縁端部は平坦となっている。3は鼓形器台の受部、4は平基式の鉄鏝である。

#### S1312（第44・45図）

S1312は平面形が7.0m×2.5m以上の隅丸方形を呈すると思われる。貼床までの深さは0.3～0.5mで、床面南部に主柱穴とみられるP1を検出した。直径0.55m、深さ0.5mで、直径約18cmの柱痕跡が確認できた。4本主柱であったと推定される。



第41図 2区SI310・311平・断面図



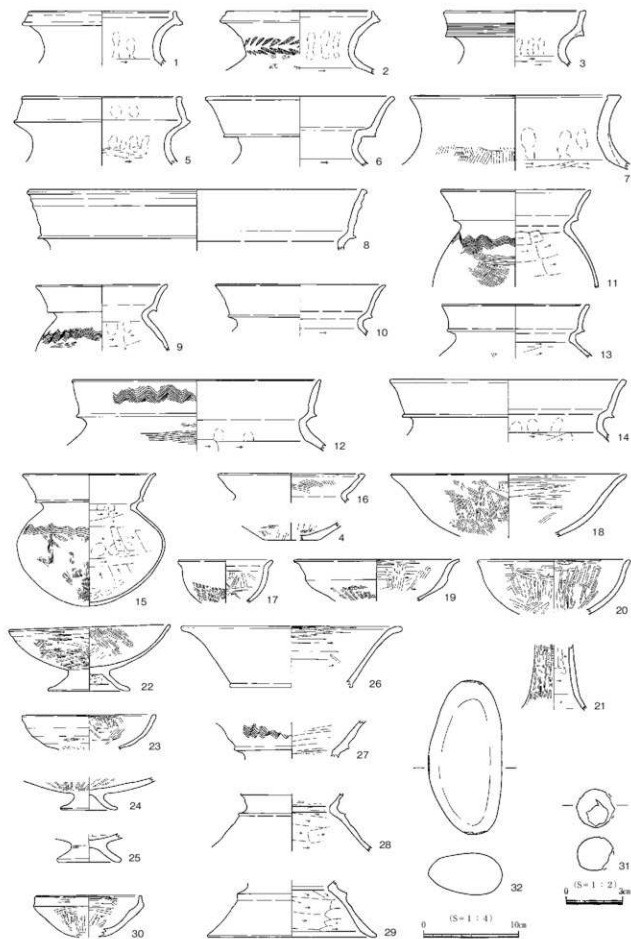
第42図 2区SI311出土遺物

柱穴に近接した貼床上面で土師器の大型高坏坏部が伏せた状態で出土した。また、覆土からは多くの土師器とともに弥生時代後期の土器や鉄製品も出土した。

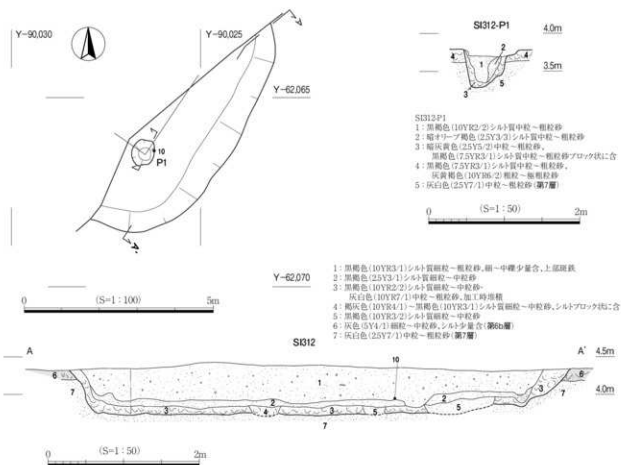
1~5は弥生土器である。1は後期初頭の壺で、口縁端部を上下に拡張し、外面には文様が施されている。また、内外面とも赤彩が施されている。2・3は甕で、2の口縁部外面には波状文と平行沈線が巡る。4・5は底部である。

6~11は土師器である。6~8は複合口縁の甕で、6・7の口縁端部は丸くおさまり、8の口縁端部は平坦となっている。また、6の頸部外面には波状文が巡る。9は小型丸底壺で、複合口縁を有し、体

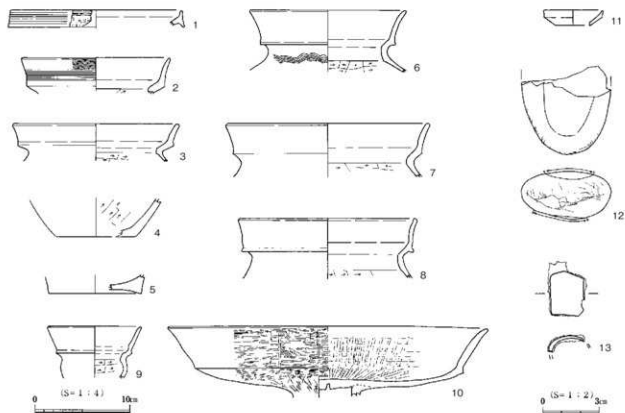




第43图 2区S1310出土遗物



第44図 2区S1312平・断面図



第45図 2区S1312出土遺物

部径よりも口径が大きいものである。10は大型の高坏で、段を有する皿状の坏部である。11は小型器台の受部か。

12は安山岩製の磨石・敲石で、上半部が欠損するが、表裏面に磨痕、下端部に敲打痕がある。

13は鉄製品である。左側縁の一部が折り曲げられており、袋状鉄斧の可能性も考えたが、厚さが非常に薄く、円筒状の製品と考えた。

SI1313～316 (第46～50図)

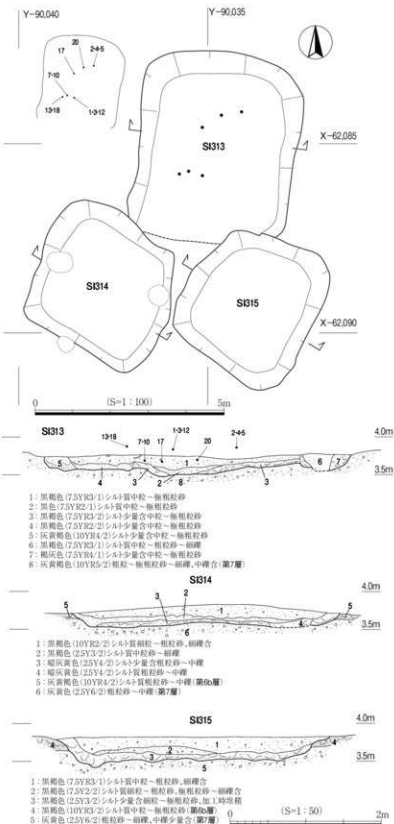
第6層ないし第7層上面で3種の堅穴が接するように検出された。切り合い部分はずかで、先後関係は不明である。いずれも支柱穴は検出されず、建築遺構とは断定できないが、貼床するものがあることから、他の堅穴同様に建築遺構として報告する。

SI1313は平面形が5.0m×4.3mの長方形で、明瞭な貼床は認められなかった。検出面から擾乱層上面までの深さは最大で0.2mである。内部には遺構は認められなかった。

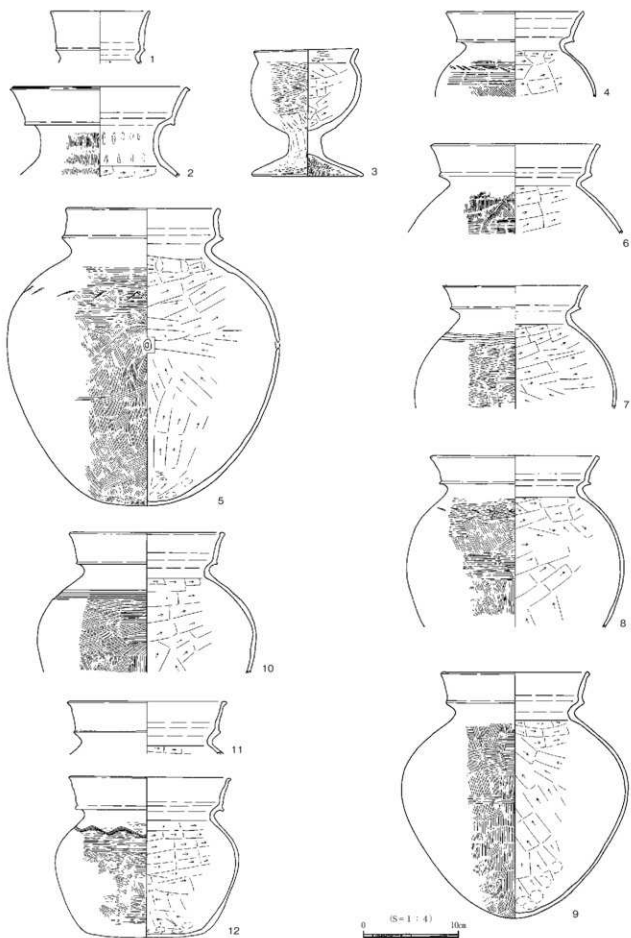
中央部を中心に土師器甕・高坏・小型壺・小型器台などの多くの土器が集中していたが、覆土に含まれるものが多い。

1～20は土師器である。1～3は壺で、1は直口壺である。2は複合口縁の壺で、口縁端部は平坦となっており、平坦部には1条の沈線がある。

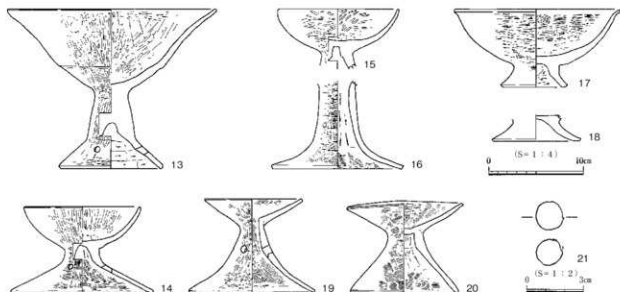
3は脚付壺で、口縁部は外反し、脚裾部は八字形に大きく開く。4～12は複合口縁の甕である。4の口縁端部は丸くおさまり、肩部外面には列点文が施されている。5の口縁端部は平坦気味となっており、肩部外面にはヘラ条工具による刺突文が施されている。また、体部中央には小さな円孔がある。6～9の口縁端部は平坦となっており、さらに外方に僅かに肥厚している。また、6の肩部外



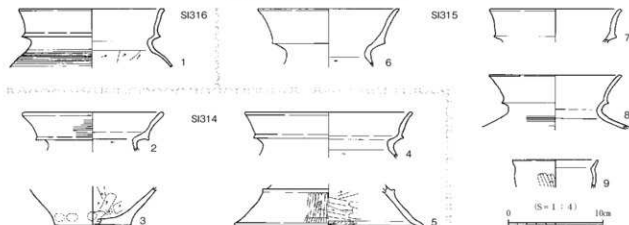
第46図 2区SI1313～315平・断面図



第47图 2区S1313出土遗物(1)



第48図 2区SI313出土遺物(2)

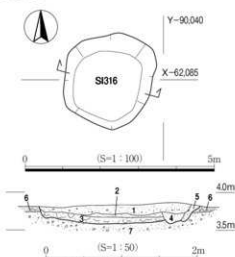


第49図 2区SI314~316出土遺物  
(1: SI316、2~5: SI314、6~9: SI315)

面には工具痕があり、7の肩部外面には波状文、8の肩部外面にはヘラ条工具による刺突文が施されている。11・12の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ大きく肥厚している。12は大きな平底で、肩部外面には波状文が巡る。13~16は高坏である。13は坏部が僅かに段を有し、脚部には4方向に円形の透かし孔がある。14・15は坏部が内湾するもので、14の脚部は八字形に大きく開き、4方向に円形の透かし孔がある。17・18は低脚坏で、17の坏部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。19・20は小型器台で、19の脚部には円孔がある。21は土玉である。

SI314は平面形が3.8m×3.6mのややいびつな方形を呈し、検出面から床面までの深さは0.1~0.15mである。床面では廃絶後のものと思われるピット以外に遺構は検出されなかった。

2・3は弥生土器である。2は甕で、口縁端部が僅かに垂下



- 1: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～粗粒砂、細～中礫合
- 2: 黒褐色(7.5YR3/1)シルト質細粒～粗粒砂
- 3: 黒褐色(10YR3/2)シルト少量中粒～粗粒砂～細礫
- 4: 黒褐色(2.5Y2/2)シルト少量中粒～粗粒砂～細礫
- 5: 黒褐色(10YR2/3)シルト質粗粒砂～細礫、中礫合
- 6: 黒褐色(10YR3/2)シルト少量中粒～粗粒砂～中礫(黒色層)
- 7: 灰色(5Y5/1)中粒～粗粒砂～細礫、中礫合(第7層)

第50図 2区SI316平・断面図

し、口縁部外面には平行沈線が巡る。3は底部である。

4・5は土師器である。4は複合口縁の甕で、口縁端部は丸くおさまる。5は鼓形器台の脚部である。

SI315は平面形が3.9m×3.5mの方形を呈し、SI314と軸方向が同じである。検出面から床面までの深さは0.1～0.2mである。内部に遺構は検出されなかった。

6～9は土師器である。6は壺で、口縁端部は丸くおさまる。7・8は複合口縁の甕で、7の口縁端部は丸くおさまり、8の口縁端部は平坦となっている。9は小型丸底鉢である。

SI316は平面形が2.5m×2.2mのいびつな方形を呈する小型の堅穴であるが、貼床が確認され、検出面から床面までの深さは0.1mである。

規模は小さいが、隣接する他の3基と同様の特徴をもつ。

1は複合口縁の土師器甕で、口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。

## (2) 掘立柱建物・柵列

1区の低湿地から北側の微高地B(2区)では多くのピットが検出された。これらのピットは古墳時代の堅穴建物と同様に第6b層上面で検出したが、第1次調査地の微高地Aでは、古代の建物・柵列の他、多数のピットが検出されており、微高地Bでも第5層を中心に古代に属する遺構・遺物が若干検出されていることから、上位層準で検出できなかった古代のピットが含まれている可能性がある。

しかし、調査地内の地層観察用畦で層準が確認できたピットはすべて第6層中から掘削されており、古代遺構の検出面である第5層に帰属するピットは認められなかった。また、後述する1区の掘立柱建物周辺の第6層から、建物に関連すると思われる古墳時代の土器がまとまって出土している。さらに、2区で検出されたピット群の出土遺物に古代まで下るものはなく、分布域が北部と南部の堅穴建物群周辺に二分され、堅穴建物に関連する可能性を示唆している。

これらのことから、古代のピットが含まれる可能性を残しつつも、本書では古墳時代の遺構として報告する。

### SB301(第51・53図)

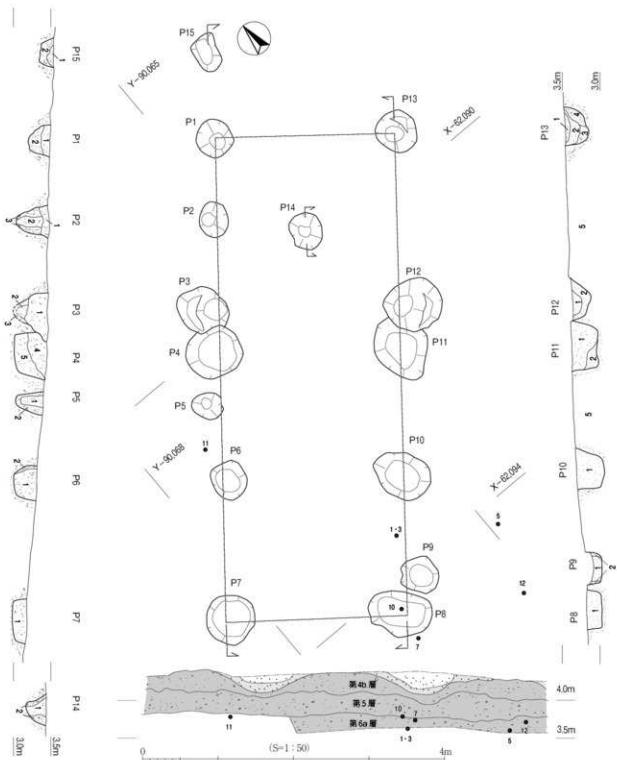
1区北部で検出された桁行4間(6.4m)、梁行1間(2.4m)の掘立柱建物である。桁行中央の柱穴を切るP3・12があり、桁行の柱穴で欠落があるなど、不規則な柱配置である。建替えがあったと考えることもできるが、一連の配置を取っており、増築または、当初からの連棟構造であったと考えたい。桁行の柱間距離は1.8～2.3mである。

柱穴は直径0.5～0.8m、検出面からの深さ0.2～0.4mの不整形円で、いくつかの柱穴で12cm程度の柱痕跡が確認できた。

柱穴からは土師器甕細片のほか縄文土器片が1点出土した。これらから建物の時期は断定できないが、建物南部の位置の第6a層中から大型土器片がまとまって出土しており、これらは完形に近い赤彩壺など弥生時代後期とみられる土器も含まれるが、多くは古墳時代前期のものであり、古墳時代後期の移動式竈と思われる破片も出土しており、この遺構に関係する遺物と考える。

2・4・6はP10、8はP11、それ以外はSB301付近の第6層から出土したものである。

1～6は弥生土器である。1～3は壺で、1の口縁部は内傾し、外面には4条の凹線が巡る。2は複合口縁を有し、3は口縁部が外反する。また、3の頸部には2方向に穿孔があり、外面には赤彩が施さ



P15

- 1: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂
- 2: 黄灰色(25Y4/1)細粒～中粒砂,少量シルト

P1

- 1: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂
- 2: 黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂

P2

- 1: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂
- 2: 黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルト
- 3: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂

P14

- 1: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂
- 2: 黄灰色(10YR4/1)シルト質細粒～中粒砂,シルト少ない

P34

- 1: 黒褐色(25Y3/2)細粒～中粒砂質シルト
- 2: 黒褐色(25Y3/1)細粒～中粒砂質シルト
- 3: 灰色(5Y4/1)シルト質細粒～中粒砂
- 4: 黒褐色(10YR3/1)細粒～中粒砂質シルト
- 5: 黒褐色(25Y3/1)細粒～中粒砂質シルト

P5

- 1: 黒褐色(7.5YR2/2)細粒～中粒砂質シルト
- 2: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂

P6

- 1: 黒色(7.5YR2/1)細粒～中粒砂質シルト
- 2: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂

P7

- 1: 黒褐色(5YR2/1)シルト質細粒～中粒砂,粗粒砂含有

P12

- 1: 黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルト
- 2: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂,シルト少ない

P13

- 1: 黒褐色(7.5YR3/1)細粒～中粒砂質シルト

P10

- 1: 黒色(10YR2/1)細粒～中粒砂質シルト,炭素化合物凝結
- 2: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂
- 3: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂
- 4: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂,粗粒砂少量含有
- 5: 黄褐色(2.5Y5/2)細粒～中粒砂(第7層)

P8-10

- 1: 黒色(7.5YR2/1)細粒～中粒砂質シルト,粗粒砂含有

P9

- 1: 黒色(10YR2/1)シルト質細粒～中粒砂
- 2: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂,シルト少ない

P11

- 1: 黒色(7.5YR2/1)細粒～中粒砂質シルト,粗粒砂～細粒砂少量含有
- 2: 黒褐色(25Y3/1)シルト質細粒～中粒砂

第51図 1区SB301平・断面図

れている。4は甕で、口縁下端部が僅かに垂下する。5は底部で、穿孔が施されている。6は鼓形器台の受部から柱部にかけての部分で、受部の外面には櫛状工具による直線文が巡り、柱部外面には3条の沈線と羽状文が施されている。

7~11は土師器である。7は複合口縁の甕で、口縁端部は平坦となっており、さらに外方に僅かに肥厚している。8は小平底の底部である。9は高坏で、坏部の口縁部は僅かに外反し、坏部と脚部との接合には円形充填法を用いている。10は低脚坏で、坏部は浅い皿状を呈する。11は鼓形器台の受部である。

12はデイスイト製の磨石・敲石で、表面と裏面には磨痕、上端部と下端部には敲打痕がある。

#### SB302 (第52図)

SB301北側の調査区北端で南側柱列が検出された東西2間(3.5m)の掘立柱建物である。柱間距離は約1.7mで、柱穴は直径0.5~0.7m、深さ約0.3mであるが、掘形の中心(柱筋)は検出できなかった。

柱穴からの出土遺物はなく時期不明だが、その位置からみてSB301と同時期の建物と推定される。

#### SB303 (第53・54図)

1区北東隅の地層断面で確認された東西5基の柱穴列である。間隔が短く切り合いもあるためすべてが同時期ではないが、東西1.9mの南側柱列と考えた。いずれも第6b層を切っているが、掘削面は第6a層内にあると推定される。

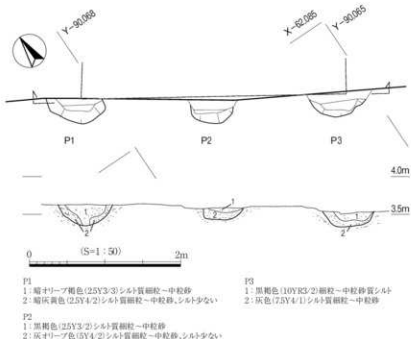
柱穴は直径約0.4m、第6b層上面からの深さ0.3mである。

柱穴からの出土遺物はないが、この柱列から西側の直径3mほどの範囲の第6a層上部で多くの土器が集中して検出された。この中には6世紀代の須恵器高坏脚部や土師器高坏坏部が含まれており、近接する井戸SE303・305からも同時期の遺物が出土するなど、後述する2区の建物およびピット群を含めた建物群の時期の一点を示唆していると考えられる。

13~25はSB303付近の第6b層上面から出土したものである。

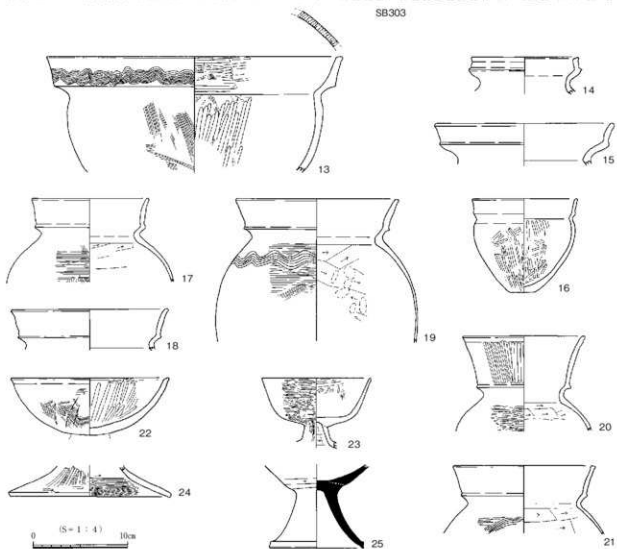
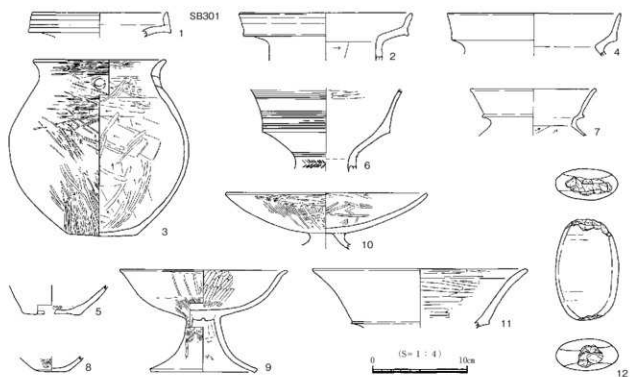
13は弥生土器鉢で、口縁端部には水平な面を持ち、端面には刺突文が施され、口縁部外面には波状文が巡る。

14~24は土師器である。14~16は壺で、14の口縁部は内傾する。16は小型の壺である。17~21は複合口縁の甕で、17~20の口縁端部は丸くおさまり、21の口縁端部は平坦となっている。また、19・21の肩部外面には波状文が巡る。22は高坏の坏部で、内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。23・24は低脚坏で、23の坏部は外傾しながら立ち上がる。24は脚部で、大きく八字形

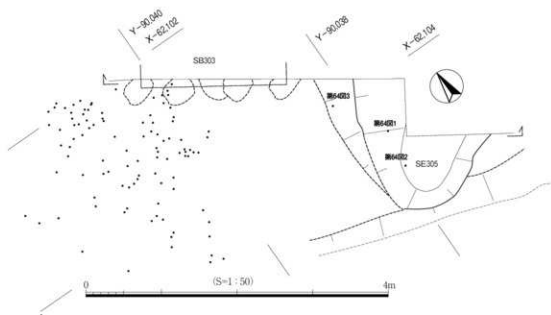


第52図 1区SB302平・断面図





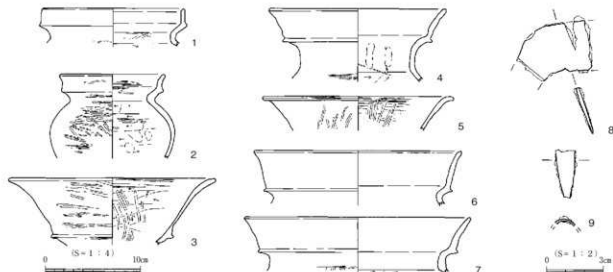
第53图 1区SB301·303出土遗物 (1~12: SB301、13~25: SB303)



- 1: 黒褐色(7.5YR3/1)シルト質細粒～中粒砂、粗粒砂含、風化黄色粒少量含(第6a層)
- 2: 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～中粒砂(第7層)
- 3: 黒褐色(7.5YR3/1)細粒砂質シルト
- 4: 黒褐色(7.5YR3/1)～黒色(7.5YR2/1)細粒砂質シルト
- 5: 黒褐色(2.5Y3/1)シルト質細粒～中粒砂、シルト少ない(SE305)
- 6: 黄灰色(2.5Y4/1)シルト質細粒～中粒砂、黒褐色(2.5Y3/1)細粒～中粒砂質シルト、タニ状に堆積(SE305)



第54図 1区SB303・SE305平・断面図

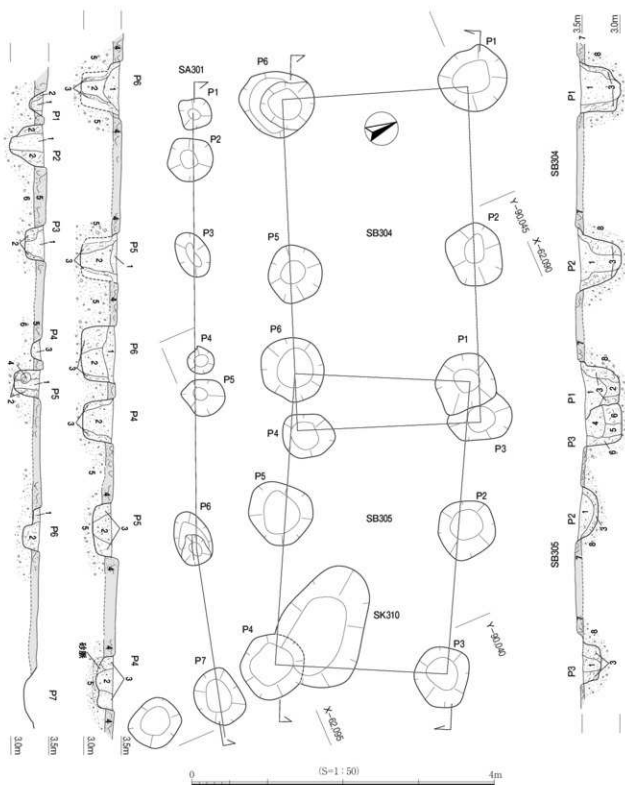


第55図 2区SB305ほかPit出土遺物

(1: SB305-P5, 2・3: SP302, 4・5: SP303, 6・7: SP304, 8・9: SP301)

に開く。25は須恵器の透かし孔のない高坏脚部である。TK10型式からTK209型式ごろと思われる。SB304・305(第55・56図)

2区南西部の第6b層上面で検出された。いずれも桁行2間、梁行1間で、SB304は桁行4.5m、梁行2.5m、SB305は桁行4.0m、梁行2.3mである。SB304は東妻側の柱穴P3がSB305の西妻側の柱穴



SB304-305南側柱列

- 1: 黒色(7SYR1.7/1)シルト質中粒～粗粒砂～中礫
  - 2: 黒色(10YR2/1)シルト質中粒～粗粒砂, 細礫合
  - 3: 黒褐色(10YR2/2)シルト少量含粗粒～粗粒砂
  - 4: 黒褐色(10YR3/2)シルト少量含粗粒～粗粒砂～細礫(礫6%)
  - 5: 灰色(5Y6/1)粗粒砂～中礫(礫7%)
- SA301
- 1: 黒褐色(10YR3/1)シルト質細粒～中粒砂, 細礫, 風化黄色粘土
  - 2: 黒褐色(10YR2/2)シルト質細粒～粗粒砂, 風化黄色粘土
  - 3: 黄灰色(2.5Y5/1)シルト少量含中粒～粗粒砂
  - 4: 黒色(10YR1.7/1)シルト質細粒～粗粒砂, 6層ブロック合(噴砂砂痕少)
  - 5: 暗灰色(7.5YR4/1)シルトブロック合中粒～粗粒砂(礫6%)
  - 6: 黄灰色(2.5Y6/1)中粒～粗粒砂, 細～中礫合(礫7%)

SB304-305北側柱列

- 1: 黒褐色(5YR3/1～7.5YR3/1)シルト質中粒～粗粒砂, 細礫合
- 2: 黒色(10YR2/1)シルト少量含粗粒～粗粒砂
- 3: 黒褐色(10YR2/2)シルト少量含粗粒～粗粒砂
- 4: 黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒～粗粒砂
- 5: 黒色(10YR2/1)シルト質中粒～粗粒砂
- 6: 黒褐色(2.5Y3/1)シルト少量含粗粒～粗粒砂
- 7: 黒褐色(2.5Y3/2)シルトブロック少量含粗粒～粗粒砂, 細礫合(礫6%)
- 8: 灰色(5Y5/1)粗粒砂～中礫(礫7%)

第56図 2区SB304・305、SA301平・断面図

P1に切られており、旧建物の西妻に東妻を描えるように建替えたと推定される。桁行の柱間距離は2.0～2.2mである。

柱穴は直径0.7～0.9mの不整形形で、検出面からの深さは0.2～0.6mであり、直径15～20cmの柱痕跡が確認された。柱穴から出土した遺物は古墳時代初頭前後の土師器甕や鼓形器台の細片があるのみであるが、1区SB303周辺で出土した土器群や1区SE303・305から出土した土器群の存在から古墳時代後期まで下る可能性を考えておきたい。

1はSB305のP5から出土したものである。複合口縁の土師器甕で、口縁部は直立する。

#### SA301 (第56図)

2区南西部のSB304・305の南側に1.2m開けて平行する柵列である。7基以上の柱穴からなり、柱間距離は1.3～1.8mでばらつきがある。柱穴は直径0.4～0.6mと小さく、直径10～18cmの柱痕跡が認められる。柱穴からは古墳時代とみられる土師器甕細片が少量出土しただけだが、SB304・305に伴う可能性を考えておきたい。

#### 2区ピット出土遺物 (第22・55図)

2区で多数検出されたピットのうち、図化できた遺物のみを報告する。各ピットの位置は第22図に示す。

2・3はSP302から出土したものである。2・3は土師器で、2は複合口縁の甕、3は鼓形器台の受部である。4・5はSP303から出土したものである。4・5は土師器で、4は複合口縁の壺、5は鼓形器台の受部である。6・7はSP304から出土したものである。6・7は複合口縁の土師器甕で、いずれも口縁端部は丸くおさまる。8・9はSP301から出土した鉄製品で、8は鉄鎌、9は円筒状の製品であると考えられる。

### (3) 井戸

検出された土坑のうち、1区の5基、2区の4基を井戸と判断した。

#### SE301 (第57・58図)

1区低湿地南側の西寄りの第6b層上面で検出した。掘形の平面形は3.1m×4.0mの不整形円形を呈し、検出面からの深さは、湧水が顕著で確実な底面を確認できなかったが、約0.8mと判断した。底面の標高は標高2.6mである。埋土下半はシルトや砂をブロック状に含む極細粒～中粒砂で、最上層は砂や有機物のラミナが顕著な堆積である。

埋土を切る直径0.9mの土坑が確認でき、井戸埋没後に再度掘削された可能性がある。この土坑横の埋土上面で流紋岩の板石が検出されている(図版13上)。

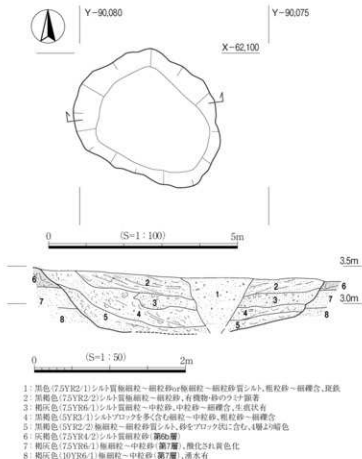
出土遺物は弥生土器・土師器壺・甕・蓋つまみの他、鼓形器台片などがある。

1は弥生土器壺で、口縁下端部の稜の突出は認められない。

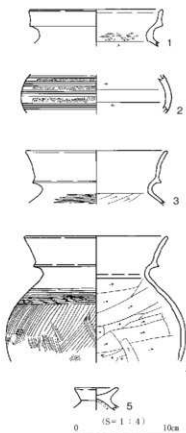
2～5は土師器である。2は壺の体部で、外面には平行沈線が4段巡っている。3・4は複合口縁の甕で、いずれも口縁端部は丸くおさまり、3の肩部外面には櫛描平行線が巡り、4の肩部外面には櫛描平行線と列点文が施されている。5は蓋のつまみの部分である。

#### SE302 (第59・60図)

1区低湿地南側の第6b層上面で検出した。掘形の平面形は4.8m×6.2mの不整形円形を呈し、検出面からの深さは1.0mで底面の標高は2.8mである。底面には4か所で直径1.0～1.3mの不整



第57図 1区SE301平・断面図

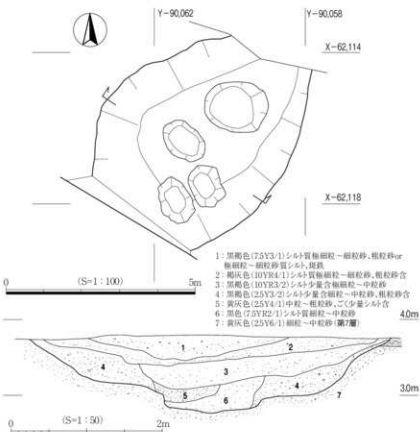


第58図 1区SE301出土遺物

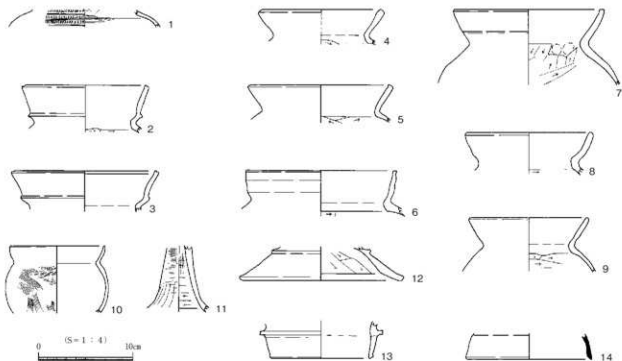
楕円形の水溜状の窪みがあり、このうちの断面観察できた部分では埋土最下層を掘削して水溜状をなしている。各窪みの切り合い関係は確認できなかったが、底面の給水ポイントが複数存在していたとみられる。

出土遺物には甕・小型高坏・鼓形器台・小型丸底土器があるが、布留系甕が多く含まれ、須恵器細片も出土している。最終的に廃棄されたのは古墳時代後期まで下ると思われる。

1~13は土師器である。1は裝飾壺の肩部で、外面には刺突文と櫛描平行線が施されている。2・3は複合口縁の甕で、い



第59図 1区SE302平・断面図



第60図 1区SE302出土遺物

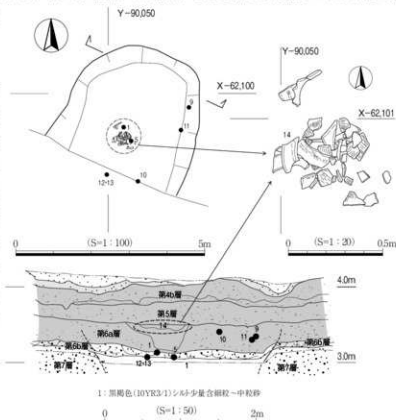
ずれも口縁端部に内傾する面を持ち、さらに内側につまみ出している。また、3の端面には1条の沈線がある。4~9は字口形口縁の寛で、4~7は口縁端部が平坦となっており、さらに5は内側に、6は外側に僅かにつまみ出している。8・9は口縁端部が丸くおさまるものである。10は小型丸底壺、11は高環の脚部、12は鼓形器台の脚部である。13は瓶形土器の底部で、外面には1条の突帯が巡る。14は須恵器壺蓋で、天井部は欠損するが、口縁端部には内傾する面を持ち、沈線がある。陶邑編年のMT15型あるいはTK10型式に比定される。

14は須恵器壺蓋で、天井部は欠損するが、口縁端部には内傾する面を持ち、沈線がある。陶邑編年のMT15型あるいはTK10型式に比定される。

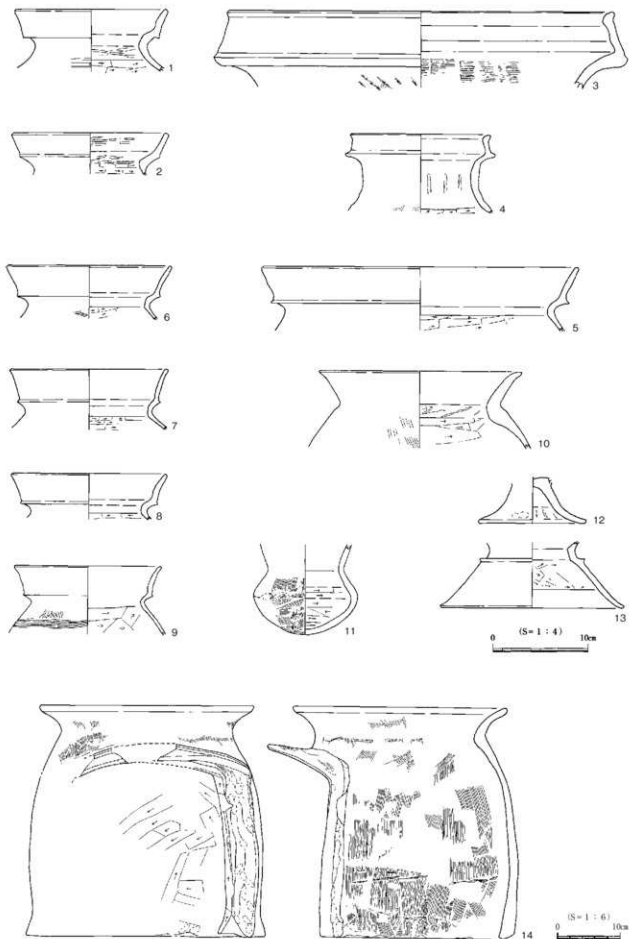
### SE303・304 (第61~63図)

いずれも1区低湿地北側の第7層上面で検出した。SE303は掘形の平面形が3.5m以上×3.7mの不整楕円形を呈すると思われ、検出面から0.2m(標高約2.7m)ほど掘削したが、湧水が顕著で底面は確認できなかった。遺構は第6b層上面で検出したが、地層断面の観察では掘削面は不明瞭であった。しかし、この遺構上の第6a層中から多くの土器が出土していることから、掘削面は第6a層中にある可能性が高い。

出土遺物は、古式土師器の壺・甕・鼓形器台などと共に、やや上位で



第61図 1区SE303平・断面図



第62图 1区SE303出土遗物

は移動式竈や、く字形口縁で外面調整が少ない甕など、6世紀前半以降に下る遺物も含まれる。最終的な埋没時期は古墳時代後期まで下る可能性がある。

1・2は弥生土器甕で、1の口縁下端部は僅かに垂下する。また、1の肩部外面には櫛描平行線が巡る。

3~14は土師器である。3・4は壺で、いずれも口縁部がく字形に内側に屈曲し、口縁端部は外反している。5~9は複合口縁の甕である。5は大型の甕で、口縁端部は平坦となっている。6~9の口縁端部は丸くおさまり、6の肩部外面には波状文、9の肩部外面には櫛描平行線が巡る。10はく字形口縁の甕、11は小型丸底壺、12は低脚坏の脚部、13は鼓形器台の脚部である。14は移動式竈で、口縁部は外反し、焚口の縁辺部には底が全周する。

この東側に接するようにはほぼ同規模のSE304が検出されたが、やはり湧水が顕著で詳細を明らかにできなかった。

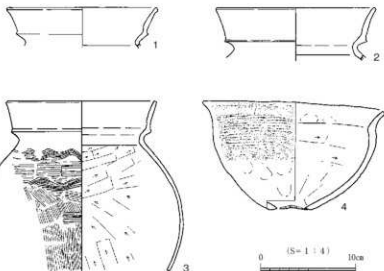
出土遺物には甕・鉢がある。

1~4は土師器である。1~3は複合口縁の甕で、いずれも口縁端部は丸くおさまる。また、3の肩部外面には2段の波状文が巡る。4は鉢で、外面には叩きが施され、底部には穿孔がある。

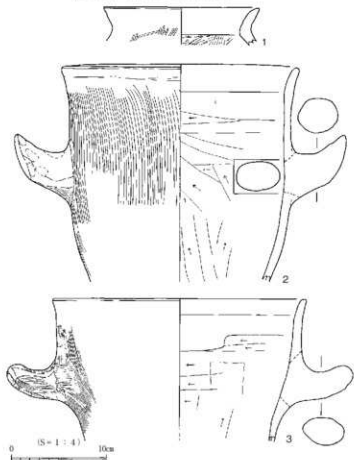
#### SE305 (第54・64区)

1区低湿地北側の東隅の第6b層上面で検出した。SB303の東に隣接する位置にある。掘形の平面形は2.3m以上×1.7m以上の不整楕円形を呈すると推定する。検出面から0.5m(標高2.7m)まで掘削したが、湧水が顕著で底面は確認できなかった。

土師器甕・高坏・甌などが出土したが、このうち1~3の甕・甌は古墳時代後期に下るものと思われる。1はく字形口縁の甕で器壁が厚く、2・3の甌は牛角状把手が付き、2の内面には把手の接合痕が見られる。底部は欠損しているが、上位層から体部下端部に浅波しの小円孔を穿つ破片が見られることから、底部蒸気孔が全開型と推定する(杉井健1999、京嶋覚2015)。

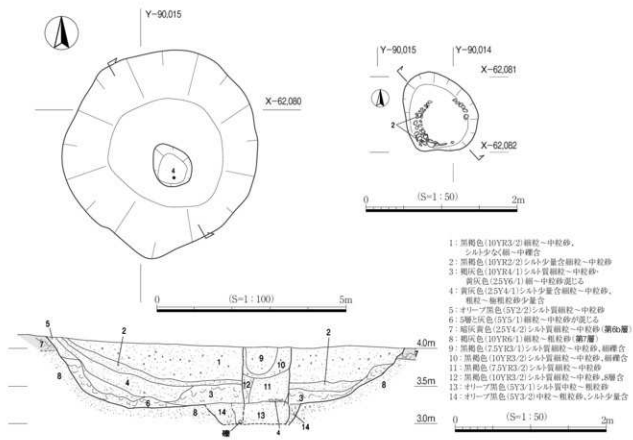


第63図 1区SE304出土遺物



第64図 1区SE305出土遺物





第65図 2区SE306平・断面図

SE306 (第65・66図)

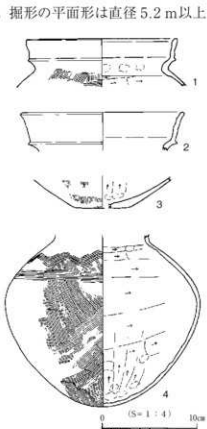
2区の竪穴建物群北群に隣接する位置の第6b層上面で検出した。掘形の平面形は直径5.2m以上の円形で、検出面からの深さは1mである。底面の標高3.0mである。

埋土の断面観察により、掘形のやや南寄りに直径0.6mの垂直の壁面をなす井戸が明瞭に確認できた。その直下の底面には直径1.0mの水溜状の窪みが検出され、その内側に6cm前後の中礫が直径0.6mの環状に集積していた。

以上の点から、直径0.6mの木製井戸枠が設けられていたと考えられる。井戸枠下端は外周に裏込めとして中礫を並べて固定し、それ以上は掘形埋土で固定したと推定される。断面観察で木質は確認できなかったことから、井戸枠は再利用のため抜き取られたと思われる。既述のSE302も底面に水溜状の窪みが検出されているため、本来は井戸枠が設けられていた可能性がある。

井戸内の底部付近で口縁部を欠くが完形近くに復元できる土師器甕体部4が出土したほか、裏込めとして利用された甕口縁部2をはじめとする土器が出土している。4は水汲み用の釣瓶として利用された可能性がある。

1～4は土師器である。1・2は複合口縁の甕で、1の口縁端部は



第66図 2区SE306出土遺物

丸くおさまり、2の口縁端部は平坦となっている。3は平底気味の底部である。4は甕の肩部から底部にかけての部分で、肩部外面には波状文と櫛描平行線が巡る。

### SE307・SD302 (第67～69図)

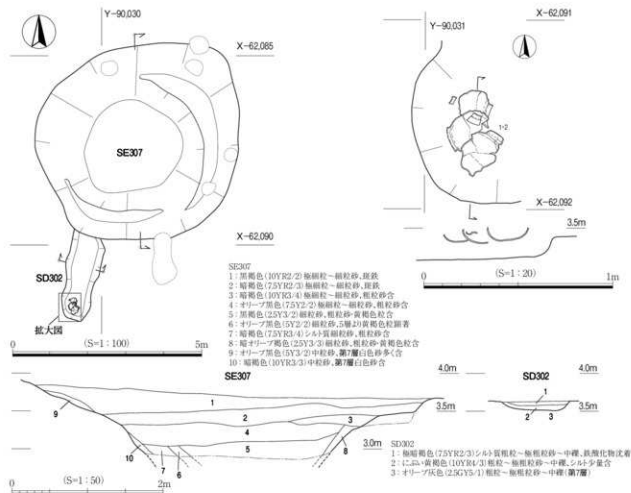
2区の竪穴建物群南群に隣接する5.4m×5.9mの円形に近い井戸である。深さは検出面から0.7m(標高2.9m)まで確認したが、激しい湧水のため底面の確認はできなかった。

出土遺物には弥生時代後期に遡る壺・甕から布留系甕まであり、最終的に埋没したのは古墳時代前期と考えられる。

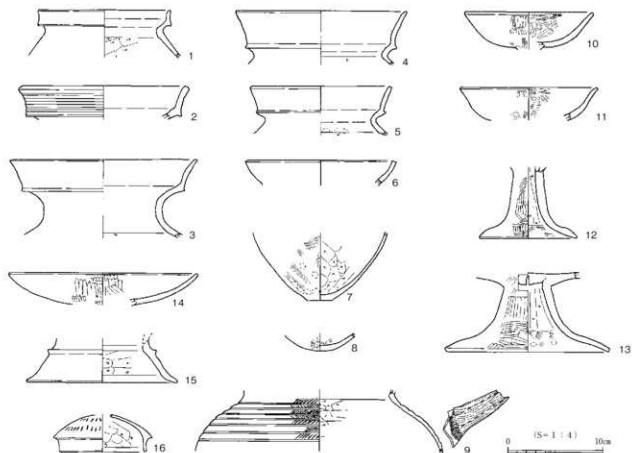
1・2は弥生土器である。1は壺で、口縁部が僅かに内傾し、口縁下端部は垂下する、2は甕で、口縁下端部は僅かに垂下し、口縁部外面には平行沈線が巡る。

3～16は土師器である。3は複合口縁の壺、4・5は複合口縁の甕で、4の口縁端部は丸くおさまり、5の口縁端部は平坦となっている。6は布留系の甕で、口縁部は内湾し、端部には内傾する面を持つ。7・8は平底気味の底部である。9は注口土器で、肩部外面には7条の沈線が巡り、沈線間には列点文と斜文が施されている。10～13は高坏である。10・11は坏部で、10の口縁部は外傾し、11の口縁部は僅かに外反する。12・13は脚部で、13は裾部がハ字形に大きく開く。14は低脚坏の坏部で、皿状を呈する。15は鼓形器台の脚部である。16は返りを有する蓋で、外面には2段にわたって刺突文が施されている。

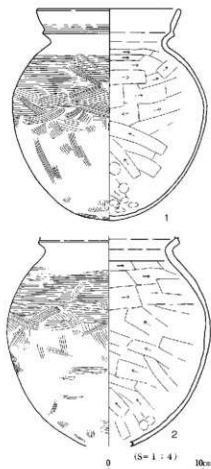
また、この井戸に連結する長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.1mの浅い溝SD302があり、その南端



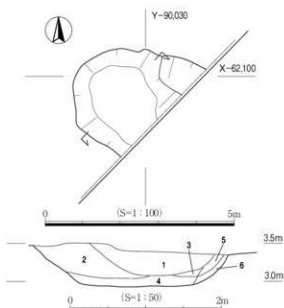
第67図 2区SE307、SD302平・断面図



第68图 2区SE307出土遺物

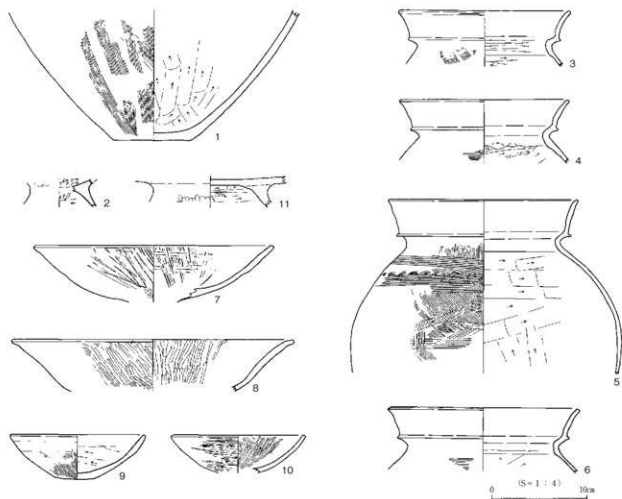


第69图 2区SD302出土遺物



- 1: 黑褐色(10YR2/3)極細粒-細粒砂, 黃褐色粘多(含)
- 2: 暗褐色(10YR3/3)極細粒-細粒砂, 黃褐色粘少量含
- 3: 中-暗褐色(5Y4/1)細粒砂, 粗粒砂含
- 4: 黑褐色(2.5Y2/3)シルト質極細粒-細粒砂, 粗粒砂含
- 5: 黑褐色(10YR1/3)極細粒-細粒砂, 黃褐色粘含
- 6: 暗褐色(10YR3/3)中砂, 黄褐色白色砂含

第70图 2区SE308平・断面図



第71図 2区SE308出土遺物

で土師器甕1・2が出土した。1・2は複合口縁の土師器甕で、2の口縁端部は欠損するが、1の口縁端部は丸くおさまり、口縁部外面には平行沈線が巡る。

#### SE308 (第70・71図)

2区南東隅の壁際に検出された3.2m×2.5m以上の不整円形の井戸である。深さは検出面から0.6mで、底面の標高は2.9mである。底面の湧水は顕著であった。

土師器壺・甕・高坏・低脚坏などが出土している。

1は弥生土器の平底の底部である。

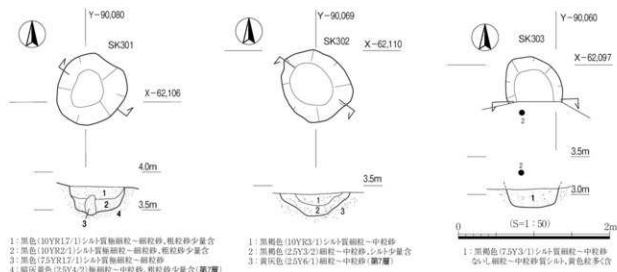
2～11は土師器で、2は台付壺の底部である。3～6は複合口縁の甕で、3・4の口縁端部は丸くおさまり、4の肩部外面には柳描平行線が巡る。5の口縁端部は平坦気味となっており、肩部外面には波状文と2段の柳描平行線が巡る。6の口縁端部は平坦となっており、端面には1条の沈線がある。さらに外方に僅かに肥厚している。7・8は高坏の坏部で、7の口縁部は僅かに内湾し、8の口縁部は外反する。9は碗で、内湾気味に立ち上がる。10は低脚坏の坏部、11は台付鉢の底部である。

#### (4) 土坑

井戸以外の土坑は小規模の9基である。

#### SK301 (第72図)

1区低湿地南側の西部で検出された直径0.9mの円形を呈する、深さ0.4mの土坑である。古式土



第72図 1区SK301～303平・断面図

師器の甕部部の細片が出土したのみである。

#### SK302 (第72図)

1区低湿地南側の中央で、SD301の肩口で検出された。直径1.0mの円形を呈し、検出面からの深さ0.3mの土坑である。遺物は出土しなかった。

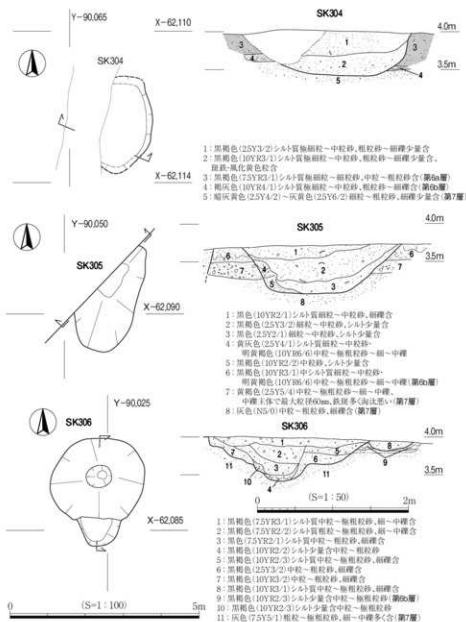
#### SK303 (第72・74図)

1区低湿地北側の中央で検出された平面形が0.7m×0.6m以上で、深さ0.2m以上の土坑である。古式土師器甕・甎などが出土した。

1は弥生土器甕で、口縁部外面には波状文が巡る。2は甎形土器の底部で、外面には断面M字形の突帯が巡る。また、突帯の上には列点文が施されている。

#### SK304 (第73図)

1区低湿地南側の中央



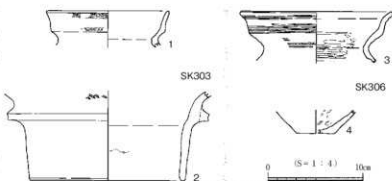
第73図 1区SK304、2区SK305・306平・断面図

で検出された2.6 m×1.8 m以上の楕円形と推定される土坑である。SD204に切られており、深さ0.6 mの土坑である。古式土師器の甕・高坏の細片が出土した。

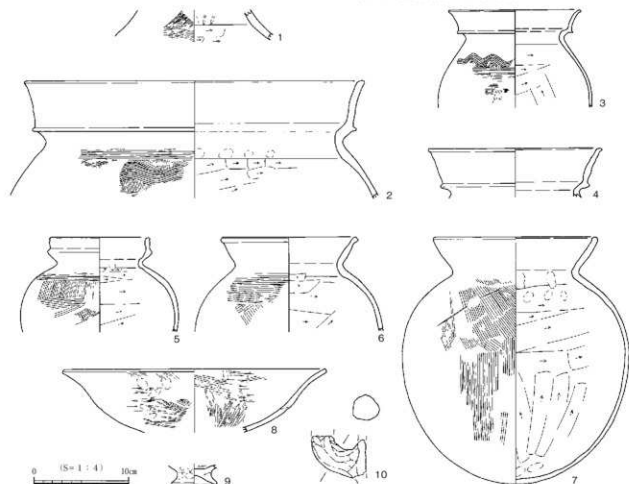
SK305 (第73・75図)

2区南西隅のSB304西側の壁際に検出された3.0 m×1.5 m以上の楕円形に近い土坑である。深さは検出面から0.65 mである。

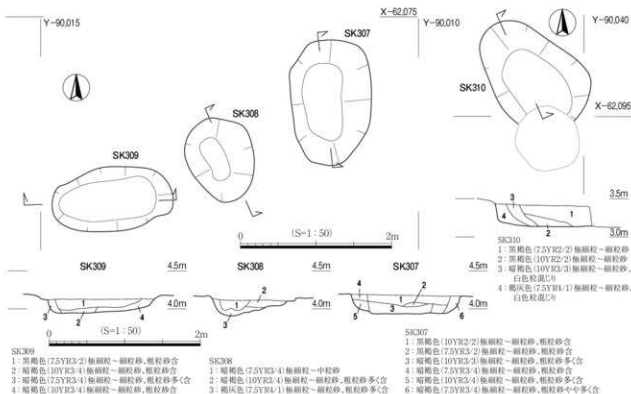
1～10は土師器である。1は壺の肩部で、頸部外面には押引文が施されている。2は大型の複合口縁の甕で、口縁端部は平坦となっている。3～5は複合口縁の甕で、3の口縁端部は平坦気味となっている。4の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。5は複合口縁が退化したものである。6・7はく字形口縁の甕で、6の口縁部は外傾し、口縁端部は丸くおさまる。端部には1条の沈線があり、さらに外方へ肥厚している。7の口縁部は僅かに内湾し、端部は丸くおさまる。8は高坏の坏部で、口縁部は外反する。9は低脚坏の脚部である。10は上部を欠損するが、甌の環状の把手である。布留系甕が含まれており、古墳時代前期まで下る。



第74図 1区SK303・2区SK306出土遺物  
(1・2:SK303, 3・4:SK306)



第75図 2区SK305出土遺物



第76図 2区SK307～310平・断面図

#### SK306 (第73・74図)

2区中央のSE307の北で検出された直径2.5mの円形の土坑である。深さは検出面から0.6mで、底面に直径0.6mの水溜状の窪みが見られ、井戸の可能性もあるが、底面の標高は3.4mで高い。

少量ではあるが、口縁に擬凹縁を施す甕口縁部の他、古い型式の低脚坏など、古墳時代初頭までの土器が出土している。

3・4は弥生土器である。3は甕で、口縁部外面には平行沈線が巡る。4は平底の底部である。

#### SK307～309 (第76図)

2区北部で3基が並んで検出された。平面形は長軸1.1～1.6m、短軸0.8～1.0mで、深さ約0.2mである。形状から土墳墓の可能性が考えられるが、出土遺物は古式土師器の甕・高坏の細片が少量あるのみで時期は特定できない。

#### SK310 (第76図)

2区南部で検出された長軸1.6m、短軸1.2m、深さ0.3mの土坑で、SB305のP4に切られている。出土遺物はなかった。

### (5) 溝

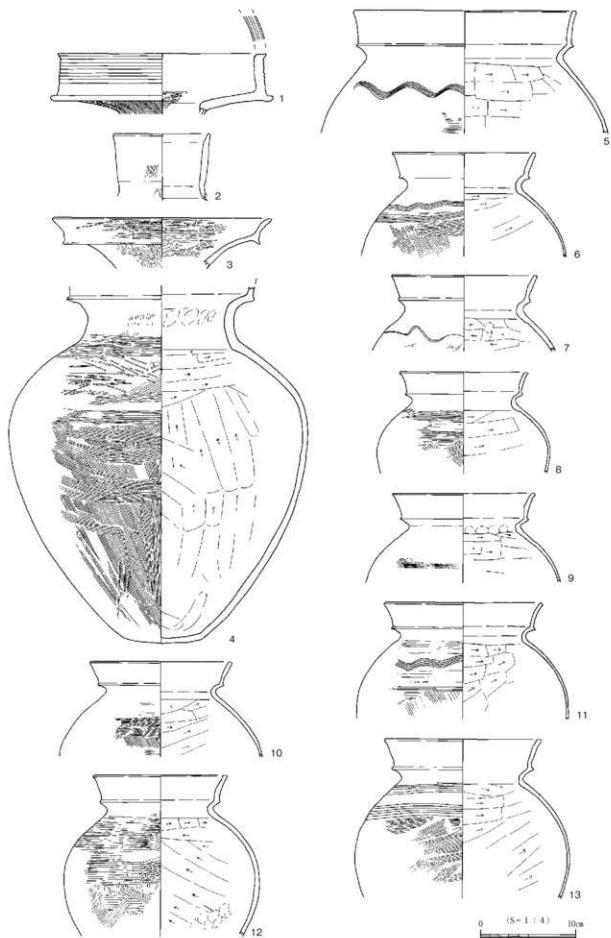
#### SD301・SX301 (第77～82図)

1区の南壁中央付近で緩やかに屈曲して東壁に向かうと推定される。低湿地南側で幅4.5～5.0m、深さは検出面から最大で0.8mである。溝内からは多数の完形あるいは完形に近い土器が出土した。1区東壁付近の低湿地内では、堆積層下部の幅約7mがSD301の延長部と推定され、低湿地の谷状地形を利用したと考えられる。この地点の土器集中部をSX301とした。

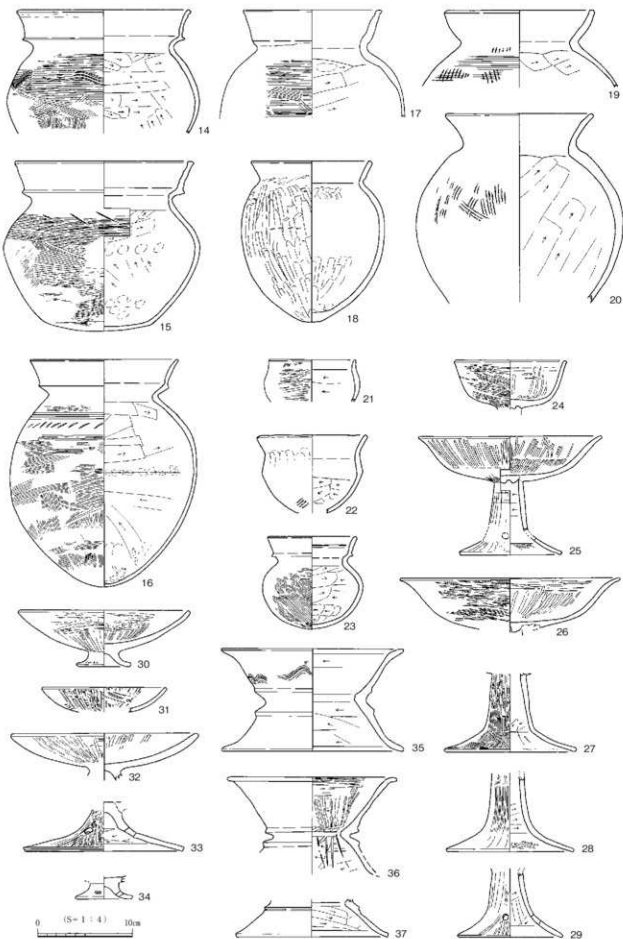
この大溝は第1次調査1・4・5区で、堅穴建物群を圍繞するように検出されているSD02の北延長







第78图 1区SD301出土遗物(1)



第79图 1区SD301出土遗物(2)

部分と推定される。第1次調査4区では東へ屈曲することが確認されているが、今回の調査で確認された屈曲部を考慮すると、大溝で区画された屋敷地の南北幅は約130mになる(第87図)。

1は弥生土器で、吉備系の特殊壺である。口縁部は大きく屈曲して直立し、口縁端部は水平な面をなし、さらに外方へつまみ出されている。端面には4条の凹線、口縁部外面には8条の擬凹線が巡る。また、内外面には赤彩が施されている。

2~40は土師器である。2~4は壺で、2は直口壺である。3は口縁下端部が斜方へ突出する。4は口縁部を欠損するが、底部は平底となっている。

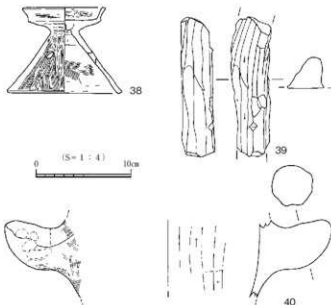
5~20は甕で、5~17は複合口縁の甕である。5は大型の甕で、口縁端部は平坦となっている。また、肩部外面には波状文が巡る。6の口縁端部は丸くおさまり、肩部外面には波状文と櫛描平行線が巡る。7~14はいずれも口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。また、7の肩部外面には1条の沈線、8・13の肩部外面には櫛描平行線、11・14の肩部外面には波状文が巡り、15の肩部外面には羽状文、16の肩部外面には櫛描平行線と列点文が施されている。17は複合口縁が退化したものである。18~20はく字形口縁の甕で、18の口縁部は外傾、19の口縁部は内湾、20の口縁部は僅かに外反する。

21は小型の短頸壺、22は小型の甕で、口縁部が外反する。23は複合口縁の小型丸底甕である。24~29は高坏である。24は口縁部が外傾し、25・26は口縁部が外反する。また、25の脚裾部には円孔がある。27~29は脚部で、27・28は八字形に大きく開き、29の裾部には円孔がある。30~34は低脚坏で、30~32はいずれも坏部が皿状である。33・34は脚部で、33は八字形に大きく開く。35~37は鼓形器台で、35の受部外面には波状文が巡る。38は小型器台、39は移動式甕の庇、40は甕で、角状の把手を持つ。

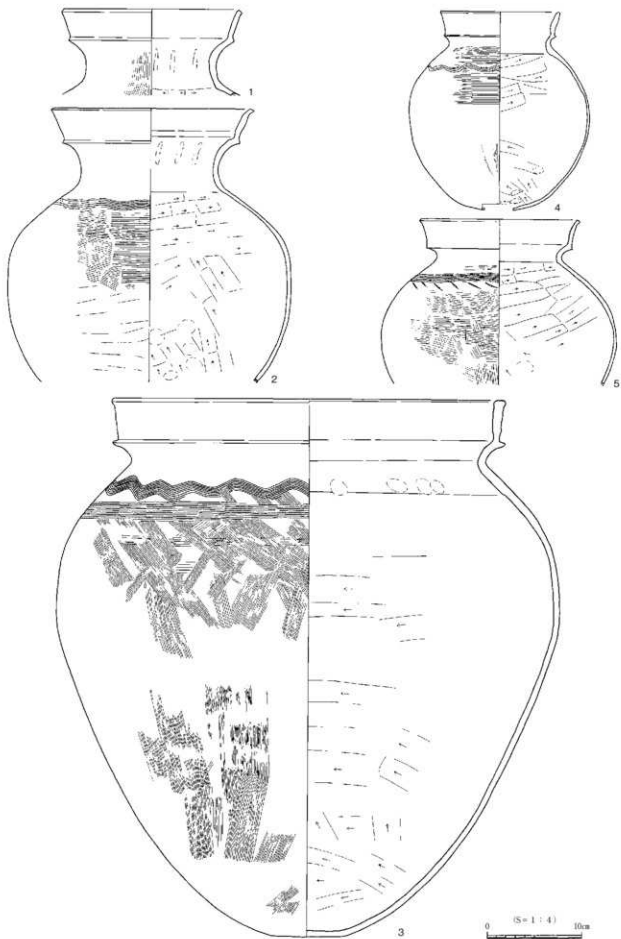
SX301の土器集中部の遺物1~19は土師器である。1・2は壺で、1の口縁端部は丸くおさまり、2の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ肥厚している。また、2の肩部外面には波状文が巡る。

3~9は甕で、3~8は複合口縁を有する。3は大型の甕で、口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ肥厚している。また、肩部外面には波状文と櫛描平行線が巡る。4の口縁端部は丸くおさまり、底部には穿孔がある。また、肩部外面には波状文が巡る。5~8の口縁端部は平坦となっており、さらに外方へ僅かに肥厚している。また、5の肩部外面には櫛描平行線と列点文、6の肩部外面にはヘラによる列点文、8の肩部外面には波状文が施されている。なお、7の底部は平底気味となっている。9は布留系甕の口縁部で、端部が内方へ肥厚している。

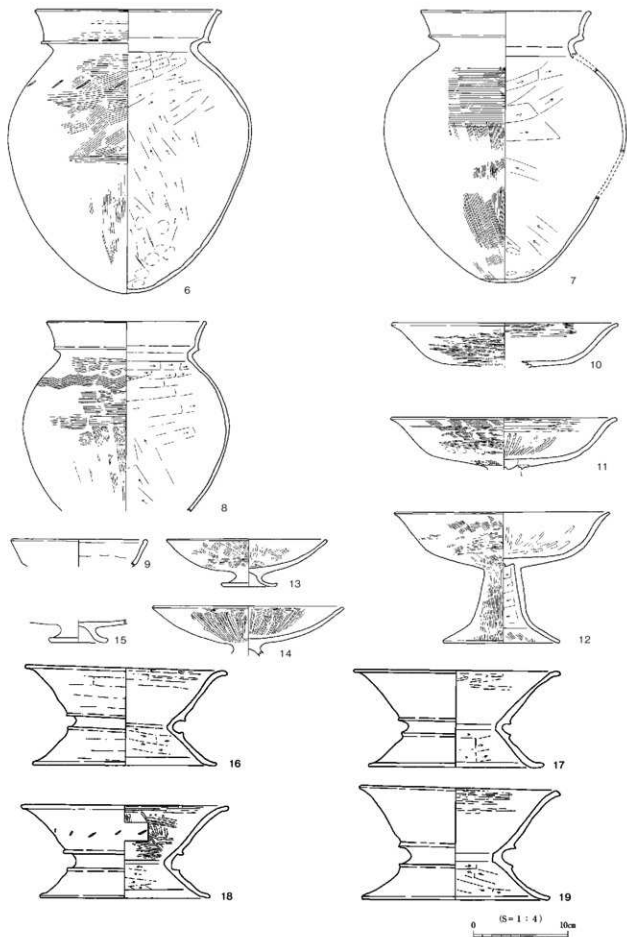
10~12は高坏で、いずれも坏部の口縁部が外反する。13~15は低脚坏で、13・14の坏部は皿状を呈する。16~19は鼓形器台で、19は口径と底径に対して器高が高いものである。また、18の受部外面にはヘラによる列点文が施されている。



第80図 1区SD301出土遺物(3)



第81图 1区SX301出土遗物(1)



第82图 1区SX301出土遗物(2)

SD303 (第83図)

2区の南東部東壁付近で検出した溝で、直角に屈曲する。幅0.8~1.0m、深さ0.25mで、古式土師器の壺・甕の小片が出土した。

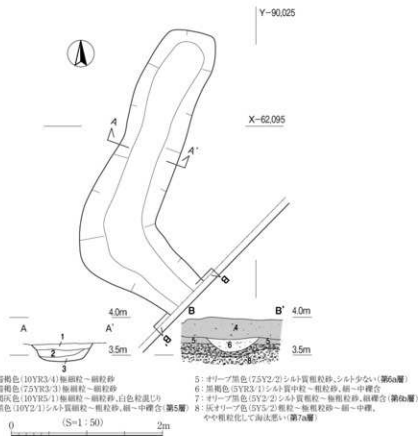
(京嶋・高橋)

(6) 地層出土遺物 (第84~86図)

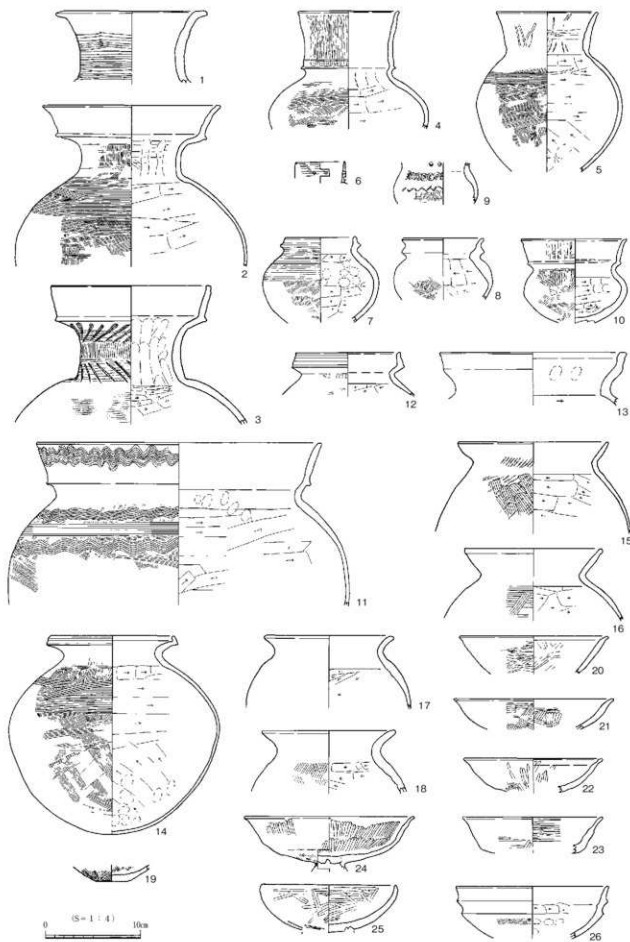
第5・6層から出土した、弥生時代後期から古墳時代後期の遺物を報告する。なお、砥石と鉄製品については奈良~平安時代に帰属するものを含む可能性があるが、当該期のものとして報告する。

1は弥生土器の長頸壺で、頸部外面には擬凹線が巡る。

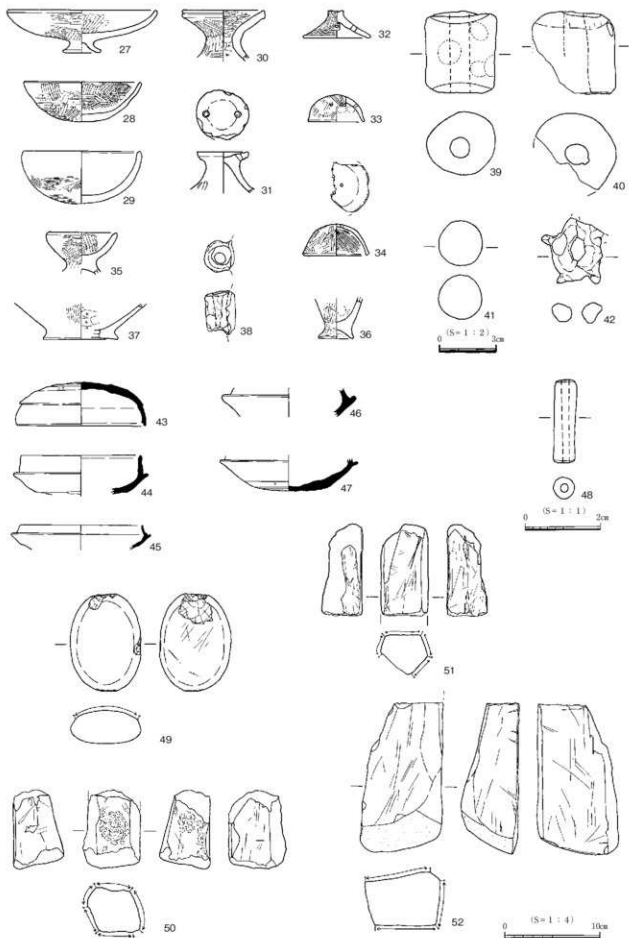
2~38は土師器である。2~10は壺で、2・3は複合口縁の壺である。いずれも口縁端部が平坦となっており、2の端面には1条の沈線が巡り、3の端面は浅く窪んでいる。また、3の頸部外面には縦方向のハケメを挟んで上下に羽状文が施されている。4・5は直口壺である。6~10は小型壺である。6は器壁が薄く、口縁部は僅かに外傾する。また、口縁部には円孔が2孔、横方向に並列する。7は口縁部が僅かに内傾し、口縁下端部は水平方向に突出する。8は複合口縁を有するものである。9は口縁部を欠損するが、頸部には円孔が2孔、横方向に並列しており、肩部外面には竹管文、体部外面には鋸歯文が施されている。10は複合口縁の小型壺であるが、底部外面には円形の剥離痕があることから、台あるいは脚が付いていたと考えられる。11~18は甕である。11は複合口縁の大型甕で、口縁部外面には波状文、肩部外面には2段の波状文と櫛描平行線が巡る。12は複合口縁の甕で、口縁部は僅かに内傾し、口縁端部は内傾する面状となっている。また、口縁部外面には平行沈線が巡る。13は複合口縁が退化したものである。14は口縁部が短く内傾し、その外面には3条の平行沈線が巡る。体部はやや扁平な球形を呈し、底部は丸底である。15は庄内系の甕で、外面にはタタキ後ハケ調整が施されている。16は布留系の甕で、口縁部は外傾し、口縁端部は外方へ肥厚している。17・18はく字形口縁の甕で、いずれも口縁部は外反する。また、18の外面には赤彩が施されている。19は平底の底部で、外面はタタキ調整が施されている。20~26は高坏の坏部で、20は外傾して立ち上がり、口縁端部は外反する。20~24は僅かに外反するもので、21と23の内外面には赤彩が施されている。25は内湾するもので、底部外面には脚部を接合する前にヘラ状工具を使用している。26は外面に断面三角形の2条の突帯が巡る。27は低脚坏で、坏部は皿状を呈し、内外面の一部に赤彩が施されている。28・29は堦で、29の内外面には赤彩が施されている。30は小型の器台で、口縁部外



第83図 2区SD303平・断面図

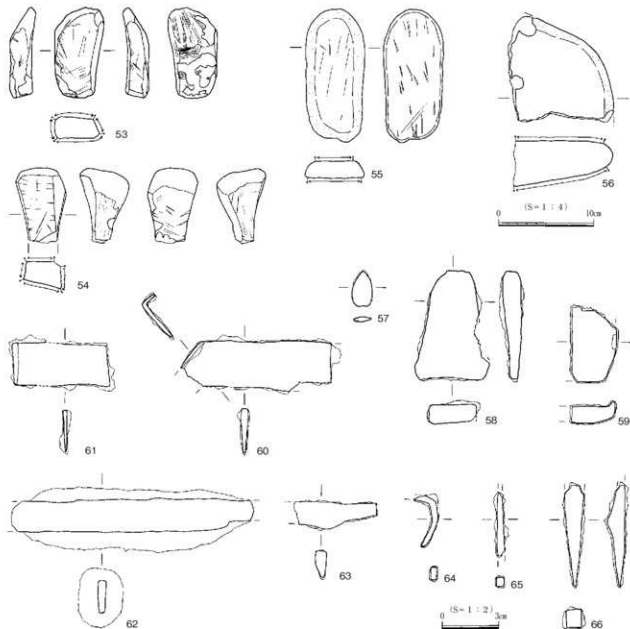


第84圖 地層出土遺物(1)



第85图 地层出土遗物(2)





第86図 地層出土遺物(3)

面には1条の沈線が巡る。31～34は蓋で、31のつまみ上面には円孔が2孔ある。32～34は小型の蓋で、32は八字形に開き、相対する位置に2孔の円孔がある。33・34は碗を逆さにしたような形態を呈し、いずれも4孔の円孔がある。35は高坏形のミニチュア土器である。36は底部に向かってすぼむ細長い形態のもので、手捏ね成形が施されている。形態的に製塩土器と考えられる。37は平底の土器で、底端部が水平方向へ突出する。38は管状の把手で、青木遺跡の出土例から甕の肩部に付くものと考えられる。

39～42は土製品で、39・40は大型の管状土錘、41は土玉である。42は楕円環状の3方向に小さな突起が付いた土製品で、前側と右側前方に同様の突起の接合痕があり、形態的に亀を模倣したものか。

43～47は須恵器である。43は坏蓋で、天井部と口縁部との境界の稜は鈍く、口縁部内面には段がある。陶邑編年のMT15型式に比定される。44～47は坏身である。44は立上り部が僅かに内傾し、立上り部端面は内側へ傾斜し、段が付く。陶邑編年のMT15型式に比定される。45は立上り部が短いもので、陶邑編年のTK209型式に比定される。

48～56は石製品である。48はシルト岩製の管玉である。49はダイサイト製の磨石・敲石で、表面に磨痕、上端部と右側縁に敲打痕がある。50～55は砥石で、50～52は長方形に加工したものである。50は花崗岩製で、上端部が欠損するが、表裏面と左右側面の5面を使用している。また、表裏面には敲打痕がある。51は安山岩製で、下端部が欠損するが、表面と左右側面の4面を使用している。52は細粒花崗岩製で、上端部と左側縁部が欠損するが、表裏面と右側面の3面を使用している。53・54は長方形に加工したもので、いずれも凝灰岩製である。53は表裏面、左右側面、下端面の5面を使用している。54は下端部が欠損するが、表裏面と左右側面の4面を使用している。55は小判形の自然礫（ダイサイト）の表裏面を使用している。56はダイサイト製の台石で、表裏面に磨痕がある。

57～66は鉄製品で、57は鉄鎌である。58は鉄斧で、刃先に向かって末広がりに広がっている。59は板状の製品で、右側縁には袋状鉄斧の袋部の折り返しのようなものがある。60は直刃鎌で、着柄部の折り返しが認められる。61は鉄鎌の着柄部の折り返しのような痕跡が認められることから、鉄鎌と推測した。62は破断面では刃先は認められなかったが、茎があり、槍鉋の可能性もある。63は刀子の茎部、64は断面長方形の棒状を呈し、逆C字形に湾曲している。65は断面長方形の棒状を呈し、長頸鎌の頭部の可能性があるが、不確実であり、棒状製品としておく。66は下端部が尖った茎の部分で、茎に対して本体は下方へ傾斜する。器種は断定できないが、このような形態から槍鉋や鑿のような切削道具の可能性もある。

(高橋)

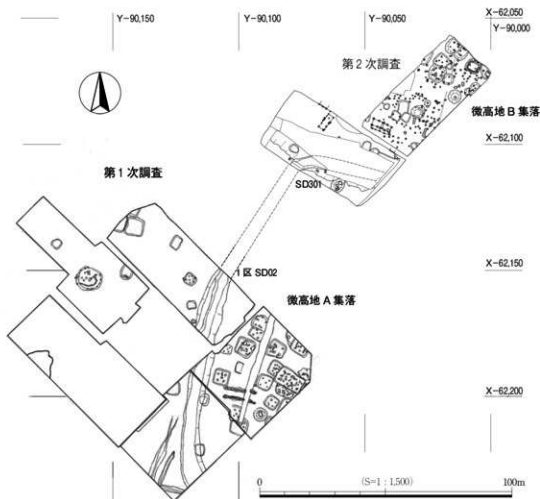
#### (7) 小結 (第 87 図)

以上、弥生時代終末から古墳時代の遺構・遺物を記載したが、弥生時代終末に限定される遺構は確認できなかった。2区の微高地B集落の竪穴建物からの出土遺物は、青木遺跡の土器編年（青木遺跡発掘調査図編1978）でⅢ期新相を少量含むつつも、Ⅳ～Ⅴ・Ⅵ期が主体をなし、Ⅶ期古相が最新となる。北と南に分布域が分かれ、切り合い関係もあるが、概ねこの時期幅の中での先後関係が想定される。

第1次調査地の微高地A集落の中心時期は青木編年のⅤ～Ⅶ期とされており、今回調査した微高地B集落と時期が重なることから、両集落は併存していたと考えられる。こうした集落のあり方は、長者原台地上の青木遺跡や、晩田丘陵上の妻木晩田遺跡において、小単位の集団が小谷などの自然地形によって区切られて立地する集落景観と共通する。

今回の調査で新たに得られた知見として、両集落を区切る低湿地周辺に井戸が集中し、ここが水資源の供給域になっていたことがあげられる。集落が形成された時期には、この地点周辺に生活用水として利用可能な帯水層が標高3m以下の第7層に存在したことを示している。第三章第2節で記したように、2区から1区低湿地北辺で確認された第7a層は河成堆積層と推定され、この付近が河川の影響を受ける時期があったことを考えると、帯水層は付近に存在した河川に由来する可能性が考えられる。

1区では微高地A側の裾に立地する井戸SE301・302は、第1次調査地の微高地A集落に属すると考えられ、Ⅴ・Ⅵ～Ⅶ期に掘削されたと思われるが、SE302の最終埋没時期は古墳時代後期まで下る。また、微高地B側の低湿地に位置する1区SE303・305は古墳時代後期まで下ると考えられる。この周辺で検出された掘立柱建物SB301～305は、周辺に分布していた土器からみて古墳時代後期ま



第87図 第1・2次調査の古墳時代遺構全体図

で下ると判断され、これらの井戸と併存していたと推定される。

以上のことから、前節で述べたように、縄文時代晩期ころに河川水が侵入する地形環境が生まれたことにより、遺跡周辺では生物活動が活発化して植物群落および土壌形成が進行した。弥生時代を通じて飛砂による風成堆積物を母材に加えつつ第6層の古土壌が形成され、弥生時代終末から古墳時代初頭に、低湿地付近の水資源に依存する集落が微高地A・Bの2ヶ所に成立したと考えられる。

当時は車尾・中島から福原にかけて、中浜砂州が形成されていくことで汀線が後退しつつあったと推定されるが、本遺跡が立地する内浜砂州と中浜砂州の間には河川水が侵入する水路や潟湖が存在した可能性があり、この立地環境を利用した人間活動があったことが想定される。第1・2次調査を通じて、そうした人間活動の内容を示唆する資料は少ないが、第1次調査で準構造船を模した船形土製品や小型倭製鏡が出土している点を重視すれば、海洋を舞台にした活動が最も妥当性をもっているように思われる(註1)。

古墳時代中期の資料はほとんど出土しておらず、この地での人間活動はほぼ停止したと判断できるが、古墳時代後期になって、微高地A集落の大型竪穴建物などと連動して、低湿地に面したエリアでは小規模であるが再び建物や井戸が作られ、人間活動が確認できる。前期と同様の海洋活動が再開したと考えられるが、この時期の活動は前期とは異なる時代背景を想定する必要がある。

(京嶋)

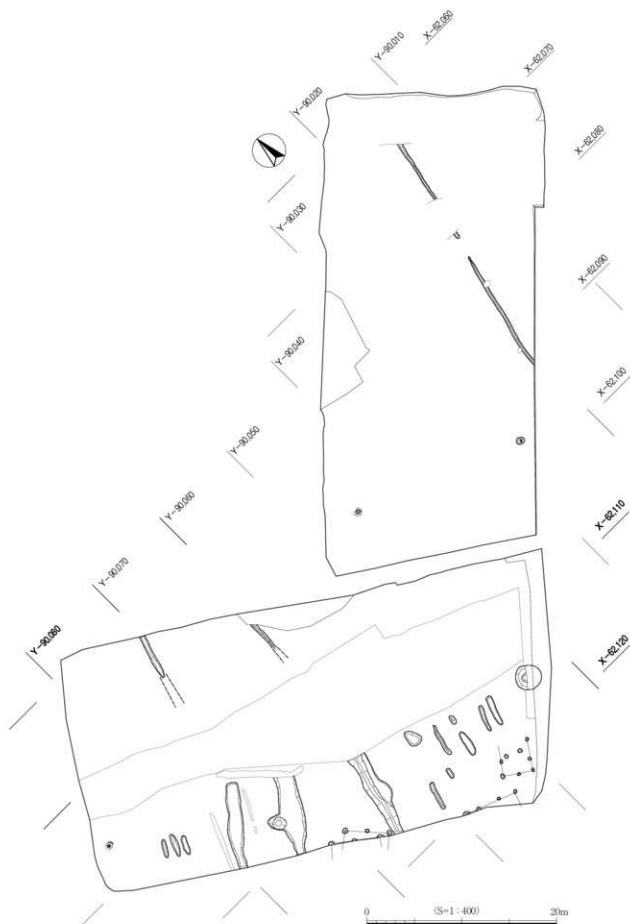
註

(1) 逆に言えば、弥生時代の段階では、この付近からの外洋への交通は不適だったと考えられ、目久美遺跡や除田遺跡などの中海沿岸が海上交通の基点になっていたと考えられる。

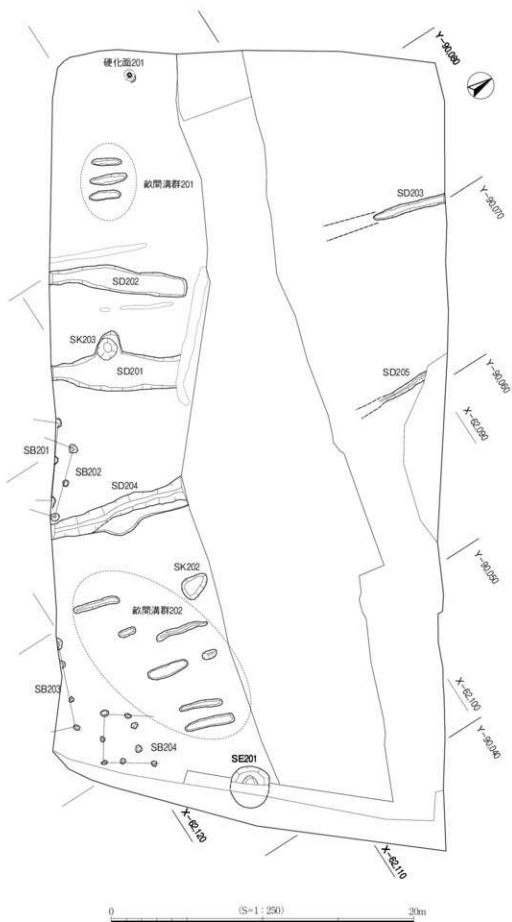
第1次調査で出土した船形土製品は舷側部が破損しているが、輸送能力が高く、外洋航海にも利用された型板型準構造船Ⅲ型(柴田昌見 2021)と推定され、微高地 A の集落が日本海の海上交通や交易に関わっていた可能性を示唆する。また、小型倭製鏡は重圏文鏡で、大型倭製鏡の出現直前の古墳時代初頭前後の近畿地方周辺で生産され、威信財として配布されたものと考えられている(辻田淳一郎 2019、脇山佳奈 2015)。上記の船舶によりもたらされたのであろう。

引用・参考文献

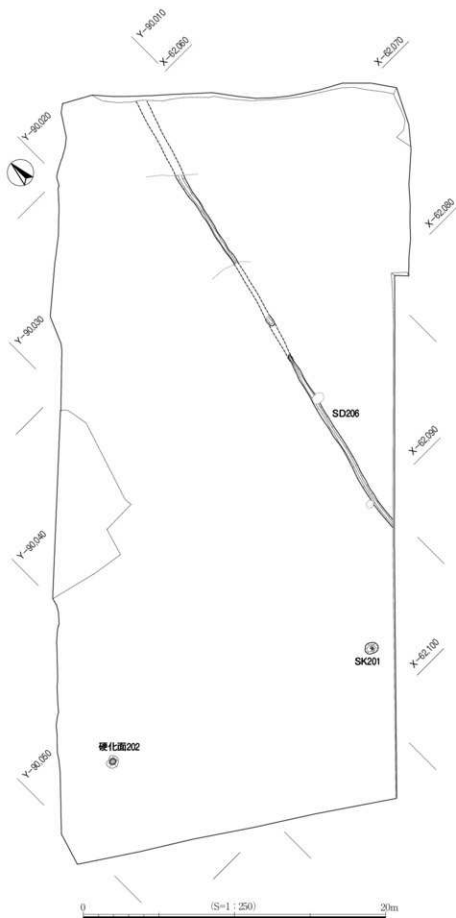
- ・青木遺跡発掘調査団編 1978、「青木遺跡発掘調査報告書」Ⅲ
- ・杉井健 1999、「甗形土器の地域性」：大阪大学考古学研究室編「国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—」、pp.383-409
- ・京嶋寛 2015、「難波型土師器の系譜とその意義—古墳時代後期土師器の地域性と海上交通—」：『大阪文化財研究所研究紀要』第16号、pp.83-97
- ・柴田昌見 2021、「準構造船と描かれた弥生船団」：『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2020』鳥取県とっとり弥生の王国推進課 青谷上寺地遺跡整備室編、pp.19-25
- ・辻田淳一郎 2019、「鏡の古代史」角川選書
- ・脇山佳奈 2015、「重圏文鏡の画期と意義」『広島大学考古学研究室紀要』第7号、pp.13-37



第 88 図 奈良～平安時代遺構全体図



第89图 1区奈良~平安時代遺構全体図



第90図 2区奈良～平安時代遺構全体図

### 第3節 奈良～平安時代

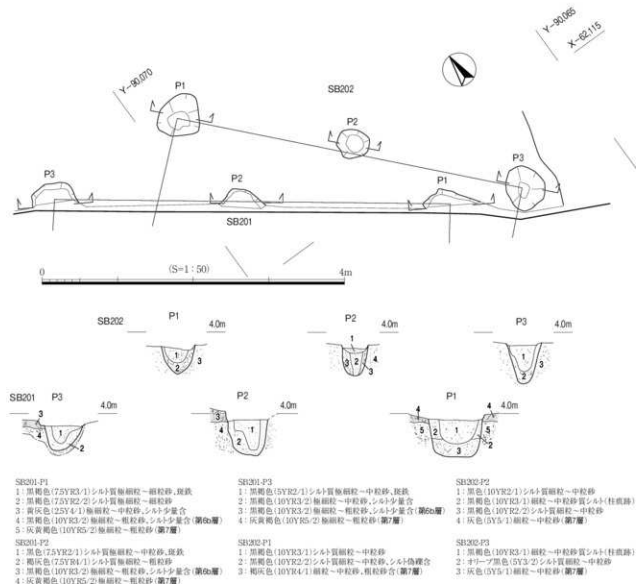
#### (1) 掘立柱建物

1区の低湿地南側の南壁際にピット群が検出され、それらから4棟の建物を復元した。これらのピットはいずれも第6b層上面で検出したが、より上位の層準から掘削された可能性が高い。また、1区低湿地北側から2区にかけて検出されたピットに比べて、掘形埋土の暗色度が弱い傾向がある。

#### SB201・202 (第91図)

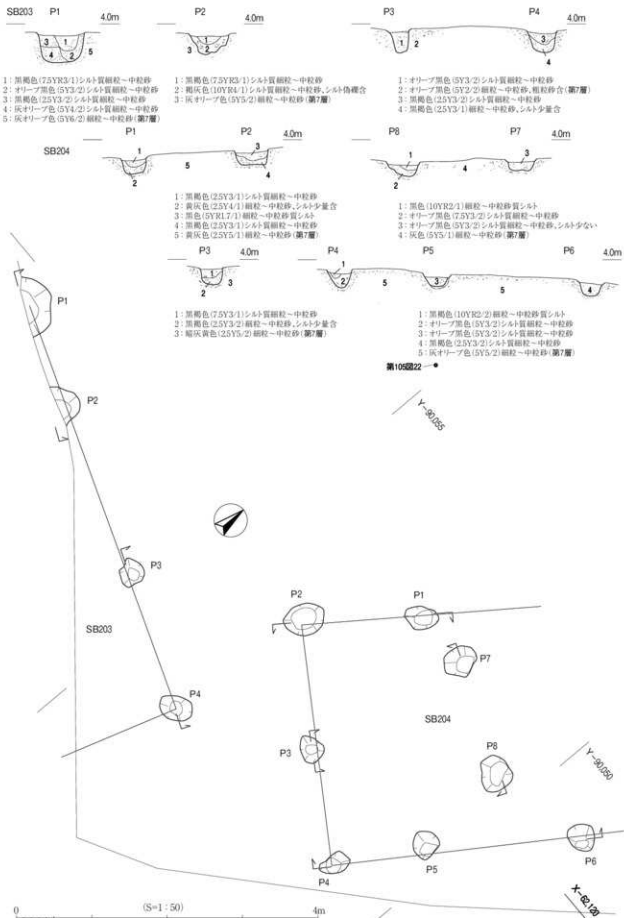
SB201は1区中央付近の南壁際に北側柱列を検出した。東西2間(5.2m)で、柱間距離は2.5m、2.7mである。柱穴は全体を検出していないが、直径0.6m前後の不整形円で、検出面からの深さは0.5～0.6m、18cmほどの柱痕跡が確認できた。

SB202はSB201と方位軸を変えて重なっているが先後関係は不明である。やはり2間(4.7m)で、柱間距離は2.4m、2.3mである。柱穴は直径0.4～0.5mの不整形円で、検出面からの深さは0.4～0.5



第91図 1区SB201・202平・断面図





第92図 1区SB203・204平・断面図

mで、確認できた柱痕跡は直径12cmほどである。

両建物の柱穴からは古式土師器の細片が出土したのみであるが、東側を区画するように位置するSD204が第5層上面検出で、須恵器片が出土するなど、古代の遺構であることから、この時期の建物群と考えたい。

#### SB203・204 (第92図)

1区南東隅で検出した。SB203は東西3間(5.7m)以上で、柱間距離は1.4~2.4mとばらつきがある。柱穴の平面形も直径0.35~0.8mと幅があり、深さは0.3~0.4mである。明瞭な柱痕跡は認められなかった。

SB204は桁行2間(3.3m)以上、梁行2間(3.3m)として復元した。柱間距離は桁行1.3~2.0mで、梁行1.6m、1.7mである。柱痕跡は確認できなかった。

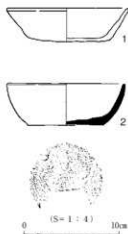
これらの建物の柱穴からの出土遺物は古式土師器の細片のみであるが、これらから数m離れた地点の第5層上面で古代の土師器杯(第105図22、図版65)が完形で出土しており、これを建物群に関連する遺物とみて古代に属する建物およびピット群と考えた。

## (2) 竈・硬化面

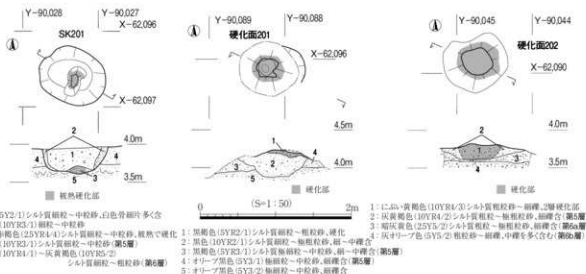
### 竈 SK201 (第93・94図)

2区南東部の第5層上面で検出した竈跡と推定される遺構である。平面形は長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形を呈し、深さは0.35mであった。長軸のやや東寄りの底面に、燃焼部と思われる赤褐色に変色して硬化した高まりがあった。内部からは被熱した完形の土師器杯1点と須恵器杯2点以上出土した。会見郡古代土器のⅢ-1期(中森祥2010)に比定され、8世紀後葉の遺構と思われる。

1は土師器杯身で、口縁部は外傾し、底部外面にはヘラ起こしが施されている。2は須恵器杯身で、口縁部は僅かに内湾し、底部外面には回転糸切りが施されている。



第93図 2区 SK201 出土遺物



第94図 2区 SK201、1・2区硬化面 201・202 平・断面図

第1次調査5区では粘土で構築された竈が検出されているが、この遺構では上部構造は確認されなかった。埋土には腐植と白色の骨片が多く含まれており、移動式竈などを設置して調理を行った可能性がある。また、数点のセンダン核が出土している。

#### 硬化面 201・202 (第94図)

硬化面 201 は1区北西部の第5層上面の畝状遺構が埋まった面上で、直径0.4 mの範囲が硬化していた。硬化面 202 は2区南西部の第5層上面で、直径0.5 mの範囲が確認された。第1次調査では2・4・5区で一定の方向性をもって断続的に確認されており、今回もこうした遺構と一連のものとする。

### (3) 井戸

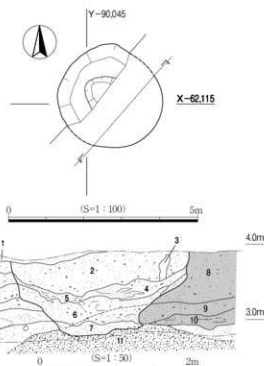
#### SE201 (第95・96図)

1区の南東端で低湿地埋土の南肩部を切り、第5層上面から掘られた井戸である。平面形は直径2.5 mの円形で、最下部は直径1.0 mの水溜状に窪み、深さは1.1 mである。底面の標高は2.8 mである。埋土の断面では確認できなかったが、井戸枠があった可能性がある。

出土遺物は付け底の移動式竈の他、須恵器杯身がある。1は移動式竈で、焚口の上縁部には庇が付き、焚口の左側縁部には庇の接合痕が認められることから、庇は焚口を全周していたと考えられる。

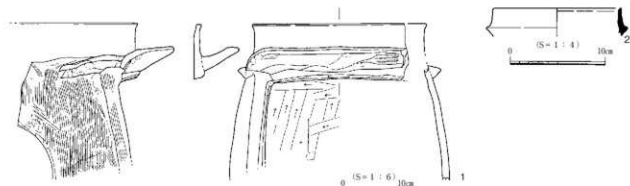
掛け口は直口で、遺存する焚口左上部の庇から後方に10cmほど突帯が貼り付けられている。また、体部左側の下半に円弧を描いて欠損する部分があり、その割れ口に沿って粗いナデ調整が認められる。

このことから、この部分に何らかの付属部位が造作されていた可能性が高い(註1)。



- 1: 黒褐色(10YR3/1) 粘細粒～中粒砂質シルトないし
- 2: 黒色(7.5Y2/1)～オリーブ黒色(5Y2/2)シルト～粘細粒砂質粘土(第4層相当)
- 3: 黒褐色(5YR3/1) 粘細粒～細粒砂質シルト
- 4: 暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質粘細粒～細粒砂
- 5: 黒色(7.5YR2/1) 粘細粒砂質粘土
- 6: 黒褐色(10YR3/1) 中粒砂質シルト
- 7: 灰色(5Y5/1) 粘細粒～中粒砂質シルト
- 8: 黒褐色(7.5Y3/2) 粘細粒～細粒砂質シルト(第5層)
- 9: 黒褐色(10YR3/1)シルト質中粒～粗粒砂～灰褐色(7.5YR4/2)シルト質粘細粒～中粒砂(第6a層)
- 10: にがい黄色(2.5Y6/3)シルト質粘細粒～中粒砂(第6a層)
- 11: 暗灰黄色(2.5Y5/2) 粘細粒～粗粒砂(第7層)

第95図 1区SE201平・断面図



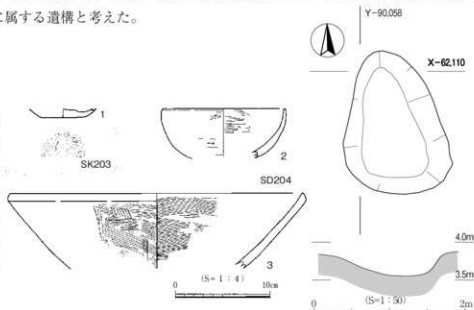
第96図 1区SE201出土遺物

2は須恵器坏身で、口縁部端面は内側へ傾斜しており、陶器編年のMT15型式に比定される。焼きがあまり、摩滅している。須恵器の年代観から古墳時代後期以降の井戸であるが、第5層上面の層準であるため、古代に属する遺構と考えた。

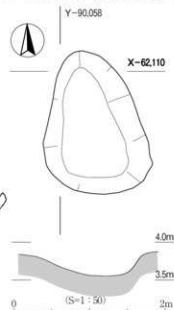
#### (4) 土坑

##### SK202 (第98図)

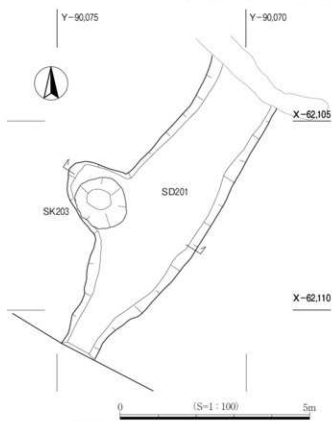
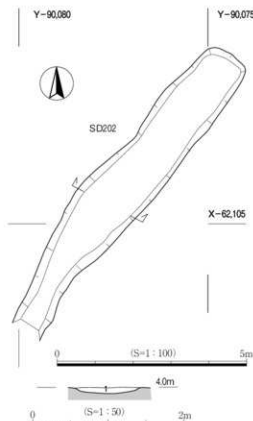
1区南東部の低湿地南際に検出された1.9m×1.3mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは0.25mである。出土遺物に須恵器細片の他、移動式竈の掛け口片がある。



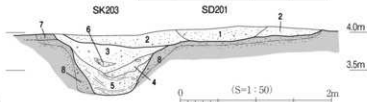
第97図 1区SK203・SD204出土遺物  
(1:SK203, 2・3:SD204)



第98図 1区SK202平・断面図



- 1: 黒褐色(25Y3-1)シルト質粘細粒-細粒砂,粗粒砂-細粒砂  
 2: 黒褐色(7.5YR3-1)シルト質粘細粒-細粒砂,粗粒砂-細粒少量含  
 3: 黒褐色(10YR2-2)シルト質粘細粒-細粒砂,細粒少量含  
 4: 黒褐色(10YR2-1)シルト質粘細粒-細粒砂,粗粒砂少量含  
 5: 黒褐色(10YR2-3)シルト質粘細粒-細粒砂,粗粒砂-細粒少量含  
 6: 褐色(10YR4-1)シルト質粘細粒-細粒砂  
 7: 黒褐色(10YR3-2)シルト質粘細粒-細粒砂,細粒少量含(第5層)  
 8: 黒褐色(10YR3-2)シルト質粘細粒-細粒砂,粗粒砂-細粒含(第6層)

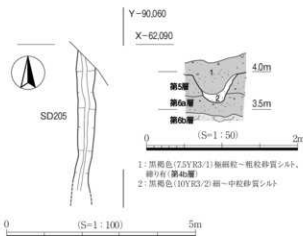


第99図 1区SK203, SD201・202平・断面図

## SK203 (第97・99図)

1区低湿地南側の第5層上面で検出された直径1.3~1.5mの楕円形さみの土坑である。検出面からの深さは0.8mで、埋没後に後述のSD201に切られている。埋土最下層はシルト~極細粒砂のラミナが見られる水成主体の堆積である。

出土遺物には第97図1の外面に回転糸切りが施された土師器坏身の底部片のほか、須恵器の底部糸切りが見られる坏底部や蓋天井部、甕体部などのいずれも細片が出土しており、古代の遺構である。



## (5) 溝

### SD201 (第99図)

1区低湿地南側の第5層上面で検出した幅1.0~2.6m、深さ0.2mの浅い溝である。古代の土師器・須恵器の坏細片が出土している。

### SD202 (第99図)

1区低湿地南側の第5層上面で検出した。SD201と平行するように位置し、幅1.0~1.5m、深さ0.1mの浅い溝である。須恵器甕体部の細片が出土している。

### SD203 (第101図)

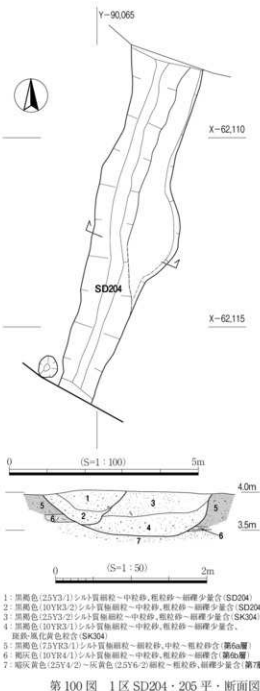
1区低湿地北側の第6b層上面で検出したが、地層観察用畦の断面観察により、第5層上面から掘削されたと判断した。幅1.2m、深さ0.5mを測る。

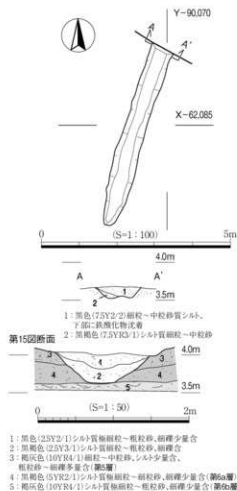
出土遺物は古式土師器の細片が出土したのみである。

### SD204・205 (第97・100図)

1区低湿地南側および北側のいずれも第6a層上面で検出されたが、地層観察用畦の断面観察からSD205が第5層上面から掘削されていることが確認できた。SD204は幅1.0m、深さ0.5mで、SD205は幅0.5m、深さ0.4mである。

出土遺物はSD204から土師器高坏の内湾して立ち上がる坏部2、須恵器細片や瓦質土器捏鉢3が出土しており、最終的に埋めたのは第4b層と



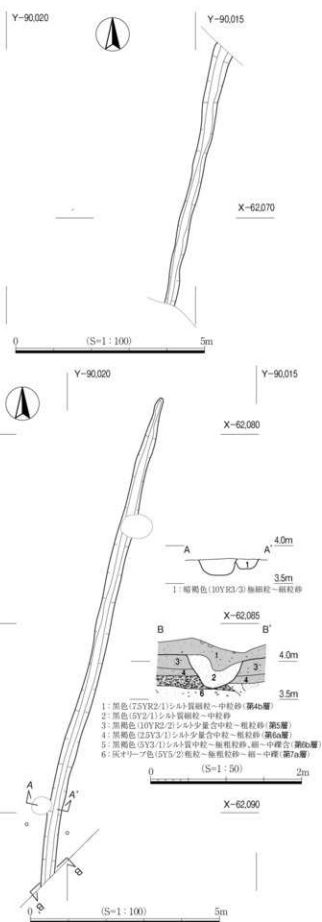


第101図 1区SD203平・断面図

考えられる。

両者は配置からみて一連の溝と考えられるが、溝幅が異なり、間に低湿地が存在することから、連続していたとは考えにくい。しかし、これらの溝は、第106図に示したように、第1次調査5区の第5層上面の溝SD07の延長部分と考えることができる。5区SD07はⅢ-①層(第2次調査の第4b層)上面の畦1の西側に平行する位置にあり、最大で幅1.75m、深さ0.42mで、埋土上面は硬化面になっている。SD204・205は、後述の第4b層上面の里道西側に沿う位置にあることから、これら一連の溝は本来、第1次調査地から続く里道の西側溝として掘削された可能性が高く、この点については次節で詳述する。

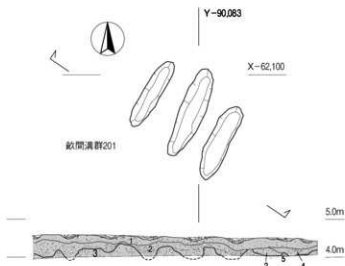
SD206 (第102図)



第102図 2区SD206平・断面図

2区の第6層上面で検出された南東壁から北東壁に直線的に延びる溝で、検出面では幅0.4m、深さ0.1mだが、地層観察用畦の断面では、第5層上面から掘られており、幅0.7m、深さ0.4mである。SD204・205とは概ね平行しており、間隔は約40mである。

出土遺物は古式土師器の細片がある。



#### (6) 畝間溝状遺構

1区の低湿地南側の第5層上面で畝間の痕跡と推定される平行する溝群を検出した。

##### 畝間溝群 201 (第103図)

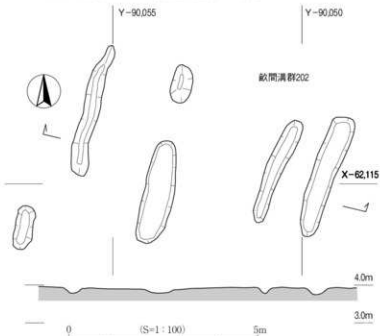
1区北西部のSD202の西側で、第5層掘削中に地層観察用畦の断面観察により、上面が畝状をなしていることが確認され、第5層下部に残存していた3条の溝を断片的に検出した。畝間溝は第4層下部層で埋まっており、間隔は約1.0mである。

出土遺物は古式土師器の細片があるのみである。

##### 畝間溝群 202 (第103図)

1区南東部のSB203・204と低湿地の間の第5層上面で検出した。畝間溝の間隔は1.0~2.5mとばらつきがあり、この上位の第4層上面では、後述する大型の鳥状畝が存在していた。

出土遺物は細片のみだが、底面にヘラケズリが認められる土師器坏片がある。



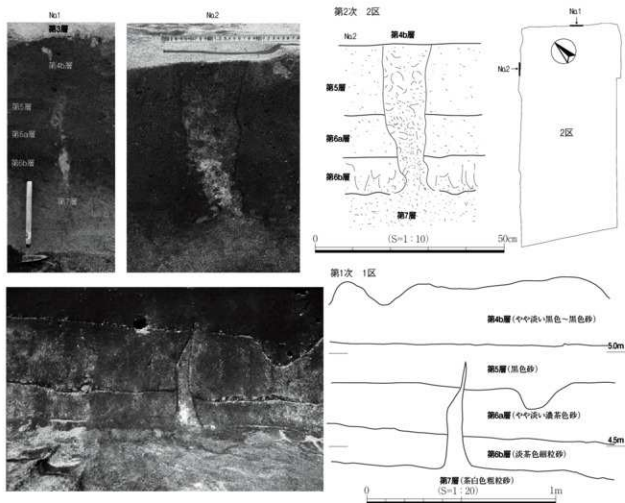
第103図 1区畝間溝群 201・202 平・断面図

#### (7) 地震痕跡 (第104図)

2区外周の壁面の地層観察により液状化痕と見られる砂脈が確認され、第7層の砂礫層上部が液状化している可能性が指摘された(註2)。こうした認識に立って地層観察用畦の断面観察を進めると、2区の全域で、遺構内も含めて砂脈が多数確認されるに至った。

先行して調査した1区にも存在した可能性があるが、外周の壁面観察が十分に行えなかったため、認識できなかった。

(京嶋・高橋)



第104図 第1・2次調査の砂脈断面

地震による液状化痕は第7層上部から第6・5層を垂直に近く上昇して貫入する砂脈として確認され、第4b層基底面で不整合となる。地震発生が第5層上面の段階であり、第4b層の中世作土を形成した耕作活動により削剥され噴砂は消滅したと考えられる。噴砂の形状は、地層の裂隙に沿った砂脈は確認できず、多くは円錐丘を形成したものと推定される(註3)。これは地盤が砂質土壌の特徴と言えるかもしれない。

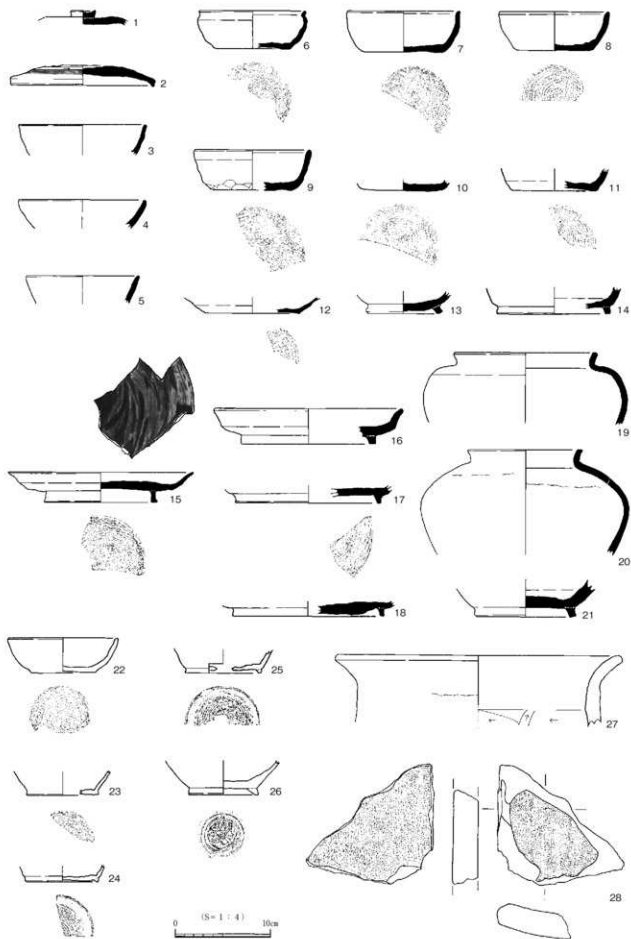
砂脈が形成された時期は第4b層の形成以前であるが、第1次調査の所見と後述する今回の畠の経営時期の年代観から11世紀後半以前となる。また、第5層上面は古代の遺構面となり、今回の調査では小規模の建物群や溝・竈・畠遺構を示唆する畝間溝などが検出されたものの、出土遺物は少なかったが、第1次調査では欄列で囲まれた官衙的な建物群や多くの遺物が確認されている。

第1次調査の出土遺物から、建物群は7世紀中葉～9世紀後半までの時期と考えられる。

砂脈と古代の遺構群との先後関係を示す資料は得られなかったが、多くの砂脈を伴う液状化を起させた地震は相当大規模なものであったと推定され、古代の遺構群の終末を地震による甚大な災害に結びつけることは、一定の妥当性をもつものとする。すなわち9世紀後半ごろに大規模地震が発生した可能性を指摘したい。

ちなみに、この時期に遺跡周辺に影響を与えた可能性のある地震として「出雲地震」の記録がある。『三代實録』と『類聚国史』に神社・寺院・官舎などが倒壊したと記されている880(元慶4)年11月に発生した地震で、マグニチュード7と推定されている(西田良平2007)。また、この地震が高根





第 105 图 地层出土遗物

半島南縁で確認されている鹿島断層の最新活動によるものとする調査研究も提示されている（徳岡隆夫ほか2007）。

（京嶋）

#### （8）地層出土遺物（第105図）

第5・6層から出土した、奈良時代から平安時代の遺物を報告する。

1～21は須恵器である。1・2は杯蓋で、1の天井部にはボタン状のつまみが付く。2は口縁部が屈曲し、天井部には環状のつまみが付くものと考えられる。また、外面には環状の墨痕がある。3～14は坏身である。3～5は口縁部で、3・4は内湾気味に立ち上がり、5は外傾する。6は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。7・8は内湾気味に立ち上がり、8はさらに口縁部が僅かに外反する。9は外傾して立ち上がる。10～12は底部で、12は器壁が薄く、大きく外反して立ち上がる。

なお、6～12はいずれも底部外面には回転糸切りが施されている。13・14は高台が付くもので、いずれも底部外面にはナデ調整が施されている。15～18は皿で、いずれも高台が付く。15・17・18の底部外面には回転糸切りが施されている。15の内面には全面的に墨痕があり、転用硯として用いられている。19・20は短頸壺、21は高台付きの壺の底部である。

22～27は土師器である。22～26は坏身で、いずれも底部外面には回転糸切りが施されている。24～26は高台が付くもので、24・25には小さな高台が付く、26には24・25よりも高い高台が付く。また、25の底部には穿孔、26の底部外面には爪痕がある。27は長胴甕で、体部は直立し、口縁部は外反する。

28は平瓦で、凹面には布目痕、凸面には縄目痕がある。

（高橋）

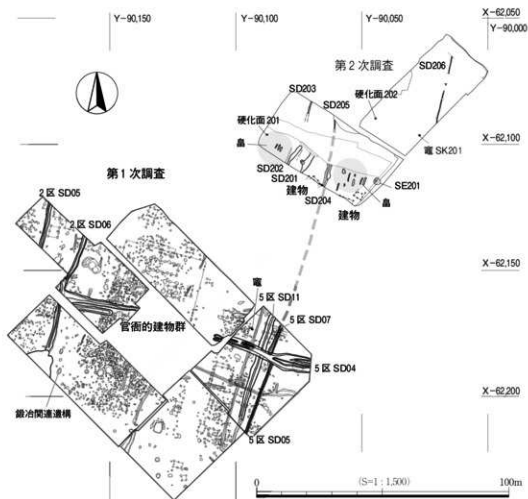
#### （9）小結（第106図）

第1次調査では多数の建物や溝などととも、これらが官衙の遺構群であることを示唆する多数の遺物が出土しているのに対して、今回の調査で検出した遺構は小規模の建物数棟と井戸、数条の溝と畝の畝間溝にとどまり、地層からの出土遺物を含めても少量の遺物しか出土しなかった。

このことから、今回の調査地は、第1次調査地の建物群の外縁部にあたり、イネ科植物の草原を多く残した、相対的に人間活動が希薄なエリアであったと思われる。しかし、後述する中世の畝に先行して、第5層を作土とする畝の経営が存在した可能性を明らかにすることができた。また、第1次調査で検出されている5区SD07の北延長部と推定した溝SD204・205は一連の溝である可能性が高い。第1次調査では、この溝の東側の第4b層上面で畝に取り込まれて縮小したと思われる畦1が平行して検出されており、第5層上面の段階で後述する里道の前身となる道が造成されていた可能性が高い。また、第1次調査の5区SD11は幅が2～3m、深さは最大で1.45mを測り、その規模や形状からみて西側の官衙の建物群の防御を目的とした堀と考えることができ、掘削土を盛った土塁状の施設が西側にあった可能性も考えられる。この施設に沿って外側に里道が設置されたのではなかろうか。

さらに官衙的な建物群が機能していた9世紀後半には、鹿島断層を震源とする「出雲地震」が発生し、出雲国庁が立地する意宇平野だけでなく、米子平野や弓ヶ浜半島でも大きな揺れがあったと推定される。特に弓ヶ浜砂州上の当地周辺は、表層が軟弱な砂質土を基盤とするため、建築物に多大な影響を被ったことは容易に推察できる。この震災を機に官衙の機能が停止した可能性が高く、これ以後、古墳時代初頭から始まった居住域としての利用は近代に至るまで見られなくなる。

（京嶋）



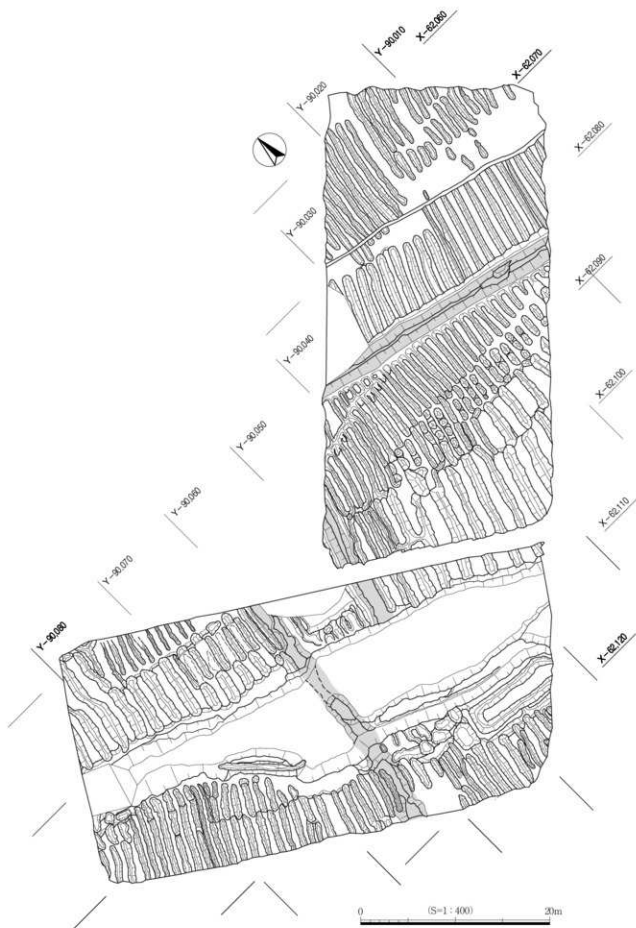
第106図 第1・2次調査の奈良～平安時代遺構全体図

註

- (1) 鳥取市高住牛輪谷遺跡など湖山池周辺の遺跡で出土している、付属籠が付く「湖山池南岸型」の可能性が高い。とすれば、湖山池周辺以外での初例となる。
- (2) 鳥根大学自然災害軽減教育研究センター酒井哲弥氏、文化財調査コンサルタント渡辺正巳氏と共に現地の地層観察により確認した。
- (3) 2000年の鳥取県西部地震（マグニチュード7）後に実施された、境港市竹内工業団地内で発生した噴砂の調査報告では、円錐丘をなす噴砂が多く確認されている（石賀弘明ほか2001）。

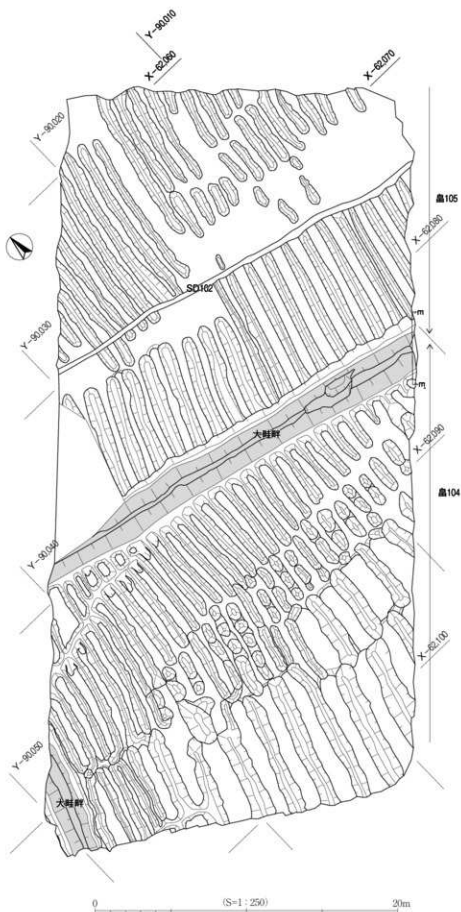
引用・参考文献

- ・石賀裕明・道前香緒里・鳥根大学地震災害調査団2001、「鳥取県西部地震による波状化に伴う噴砂について」：『鳥取県西部地震災害調査報告書』、pp.21-24
- ・徳岡隆夫・吹田歩・田中義昭・渡辺正巳・中田高2007、「P-14鹿島新層（鳥根半島）の最新活動時期の考古学的調査による解明」：『日本第四紀学会講演要旨集』37、pp.138-139
- ・中森祥2010、「因幡・伯耆における古代土器の編年とその様相」：『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』、pp.85-102
- ・西田良平2007、「山陰地域の地震活動」：『鳥取大学工学部研究報告』第38巻、pp.25-39



第107図 鎌倉～室町時代遺構全体図





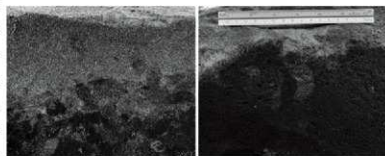
第109图 2区録倉~室町時代遺構全体图

## 第4節 鎌倉～室町時代

### (1) 畠

1・2区の第4b層上面で畠の畝状遺構が検出された。畠は後述の1区の低湿地および南北里道、2区の東西大畦畔を境に畝幅や方向が変わっており、畠101～105に区分できる。

すべての畠の畝および畝間溝の上面には直径2～3cmの無数の生痕が確認され(第110図)、その擾乱が顕著な部分を第4a層とした。畠作土中の生痕は第3b層の砂で埋められているが、逆に第3b層基底面付近は畠作土が混じる黒褐色シルト質細粒砂の生痕もある(註1)。

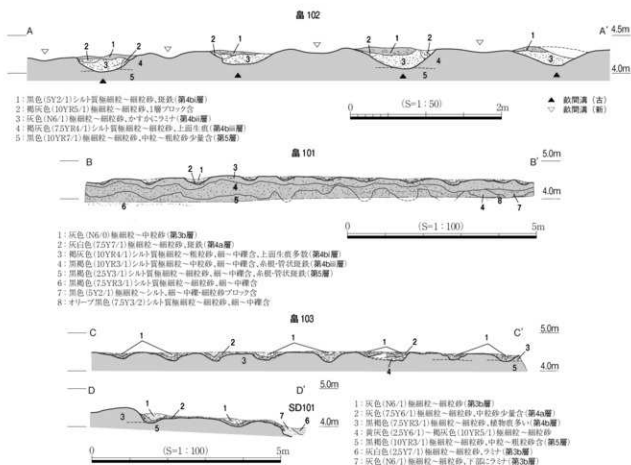


第110図 畠101上面に見られる生痕

### 畠101・102 (第108～111・115図)

1区南北里道の西側に位置し、低湿地を介して南北に分割される。

低湿地南側の畠101は畝幅1.5mを基調とし、N30°Eの畝方向を示している。西端や中央付近では畝立てをずらして行っており、畝間溝は途中で切れている。



第111図 1区畠101～103断面図

畝 102 は低湿地北側に位置し、畝幅 2.0 m を基調とし、N 10° E の畝方向である。中央北部には畝幅 1.0 m の狭い間隔で畝間溝が並ぶエリアがある。東部には当初の畝間溝が埋まった後に、その上部に新たに畝立てしている箇所が確認された（第 111 図上）。

第 115 図の 9・15・16 は畝 101 から出土したものである。

9 は須恵器坏身で、口縁部の立ち上がりは短く、陶邑編年の TK217 型式に比定される。15・16 は白磁碗で、15 の外面にはヘラ彫りによる縦方向の線刻があり、見込みには太い沈線状の段が付く。森田分類のⅢ類である。16 は高台を意図的に打ち欠いており、高台内は無軸である。また、見込みには沈線が巡っている。

12・17 は畝 102 から出土したものである。

12 は須恵器皿で、口縁部は外反し、底部外面には回転糸切りが施されている。また、底部内面には墨痕は認められないが、器面が滑らかであり、転用硯として用いられたと考えられる。17 は白磁碗で、口縁端部に玉縁が付く。森田分類の D 群である。

畝 103・104（第 108・109・111・112・115 図）

1 区南北里道の東側に位置し、低湿地を介して南北に分割される。

低湿地南側の畝 103 は畝幅 1.3~1.5 m、畝方向 N 10° E である。南北里道に沿った幅約 5 m の範囲は畝間溝が不明瞭になっている。また、低湿地に沿って長さ 20 m 以上、幅 4.5 m で、外周に下幅 1.5 m の畦畔を廻らせることで、幅 1 m の溝で区画された形態となる、大型の鳥状畝が 1 基検出された。畝方向は E 10° S である。南辺の畦畔中央部は、給排水のためか幅 0.8 m ほど切れていた。この西側の低湿地に面したエリアは不整形な土坑状の凹凸となっていた。

畝 103 の低湿地際の肩部には樹木幹があったことを示す根株痕（第 112 図）が複数遺存しており、南北里道の西側にも同様に遺存していた。低湿地に沿った凹凸や南辺の抉れは樹木の幹を掘り起こした痕跡の可能性がある。また、畝 101・103 の畝上面では放射状に樹木の細根またはササなどの地下茎が延びた痕跡が複数確認できることなどから、耕作停止後しばらくはススキやハンノキなどの先駆種を中心とした、ある程度の植物群落が形成されたと推定される。

畝 104 は低湿地北側に位置し、1 区から 2 区にかけての範囲である。北端は 2 区の東西大畦畔で区切られている。低湿地に面する南部は畝幅 2.0~2.5 m と大きく、畝間溝も深い。畝方向は N 20° E である。2 区で畝の位置をずらした箇所が見られる。

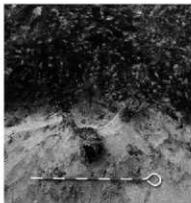
一方、2 区の東西大畦畔に近い耕作エリアは幅 1 m の細畝になっていた。畝方向は N 0~15° E で、西に向かって傾きが大きくなる。やはり畝を途中でずらしている箇所が認められる。また、底面をピット状に深く掘り込んだ畝間溝が並ぶエリアもあった。

第 115 図 1・5・6・18 は畝 103 から出土したものである。

1・5・6 は土師質土器である。5・6 は坏身で、いずれも内湾気味に立ち上がり、底部外面には回転糸切りが施されている。1 は小皿で、手捏ね成形が行われている。18 は端反りの青磁碗である。

2~4・8・10・11・19 は畝 104 から出土したものである。

10・11 は須恵器坏身で、口縁部の立ち上がりは短く、陶邑編年の TK217 型式に比定される。2~4・8 は土師質土器で、3・4 は坏身である。3 は内湾気味に立ち上がり、4 は高台が付く。2 は小皿、8 は鍋、



第 112 図 畝 103 低湿地際の根株痕



19は管状の土錘である。

#### 畠 105・SD102 (第109・115図)

2区東西大畦畔の北側に位置する。畝幅が1.5mの南部と1.0mの北部に大別され、畝の方位はN20°EとN8°Eである。両者の間には幅0.5mの浅い溝SD102が東西大畦畔と2.1mの間隔を開けて平行して直線的に延びている。深さ4cmほどの埋土は灰色(5Y4/1)細粒～中粒砂質シルトで、やや踏み固められた感があり、作業用の通路になっていた可能性がある。

第115図13・14・20は畠105から出土したものである。

13・14は須恵器坏身で、14の底部外面には回転糸切りが施されている。20は管状土錘である。

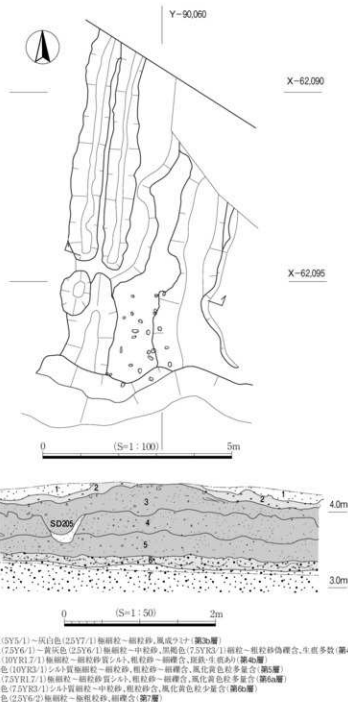
## (2) 里道・大畦畔

1区で南北方向の里道、2区で東西方向の大畦畔、2区から1区にかけて南北の大畦畔を第4b層上面で検出した。

#### 南北里道 (第108・113図)

1区中央部で幅2.0～2.5m、高さ0.2～0.3mの南北に延びる帯状の高まりを検出した。上面は畝間溝で壊されたり、樹木の痕跡で凹凸があるが、明瞭に帯状の高まりとして認識でき、低湿地のSD101内にも続いていた。このことから、人間が通行するために造成された里道と考える。低湿地の北側3mまでの上面には10～15cmほどの大礫が散漫だが埋め込まれており、ぬかんだ上面を改良しようとした可能性がある。

この里道の西側に沿って第5層上面でSD205が検出されているが、最終的に埋めているのが第4b層である。このことから、上面の畠造成時に埋まったと考えられるが、里道との関係においては、断面の地層観察では確認できなかったが、当初の里道造成に際してこの溝が掘削された可能性も否定できない。前節で記したよう



第113図 1区南北里道平・断面図

に、検出層準や位置からみて、この里道と一連の遺構と考えられる第1次調査の畦1・10も、直下の層準で西側に溝が検出されており、第1次調査の畝との連続性を看取できる。

#### 東西大畦畔 (第109・114図)

2区の中央部で下幅2.5m、高さ0.8mの東西方向の大型畦畔が検出された。上端は平坦部がほとんどない断面三角形を呈しており、通路として利用されたものではない。北側裾部は幅1.2m、深さ0.4mの溝状をなしており、この溝の掘削土を南側に盛り上げて畦畔が造成されたと思われる。

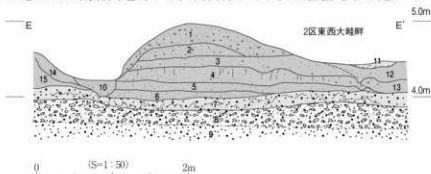
畝105の南部と畝104北部の畝には連続性が見られることから、畝開発の当初からあったのではなく、畝経営の途中で、旧耕作単位と関係なく、この地点に畦畔が設けられたと推定され、耕作区画を新たに明示する目的があったと思われる。

また、この畦畔は第3b層の風成層で埋没しているが、畦畔北側では溝状の窪みに向かって北から南に下降し、畦畔に遮られて上昇するラミナが見られた。大型で上端を尖らせて高くしているのは、飛砂を防ぐ目的もあったと推察される。

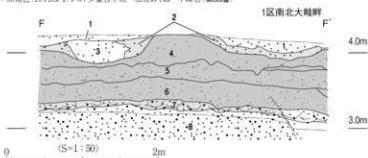
#### 南北大畦畔 (第108・109・114・115図)

東西大畦畔の西端に接続すると思われる南北大畦畔が2区南西部から1区の低湿地まで延びていた。南北里道と8mのあいだを開けて平行しており、その間の空間にも間隔の狭い畝間溝状の浅い溝が確認された。出土遺物として第115図の土師質土器鍋7を図示する。

2区では東西大畦畔と同じ規模だが、1区では高まりの部分の削られて、下幅が1.2m、高さ0.4mほどで検出されており、1区調査時には畝との区別ができず、畦畔とは認識できなかった。畦畔の西裾部が溝状をなしており、畝104外周の西および北辺を溝状に掘削して内側に畦を造成した形である。南北大畦畔は低湿地手前で終わっており、南側の畝103では確認されなかった。畝104への北からの飛砂を防ぐために、北寄りの東西大畦畔との接続付近のみ高く盛り上げたとも理解できる。

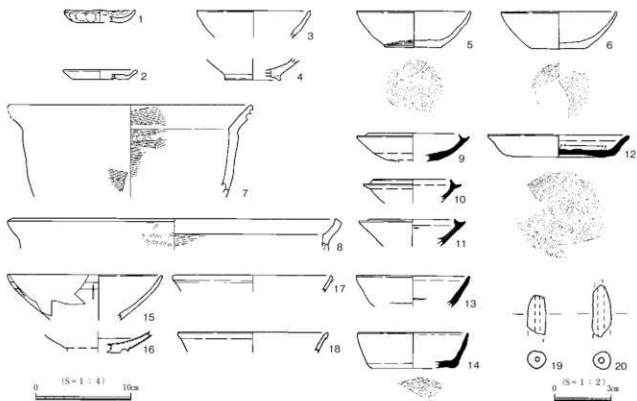


- 1: オリーブ黒色 (SY3/1) シルト質細粒～粗粒砂鈣～細～中粒(基土)
- 2: 黒褐色 (10YR3/1) シルト質中粒～粗粒砂鈣、細粒～灰色 (5Y2/1) シルト質細粒～中粒砂鈣、細～中粒少量含(第4b層)
- 3: 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質中粒～粗粒砂鈣、細粒～黒褐色 (2.5Y2/1) シルト質細粒～中粒砂鈣、細粒少量含(第5層)
- 4: 黒褐色 (10YR3/1) シルト質中粒～粗粒砂鈣、細～中粒含、赤鉄管状埋戻土(第6a層相当)
- 5: 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト少量含中粒～粗粒砂鈣
- 6: オリーブ黒色 (10Y3/1) シルト少量含中粒～粗粒砂鈣、細～中粒含、5層と一連か
- 7: 黒褐色 (5Y3/1) シルト質中粒～粗粒砂鈣、細～中粒含(第7a層)
- 8: 黄灰色 (2.5Y6/1) 中粒～粗粒砂鈣、細～中粒含(第7b層)
- 9: 黄灰色 (10YR5/1) 中粒～粗粒砂鈣(第7c層)
- 10: 黒褐色 (10YR2/1) シルト質中粒～粗粒砂鈣、2層に付石
- 11: 黄灰色 (2.5Y4/1～5Y4/1) シルト質細粒～中粒砂鈣、上面生草多数(第4a層)
- 12: 黒色 (7.5Y2/1) シルト質細粒～中粒砂鈣、細～中粒含赤鉄管状埋戻土少量含(第4b層)
- 13: 黒褐色 (10YR2/2) シルト少量含中粒～粗粒砂鈣、細～中粒少量含(第5層)
- 14: 黒褐色 (2.5Y3/1) シルト質中粒～粗粒砂鈣
- 15: 黒褐色 (10YR3/1) シルト少量含中粒～粗粒砂鈣、細～中粒含(第6a層)



- 1: 灰色 (5Y5/1)～灰白色 (2.5Y7/1) 細粒鈣～粗粒砂鈣、風成クマシ(第3a層)
- 2: 灰色 (7.5Y6/1)～黄灰色 (2.5Y6/1) 細粒鈣～中粒砂鈣、黒褐色 (7.5YR3/1) 細粒～粗粒砂鈣含腐生、生草多数(第4a層)
- 3: 灰色 (N6/0) シルト質細粒～中粒砂鈣、水成クマシ
- 4: 灰色 (10YR7/1) 細粒鈣～粗粒質シルト、粗粒砂鈣～細粒含、黒鉄・生草少量(第4b層)
- 5: 黒褐色 (10YR3/1) シルト質細粒～粗粒砂鈣、粗粒砂鈣～細粒含、風化黄色粘多量含(第5層)
- 6: 黒色 (7.5YR1/1) 細粒鈣～粗粒砂鈣シルト、粗粒砂鈣～細粒含、風化黄色粘多量含(第5層)
- 7: 黒褐色 (7.5YR3/1) シルト質中粒～中粒砂鈣、粗粒砂鈣、風化黄色粘少量含(第6a層)
- 8: 灰黄色 (2.5Y6/2) 細粒鈣～粗粒砂鈣、細粒含(第7層)

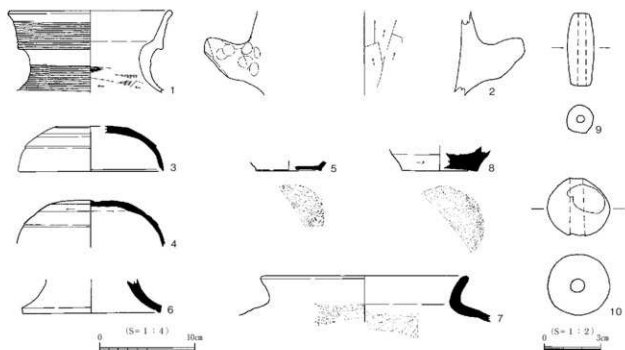
第114図 1・2区大畦畔断面図



第115図 冢101～105・南北大畦畔出土遺物  
 (1・5・6・18: 冢103、2・4・8・10・11・19: 冢104、7: 南北大畦畔、  
 9・15・16: 冢101、12・17: 冢102、13・14・20: 冢105)

### (3) 低湿地 (第108・116図)

1区中央部で東西方向に検出された。今回の調査では、第7層上面の落込みを低湿地として認識し、第5・6層層準の地層で埋没しながら第4層上面まで存続していた(第Ⅲ章第2節第15図参照)。この第4層上面の溝状遺構をSD101とした。第Ⅴ章で報告したSD101の花粉分析では、*ガンマ・オモ*



第116図 低湿地 (SD101) 出土遺物

ダカなどの抽水植物や湿性植物が卓越しており、西端で幅7.0m、東端では幅11.0mを測る水漬きの低湿地であったと考えられる。上面には全面で踏込みが顕著に認められたが、花粉・植物珪酸体分析によれば稲作水田に利用された可能性は低い。また、既述のとおり低湿地を横断する南北里道の帯状の高まりが確認された。

この低湿地の西端と東端のトレンチ調査により、下位では第5・6層層準の地層が両肩部から底に向かって堆積して、この落込みをほとんど埋めており、その後、第4層に相当する、リターなどの植物遺体を含む湿地性のシルト～粘土が主体となる堆積物が、0.1～0.3mの厚さで確認された。第6層の標高3m以下で激しい湧水があり、標高2.5mまで掘削したが、最下部は確認できなかった。

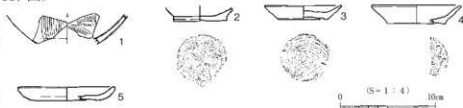
第4層以下の低湿地内の遺物を第116図に示した。1は弥生土器壺で、口縁部外面と肩部外面には擬凹線が巡る。2は甌で、角状の把手が付く。3～8は須恵器である。3・4は坯蓋で、3は天井部と口縁部との境界の稜は鈍く、口縁部内面には浅い段がある。陶邑編年のMT15型式に比定される。4は口縁端部を欠損するが、天井部と口縁部との境界の稜は鈍く、陶邑編年のMT15型式あるいはTK10型式に比定される。5は坯身で、底部外面には回転糸切りが施されている。6は高坏の脚部である。7は甕で、外面には叩き目、内面には当て具痕がある。8は甕の底部で、底部外面には回転糸切りが施されている。9は管状の土錘、10は球状の土錘である。

#### (4) 地層出土遺物 (第117図)

第5・6層から出土した、鎌倉時代から室町時代の遺物を報告する。

1は同安窯系Ⅰ類の青磁碗で、外面には細

かい櫛描、内面には櫛描による文様が描かれている。2～5は土師質土器である。2は坯身の底部で、外面には回転糸切りが施されている。3～5は小皿で、3・4の底部外面には回転糸切りが施され、5の底部外面にはナデ調整が施されている。



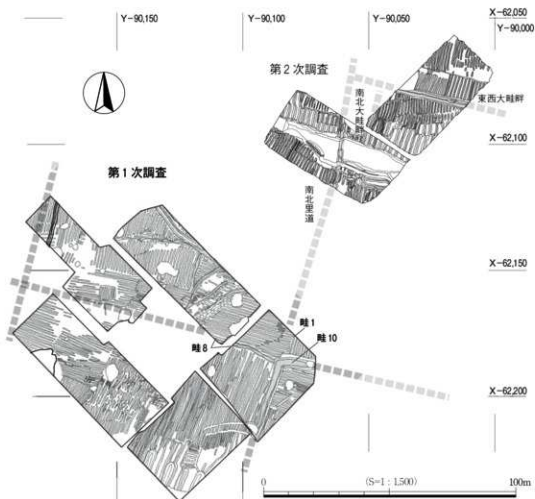
第117図 地層出土遺物

#### (5) 小結 (第118・119図)

第4b層上面の畠遺構は、南北里道、SD101、東西大畦畔によって5つの耕作単位に区分された。それぞれ畝幅や畝方向が異なり、栽培作物が異なる可能性が考えられる。また、同じ区画の中でも、小単位が認められる。

里道は農地開発初期から存在しており、経営末期には、一部畠地に取込まれて、機能が失われていたと推察される。一方、大畦畔は、東西大畦畔で認められたように、旧耕作単位を越えて直線的に設けられた様相を呈しており、経営期間の途中で造設された施設と考えられる。

これら今回検出した里道および大畦畔の位置と、第1次調査で検出されている畦畔の位置を合わせると、南北里道は第1次調査5区の南北畦畔に連続すると考えられ、東西大畦畔と第1次調査5区の東西畦畔との距離は約110mで平行しており、南北里道から約110m離れた第1次調査2区SD05を土地区画に関連する遺構と考えると、一町(109m)四方の土地区画があった可能性を提示できる。



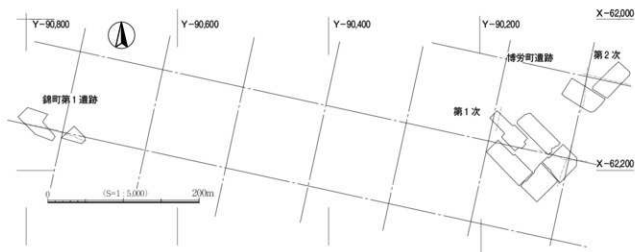
第118図 第1・2次調査の鎌倉～室町時代遺構全体図

この方格地割が示す方位はN14°Eで、米子市域の条里地割の傾きN4～5°E（岩永実1962、中村佐太郎1978）とは異なる。しかし、第1次調査の報告でも指摘しているように、西500mに位置する錦町第1遺跡のクロスナ上面で検出された畠遺構を区画する東西大畦畔は、博労町遺跡と同じ方向を示しており、110mの方格を当ててみると、博労町遺跡第1次調査の東西大畦畔の一町南の陌線に位置する。とすると、錦町第1遺跡のA・B区間の未調査部分に阡線が通ることになる（第119図）。

以上のことから、第4b層を作土とする畠は11世紀中葉以降に本格的な造成が始まり、14世紀前半まで経営された。年貢や納税の基準となる土地区画として、条里的な方格地割が経営途中で完成したと思われる、その後、最終段階には里道や畦畔部分も耕作地に取り込まれて土地区画が不明瞭な部分が目立つようになっている。

こうした畠遺構の特徴を総合すると、前節で示したように、第5層上面でも畠状遺構が確認されたことから、第1次調査地の官衙的な建物群が機能していた段階で、すでに周辺での第5層を作土とする農地経営が始まっていたと考えられる。そして、建物群の廃絶以後、折からの深刻な農業災害による疲弊（錦織勤2003）を背景に、本格的かつ広域的な農地開発が進行したと思われる。この開発は錦町第1遺跡を含む広大な範囲で実施されたもので、多くの役夫と物資が必要であったと推察される。したがって、官衙的建物群の経営主体による、公領として農地開発が進められたと考えるのが妥当と思われる、その経営は在地領主の国人が担ったと考えたい。

このような課税対象となる畠地（名田）には、土地面積を明示する溝や畦畔などの区画施設が造



第119図 博労町遺跡と錦町第1遺跡の位置関係（一点鎖線は110m方格）

成されていったが、ある時期から土地面積の明示が不要になり、土地区画の施設は畠地に取り込まれて消滅する。これは、畠地が地頭など在地領主層の土地支配の拡大により、私領化が進んだことを示唆するとも考えられる。

考古学資料から想定した事象を、この地域の数少ない中世史料により位置づける場合、まず注目すべきは「勝田庄」との関りであろう。『民経記』1233（天福元）年5月記の紙背文書に「抑伯州勝田庄、難爲六西相傳之地…(略)…去二□地頭新補之上…(略)…」とあり、日付は「十月六日」とあるが、1222（貞応元）年かとされている（東京大学史料編纂所編1995）。この「勝田庄」は勝田地名がある東伯郡とする説と、近世の勝田庄・勝田村の地名がある浜の目（弓ヶ浜半島）とする説がある（君嶋俊行2017）。両説の当否は中世史料の不足から直ちに確定できないが、中世末期以降の史料は後者に集中しており、前者の史料はほとんどないことから、博労町遺跡の畠遺構は「勝田（神田）庄」に属する可能性が高いと考える（註2）。

後者の説を前提に考えると、先の文書は1221（承久3）年の承久の乱後に新補地頭が補任されたことを記しており、「六代相伝」してきた「勝田庄」の土地が朝廷側の所領であったことを示している。そして、新補地頭の補任以降は、地頭による土地支配がしだいに進んでいったことが予想される。その点で注目されるのは、『佐々木文書』中の1354（文和3）年10月14日の足利尊氏袖判下文（鳥根県古代文化センター編1999）に登場する南條又五郎の「神田庄」である。この文書からは、前年に戦死した佐々木秀綱の軍功により、没収されていた南條又五郎の「神田庄」を、佐々木氏の家督の所領にするよう幕府が命じたことを知ることができ、この時点で「神田庄」が私領になっていたことがわかる（註3）。

博労町遺跡の畠遺構は12世紀を中心に経営され、下限が14世紀前半ころと考えられることから、上記文書の時期と一致する。すなわち、「勝田庄」内の農地とみられる博労町遺跡から錦町第1遺跡で確認された広域的な畠遺構は、公領として開発・経営がはじまり、13世紀以降、補任された地頭による土地支配が進んでいったが、最終的には経営主体であった南條氏が没したためか14世紀前半ころに幕府に没収された。その後、14世紀中葉に「神田庄」を与えられた佐々木氏（後の尼子氏を庶家とする）は、飛砂の激化や南北朝動乱の影響によるためか経営に着手することなく、畠は放棄されたのではなかろうか。

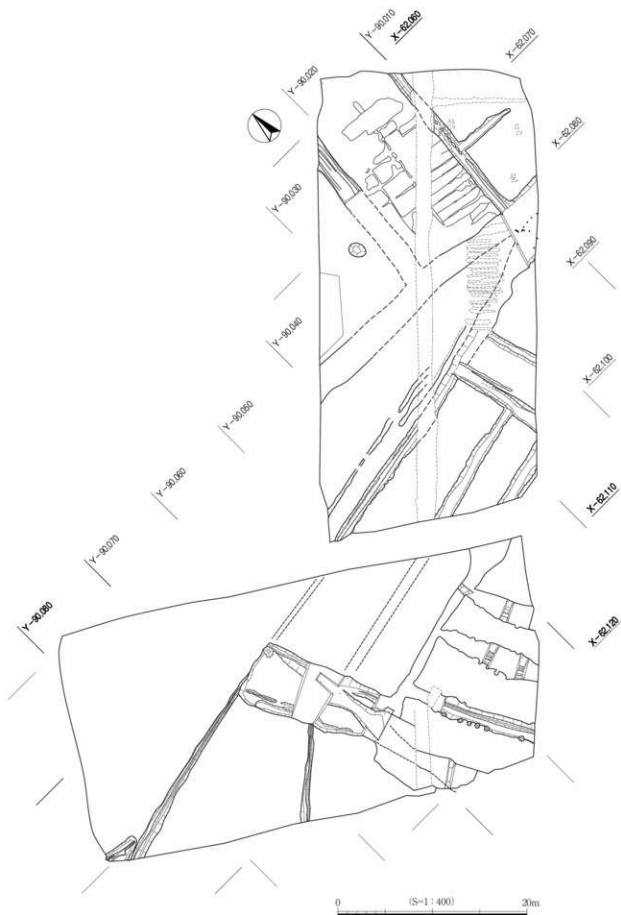
（京嶋）

註

- (1) 東伯郡湯梨浜町の長瀬高浜遺跡でもクロナナ上面で中世の畠が検出されており、そこでも全面に生痕が確認されており、赤木三郎氏はカニの巣穴とする一方で、高橋学氏はヨシなどのイネ科植物に由来するものとしている（赤木三郎 1997、高橋学 1997）。第Ⅵ章で報告しているように、本遺跡でもイネ科花粉は卓越するものの、植物珪酸体ではヨシ属は少なく、シバ属・ススキ属が多い。
- (2) 「勝田庄」と「神田庄」については前者が浜の目から米子付近までを指し、後者は「大山寺縁起」の「髪太ノ浦」や「雲陽軍実記」「伯耆民談記」などで「神田浜」とある当遺跡周辺を指し、「勝田庄」内にあった浦方・浜方の「神田」集落を念頭に置いた呼称ではなかろうか。
- (3) 当該文書の「下」に続く「佐々木秀綱跡」は命令の対象者である故佐々木秀綱の家督と考え、(島根県古代文化センター 1999) の解釈とは異なる。

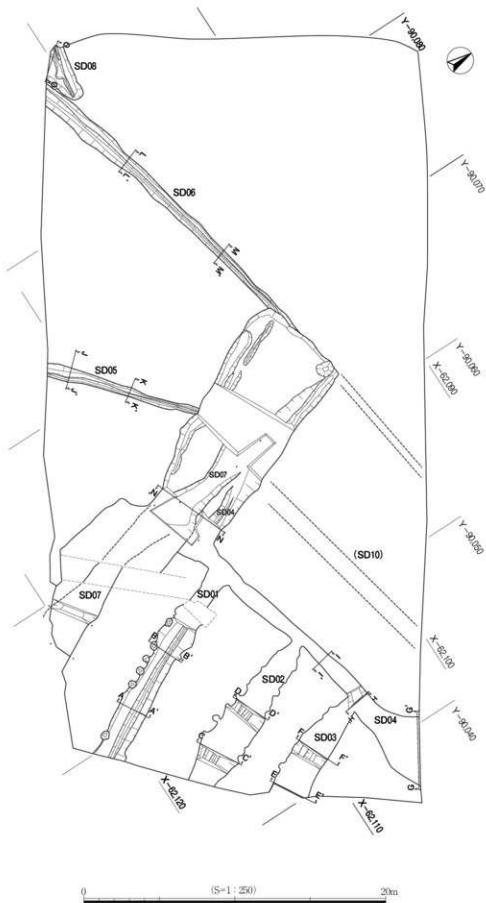
引用・参考文献

- ・赤木三郎 1997、「長瀬高浜と周辺の第四系」：『長瀬高浜遺跡』Ⅵ、pp.114-123
- ・岩永実 1962、「鳥取県における条里地割の研究（第2報）」：『鳥取大学文学部研究報告』、pp.69-70
- ・君嶋俊行 2017、「『伯州勝田庄』はどこか」：『園田俊雄先生命寿記念考古学小論集 だんだん』、pp.57-66
- ・島根県古代文化センター編 1999、「戦国大名尼子氏の伝えた古文書-佐々木文書-」、p.29（影写 p.14）
- ・高橋学 1997、「長瀬高浜遺跡の畠状遺構のソフト X 線分析と画像処理」：『長瀬高浜遺跡』Ⅵ、pp.124-131
- ・東京大学史料編纂所編 1995、「經光卿記 紙背文書」：『大日本古記録 民経記 7』、p.95
- ・中村佐太郎 1978、「日野川下流域平野の地形と条里制遺構」：『人文地理』第 30 巻第 1 号、pp.55-64
- ・錦織勲 2003、「平安期の伯耆国の農業災害」：『新修米子市史』第 1 巻、pp.545-552

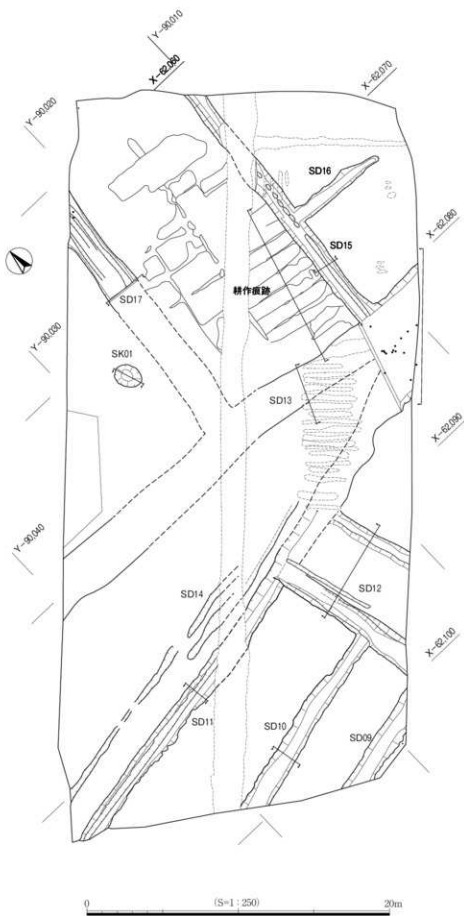


第120図 江戸時代遺構全体図





第 121 图 1 区江戸時代遺構全体図



第122図 2区江戸時代遺構全体図

## 第5節 江戸時代

### (1) 溝

1・2区の第2層ないしは第3a層上面で、多くの溝が検出されたが、これらは本来、近・現代作土の第1層でほとんど消失した第2層上面の遺構と考えられる。これらの溝と関連する第1層下面の耕作痕や、それより新しい第1層上面の畝状遺構も部分的に確認された。

調査期間の関係で、本層上面の遺構調査は最低限の記録を取るに留めることとし、遺構の全掘は行わなかった。

#### SD01～03 (第121・123・126図)

1区東端で検出された3～4mの間隔を開けて平行する南北溝である。北で東西溝SD04に接合している。接合部分の溝幅が狭くなっており、ここから南に水が流れたと推定される。幅1.4～2.6mで、検出面からの深さは0.4～0.6mである。いずれも最終的に灰白色から黄灰色の極細粒～細粒砂の水成層で埋没する点で共通している。これらは畝の畝間溝とみられ、その間の部分が耕作範囲であったと思われる。

SD02から陶器播鉢などが出土した他、他の溝からも陶器・磁器片が出土した。第126図の1はSD02から出土した須佐唐津焼の播鉢で、内面には12条1単位の播目がある。

#### SD04・09 (第121・123・124図)

1区のSD01～03北端と接合する東西溝で、東の2区SD12から西に始まるSD09から続き、西端で北に直角に曲がり、SD06に合流して終わる。幅1.0～1.7mであるが、1区北壁では幅4.0mに拡大しており、この部分は土坑状になっていたと思われる。検出面からの深さ0.1～0.25mで、1区北壁の部分では0.8mである。

SD04・09から染付磁器碗や陶器の細片が出土している。

#### SD05・06・08 (第121・123・126図)

1区西部で検出された溝である。幅0.5～0.9m、検出面からの深さは0.1～0.25mである。SD05はSD07に伴う落ち込みに接合して終わっており、SD06はSD04・07の北端部でこれらと接合して、それ以东は消失していた。位置関係からみて、2区SD11と一連の東西溝と思われる。SD08はSD06西端で北西に分流するように始まる溝で、幅1.0m、検出面からの深さ0.4mである。

SD05から磁器・陶器片が、SD06から瓦質小皿が、SD08からは陶器播鉢が出土した。

第126図2・3はSD05から出土したものである。2は伊万里焼の皿で、高台畳付は露胎となっており、砂が付着している。3は煙管の吸口で、内部には羅字の竹材が僅かに残る。

第126図4はSD06から出土した土師質土器の灯明皿で、底部外面には回転糸切りが施されている。また、口縁部外面には油脂が付着している。

第126図5はSD08から出土した陶器播鉢で、口縁部外面には2条の沈線が巡り、内面には8条1単位の播目がある。

#### SD07 (第121・124・126図)

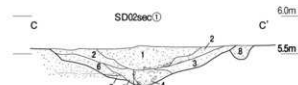
1区東部で検出された南北溝である。SD01～03の西に平行して位置しており、幅1.5～2.5m、検出面からの深さは0.4～0.5mである。規模からみても幹線の南北溝と思われ、SD04との合流付近



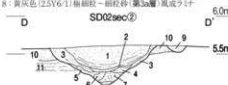
- 1: 灰黄色(25V6-2)無細粒-細粒砂,水成
- 2: 暗灰黄色(25Y5-2)シルト質無細粒-細粒砂
- 3: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 4: 暗灰黄色(25Y5-2)無細粒-細粒砂,シルト少量
- 5: 黄褐色(25Y5-2)シルト質無細粒-細粒砂
- 6: 灰白色(25Y7-1)無細粒-細粒砂(第3a層)風成クマテ面着,鉄硫化物



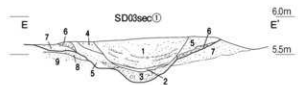
- 1: 灰白色(5Y7-1)無細粒-細粒砂,水成クマテ
- 2: 暗灰色(10YR5-1)シルト質無細粒-細粒砂,水成クマテ
- 3: 暗灰色(7.5YR5-1)シルト質無細粒-細粒砂,鉄硫化物
- 4: 黄灰色(25Y6-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 5: 暗灰色(5YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 6: 灰黄色(10YR5-2)シルト質無細粒-細粒砂
- 7: 土赤-黄褐色(10YR7-2)シルト質無細粒-細粒砂(第2層)鉄硫化物多い
- 8: 黄灰色(25Y6-1)無細粒-細粒砂(第3a層)風成クマテ



- 1: 黄灰色(25Y5-1)無細粒-細粒砂,最下部鉄硫化物沈着
- 2: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,鉄泥
- 3: 暗灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 4: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,黒褐色(10YR3-1)シルト木質片含む
- 5: 暗灰色(7.5YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 6: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,加工時堆積
- 7: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,加工時堆積
- 8: 黄灰色(25Y5-1)無細粒-細粒砂



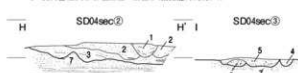
- 1: 暗灰色(10YR6-1)無細粒-細粒砂,水成有機物クマテ
- 2: 暗褐色(10YR3-1)粘土-シルト質粘上,上面鉄硫化物沈着
- 3: 暗灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 4: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,シルト多い
- 5: 灰色(5Y5-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 6: 暗褐色(25Y3-1)細粒砂質粘土
- 7: 黒褐色(25Y3-1)粘土,上面無細粒-細粒砂
- 8: 暗灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 9: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 10: 黄灰色(25Y5-1)無細粒-細粒砂(第2層)
- 11: 灰色(5Y4-1)無細粒-細粒砂(第3a層),風成クマテ



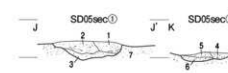
- 1: 暗灰色(10YR6-1)無細粒-細粒砂,水成有機物クマテ,鉄硫化物沈着
- 2: 暗灰色(5YR4-1)シルト質無細粒粘上,上面鉄硫化物
- 3: 暗灰色(10YR4-1)粘土-シルト質無細粒-細粒砂
- 4: 黒褐色(10YR3-2)シルト質無細粒-細粒砂,シルト多い
- 5: 黄灰色(25Y5-1)シルト質無細粒-細粒砂,シルト少ない
- 6: 暗灰色(10YR6-1)細粒砂
- 7: 暗灰色(10YR5-1)シルト質無細粒-細粒砂,鉄泥
- 8: 暗灰色(10YR6-1)無細粒-細粒砂(第2層)
- 9: 黄灰色(25Y6-1)無細粒-細粒砂(第3a層),風成クマテ



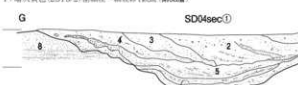
- 1: 黄灰色(25Y5-1)無細粒-細粒砂,水成有機物クマテ
- 2: 暗褐色(10YR3-1)粘土,上面鉄硫化物沈着
- 3: 暗灰色(10YR4-1)粘土-シルト質無細粒-細粒砂
- 4: 土赤-黄褐色(10YR5-4)シルト質無細粒-細粒砂,鉄硫化物沈着
- 5: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,鉄泥
- 6: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,鉄泥
- 7: 灰色(5Y5-1)シルト質無細粒-細粒砂,シルト少な(鉄泥入り(第2層))



- 1: 黒褐色(25Y3-2)シルト質無細粒-細粒砂,中粒砂少量含
- 2: 黄灰色(25Y5-1)シルト質無細粒-細粒砂,上部鉄泥多
- 3: 灰黄褐色(10YR4-2)シルト質無細粒-細粒砂,炭化物含
- 4: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 5: 灰色(5Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,水成クマテ
- 6: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 7: 暗灰黄色(25Y5-2)無細粒-細粒砂,鉄泥(第3a層)



- 1: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,中粒-極細粒砂含
- 2: 灰黄褐色(10YR4-2)シルト質無細粒-細粒砂,中粒砂-細粒砂少量含,鉄泥
- 3: 暗灰色(10YR5-1)シルト質無細粒-細粒砂,シルト少ない
- 4: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,粗粒砂少量含
- 5: 暗灰色(10YR5-1)シルト質無細粒-細粒砂,粗粒-極細粒砂少量含
- 6: 黄灰色(25Y5-1)シルト質無細粒-細粒砂,シルト少ない
- 7: 暗灰色(10YR5-1)無細粒-細粒砂(第3a層)



- 1: 暗褐色(5Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂
- 2: 灰色(7.5Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,水成(中粒-極細粒砂少量および炭化物含)
- 3: 暗灰黄色(25Y4-2)シルト質無細粒-細粒砂,シルト少量で中粒砂含
- 4: 黄灰色(25Y4-1)無細粒-細粒砂,中粒-極細粒砂少量含
- 5: 暗灰黄色(25Y5-2)シルト質無細粒-細粒砂,水成で中粒-粗粒砂少量含
- 6: 暗褐色(25Y3-1)細粒砂質粘土,粗粒砂クマテ含む
- 7: 黄灰色(25Y4-1)粘土-シルト質無細粒-細粒砂
- 8: 灰色(7.5Y5-1)無細粒-細粒砂(第3a層),風成クマテ

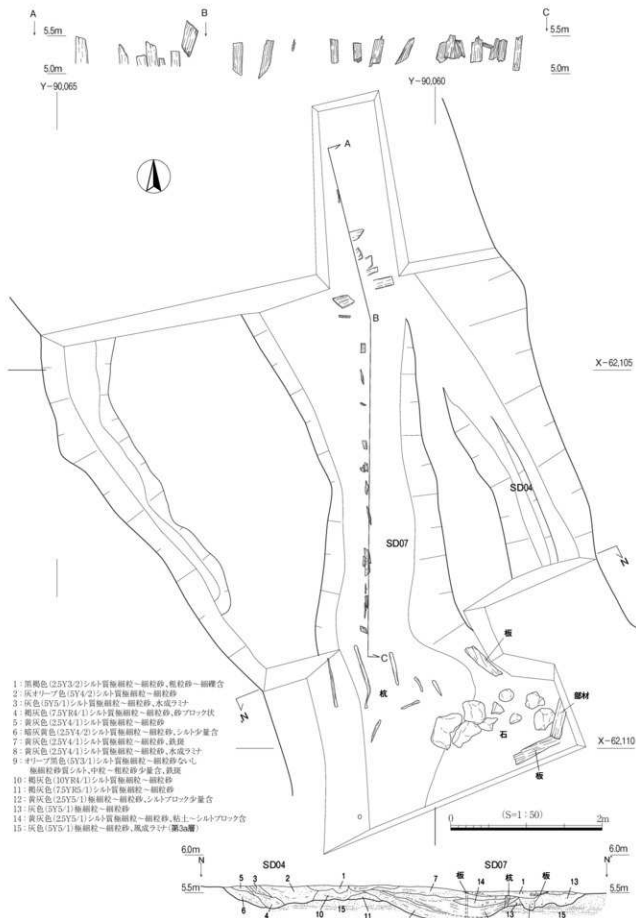


- 1: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,粗粒-極細粒砂少量含,鉄泥
- 2: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,粗粒砂少量含
- 3: 暗灰色(10YR5-1)シルト質無細粒-細粒砂,シルト少なで中粒-粗粒砂少量含
- 4: 暗灰色(10YR4-1)シルト質無細粒-細粒砂,粗粒砂少量含
- 5: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,シルト少ない
- 6: 暗灰色(10YR6-2)無細粒-細粒砂(第3a層)



- 1: 黒褐色(10YR3-1)シルト質無細粒-細粒砂,上部:粗粒砂-細粒
- 2: 黄灰色(25Y4-1)シルト質無細粒-細粒砂,炭泥-炭泥少量含
- 3: 黒褐色(25Y3-1)シルト質無細粒-細粒砂,粗粒-極細粒砂少量含
- 4: 灰色(5Y4-1)無細粒-細粒砂(第3a層),風成クマテ

第123図 1区溝断面図

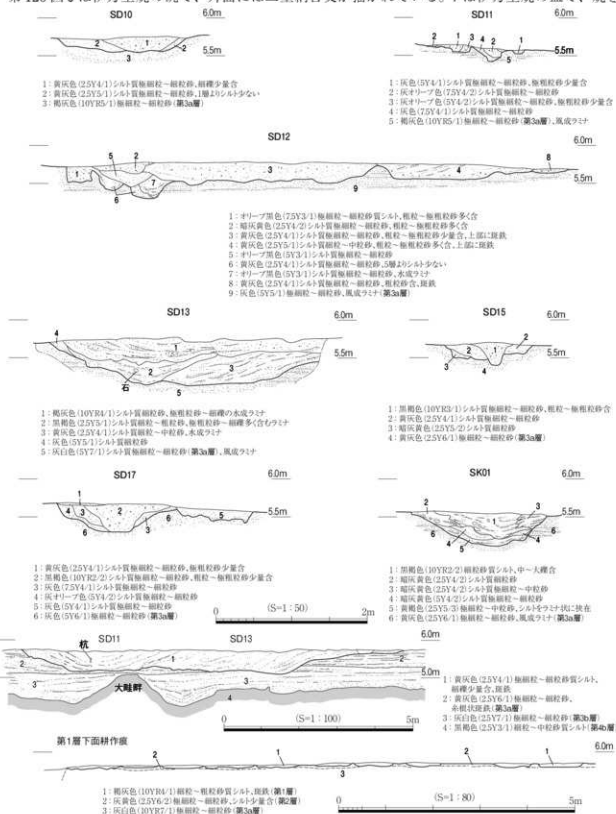


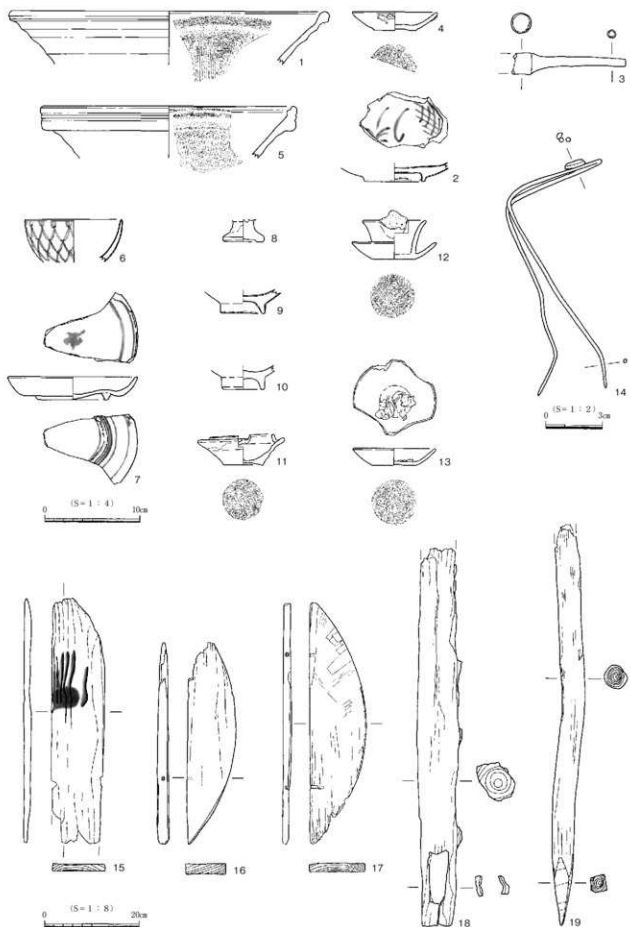
第124図 1区SD04・07平・断面図

で、溝に平行して板や桶底板を転用した土留めがなされており、その南側で直交する杭列を検出した。杭列付近には作業用とみられる粗雑な石敷きが検出され、この地点で簡易な水利管理がなされたと思われる。北端はSD06に接合して終わる。

染付磁器碗・皿・仏飯具、陶器碗や土師質土器などが出土した。

第126図6は伊万里焼の碗で、外面には二重網目文が描かれている。7は伊万里焼の皿で、焼き





第126图 1区SD02·05~08出土遗物  
 (1: SD02, 2·3: SD05, 4: SD06, 5: SD08, 6~19: SD07)

歪みにより底部が下方へ垂下している。また、外面には5条の圏線、内面には2条の圏線が描かれ、見込みにはコンニャク印判がある。8は伊万里焼の仏飯器の脚部である。

9・10は京焼系の碗で、9の内外面には貫入が見られる。11は陶器の灯明皿で、体部から底部にかけて露胎となっており、底部外面には回転糸切りが施されている。また、立上がり部には注口がある。12・13は土師質土器の灯明皿で、いずれも底部外面には回転糸切りが施されている。12は油溜めがあるもので、底部内面から注口かけて油脂が厚く付着し、さらにその上に砂が付着している。13の底部内面には油脂が付着している。

14は銅製の二本軸の簞で、頭部には飾りの一部と考えられる楕円筒状の付着物がある。

15～19は木製品で、いずれもSD07の護岸として用いられたものである。15～17は桶の蓋板あるいは底板で、16・17は2ヶ所に目釘穴があり、15には炭化した部分がある。18はほぞ穴のある建築材、19は先端を加工して尖らせた杭である。

#### SD10 (第122・125・127図)

2区南部で検出された東西溝である。SD09と平行してSD12から西に始まるが、1区ではその続きは検出できなかった。幅1.6m、検出面からの深さ0.2mである。

陶器の碗・鉢や染付磁器片が出土している。1は京焼系の碗で、内外面には貫入が見られ、高台畳付には砂が付着している。2は佐佐見産の陶器皿で、見込みには蛇の目釉刺しが施されている。

#### SD11 (第122・125図)

2区南部から中央部にかけて検出された東西溝である。SD09・10と平行しており、西ではSD06に連続し、東端はSD13に接続すると思われる。西側では幅1.0m、検出面からの深さ0.2mと小規模で平行するSD14は一連の耕作痕とみられる。SD13と接合する東端では幅2.5m、検出面からの深さ0.5mで、埋土は明瞭な水成層となっている。SD13との切り合いは認められなかったが、SD11の部分が最終的に埋まったことが地層観察からうかがえる。

陶器碗・染付磁器碗などが少量出土している。

#### SD12 (第122・125図)

2区南部のSD09・10の東端に接合する南北溝で、北端はSD11と接続して終わる。幅は6.2mと広いが、西端1.3mほどが深く0.5mを測る。この東側は幅3.0mと2.0m、深さ0.2～0.3mの浅い溝が並んだ状態である。

陶器播鉢や染付磁器碗などが出土している。

#### SD13 (第122・125・127図)

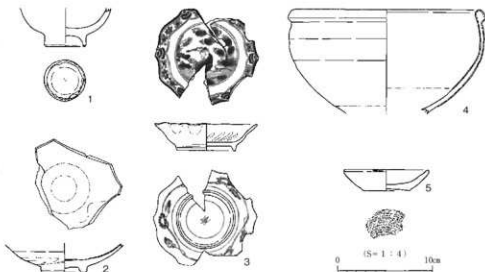
2区西部から東部にかけて検出された、正方位に近い東西溝である。SD11と接続する東端部のみを掘削した。この溝からは平行する南北溝SD15・17が北に延びている。また、この溝の位置は第4b層上面の東西大畦畔と一致しており、大畦畔の最上部の一部がこの溝の掘削により破壊されていた。大畦畔による土地区画がこの溝に継承されていた可能性がある。SD11との間で多くの杭が打たれており、護岸や水利管理が行われたと思われる。

出土遺物には、染付磁器皿・肥前系陶器鉢のほか、漆碗とみられる木片がある。3は伊万里焼の型付皿で、外面には体部に花唐草文、底部に三重圏線、高台内に一重圏線と虫文のような文様が描かれている。内面には口縁端部に口紅装飾、体部に斜めの竖筋文が施され、口縁部に宝珠文と花文、見込みに二重圏線・人物・植物が描かれている。



4は石見焼の捏鉢あるいは片口で、内外面に貫入が見られる。SD15・17（第122・127図）

2区北部で検出された南北溝で、SD13から発し、約10mの間隔を開けて北に直線的に延びる。SD15は幅1.2m、検出面からの深さは0.3m



第127図 2区SD10・13・15出土遺物  
(1・2:SD10, 3・4:SD13, 5:SD15)

で、東西溝SD16が接合している。SD17は幅2.6mで、東側1.6mほどが深くっており、0.4mを測る。両溝とも掘り直されていると思われる。

両溝の間の部分には第1層下面の耕作痕跡があり、その時期まで溝が機能していたと思われる。

SD15からは土師質土器の灯明皿5が出土した。底部外面には回転糸切りが施され、口縁端部にタール状の煤が付着している。このほか染付磁器や陶器挿鉢の細片が出土している。SD17からは磁器碗片がある。

## (2) 土坑

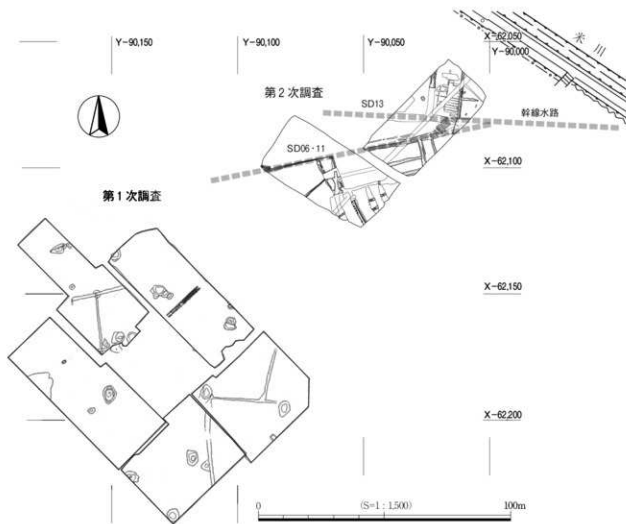
### SK01 (第122・125図)

2区SD17の西側で検出された。平面形は1.8m×1.4mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.4mである。埋土は全体的に水成相を呈しており、野井戸であった可能性がある。出土遺物は磁器細片があるのみである。

## (3) 小結 (第128図)

今回の調査では、第1次調査で多く確認されていた野井戸が、小規模だが可能性のあるSK01以外には確認されなかった。しかし、農業用と思われる多くの直線的な溝が検出され、このうちSD11・13は幹線の灌漑水路で、SD07はSD11からの支線水路と考えられる。それ以外の溝は耕作範囲を囲う畝間溝と考えられ、幹線水路から支線水路・畝間溝に給水していく灌漑システムを想定できる。ただ、SD11・13接続付近では一定の水量を想定させる水成堆積が見られたが、SD11の延長部や支線水路では溝が小規模となり、それほど顕著な水成堆積は見られないことから、水田の灌漑水路とは様相を異にしている。

幹線水路の水源は、1714（正徳4）年に第1期の戸上から浜橋まで完成した米川用水（國田俊雄2004）と推定され、これらの溝群はそれ以後に構築されたものであろう。ここで想定した灌漑システムは、米川用水に依存した、早害防止の補給水灌漑を目的とした労力節約型の「畦間灌漑」であったと考えられる。一方、第1次調査では、数本の溝とともに野井戸が多く検出されており、畿内の河内木綿の栽培で見られる用水節約型の「散水灌漑」も行われた可能性が高い（註1）。



第128図 第1・2次調査の江戸時代遺構全体図

この灌漑システムの違いは、栽培作物の違いが考えられる他、灌漑水路の下流部では早魃時の水不足がより深刻となり、野井戸からの担送による灌漑が必要となったことも要因として考えられる。

栽培作物としては綿が第一にあげられる。明治時代前期における実綿の生産高では、伯耆は全国で河内・摂津・安芸に次いで4番目に多い(中島峰広 1990)。また、近世における当地周辺は会見郡勝田庄に属しており、1737(元文2)年編纂とされる『伯州村分帳』によれば、米子町・倉吉町を除く伯耆国の郷(庄)で、勝田庄は戸数では最多、村数も2番目に多いという(白石太良 1972)。米子町の近郊農業地帯として、都市に供給する新鮮な農産物や、綿作を中心とした商品作物の生産がさかに行われたことが推察される。

(京嶋)

註

(1) 中島峰広氏の近世畑地灌漑の研究(中島峰広 1990)を参考にした。

参考・引用文献

- ・ 國田俊雄 2004、「新田開発と農業の発達」：『新修米子市史』第2巻通史編近世、pp.233-280
- ・ 白石太良 1972、「近世伯耆国における「郷」・「庄」と「備」に関する研究ノート」：『兵庫地理』第16号、pp.24-43
- ・ 中島峰広 1990、「近世農書」にみられる畑地灌漑：『歴史地理学』第149号、pp.3-23

## 第V章 古環境復元と人間活動

### 第1節 博労町遺跡の砂の特徴

島根大学総合理工学部地球科学科 酒井哲也

#### (1) はじめに

ここでは、第7層とされた砂層と第3層から採取した砂の鉱物組成の比較を行なった。第7層は細礫を含む、極粗粒から中粒砂から構成される。しかし、この層は塊状で、特に堆積構造などは見られない。上位に重なる黒褐色のシルト質砂層（いわゆるクロスナ層）との境界は場所によって不規則な形を示し、さらに第7層の砂が上位層に入り込む部分や碎屑性のダイクも観察された。これは、第7層が地震などの振動により液化化が発生し、その一部が流動化して上位層に貫入したことによると判断される。このため、第7層の堆積場を現場で復元することは困難であった。よって、何らかの別の方法で、その堆積場を推定する必要がある。ここでは、砂の鉱物組成に基づき、第7層の堆積場の復元を試みた。また、第3層と第7層の鉱物組成を決定した要因についても考察を行なった。

#### (2) 方法

ここでは簡易法による砂の鉱物鑑定を行なった（野尻湖火山灰グループ2001）。砂試料を実体顕微鏡下で観察を行い、石英、長石のほか、火山岩粒子（流紋岩・デーサイト・安山岩）、有色鉱物粒子（磁鉄鉱・黒雲母・輝石・角閃石など）、そして鏡下で鉱物の鑑定ができなかった不明粒子に区分した。第7層（3試料）と第3層（9試料）の砂層を対象として観察を行なった。第3層の砂はこの報告書内ですでに解釈されているように、風成砂であると解釈され、それは細粒砂を主体とした、淘汰の良い砂からなる。粒径のバイアスを取り除くため、観察は中粒砂、細粒砂サイズの粒子に限定して行なった。ここでは特に、砂試料を固定して観察は行っていないため、鉱物鑑定の際には、顕微鏡の視野に30粒子程度がはいるようにして、すべての中粒・細粒砂の鑑定を行なった。鑑定を行なった粒子数は200粒子程度となるようにした。

鑑定した結果は、石英、長石、岩片（石英・長石以外の粒子）を各端成分に取った一般的な三角図にプロットを行なったほか、堆積物の供給源の違いを示すために、石英+長石粒子、火山岩粒子、その他の岩片を端成分に取った三角図を作成した。なお、この三角図の作成に際し、顕微鏡下で判別のできなかった粒子は、石英粒子でも長石粒子でもないことから、「岩片粒子」と扱い、プロットを行なった。

第6表 鉱物組成の分析結果

	石英	長石	火山岩	有色鉱物	不明	合計	
1	14	68	98	21	6	207	第7層
2	9	46	153	3	5	216	
3	9	67	112	4	18	210	
4	42	74	100	24	8	248	第3層
5	19	77	63	31	13	203	
6	24	42	74	47	1	188	
7	27	75	86	23	1	212	
8	11	58	78	42	5	192	
9	8	70	57	79	9	223	
10	13	66	73	50	15	217	
11	21	70	79	25	12	207	
12	16	90	70	37	7	220	

#### (3) 結果

##### i) 第7層の結果

第7層については、3試料の分析を行なった。鑑定の結果は、表6に示す。第7層の粒子には、火山岩由来の粒子と鑑定された粒子

が全体的に卓越していた。この砂は石質アレナイトのカテゴリーに区分される（第129図）。

#### ii) 第3層の結果

第3層については、9試料の分析を行なった。鑑定の結果、火山岩粒子の割合がやや減少し、長石粒子の割合が増加した結果となった（表6）。この砂も石質アレナイトのカテゴリーに区分される。

### (4) 考察

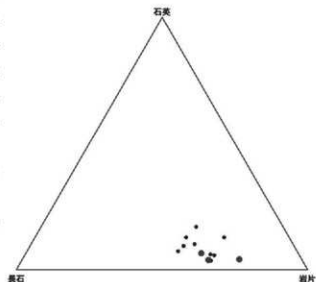
#### i) 第7層の堆積環境

第7層を構成する砂層は礫を含み、第3層よりも粗粒で淘汰も悪い。この特徴からは、河川流路堆積物である可能性が示される。河川流路堆積物の認定には、通常、堆積構造の観察がよく用いられる。しかし、この砂層の一部が、上位のクロスナに貫入する構造が見られることから、堆積後に液状化を被った可能性が高い。よって、何か別の方法で、その堆積環境を決定する必要がある。

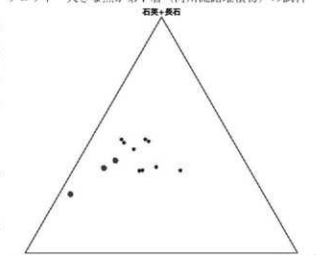
地図上では、この場所に移動して行くことが可能な河川として、加茂川ないし、周辺の丘陵地に由来する小河川が考えられる。加茂川の流域ないし周辺の丘陵には太田（1962）により、中新統である玉造累層米子凝灰岩（流紋岩質凝灰岩や火山礫凝灰岩）、吉佐火山碎屑岩（流紋岩質溶岩、火山角礫岩、火山礫凝灰岩）、法勝寺流紋岩と命名された岩石が分布する（注：この地域では現在、中海岸域で一般的に用いられている地層区分が適用されていない。これらは、大田市から安来市にかけて分布する中新統川合層、久利層（鹿野ほか1994など）に相当すると思われる）。よって、これらの地域からもたらされる砂は流紋岩溶岩や火砕岩の分布域を主な起源とするため、流紋岩粒子や、流紋岩に斑晶として含まれる、石英や長石が砂粒子の主体となることが予想される。実際に、第7層の砂粒子の主体は流紋岩粒子を含む、火山岩粒子、長石が主体であることから、加茂川ないし、博労町周辺の丘陵地に起源を持つ小河川によりもたらされた砂であることと矛盾しない。第7層の標高を踏まえると、より低い位置を流れる加茂川によりこの砂層がもたらされたと解釈するには少し無理がある。第7層は周辺の丘陵地に源流を持つ、小河川が残した地層と解釈するのが最も妥当である。

#### ii) 第3層と第7層の鉱物組成の違い

本来であれば、統計的な処理を行う必要があ



第129図 石英、長石、岩片（石英、長石以外の粒子）を端成分に取った三角ダイアグラムへの鉱物組成分析結果のプロット 大きな点が第7層（河川流路堆積物）の試料



第130図 石英と長石、火山岩片、その他の岩片を端成分に取った三角ダイアグラムへの鉱物組成分析結果のプロット 大きな点が第7層（河川流路堆積物）の試料



粒子や、それに由来する石英や長石粒子が卓越することが示されている。しかし、より古い時代に堆積したとされる、平野のより西側の中浜や内浜の砂では、火山岩粒子が卓越する傾向にある。ただし、花崗岩に由来すると推定される石英や長石も30~50%程度含まれる(貞方1991)。外浜と中浜・内浜との砂の鉱物組成の違いは、たたら製鉄による花崗岩分布域からの土砂流出の増加によるものと推定される。

博労町遺跡は中浜や内浜に隣接する場に位置する。よって、そこに運ばれた風成砂には、デザートや花崗岩起源の石英や長石が運搬されることが期待される。第3層で石英・長石粒子の割合が増えたことは、花崗岩由来の堆積物の混合を示唆するものである。海成ないし風による運搬に伴い、より弱い粒子である火山岩粒子が失われることも、風成砂において石英や長石粒子が増えることの原因になりうる(Noda 2005)。この評価をより確実にするためには、組成データに関係する統計的な処理を適用する必要がある(例えば、太田・新井2006)。

## (5) まとめ

第3層と第7層の砂の鉱物組成の分析を行なった。その結果、第7層では火山岩の粒子の割合が高く、第3層のものでは、それに比べて石英と長石の割合が増える結果となった。この結果から、第7層は、河川環境の堆積物であると推定された。これはあくまで組成データであることから、統計的な処理が必要ではあるが、第3層と第7層の砂の鉱物組成の違いは、供給源の違い、堆積物の運搬経路の違いを反映するものと解釈される。

## 引用・参考文献

- ・太田亨・新井宏嘉 2006 「組成データ解析の問題点とその解決法」『地質学雑誌』112, pp.173-187
- ・太田良平 1962 『5 萬分の1地質図幅説明書「米子」』工業技術院地質調査所, p. 29
- ・鹿野和彦・山内増喜・高安克巳・松浦浩久・豊遙秋 1994, 「松江地域の地質」『地域地質研究報告書 (5 萬分の1地質図幅)』地質調査所, p.126
- ・貞方昇 1991 「弓が浜半島「外浜」浜堤群の形成における鉄穴流の影響」『地理学評論』第64巻第11号, pp.759-778
- ・野尻湖火山灰グループ2001, 「新版 火山灰分析の手引き 双眼実体顕微鏡による火山灰の砂粒分析法」地学ハンドブックシリーズ14, 地学団体研究会編, p.56
- ・Noda, A., 2005, Texture and petrology of modern river, beach and shelf sands in a volcanic back-arc setting, northeastern Japan. *Island Arc*, 14, 687-707.
- ・Refaat, A.A. and Hamdan, M.A., 2015, Mineralogy and grain morphology of the aeolian dune sand of Toshka area, southeastern Western Desert, Egypt. *Aeolian Research*, 17, 243-254.

## 第2節 古環境分析

文化財調査コンサルタント株式会社 渡邊正巳

### (1) 分析試料と分析方法

分析試料は、一般財団法人米子市文化財団と協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。第7表に分析試料一覧、調査区平面図（第132図）中に、試料採取地点を示す。なお本節中の畠2～5は、第IV章第4節で報告した畠102～105を指している。

#### i) 試料採取層準

##### SD101（水路跡）地点

SD101地点断面図（第133図）中に、試料採取位置を示す。①～⑦で7試料を採取し、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。

##### 畠2地点畦畔

畠2地点（1区）畦畔（畝・畝間）地点の模式柱状図を第134図左上に示す。■で示した最上位の試料を対象に花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を実施した。

第7表 分析試料一覧表

地点名		試料 No.	層名	分析項目				
				花粉分析	植物珪酸体分析	種実同定	総物分析	
1区	SD101 水路跡	1	1層	○	○	-	-	
		2	3層	○	○	-	-	
		3	4層	○	○	-	-	
		4	5層	○	○	-	-	
		5	6層	○	○	-	-	
		6	7層	○	○	-	-	
		7	9層	○	○	-	-	
	畠2	軟	1	第4層	○	○	○	-
		軟間	1	第4層	○	○	○	-
	畠3	軟	1	第4a層	○	○	○	-
		軟間	1	第4a層	○	○	○	-
	畠4	軟	1	第4層	○	○	○	-
			2		○	-	-	-
			3		○	-	-	-
			4		○	-	-	-
			5	○	-	-	-	
			6	第5層	○	-	-	-
			7	○	-	-	-	
			8	第6層	○	-	-	-
		軟間	1	第4層	○	○	○	-
			2	第5層	○	-	-	-
3	第6層		○	-	-	-		
2区	畠5	軟	1	第4層	○	○	○	-
		軟間	1	第4層	○	○	○	-
	総物分析採取地点	1	-	-	-	-	○	
合計				24	15	8	1	

種実同定のためパイロットとして島2地点畦試料での洗い出しを行った。この結果検出数が少なかったために、下位の試料No.2（4層上）試料も種実同定の対象とした（総量1.3kg）。

### 島3地点畦畔

島3地点（1区）畦畔（畝・畝間）地点の模式柱状図を第134図右上に示す。

■で示した最上位の試料を対象に花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を実施した。

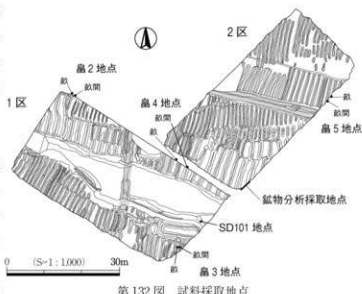
### 島4地点畦畔

島4地点（1区）畦畔（畝・畝間）地点

の模式柱状図を第134図右下に示す。全試料で花粉分析を実施したほか、■で示した最上位の試料を対象に植物珪酸体分析、種実同定を実施した。

### 島5地点畦畔

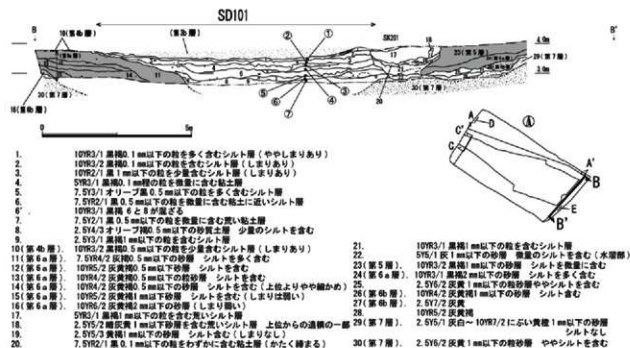
島5地点（2区）畦畔（畝・畝間）地点の模式柱状図を第134図右下に示す。■で示した最上位の試料を対象に花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定を実施した。



第132図 試料採取地点

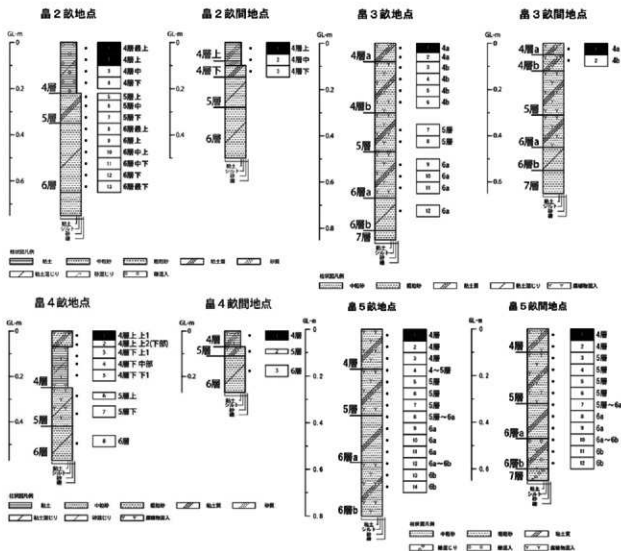
### 植物分析試料採取地点

植物分析試料は第6a層を対象として、トマック NS-10 を利用して面的に剥ぎ取ったほか、瞬間接着剤で周囲を硬化させて採取した。断面図（第135図右）中、濃灰色の部分、トマック NS-10 を利用して面的に剥ぎ取ったおおよその範囲、灰色の部分、第135図写真で示した瞬間接着剤で周囲を硬化させて採取したおおよその範囲である。また、状況写真（第135図左）中、白枠内がトマック NS-10 を利用して面的に剥ぎ取ったおおよその範囲、窪みが瞬間接着剤で周囲を硬化させて採取



第133図 SD101 地点断面図（花粉・植物珪酸体試料採取位置）





第134図 高2～5地点(畝・畝間地点)模式図柱状図(試料採取層序)

した位置である。

## ii) 花粉分析方法

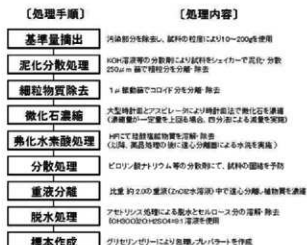
渡辺(2010)に従って実施した(分析処理フローを第136図に示す)。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞



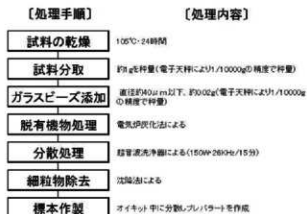
- 1: 斑状礫土(第0層)
- 2: 黒褐色(2.5Y3/2) 細粒砂質シルト、極細粒砂～細粒砂多く含、斑鉄(第1層)
- 3: 黄灰色(2.5Y4/1) 極細粒～細粒砂質シルト～シルト質極細粒～細粒砂、細粒少量含、斑鉄(第2層)
- 4: 黄灰色(2.5Y7/1)～灰白色(10YR6/1) 極細粒～細粒砂、風成平行ラミナ、糸繭状斑鉄(第3a層)
- 5: 灰白色(2.5Y7/1)～灰白色(5Y7/1) 極細粒～細粒砂、風成斜交ラミナ(第3b層)
- 6: 黒褐色(5YR2/1) シルト質中粒～細粒砂、細～中礫含(第4層)
- 7: 黒褐色(5YR3/1) シルト質中粒～極細粒砂、細～中礫含(第5層)
- 8: 黒色(10YR2/1) シルト質中粒～極細粒砂、細～中礫含(第6層)
- 9: オリーブ黒色(5Y2/2) シルト質極細～極細粒砂、細礫含(第6b層)
- 10: 褐灰色(10YR5/1) 中粒～粗粒砂(第7b層)

第135図 試料採取状況および鉍物分析試料採取地点断面図

子化石の同定も行った。また中村(1974)に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科(40ミクロン以上)と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科(40ミクロン未満)に細分した。



第 136 図 花粉分析処理フロー



第 137 図 植物珪酸体分析処理フロー

### iii) 植物珪酸体分析方法

藤原 (1976) のグラスビーズ法に従って実施した (分析処理フローを第 137 図に示す)。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じて 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群 (第 8 表) を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスビーズの個数が 300 を超えるまで計数を行った。

### iv) 種実同定方法

#### 処理方法

湿润重量で 100g 程度の試料を 0.25mm 目の篩で水洗し細粒物を除去する。

肉眼あるいは実体顕微鏡を用い、残渣 (0.25mm 以上の粒径もの) より同定可能な植物遺体を選別する。今回の分析では種実の含有量の極めて少ない試料が多かったことから、各試料 400g 以上の処理を行った。特にパイロットとして実施した畠 2 畝 4 層では、最上部 (試料 No.1) 500g、上部 (試料 No.2) 800g の処理を行っている。

#### 同定・計数

肉眼及び実体顕微鏡にて、現生標本および図鑑

第 8 表 同定・検鏡対象分類群 (同定分類群と推定母植物の関係)

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物		
栽培植物との対応が明らかな分類群	1	イネ	イネ		
	3	3	イネ籾殻 (籾の表皮細胞)	イネ	
		21	ムギ類 (籾の表皮細胞)	コムギ・オオムギ	
		41	オヒシバ属 (シコクビエ型)	シコクビエ	
	61	キビ属型	ヒエ・アワ・キビ		
	62	キビ属型	キビ		
	64	ヒエ属型	ヒエ		
	66	エノコログサ属型	アワ		
	84	ウシクサ属 B	サトウキビ		
	91	モロコシ属型	モロコシ		
	93	ジユズダマ属型	ハトムギ		
	母植物との対応が明らかな分類群	4	11	サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・アシカキ
			13	マコモ属	マコモ
31		ヨシ属	ヨシ		
33		ダンチク属	ダンチク		
35		スマガヤ属型	スマガヤ		
51		シバ属型	シバ属		
71		トダシバ属	トダシバ属		
81		ススキ属型	ススキ属		
83		ウシクサ属 A	チガヤ属など		
201		メダケ節型	メダケ節		
203		ネザサ節型	ネザサ節		
205		チマキザサ節型	チマキザサ節・チシマザサ節		
207		ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節		
209		マダケ属型	マダケ属		
350		カヤツリグサ科 (スゲ属など)	スゲ属		
390		シダ類	シダ類		
501		ブナ科 (シイ属)	シイ類		
503		ブナ科 (アカガシ亜属)	カシ類		
510		クスノキ科	バリバリノキなど (クスノキ以外)		
520		マンサク科 (イスノキ属)	イスノキ属		
530	アワブキ科	アワブキ科			
540	モクレン属型	モクレン属			
570	マツ科型	マツ科			
580	マツ属型	マツ属			

類との対比により同定し同時に計数を行う。試料ごとに、分類群別、部位別に計数し、同定・計数結果を表形式にまとめる。

#### 標本作製

同定後の試料を、調査地点毎に分類群別にガラス瓶に入れ、60% エタノールにて液浸標本とする。(処理により試料が脆くなり、写真撮影後に破損した試料があった。)

#### v) 鉱物分析方法

オレンジ色を呈した粒子の鉱物学的記載及び鑑定を行うために、以下の手順で薄片を作成した。

1: 試料を乾燥後、真空浸透法によりレジンに浸透させ、強化処理を行う。

2: 24×30mm程度未満の大きさに調整し、(スライドガラス: 28×48mmへの) 貼付面をカーボランダムにより研磨する。

3: 乾燥後、レーキサイドセメント(あるいは接着剤)を用いて、スライドガラスに貼付ける。

4: 鉱物切断機による二次切断の後、カーボランダムにより研磨する。

5: 乾燥後、カナダバルサムを用いてカバーガラスを貼付ける(場合によって、マニキュアを塗布)。

6: 薄片の観察には、偏光顕微鏡を利用する。

薄片作成が困難を極めたことから、確認のために別途オレンジ色粒子を削り取り、ペトロポキシで固定した薄片を作成した。

## (2) 花粉分析

### i) 花粉化石の含有状況

24 試料の花粉分析を行った結果、全ての試料から統計処理に十分な量の花粉・胞子化石が検出された。

### ii) 検出された花粉化石の種類

検出された花粉化石は第9・10表に示す74種類であった。このほか、9種類(形態分類群を除く)の胞子化石を検出した。これらのうち、花粉組成を特徴付ける種類は以下に示すようなものであった。

#### ① 卓越木本花粉

マツ属(複雑管東亜属)、スギ属

#### ② 卓越草本・藤本花粉・胞子(栽培種及び栽培の可能性のあるものを含まない)

イネ科(40ミクロン未満)、カヤツリグサ科、アリノトウグサ科、ヨモギ属

#### ③ 栽培種花粉(栽培の可能性のあるものを含む)

イネ科(40ミクロン以上)、ソバ属、アズキ属・ササゲ属

### iii) イネ科の細分について

イネ科花粉を粒径から、40ミクロン以上と40ミクロン未満に区分した。

稲作が行われる前の自然堆積物では、イネ科(40ミクロン未満)花粉が高率となることはあるが、イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることはほとんどない。これに対し、稲作が広範に行われたと考えられる弥生時代以降においては、自然堆積物でもイネ科(40ミクロン以上)花粉が高率となることが多くなる。更に稲作遺構での分析結果では、ほとんどの場合イネ科(40ミクロン以上)花粉が高率で検出される。

一方、第138図に示すように、イネ科(40ミクロン以上)花粉にはイネ属(*Oryza*)を含んでいるが、

すべてがイネ属であるわけではない。

これらの状況証拠と事実から、弥生時代以降に高率で検出されるイネ科（40ミクロン以上）花粉について、すべてがイネ属に由来するわけではないが、その多くはイネ属に由来すると推測される。

#### iv) 分析結果

分析結果を第139～142図の花粉ダイアグラム、第9・10表の花粉組成表に示す。花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム]として分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム]として分類群ごとに含有量（湿潤試料1g中の粒数）を算出し、変化を示している。

#### v) 花粉群集の特徴

以下に、花粉化石群集の変遷を地点毎に記載する。また、花粉化石群集の変遷が明確になる様、時間軸に沿って下位から上位に向かって記載を行った。

#### SD101 地点

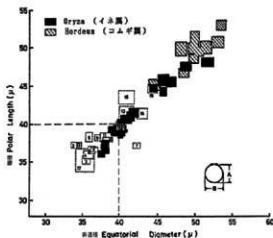
試料No.7では草本・藤本花粉が54%と多く、木本花粉が31%に止まる。木本花粉ではマツ属（複雑管束亜属）が29%を占め、スギ属が21%、アカガシ亜属が15%、コナラ亜属が7%と続く。草本・藤本花粉ではヨモギ属が64%と高率を示すほか、オモダカ属が33%を示す。

試料No.6・5では草本・藤本花粉が46%程度と下位に比べやや減少し、木本花粉が増加する。木本花粉ではスギ属が34～40%と増加傾向を示し、マツ属（複雑管束亜属）が24～16%と減少傾向を示す。このほかアカガシ亜属が13%程度、コナラ亜属が11%程度とその他の種類に比べやや高い出現率を示す。草本・藤本花粉ではヨモギ属が40～53%と高率を示すほか、イネ科（40ミクロン未満）が20%程度、イネ科（40ミクロン以上）が16%程度を示す。

試料No.4～2では草本・藤本花粉が58%程度と下位に比べやや増加するが、木本花粉は38%と変化が乏しい。木本花粉ではスギ属が一旦減少した後、20～30%と増加傾向を示す。一方、マツ属（複雑管束亜属）は一旦増加した後、30～19%と減少傾向を示す。このほかアカガシ亜属が18%程度、コナラ亜属が13%程度とその他の種類に比べやや高い出現率を示す。草本・藤本花粉ではヨモギ属が70%程度と高率を示すほか、イネ科（40ミクロン未満）が30%程度、イネ科（40ミクロン以上）が13%程度、カヤツリグサ科が25%程度を示す。また、僅かであるがアズキ属・ササゲ属が検出される。

試料No.1では草本・藤本花粉が64%程度と更に増加し、木本花粉は28%と減少する。木本花粉ではスギ属が35%、マツ属（複雑管束亜属）が19%、アカガシ亜属が14%、コナラ亜属が9%と続く。草本・藤本花粉ではヨモギ属が60%と高率を示すほか、イネ科（40ミクロン未満）が51%程度、イネ科（40ミクロン以上）が17%、カヤツリグサ科が35%を示す。

#### 畠4畝地点



- 【図中のイネ・コムギ以外のイネ科】
1. *Zizania latifolia* (マツコ)
  2. *Ischaemum eriostachya* var. *aequalis* (マツコ)
  3. *Tripsitum sibiricum* (オモダカ)
  4. *Arthraxon hispidum* (コナラ)
  5. *Distachya odorata* (メヒシバ)
  6. *Echinochloa crusgalli* subsp. *indica*
  7. *Polypogon monspeliensis* (オモダカ)
  8. *Phalaris arundinacea* (オモダカ)
  9. *Syntherisma stipitatum* (オモダカ)
  10. *Echinochloa crusgalli* var. *indica*
  11. *Allopecurus aegaeoides* var. *aequalis* (オモダカ)
  12. *Echinochloa crusgalli*
  13. *Pennisetum thibetanicum*
  14. *Allopecurus japonicus*
  15. *Echinochloa crusgalli* var. *erectoides*
  16. *Allopecurus aegaeoides* var. *aequalis* (オモダカ)
  17. *Pharusia communis* (マツ)

第138図 イネ科花粉の粒径比較図 (中村 1974)

試料No.8では草本・藤本花粉が69%と多く、木本花粉が21%に止まる。木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)が39%を占め、スギ属が26%、アカガシ亜属が9%と続く。草本・藤本花粉ではヨモギ属が151%と高率を示すほか、イネ科(40ミクロン未満)が88%、カヤツリグサ科が38%、イネ科(40ミクロン以上)が13%、アリノトウグサ科が11%を示す。また、僅かであるがアズキ属-ササゲ属が検出される。

試料No.7-5では草本・藤本花粉が73-60%と減少傾向を示し、木本花粉が16-26%と増加する。木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)が50-41%と減少傾向を示し、スギ属が8-26%と増加傾向を示す。このほかアカガシ亜属、コナラ亜属がその他の種類に比べやや高い出現率を示す。草本・藤本花粉ではヨモギ属が180-90%程度と高率ではあるが減少傾向を示す。同様にイネ科(40ミクロン未満)も、100-30%程度と高率ではあるが減少傾向を示す。このほか、アリノトウグサ科が14%程度、イネ科(40ミクロン以上)が10%程度、カヤツリグサ科が8%程度を示す。また、僅かであるがソバ属、アズキ属-ササゲ属が断続的に検出される。

試料No.4・3では草本・藤本花粉が62-67%と微増し、木本花粉が29-25%と微減する。木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)が37-35%と微減し、スギ属が20-25%と微増する。このほかアカガシ亜属、コナラ亜属がその他の種類に比べやや高い出現率を示す。草本・藤本花粉ではヨモギ属が62-87%と増加傾向を示すほか、イネ科(40ミクロン未満)も39-52%と増加傾向を示す。また、アリノトウグサ科が67%程度を示し、イネ科(40ミクロン以上)、カヤツリグサ科がその他の種類に比べ高い出現率を示す。また、僅かであるがソバ属が検出され、アズキ属-ササゲ属も断続的に検出される。

試料No.2・1では草本・藤本花粉が62%程度、木本花粉が23%程度を示す。木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)が40%程度、スギ属30%程度の出現率を示す。このほかアカガシ亜属がその他の種類に比べやや高い出現率を示す。草本・藤本花粉ではヨモギ属が99-111%と増加傾向を示し、イネ科(40ミクロン未満)が50-39%、アリノトウグサ科が30-15%、イネ科(40ミクロン以上)が14-9%、カヤツリグサ科が10-6%と減少傾向を示す。また、僅かであるが試料No.2でソバ属、アズキ属-ササゲ属が検出される。

#### 島4 畝間地点

試料No.3では草本・藤本花粉が63%を占め、木本花粉が19%に止まる。木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)が43%を占めるほか、スギ属が17%、アカガシ亜属が10%、コウヤマキ属、コナラ亜属が9%と続く。草本・藤本花粉ではヨモギ属が203%と極めて高率を示すほか、イネ科(40ミクロン未満)も66%と高率を示す。このほか、イネ科(40ミクロン以上)が13%、アリノトウグサ科が12%、カヤツリグサ科が9%とその他の種類に比べやや高い出現率を示す。また、僅かであるがアズキ属-ササゲ属も断続的に検出される。

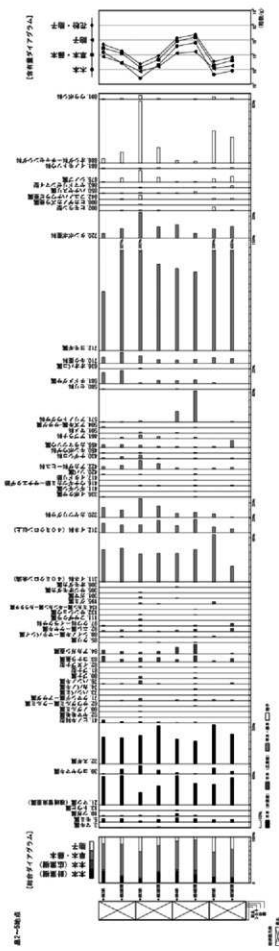
試料No.2では草本・藤本花粉が66%と下位と同定の高率を示す。一方、木本花粉は24%と下位に比べ増加する。木本花粉ではマツ属(複維管束亜属)が38%を占めるほか、スギ属が25%、アカガシ亜属が11%と続く。草本・藤本花粉ではヨモギ属が128%と極めて高率を示すほか、イネ科(40ミクロン未満)も66%と高率を示す。このほか、イネ科(40ミクロン以上)が21%、カヤツリグサ科が19%、アリノトウグサ科が15%とその他の種類に比べやや高い出現率を示す。また、わずかであるがソバ属、アズキ属-ササゲ属が検出される。

試料No.1では草本・藤本花粉が66%と下位と同定の高率を示す。一方、木本花粉は27%と下位に





第141図 島4 駅前地点花粉ダイアグラム



第142図 島2-5 地点花粉ダイアグラム

第9表 SD101 地点花粉化石組成表

調査地点	地層	SD101地点													
		1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層						
3 <i>Polecatia</i>	マツ属	11	4.25	4	1.55	6	2.65	3	1.35	1	0.35	1	0.45	10	3.75
5 <i>Alvea</i>	マツ属	3	1.25	2	0.85	3	1.35	4	1.85	2	0.85	1	0.45	13	4.85
10 <i>Fagus</i>	マツ属	3	1.25	2	0.85	2	0.75	2	0.75	1	0.45	1	0.45	13	4.85
21 <i>Ficus (Diplospora)</i>	マツ属(複雑管束亜属)	49	18.55	49	18.95	66	24.45	88	30.05	48	18.25	53	23.65	79	29.25
30 <i>Swartzia</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	2	0.75	1	0.45	2	0.85	4	1.55
32 <i>Cycas</i>	スギ属	90	34.05	70	30.15	54	23.55	61	25.05	117	39.55	77	34.25	50	21.05
41 <i>Cycas</i>	スギ属	9	3.55	14	5.45	6	2.65	9	3.15	11	3.75	5	2.25	10	3.75
51 <i>Sida</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
52 <i>Phacocarpus-Jubaea</i>	マツ属(1層)〜マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
71 <i>Caulophyton</i>	マツ属(1層)〜アカガシ属	4	1.55	9	3.35	2	0.85	2	0.75	1	0.45	1	0.45	1	0.45
73 <i>Corylia</i>	バナナ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
74 <i>Styela</i>	カシノキ属	1	0.45	2	0.85	3	1.25	5	1.75	2	0.75	2	0.85	1	0.45
75 <i>Alnus</i>	カシノキ属	4	1.55	1	0.45	2	0.85	4	1.65	3	1.25	4	1.55	1	0.45
80 <i>Fagus</i>	マツ属	3	1.25	6	2.35	2	0.85	7	2.65	2	0.75	1	0.45	1	0.45
81 <i>Fagus ovata</i> type	マツ属	3	1.25	4	1.55	4	1.75	2	0.75	1	0.45	1	0.45	1	0.45
82 <i>Fagus ovata</i> type	マツ属	3	1.25	4	1.55	4	1.75	2	0.75	1	0.45	1	0.45	1	0.45
83 <i>Quercus</i>	マツ属	24	9.25	20	13.55	34	14.75	36	12.35	30	10.15	20	12.45	19	7.15
84 <i>Castanea</i>	マツ属	36	13.85	50	19.35	38	16.45	49	18.75	45	15.25	26	11.85	30	11.65
89 <i>Castanea</i>	マツ属	2	0.85	2	0.85	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
92 <i>Ulmus-Zelkova</i>	シノキ属-マツ属(1層)属	5	1.95	4	1.75	9	3.15	10	3.65	8	2.85	5	1.85	5	1.85
94 <i>Cedrus-Abies</i>	スギ属-マツ属(1層)属	4	1.55	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
97 <i>Miconia-Litsea</i>	マツ属	3	1.25	5	1.95	4	1.75	3	1.05	2	0.75	2	0.85	3	1.15
111 <i>Euforbia</i>	マツ属	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85
132 <i>Dioscorea</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
134 <i>Cibicides-Favosites</i>	マツ属-マツ属(1層)属-カタガシ属	3	1.25	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85
141 <i>Mollusca</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
160 <i>Acar</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
170 <i>Acacia</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
195 <i>Diapentem</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
202 <i>Elaeagnus</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
209 <i>Typha</i>	マツ属	40	15.45	3	1.25	9	3.35	24	8.25	2	0.75	2	0.75	4	1.55
205 <i>Alisma</i>	マツ属(1層)属	39	14.95	17	6.65	10	3.55	24	8.25	1	0.35	1	0.35	80	30.05
306 <i>Sagittaria</i>	マツ属	3	1.25	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
281 <i>Gnaphalium(40)</i>	マツ属(40ミシロ科)属	132	50.95	50	22.45	52	22.45	100	34.15	69	23.25	45	20.05	32	12.05
312 <i>Gnaphalium(40)</i>	マツ属(40ミシロ科)属	42	17.35	30	15.15	28	12.15	37	12.85	89	33.95	38	12.95	24	9.05
203 <i>Cyperaceae</i>	マツ属	90	34.05	64	23.55	64	23.55	90	34.05	30	10.15	15	5.65	27	10.15
204 <i>Malvaceae</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	2	0.75	1	0.45	1	0.45	2	0.75
245 <i>Lilium</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
352 <i>Lilium</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
410 <i>Zinnacanthus-Panicum</i>	マツ属(カシノキ科)属	5	1.95	7	2.75	5	2.25	6	2.05	15	5.15	2	0.85	10	3.75
422 <i>Chenopodiaceae-Compositaceae</i>	マツ属(マツ科)属	12	4.65	5	1.95	5	1.95	7	2.65	1	0.45	30	9.95	12	4.55
430 <i>Compositaceae</i>	マツ属	1	0.45	2	0.85	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
441 <i>Asplenium</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
450 <i>Saururus</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
455 <i>Raietocarpus</i>	マツ属	2	0.85	2	0.85	8	3.05	2	0.75	3	1.05	3	1.15	1	0.45
481 <i>Crocodylus</i>	マツ属	14	5.45	5	1.95	2	0.85	2	0.75	6	2.25	9	4.05	7	2.65
500 <i>Lagotis</i>	マツ属	3	1.25	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	23	8.65
504 <i>Azadirachta</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
505 <i>Amomum-Lygodium</i>	マツ属(1層)属	7	2.75	7	2.75	5	2.25	4	1.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
563 <i>Delphinium-Lupinus</i>	マツ属(1層)属	3	1.25	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
571 <i>Helleborus</i>	マツ属	10	3.85	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
580 <i>Urtica</i>	マツ属	8	3.15	5	1.95	3	1.25	4	1.45	1	0.45	2	0.85	1	0.45
581 <i>Helleborus</i>	マツ属	2	0.85	1	0.45	2	0.85	2	0.75	4	1.45	2	0.85	42	15.75
582 <i>Helleborus</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
651 <i>Rubus</i>	マツ属	5	1.95	4	1.55	14	5.05	12	4.15	2	0.75	3	1.15	17	6.45
672 <i>Actinostemon-Quercus</i>	マツ属(1層)属	3	1.25	2	0.85	2	0.85	2	0.75	2	0.75	3	1.15	17	6.45
710 <i>Carex</i>	マツ属	3	1.25	2	0.85	2	0.85	2	0.75	2	0.75	3	1.15	17	6.45
712 <i>Artemisia</i>	マツ属	156	60.05	168	64.95	169	72.85	216	73.35	157	57.05	80	30.65	170	63.75
720 <i>Cyperaceae</i>	マツ属	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85	2	0.85	6	2.25	7	2.65
800 <i>Urtica</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
842 <i>Rubus</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
875 <i>Urtica</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
881 <i>Pteris</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
885 <i>Aspid. Aspid.</i>	マツ属	16	6.25	10	3.95	19	7.05	79	27.05	87	29.45	10	4.45	15	5.65
891 <i>Pteris</i>	マツ属	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45	1	0.45
895 <i>MCHLATE-TYPE-SPORE</i>	マツ属	25	9.65	11	4.25	9	3.05	10	3.65	13	4.65	6	2.75	14	5.25
899 <i>TRE-ATE-TYPE-SPORE</i>	マツ属	27	10.35	14	5.45	11	4.75	10	3.65	15	5.15	7	3.25	20	7.05
木本花粉(%)		183	18.15	147	21.75	133	20.05	168	17.95	183	23.65	141	20.85	184	21.25
草本花粉(%)		87	10.65	110	14.55	89	15.35	125	13.25	113	14.05	84	11.15	83	9.85
草本-藤本		577	64.15	304	56.05	375	51.15	544	58.15	360	49.25	220	46.15	470	54.25
菌類		65	7.25	32	5.25	38	5.25	100	13.75	118	15.25	38	6.05	132	14.95
計		992	92.75	879	94.95	949	94.95	1077	94.95	774	94.95	486	94.95	992	94.95
試料重量(g)		95.010	95.185	101.092	97.7	104.087	7.925	124.84	100.89						

比で微増する。木本花粉ではマツ属(複雑管束亜属)、スギ属が30%程度を占めるほか、アカガシ亜属が13%、コナラ亜属が8%と続く。草本・藤本花粉ではヨモギ属が107%と高率を示すほか、イネ科(40ミシロ未満)が44%、アリノトウグサ科が42%と高率を示す。このほか、イネ科(40ミシロ以上)が18%とその他の種類に比べやや高い出現率を示す。また、僅かであるがソバ属、アズキ属-ササゲ属が検出される。

畝2~5地点畦畔(畝・畝間地点)

草本花粉が55~65%程度、木本花粉が10~30%程度の出現率を示す。畝と畝間の比較では、花粉化石含有量(花粉・胞子含有量、草本・藤本含有量、木本含有量ともに)が畝間で多い傾向にあったが、例外も認められた。木本花粉では、マツ属(複雑管束亜属)、スギ属が高率を占めた。両者の関係では、スギ属がマツ属(複雑管束亜属)と同程度か、高めの出現率を示した。柱状に分析を実施した





畠4の傾向から、スギ属が高い出現率を示す試料(層準)が、マツ属(複雑管束亜属)と同定の出現率を示す試料(層準)よりやや上位の層準であると考えられる。調査時の削り込み、あるいは上位層の堆積時に生じた削り込みに因ると考えられる。

草本・藤本花粉では、ヨモギ属が全ての試料で100%を超えたほか、イネ科(40ミクロン未満)がほとんどの試料で40%程度を示した。また、畠2でチドメグサ属、畠4ではアリノトウグサ科が高率を示した。また、ソバ属が畠2・3・4、アズキ属-ササゲ属が畠2で検出された。

### (3) 植物珪酸体分析

#### i) 植物珪酸体化石の含有状況

15試料の植物珪酸体分析を行った結果、すべての試料から植物珪酸体(プラント・オパール)化石が検出された。検出された植物珪酸体(プラント・オパール)化石は第11表に示す11種類であった。

#### ii) 植物珪酸体分析結果

第8表に示した35分類群(栽培植物との対応が明らかな分類群)について同定・計数を行った。この結果、11分類群が検出され、計数を行った。植物珪酸体分析の結果を、第143・144図の植物珪酸体ダイアグラムと第11表の植物珪酸体分析組成表に示す。

植物珪酸体ダイアグラムでは、検出密度を分類群ごとにスペクトルで表している(イネ科(機動細胞)は黒、樹木起源は白のスペクトルで表した)。また、寒暖の指標である「メダケ率」と、関東地方での積雪量の指標である「チマキザサ節型/ミヤコザサ節型グラフ」を示した(樹木由来の珪酸体は検出されなかった。ミヤコザサ節型珪酸体も検出されなかったことから、「チマキザサ節型/ミヤコザサ節型グラフ」は作成できなかった)。

#### iii) 植物珪酸体(プラント・オパール)化石群集の特徴

##### SD101地点

最下位の試料No7(9層下部)・4(5層)を除く5試料からイネが検出された。また、試料No1からはイネ初殻、キビ族型(アワ・キビ・ヒエを含む)も僅かに検出された。このほか、多くの試料でイネ科草本のシバ属型、ススキ属型、ウシクサ族Aの検出量が多かったほか、ネザサ節型の検出量も多かった。

##### 畠2~5地点

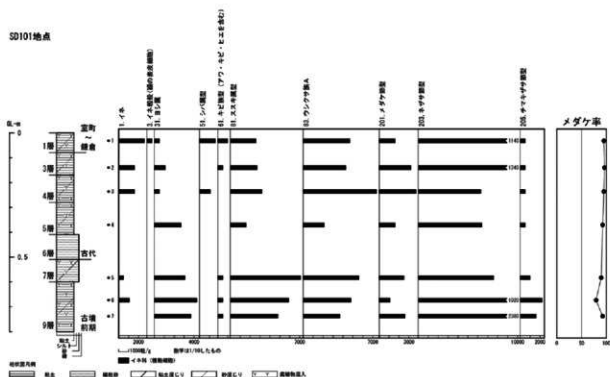
全ての試料からイネが検出された。また畠2畝地点からは、ムギ類(穎表皮細胞)とキビ族型(アワ・キビ・ヒエを含む)が僅かに検出された。このほか、多くの試料でイネ科草本のヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Aの検出量が多かったほか、ネザサ節型の検出量も多かった。

### (4) 種実同定

種実同定結果を第12表に示す。以下に記載を行うとともに、代表的な試料(下線)の写真を巻末図版に示す。

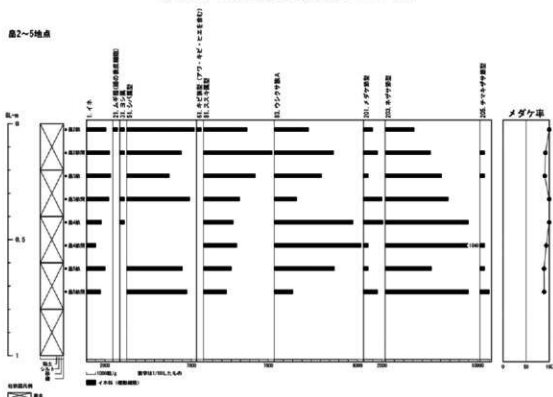
- ・イガガヤツリ類似(果実):高さ0.8mmの扁平倒卵形2面形で褐色表面はざらつく。イガガヤツリに形態が似る。
- ・コゴメガヤツリ近似種(果実):高さ0.8mmの三角状長卵形で褐色、壁表面に微細な白く浮き出たように見える網目が密に分布する。

## SD101地点



第143図 SD101地点植物珪酸体ダイアグラム

## 高2~5地点



第144図 高2~5地点植物珪酸体ダイアグラム

- ・ カヤツリグサ属かテンツキ属 (果実: 風化): 高さ0.5mmの3稜形で高さの半分より上が太く薄い褐色。風化のため果皮壁が大変薄くなっているか、あるいは最外層が剥がれているようである。
- ・ カヤツリグサ属? (果実: 風化): 高さ0.5mmの3稜形で黄褐色、果皮壁が大変薄くなっている。
- ・ ホタルイ属 (果実): 高さ1.1mmで広倒卵形、側面観は平凸レンズ形、頂部は尖り基部は平らなへそがある。果皮は黒褐色で前面に細かい横しわがあり光沢がある。



第12表 種実同定結果

種名		1区											
		島2		島3		島4		島5		島6		島7	
種別		4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部	4期 地上部
分種群		総計(個体数)											
科	属	種	部位	採種地	№1	№2	№3	№4	№5	№6	№7	№8	№9
カヤツリグサ科	カヤツリグサ属	イボガヤツリ属	葉面									3	
		コロメガヤツリ属	葉面		4	25						1	
		カヤツリグサ属(カヤツリグサ)	葉面(風化)									85	
		カヤツリグサ属?	葉面(風化)									3	
		カキルイ属	葉面(葉)									22	
			葉面(葉)									1	
		テンツキ属	ピロードテンツキ属	葉面		1							
	スゲ属		葉面(風化)									1	
			葉面(風化)									2	
カヤツリグサ科?			葉面		1								
イグサ科	イグサ属		種子			1					4	62	
	スズメノヤリ属		種子										
バウ科	ヘビイチゴ属		核									1	
	キジムシロ属		核									19	
クコギ科(セリ科)	チドメサ属		葉面									12	
			葉面(風化)									2	
アリノトウグサ科	アリノトウグサ属	アリノトウグサ	葉面									85	
オオトラノオ科	オオトラノオ属		種子(風化)		20	56					2		
	センシク属		種子(風化)					1			2	1	
レン科	オウソウ科属?		葉面(風化)									1	
ナス科	ナス属		種子(核)									1	
オオハコ科	カウガツク属		種子(風化)									1	
アオネ科	フタバムグラ属		種子									10	
キク科?	ハハコ科属?	ハハコ科属	葉面?										
合計					24	91	0	0	3	6	281	0	1

- ・ ホタルイ属 (果実: 半炭化): 高さは1.6mm広倒卵形で一部に炭化した光沢が見られ、基部から刺状突起が伸びているが途中で切れている。
- ・ ピロードテンツキ類似 (果実): 高さ0.9mmの2面倒卵形で明るい褐色縦方向に細かい筋が見え、ピロードテンツキに似る。
- ・ スゲ属 (果実: 風化): 高さ1mmの2面形で縦方向に薄い筋があり上下端が尖る。壁は破れている。
- ・ カヤツリグサ科 (果実: 風化): 高さ1.0mmの3稜形。
- ・ カヤツリグサ科? (果実: 風化): 高さ0.8mmの3稜形?。
- ・ イグサ属 (種子): 高さ0.6mmの紡錘形で壁が薄く前面に細かい長方形の網目がある。
- ・ スズメノヤリ属類似 (種子): 高さ0.9mmの幅が広い紡錘形で壁は薄く横方向の細かい筋があり上下端がやや黒っぽい。幅が太いためスズメノヤリ属の可能性はある。
- ・ イグサ科 (種子): 高さ1mmの紡錘形で、薄壁で前面に網目があるが、やや大きいためイグサ科だけでなくスズメノヤリ属の可能性もあるためイグサ科とした。
- ・ ヘビイチゴ属 (核): 長さ0.7mmの倒卵形で背面は丸く腹面は内側に湾曲し頂部に偏した一端に短い突起状のへそがある。壁は褐色で平滑。
- ・ キジムシロ属 (核): 長さ0.6mmの倒卵形で背面は丸く腹面は内側に湾曲し頂部に偏した一端に短い突起状のへそがある。壁は褐色で湾曲に対してやや斜め方向の不明瞭な隆起が数本ある。
- ・ アリノトウグサ (果実): 高さ1.2mm前後の球形で先端は尖り頂部から基部にかけて8本の稜がある。果皮は平滑で褐色で果皮壁はやや厚くやや柔らかい。
- ・ チドメサ属 (果実): 高さ0.8mmの半円形で側面に1本ずつ隆起があり果皮壁は柔らかく薄褐色である。
- ・ オオトラノオ属 (種子): 長さ0.8~1.2mmの3~4角状で前面にやや粗い網目があり一端にへそがある。

- ・キランソウ属（果実）：長さ1.5mm前後の倒卵形で背面は丸く腹面は下半部が大きくえぐれたへそがあり、壁は黄褐色で多角形の隆起した網目模様がある。
- ・キランソウ属？（果実：風化）：長さ1.3mmの楕円形で不明瞭だが網目がある。キランソウ属が風化されたものか。
- ・ナス属（種子：破片）：残存破片の長さ1.6mmで平な盤状で一端がへこんだへそがあり全面にジグソーパズル状の網目がある。
- ・クワガタソウ属（種子：風化）：長さ0.8mmの盤状で背面は丸く腹面は中央が突出してへそがあり、多角形の網目が一部に残っていることからクワガタソウ属とした。
- ・フタバムグラ属（種子）：長さ0.7～1.2mmの多角状球形で一端頂部に壁が厚くなったようなへそがあり全面に多角形で中央がへこんだ細かい網目がある。
- ・ハハコグサ類似（果実？）：長さ0.8mmの管状で褐色、細かい網目がありやや微細な短毛が残っている。ハハコグサの仲間に似るがサイズが小さい。

## (5) 鉱物分析

複数枚の薄片を作成し、鉱物顕微鏡下で観察した。代表的な薄片の顕微鏡写真を本節の末尾に示すとともに、観察結果を示す。

### ①薄片No2（デイサイト質火山岩礫：Vol）

写真中の火山岩礫は二重の碎屑岩となっている。微斑晶として斜長石(Pl)、鉄鉱(Fe)が認められる。石基の大部分の鉱物粒は斜長石からなり、ホルンブレンド、鉄鉱、斜方輝石のほか火山ガラスと思われる部分もある。鉱物粒の周囲は、酸化鉄・水酸化鉄と推察される鉄分によってコーティングされている。

### ②薄片No3（オレンジ色部：Pm・デイサイト質火山岩礫 Vol）

オレンジ色部（Pm）には微斑晶としてラス状の斜長石と鉄鉱のほか、斜方輝石（微斑晶）が認められるほか、黒雲母？（仮像）も認められるなどデイサイト質火山岩礫と同様の組織を示す。ただし、酸化鉄・水酸化鉄と推察される鉄分が沈着し、暗褐色の物質（アモルファス？：非晶質）に置き換えられている。

### ③薄片No16：ベトロボキシ封入（オレンジ色部：Pm）

オレンジ色部（Pm）にはラス状の斜長石と鉄鉱が認められ、鉱物粒間には暗褐色の物質（アモルファス？：非晶質）が占めている。暗褐色部は地下水浸透時に沈着（置換）した鉄分（水酸化鉄・酸化鉄？）と考えられる。オレンジ色部の原岩はデイサイト質の軽石で、その風化したガラス質基質部に地下水に含まれる鉄分が沈着・置換したものの可能性がある。

## (6) 考察

### i) 花粉分帯

柱状で分析試料を採取した、SD101地点、及び畠4畝地点、畠4畝間地点の分析結果を基に、博労町遺跡における弥生～古墳時代以降、鎌倉～室町時代に至る花粉化石群集（上位よりI帯a亜帯～II帯b亜帯の2帯5亜帯）を設定した。

以下では、下位から上位に向かい、各花粉帯（亜帯）の特徴を示す。

① II帯 (SD101 地点試料No 7~5、畠 4 畠地点試料No 8、畠 4 畠間地点試料No 3)

SD101 地点で特徴的で、下位から上位に向かいマツ属 (複維管束亜属) が減少傾向を、スギ属が増加傾向を示す。これらのうちマツ属がスギ属に対し高率を示す SD101 地点試料No 7、畠 4 畠地点試料No 8、畠 4 畠間地点試料No 3 を b 亜帯、マツ属 (複維管束亜属) が低率になる (スギ属が高率になる) SD101 地点試料No 6・5 を a 亜帯とした。

② I 帯 (SD101 地点試料No 4~1、畠 4 畠地点試料No 7~1、畠 4 畠間地点試料No 3~1)

一旦、マツ属 (複維管束亜属) が増加し、スギ属に対し高率を示すようになるが、マツ属 (複維管束亜属) は減少傾向を、スギ属は増加傾向を示す。これらのうちマツ属がスギ属に対し高率を示す SD101 地点試料No 4・3、畠 4 畠地点試料No 7~5、畠 4 畠間地点試料No 2 を c 亜帯、マツ属 (複維管束亜属) が減少、スギ属が増加し、拮抗するようになる SD101 地点試料No 2、畠 4 畠地点試料No 4~1、畠 4 畠間地点試料No 1 を b 亜帯、スギ属がマツ属 (複維管束亜属) より著しく高率になる SD101 地点試料No 1 を a 亜帯とした。

ii) 従来の分析結果との比較

博労町遺跡内では、今回調査を行った啓成小学校敷地に隣接する米子工業高校敷地内でも発掘調査が行われており、花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析が行われていた (古環境研究所 2011)。ここでの花粉分析は、中世の畠遺構検出面に限られているほか、花粉粒総数 200 粒を基準に顕微鏡観察が行われていた。このため今回実施した花粉分析結果、特に木本花粉化石群集の変遷から設定した各花粉帯との比較検討ができなかった。

一方、米子市内では、目久美遺跡及び近隣の大谷遺跡に於いて、大西 (1986) 以降、弥生時代以前の堆積物を主な対象とした詳細な花粉分析が、継続的に実施されていた。目久美遺跡では、今回の分析で中心となった弥生時代以降中世にかけての分析も行われているものの堆積時期が明瞭でなかったり、分析試料が少なかったりするために、今回の分析結果との詳細な比較検討はできない状況である。第 145 図に目久美遺跡 (大西郁夫 1986) の花粉ダイアグラムを示す。堆積時期未定であるが、花粉帯 VI から上位でスギ属の増減が認められ、特に花粉帯 III を挟んで急減 (IV 帯)、微増 (II 帯) と続く。一方、今回の分析では、スギ属の減少、増加が古代の層準で認められる。しかし、マツ属 (複維管束亜属) の出現率は、スギ属が増加傾向を示す上位の I 帯 (奈良~室町時代) では目久美遺跡ほど高率にならない。

一方、下位の II 帯 (弥生~古墳時代) では目久美遺跡を上回る出現率を示している。

以上の様に、博労町遺跡周辺と目久美遺跡周辺では、背後の森林植生に違いが生じていたと考えられる。

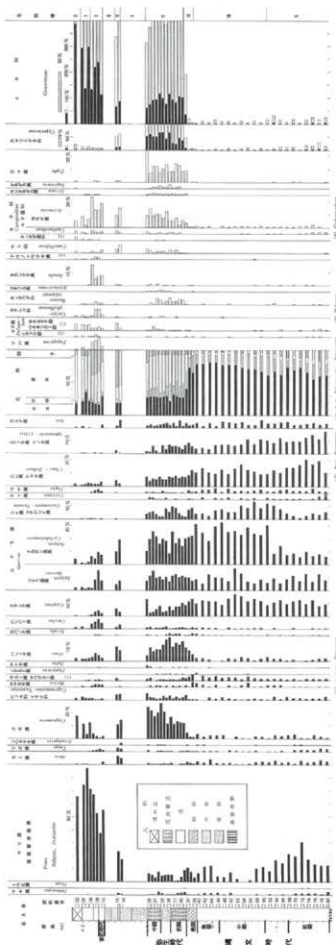
iii) 古植生について

植物珪酸体分析結果・花粉分析結果及び種実同定結果を基に、調査地周辺の古植生変遷について、設定した局地花粉帯ごとに考察する。

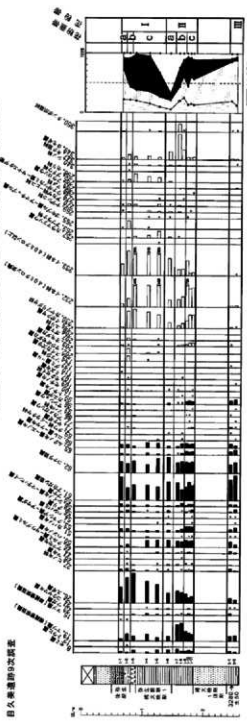
**II 帯 b 亜帯期 (SD101 地点試料No 7、畠 4 畠地点試料No 8、畠 4 畠間地点試料No 3) : 弥生~古墳時代 (前期)**

① 周囲の山地植生

同時期 (弥生時代前~中期、縄文時代晩期~弥生時代後期) の目久美遺跡に比べ、博労町遺跡ではマツ属 (複維管束亜属) が高率を示す。一方で、アカガシ亜属は博労町遺跡が低率を示す。目久



第145図 目久美遺跡1次調査の花粉分析結果(大西1986)



第146図 目久美遺跡9次調査の花粉分析結果(渡辺ほか2003)



美遺跡は遺跡背後（南側）に丘陵が広がり、カシ類を主要素とする照葉樹林が分布していたものと考えられる。一方で博労町遺跡は砂丘上に立地し、丘陵までやや距離がある。丘陵に照葉樹林が分布していたとしても小規模であり、砂丘上にはクロマツ林が分布していたものと考えられる。また、目久美遺跡では博労町遺跡に比べスギ属も高率を示している。スギは湿潤環境を好むことから主に谷筋に生育していたと考えられ、目久美遺跡では、背後の丘陵沿いの谷間にスギ林を形成していたものと考えられる。これに対し、前述の様に博労町遺跡は砂丘上に立地することから、スギの生育環境が近辺に乏しかったものと考えられる。

#### ② 近辺の植生

低湿地（SD101）内には、抽水植物であるオモダカ類が生育していたと考えられる。縁辺にはガマ類やヨシ類、ウシクサ類などのイネ科湿性植物、カヤツリグサ類、イボクサ類、サナエタデ類（ウナギツカミ類）、セリ類、チドメグサ類が生育していたと考えられる。また、畠4地点付近ではアリノトウグサが生育していたと考えられる。また、砂丘上ではススキ類やササ類などのイネ科草本のほか、ヨモギ類などのキク科草本などが広く生育していたと考えられる。

### II帯 a 亜帯期（SD101 地点試料No.6・5）：古墳時代（前期）

#### ① 周囲の山地（砂丘）植生

アカガシ亜属はb 亜帯時期と同程度の出現率であるが、スギ属が増加、マツ属（複雑管束亜属）が減少する。第145・146図で示したように弥生時代頃の目久美遺跡でもスギ属がピークを成す傾向は認められるが、目久美遺跡ではこの間でのマツ属（複雑管束亜属）にはほとんど変化がなく、アカガシ亜属が微減傾向にある。目久美遺跡では、更にハンノキ属、クマシデ属の減少傾向も認められる。

弥生時代頃にスギ属がピークを成す傾向は、中海・宍道湖地域全体で認められる。また、スギが湿潤気候（雨（雪）や霧）を好むことから、この時期に降水量が増えたと考えられている。博労町遺跡では、目久美遺跡などと比べスギ属がピークを成す時期がやや遅く、遅れた原因に広域な気候変動以外の要因も想定される。b 亜帯期に海岸林を成していたと考えられたマツ属（複雑管束亜属）が減少することから、中浜砂州の発達により海岸が遠のき、内浜砂州と中浜砂州間の堤間低地が発達するなどの地形変化により、遺跡近くの海岸線の消滅と堤間低地でのスギ林の発達が推定できる。

#### ② 近辺の植生

オモダカ属が急減し、イネ科、カヤツリグサ科が増加傾向を示すことから、低湿地縁辺にはヨシ類、ウシクサ類などのイネ科湿性植物、カヤツリグサ類が多く認められるようになったほか、ガマ類、オモダカ類、イボクサ類、サナエタデ類（ウナギツカミ類）、セリ類、チドメグサ類が生育していたと考えられる。また、砂丘上では、ススキ類やササ類などのイネ科草本のほか、ヨモギ類などのキク科草本などが生育していたと考えられる。更に、イネを含むイネ科（40ミクロン以上）花粉も増加傾向を示し、イネの植物珪酸体も検出されるなど、近辺で稲作が行われた可能性も指摘できる。

### I帯 c 亜帯期（SD101 地点試料No.4・3、畠4 畠地点試料No.7～5、畠4 畠間地点試料No.2）：古代

#### ① 周囲の山地（砂丘）植生

II帯 a 亜帯期に比べ、スギ属が減少し、マツ属（複雑管束亜属）が増加する。一方、目久美遺跡で同時期の堆積物が得られておらず、比較試料が無い。砂丘の発達とともに堤間低地が乾燥化してスギが生育できなくなり、代わりにマツ類が分布域を広げていったと考えられる。

## ② 近辺の植生

イネ科、カヤツリグサ科がⅡ帯に比べ増加するほか、ガマ属、サジオモダカ属の増加も顕著である。川辺にはヨシ類、ウシクサ類などのイネ科湿性植物、カヤツリグサ類に加えガマ類、サジオモダカ類も顕著になったほか、イボクサ類、サナエタデ類（ウナギツカミ類）、ミソハギ類、セリ類、チドメグサ類、ゴキズル類が生育していたと考えられる。また、砂丘上では、シバ類やススキ類、ササ類などのイネ科草本のほか、ヨモギ類などのキク科草本などが生育していたと考えられる。また、畠4付近ではアリノトウグサが生育した。更にイネの植物珪酸体が検出され、畠4地点ではソバ属やアズキ属-ササゲ属花粉が検出されるなど、近辺で稲作や畑作が行われたと考えられる。

I帯b亜帯期（SD101地点試料No.2、畠4畝地点試料No.4~1、畠4畝間地点試料No.2）：古代～鎌倉（室町）時代

### ① 周囲の山地（砂丘）植生

c亜帯の終わりからスギ属が増加に転じ、マツ属（複維管束亜属）がやや減少する。一方、目久美遺跡では室町時代にはスギ属が低率になり、マツ属（複維管束亜属）が急増している。また今回の博労町遺跡での分析結果では（堆積相の変化がない、SD101において木本花粉の含有量が減少傾向にある）ことから、遺跡周囲の木々そのものが減少した可能性が指摘できる。このことと、両遺跡で反する結果が得られていることから、マツ属（複維管束亜属）は燃料として優良であることから伐採がより進み、相対的にスギが残ったものと考えられる。

### ② 近辺の植生

アリノトウグサ科花粉が急増するほか、種実同定でもアリノトウグサが多く検出され、畠4地点ではアリノトウグサが密生していたものと考えられる。一方で、その他の分類群に変化はほとんど認められず、その他の植生に変化は乏しかったと考えられる。

### ③ 畑作について

今回の調査及び第1次調査で検出された畝状遺構は、この時期に相当する。



第147図 遺跡周辺の地形（1mコンタマップ）カシミール3Dを利用して作成

今回の畝状遺構の調査において、花粉分析ではソバ属、アズキ属-ササゲ属花粉が検出され、植物珪酸体分析ではイネ、ムギ類が検出された。一方で種実同定では、多くの試料を水洗したが、畝4畝間でナス属が1個体検出されたのみであった。これらの事柄から、畝状遺構ではムギ類、ソバ、アズキ（あるいはササゲ）、ナス（あるいはジャガイモ？）が栽培されていたと考えられる。

第1次調査において、花粉分析ではイネ属型、ソバ属、植物珪酸体分析でイネ、キビ族型、種実分析ではイネ、ヒエ、オオムギ、コムギなどの穀類のほか、アサ、ウリ類も検出されていた。

乾燥環境下にある畝では、花粉、種実の保存状態が悪いことが知られている。このため、調査区ごとの検出栽培種の違いが栽培場所の違いを示しているとは言い難い。しかし、その場所近辺で栽培されていたことは、ほぼ間違いない（第1次調査時のアサ、ウリ類は水溜状遺構から出土しており、ここでの栽培とは捉え難い。水溜状遺構に続く溝の流域全体〜溝周辺まで栽培域を広げて考える必要がある。）。

また、イネの栽培について、現在では水稲が一般的である。しかし、畝状遺構に伴うこと、畝作物（特にイネと栽培時期の重なるキビ類、ヒエ）と共に検出されることから、陸稲の可能性も指摘できる。

#### I 帯 a 亜帯期 (SD101 地点試料No.1) : 鎌倉〜室町時代

##### ① 周囲の山地（砂丘）植生

木本花粉組成はb亜帯とほぼ同じで、森林植生の変化が乏しかったと考えられる。

##### ② 近辺の植生

草本花粉組成ではガマ属、サジオモダカ属、イネ科、カヤツリグサ科などの湿性植物由来と考えられる花粉が増加する。SD101 はほとんど埋まっており、河川としての機能を失っていたと考えられるが、湿地として残っていたものと考えられる。湿地内にはガマ類、サジオモダカ類、ヨシ類、ウシクサ類などのイネ科湿性植物、カヤツリグサ類に加え、イボクサ類、サナエタデ類（ウナギツカミ類）、ミソハギ類、アカバナ類、セリ類、チドメグサ類、ゴキズル類などが生育していたと考えられる。また、砂丘上では、シバ類やススキ類、ササ類などのイネ科草本のほか、アブラナ類、ヨモギ類などのキク科草本などが生育していたと考えられる。

#### iv) 地層中のオレンジ色部の成因について

前述の観察結果と、「第5・6層中には河原起源と思われる軽石が多く含まれているため、遺跡付近に軽石を含む砂礫堆積物があった可能性がある。」(担当者談)とのことから、近辺に分布したデイサイト質堆積物（デイサイト質軽石）が二次堆積し、風化したガラス質基質部に、地下水の影響で鉄分が沈着・置換したものと考えられる。

#### (7) まとめ

博労町遺跡において、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定、鉍物分析を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

- ・花粉分析の結果、弥生時代から室町時代にいたる堆積物（時期）を2帯5亜帯に分帯（区分）することができた。
- ・花粉帯ごとに、花粉分析結果、植物珪酸体分析結果、種実同定結果を基に、古植生について考察した。また古植生推定にあたり、米子市西部に位置する目久美遺跡の花粉分析結果との比較を行った。特筆すべき事柄は、以下の通りである。

- ① 畝状遺構では、イネ（陸稲の可能性もあり）、ムギ、ソバ、アズキ（あるいはササゲ）、ナス（あるいはジャガイモ？）が栽培された可能性が指摘できる。
  - ② 弥生時代には、周辺の砂丘上にはクロマツ海岸林が広がっていたものと考えられる。
  - ③ 古墳時代には、砂丘の発達とともに海岸（クロマツ海岸林）が遠のき、堤間湿地にスギ林が発達していったと推定できる。
  - ④ 古代には堤間湿地の乾燥化が起き、スギ林の衰退とマツ林の拡大が起こったと考えられる。
  - ⑤ 古代以降中世にかけては、燃料等の目的でマツの伐採が進んだ可能性がある。
- ・2区南端第6a層で認められたオレンジ色を呈する極粗砂～細礫サイズの粒子について、鉱物顕微鏡下での観察結果から、デイサイト質の軽石が風化し、ガラス質の基質部分に鉄分が沈着・置換したものと推定できた。

#### 引用・参考文献

- ・大西郁夫 1986、「米子市目久美遺跡の花粉分析」：米子市教育委員会編『加茂川改修事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』pp.68-77
- ・古環境研究所 2011、「博労町遺跡における自然科学分析」：米子市教育文化事業団編『博労町遺跡』第2分冊、pp.1-24
- ・中村純 1974、「イネ科花粉について、特にイネを中心として」：『第四紀研究』13、pp.187-197
- ・藤原宏志 1976、「プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）- 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法 -」：『考古学と自然科学』9、pp.15-29
- ・Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1),337-360.
- ・Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, L., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Muscheler, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, D., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve(0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62
- ・渡辺正巳・三瓶良和・澤田祐紀 2003、「目久美遺跡第8～10次調査における古環境解析」：米子市教育文化事業団編『目久美遺跡』IX・X、pp.123-154
- ・渡辺正巳 2010、「花粉分析法」：『必携 考古資料の自然科学調査法』ニュー・サイエンス社、pp.174-177

# 顯 微 鏡 写 真



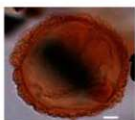
検出状況：SD101-4



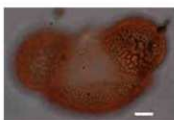
検出状況：畠4 畝間-1



モミ属



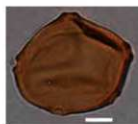
ツガ属



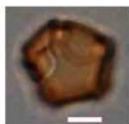
マツ属 (複維管束亜属)



スギ属



クマシデ属  
-アサダ属



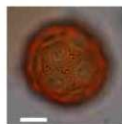
ハンノキ属



コナラ亜属



アカガシ亜属



サジオモダカ属



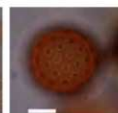
イネ科  
(40%以上未満)



カヤツリグサ科



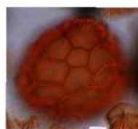
ソバ属



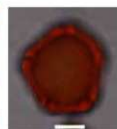
アカザ科  
-ヒユ科



コウホネ属



アズキ属  
-ササゲ属



アリントウグサ属



キク亜科



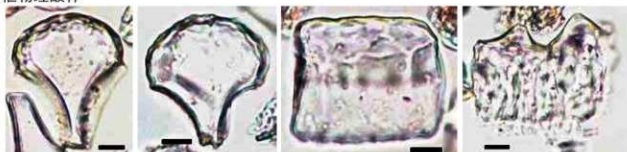
ヨモギ属



タンポポ亜科

記述のあるもの以外、  
スケールバーは0.01mm

植物珪酸体

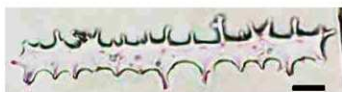


イネ

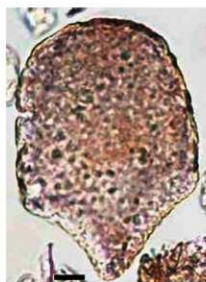
イネ

イネ (側面)

イネの籾殻 (籾の表皮細胞)



ムギ類 (籾の表皮細胞)



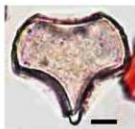
ヨシ属



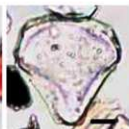
キビ属型



キビ属型



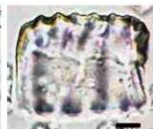
シバ属型



ススキ属型



メダケ節型



ネザサ節型



チマキザサ節型

スケールはすべて0.01 mm

果実・種子・核



イガガヤツリ  
類似  
(果実)



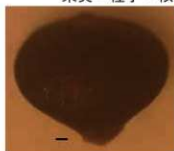
コメガヤツリ  
近似種  
(果実)



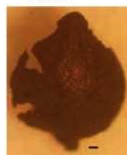
カヤツリグサ属  
or テンツキ属  
(果実：風化)



カヤツリグサ属？  
(果実：風化)



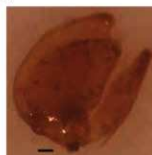
ホタルイ属  
(果実)



ホタルイ属  
(果実：半炭化)



ビロードテンツキ類似  
(果実)



スゲ属  
(果実：風化)



カヤツリグサ科  
(果実：風化)



カヤツリグサ科？  
(果実：風化)



イグサ属  
(種子)



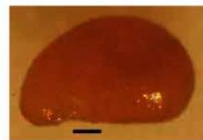
スズメノヤリ属  
類似  
(種子)



イグサ科  
(種子)



ヘビイチゴ属  
(核)



キジムシロ属  
(核)



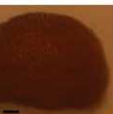
アリノトウグサ  
(果実)



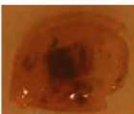
フタバムグラ属  
(種子)



ハハコグサ類  
類似  
(果実？)



チドメグサ属  
(果実)



チドメグサ属  
(果実：風化)



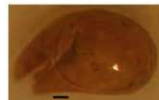
クワガタグサ属  
(種子：風化)



オカノトラノオ属  
(種子)



キンランソウ属  
(果実)



キンランソウ属？  
(果実：風化)

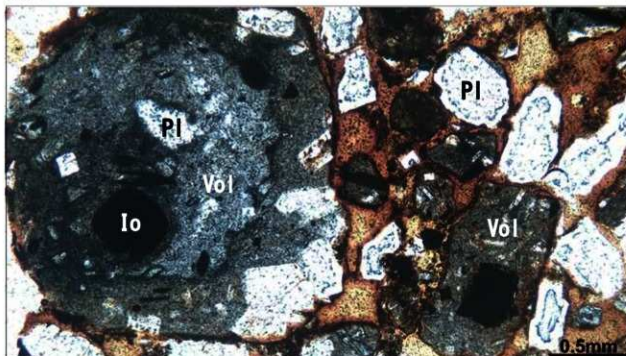


ナス属  
(種子)

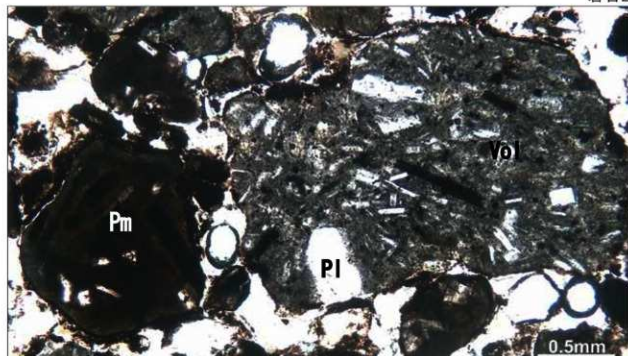
スケールバーは0.1 mm



岩石 1



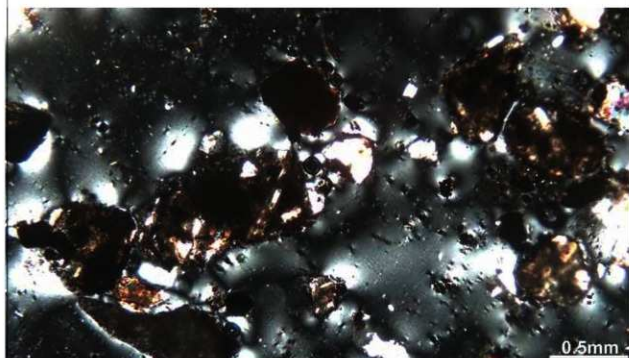
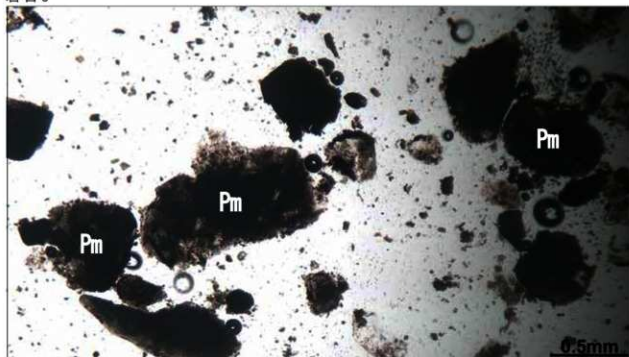
No2 火山岩 (デイサイト) 礫 (Vol), 鉱物粒  
上: オープンニコル, 下: クロスニコル  
Vol: 火山岩 (デイサイト) PI: 斜長石 lo: 鉄鉱



No3 オレンジ色部 (Pm) と火山岩燻 (Vol)

上：オープンニコル，下：クロスニコル

Vol：火山岩（デイサイト） Pm：オレンジ色部（軽石） PI：斜長石



No.16 オレンジ色部 (Pm) の削り出し試料 (ペトロポキシにより固定)  
上：オープンニコル, 下：クロスニコル  
Pm：オレンジ色部 (軽石)

### 第3節 博労町遺跡における人間活動の変遷

第Ⅲ章第2節の基本層序および第Ⅳ章における考古学的な検討に加え、本章第1・2節の自然科学分析による古環境復元の成果を踏まえて、本節では、各時代を通じて変化していく自然環境の中で、博労町遺跡において繰り上げられた人間活動の変遷を復元してみたい。

#### (1) 縄文時代晩期の地形環境と人間活動

第2次調査の低湿地周辺の第6層や古墳時代の遺構埋土から、縄文時代晩期～弥生時代前期の突帯土器が出土したことにより、基盤となる第7層が縄文時代晩期までに堆積した地層であることが判明した。この時期の遺物は微高地A・B(第13図)の高所では出土していないため、微高地を含めた全体がその時期までに形成されていたかは確認できていない。

この低湿地をつくる堤間低地は上幅130m程度の小規模なものだが、微高地Aと微高地Bを区切るもので、この地域周辺の古地形復元にとって重要な要素である。南東に開く谷状地形をなしており、微高地Bの裾部の等高線に沿うように、直径50mm前後の中礫を含む砂礫層(第7a層)が上部に堆積していた。この砂礫層は第1節の分析で河成堆積物の可能性が高く、最寄りの河川からイベント的に氾濫流が低地に侵入し、砂礫を運搬したと推定される。

こうした地形環境のもとで、低湿地付近ではオモダカ・ヨシなどの抽水植物や湿生植物を中心とした植生が、いち早く形成されたと思われ、そこに人間が進出したと考えられる。人間活動は少量出土している土器から、弥生時代中期～後期初頭まで確認できるが、微高地を含めて、居住域としては弥生時代終末まで利用されていない。

#### (2) 内浜砂州の安定と初期開発

微高地A・Bなどからなる内浜砂州の浜堤群は、弥生時代を通じてススキやササ類などの草原に覆われ、古土壌(クロスナ)を形成する安定した地形環境が維持されるようになった。

一方、日野川河口の三角州と連続するように中浜砂州が形成され始め、汀線が後退し、微高地A・Bなどの内浜砂州との堤間低地が発達したことを、花粉分析ではスギ属花粉の増加から推定している。堤間低地は湿地や水路・潟湖となり、微高地A・B上の植生維持と土壌形成に寄与していたと推定される。

弥生時代終末から古墳時代前期には、生活用水を低湿地周辺の井戸から調達した集落が、ススキやササ類で覆われていた微高地A・Bで形成される。井戸底面の標高は2.5～3.0mで、第7層の標高3m以下が滞水層になっており、日野川河口や勝田山丘陵からの伏流水などが分布する水文環境があったと想定される。

集落からは外面タタキを施す鉢・甕や布留系土器など、他地域からの搬入土器や、準構造船を模した船形土製品、3点の小型倭製鏡が出土しており、堤間低地の水路を利用した海上交通に利便な立地環境を背景に、異文化との交流に供された港湾を擁する集落であったと思われる。

これらの集落は古墳時代中期に一旦廃絶するが、古墳時代後期には微高地Aの旧集落域や、微高地Bの低地部周辺で活動が再開する。この時代は、緊迫した東アジア情勢を背景にして、屯倉設置

による地域統治の再編が全国的に進められている。この地域は日本海に面して東アジア世界に直結した地勢にあり、当時の緊張感が当地での活動再開を促したのであろう。

### (3) 行政施設の設置と砂州の液状化

マツ属(複雑管東亞属)の増加から、中浜砂州の発達により堤間低地の乾燥化、水域の縮小が推定され、古墳時代後期の集落は飛鳥時代に入って衰退したと思われる。その後、第1次調査の微高地Aでは柵列で囲繞された建物群が、方位を揃えて計画的に造営されている。

銅製の巡方2点、丸軋2点、石製巡方1点、墨書土器や転用硯・水滴、権衡の石製錘などの官衙的な要素が強い遺物が多く出土しており、出土土器から7世紀中葉～9世紀後半に営まれた施設と考えられる。花粉・植物珪酸体分析から、周辺では稲作や畠作も行われていた可能性が指摘されている。

第1次調査では、鍛冶関係の遺構・遺物も出土しており、製錬を推定させる遺物があることから、浜砂鉄が利用された可能性があり、付近に砂鉄の集積した浜があったことを推察させる。古墳時代からの港湾機能が継承された、津や厩が付帯する行政施設であったと推定される。

また、微高地A・Bでは、第4章第3節で詳述したように、第7層上部は液状化により塊状を呈し、上面から第6b層にかけて擾乱した層相をなし、第5・6層に貫入する砂脈が多数確認された(第104図)。液状化が発生したのは畠の初現期とされる11世紀後半以前で、第5層上面遺構の下限である9世紀後半以降に発生したと推定され、記録に残る880(元慶4)年の「出雲地震」の痕跡である可能性が高い。

地盤が横揺れに弱い砂地で、簡易な小型建物を主体とする建物群などが大きな被害を受けたことは容易に推定でき、この震災被害により官衙機能が停止したと考えることができる。

### (4) クロスナの活用と飛砂被害

平安時代末期ごろ、低湿地を除く微高地A・Bの全域が畠として開発される(第107図)。砂州上に弥生時代を通じて形成されてきた古土壌のクロスナが、生産活動の対象として、本格的に活用されたことになる。

砂質土ではあるが、腐植を多く含んで保水力があるクロスナの発達が、この時期の農地開発を可能にしたといえる。錦町第1遺跡でも同層準で畠が検出されており、その土地区画に博労町遺跡と一連の計画性が認められることから、砂州上でクロスナが分布する範囲の全体が農地化されていた可能性がある。

花粉・植物珪酸体分析によれば、イネ・ムギ・ソバ・アズキ(あるいはササゲ)・ナス(あるいはジャガイモ)などの栽培が推定されている。

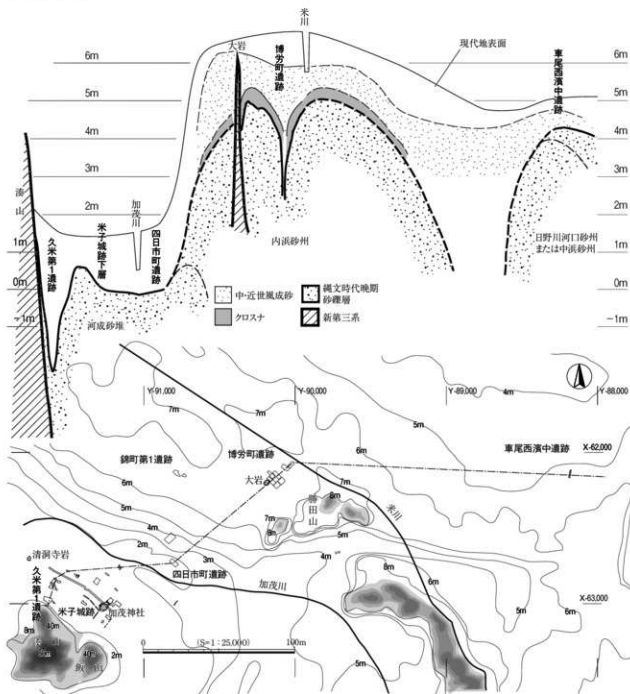
しかし、クロスナは一般的にクロボク土と同様に酸性土壌とされ、農耕に適さないため、ススキやササ類の草原や収穫後の残渣を焼くことで土壌改良をした可能性があるが、考古学的には確認されていない。農地の管理・経営を担った人間集団による、クロスナへの本格的な働きかけがここから始まり、室町時代まで継続することになる。

畠の灌溉は天水灌溉が基本と思われ、堤間低地斜面の畠では、畝間溝内の雨水の保水策として、畝を短くして、断続的に配置するよう造成していた。干害に際しての補給水灌溉としては、野井戸

などは確認できなかつたため、水源を低湿地に続く河川や丘陵裾の湧水池などに求めて、畦畔沿いの溝を利用したり担送したりしたと推定される。

畠を区画する東西の大畦畔は、区画としては必要以上に高く盛り上げて作られており、北ないし北東方向からの飛砂対策としての、防砂堤の役割をもっていたと考えられる。風成砂で埋まった畝間溝の上に、新たに畝立てした部分も確認されており、14世紀前半の農地経営の最終段階ごろには、飛砂被害が深刻になっていたことを示している。

また、この時期以降、砂州はさらに発達して汀線が後退し、補給水灌漑の水源が失われていくなど地形環境の大きな変化があったと思われる、南北朝動乱による社会環境の変化もあり、砂州上での生産活動は停止することになる。



第148図 内浜砂州・中浜砂州の地形断面模式図(下図コンターは現代地形)

その後のこの遺跡周辺は、外浜・中浜砂州由来の風成砂の堆積が継続し、微高地A・Bと堤間低地からなる地形は、最大で厚さ2mに及ぶ第3層の砂丘砂で埋没する。地層断面の観察からは、この層中で明確な土壌形成や人間活動は確認できなかった。

次に人間活動が認められるのは、18世紀前半の米川用水の開削により、この砂を作土とする農地開発が行われた江戸時代後期以降となる。

最後に、周辺遺跡の地層記録を参考にして作成した、湊山北麓から日野川河口左岸付近までの、米子低地から弓ヶ浜半島の地形断面模式図を第148図に示しておく。

#### (5) おわりに

以上、博労町遺跡の発掘調査に際して、砂粒の鉱物組成の検討、土壌中の花粉・植物珪酸体化石の分析および種実同定、考古学的な地層観察と生物活動痕跡の調査を行い、弓ヶ浜半島の形成と古環境の変化、人間活動の変遷についての考察を試みた。しかし、更新統以前の地層の検討や、人間が居住し農耕を行うための水環境、クロスナ形成にかかわる土壌学的な検討など、多くの検討課題を残すことになった。

今後、砂丘遺跡における考古・歴史学の人文科学および、自然科学の各分野を含めた学際的な共同研究が進められることで、これらの課題解決が図られることに期待したい。

(京嶋)

## 第Ⅵ章 まとめ

今回の調査では、縄文時代晩期から江戸時代の遺構・遺物が検出された。縄文時代晩期から弥生時代後期の遺構は検出されなかったが、検出された遺構の時期は、弥生時代終末期～古墳時代、奈良～平安時代、鎌倉～室町時代、江戸時代の4時期に分けられる。

本章では今回の調査成果を基に、隣接する第1次調査との比較・検討を行うことにより、まとめとしたい。

今回の調査の第一の成果として、縄文時代晩期の土器の出土がある。第1次調査では、縄文時代晩期の土器は出土しておらず、弥生時代終末期が最古の資料であった。今回の調査では、1区の低湿地を中心に土器が出土しており、このことから当地での人間の活動開始時期が縄文時代晩期にまで遡ることが明らかとなった。さらに、本調査地の西約600mに位置する錦町第1遺跡からも当該期の土器が出土しており、内浜砂州基部における人間の活動が当該期に比較的広範囲で開始されたと考えられる。しかし、その後の動向は、本遺跡では弥生時代中期～後期の土器が僅かに出土したのみで、本遺跡周辺では、弥生時代を通じて集落を形成するような環境ではなかったと考えられる。

次に、本遺跡から出土した突帯文土器群について見てみると、これらの土器群は晩期後葉の古海式段階に帰属するものである。点数が少ないうえに一括性が認めたい資料であるが、鳥取県西部では当該期の資料が少ないという現状において、この段階の資料を十分に補完できるものであり、この段階の土器を検証するうえで、たいへん意義のある資料である。本資料及び今後の調査による資料の増加によって、鳥取県西部における古海式段階の突帯文土器群の様相が明らかとなることに期待したい。

弥生時代終末期～古墳時代前期の集落は、出土土器から第1次調査で検出された集落と併存していたと考えられるが、1区で検出された低湿地によって第1次調査で検出された集落とは区切られている。さらに、両集落とも低湿地周辺に井戸を集中して築いており、この低湿地が生活用水の供給源となっていたと考えられる。また、両集落は、海に近接した立地や、第1次調査では多量の土錘、石錘、準構造船を模した船形土器、布留系土器などが出土していることから、漁撈や交易など、海と密接に関わる活動を行っていたと考えられる。

古墳時代中期には、第1次調査、本調査とも遺物の出土はほとんど認められず、集落は一時廃絶するが、古墳時代後期になると第1次調査や本調査で再び集落が形成されており、前期と同じ立地であることから、海を舞台とする活動の再開が示唆される。

奈良～平安時代は、第1次調査では官衙的な遺構群・遺物が出土しているが、本調査では小規模な建物数棟、井戸、畝の畝間溝が検出されているのみであり、1区の低湿地（自然地形による制約）により、本調査地まで官衙域が展開しなかったであろう。本調査地では、畝の畝間溝の存在やかなり細片化した土器の出土から、中世の畝に先行して畝の耕作が行われていたと推測される。また、地震による液状化に伴う砂脈が確認され、層位的に第1次調査での官衙施設の廃絶時期との関連性が窺える。『三代實録』や『類聚国史』に記録のある880（元慶4）年11月に発生した「出雲地震」により、官衙的施設が壊滅的な被害を受け、その機能は終焉を迎えた可能性が示唆される。

鎌倉～室町時代には、調査地全域にわたって畝跡を検出した。畝跡は、南北方向にのびる里道、東西大畦畔、低湿地（SD101）によって大きく5区画に分けられ、さらに、畝幅や畝の方向の違いから



小区画に細分される。また、小区画に区分された畠により栽培作物が異なる可能性があり、花粉分析と種実同定の結果からイネ、ムギ、ソバ、アズキ、ナスが栽培されていたと推測される。

本調査で検出された里道や大畦畔と第1次調査で検出された畠跡の畦畔との位置関係から、一町(109 m)四方の土地区画があった可能性がある。さらに、錦町第1遺跡でも、この区画と関連のある畠跡の大畦畔が確認されており、広域的に条里的な土地区画が施行され、これを基に大規模な農地開発が行われたと推測される。博労町遺跡の畠跡は、12世紀を中心に経営され、14世紀前半まで継続するが、14世中葉になると、多量の飛砂の堆積によって耕作を放棄せざるを得ない状況となる。

江戸時代には、農業用と考えられる多くの溝を検出した。このうちSD11・13は本調査地の東側に隣接する米川から引水し、二股に分岐する幹線水路と推測され、SD07はSD11から分岐した支線水路と考えられる。それ以外の溝は、平行あるいは直交するようにのびており、耕作地を区画する畝間溝と考えられ、幹線水路から支線水路・畝間溝に給水していく灌漑システムが想定される。一方、第1次調査では、数条の溝とともに「綿井戸」と呼ばれる灌漑用の井戸が多く検出されており、灌漑システムの違いが見られる。このように米子町近郊における農村開発が行われ、近代以降、砂丘地帯では綿の栽培が盛んとなり、「伯州綿」が特産品となることから、綿を中心とした農業生産が行われたと考えられる。

最後に、これまでの2次にわたる博労町遺跡の発掘調査によって、海浜砂丘地における地形環境・植生の変遷といった自然環境の変化とともに、それぞれの環境下における人間の活動の様相が明らかとなったことは、この地域の歴史像を考えるうえで、重要な一資料を得ることができた。しかし、海浜砂丘地での調査例は少なく、今後の調査資料の蓄積に期待するとともに、膨大な調査資料のある内陸丘陵地の遺跡群とを比較・検討することによって、さらにこの地域の広範的な歴史像が明らかになっていくことであろう。

(高橋)

## 遺物觀察表

土器・土製品・陶磁器観察表

遺物番号	押戻回数	出土地層位	種別	法長 (cm)		画像・文様	胎土	焼成	色調	備考	
				口径	高さ						
1	17 47	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	(170)	—	(5.2)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-1期 内腔接合
2	17 47	F 5東 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(277)	—	(7.5)	外面：釉・彫痕が現る横・左上がりのナデ 内面：ヘラ状工具による横方向のナデ	善	良好	暗褐色	Ⅱ a 2-1期 内腔接合
3	17 47	I区 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(270)	—	(14.3)	外面：釉・彫痕が現る横・左上がりのナデ 内面：釉・彫痕が現る横方向のナデ	善	良好	暗褐色	Ⅱ a 2-1期 内腔接合
4	17 47	S E 3 0 3	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.8)	外面：調整不明 内面：調整不明	善	良好	灰白色	Ⅱ a 2-1期 柱見Ⅱ式
5	17 47	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.8)	外面：横方向のナデ 内面：ナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-1期
6	17 47	H 5・1 5 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(3.2)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰褐色	Ⅱ a 2-1期
7	17 47	G 3 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(5.8)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	暗灰色	Ⅱ a 2-1期
8	17 47	H 4 第5層下層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(5.8)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-1期 内腔接合
9	17 47	F 5西 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(4.9)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	茶褐色	Ⅱ a 2-1期 内腔接合 外面保存層
10	17 47	S D 3 0 1	夾帯文土器 深 鉢	(273)	—	(4.9)	外面：釉・彫痕が現る横・右上がりのナデ 内面：釉・彫痕が現る横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-2期 内腔接合
11	17 47	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	(280)	—	(8.0)	外面：釉・彫痕が現る横・右上がりのナデ 内面：釉・彫痕が現る横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-2期 内腔接合 外面保存層
12	17 47	H 5・1 6 第6層	夾帯文土器 深 鉢	(122)	—	(4.8)	外面：横方向のナデ、二条夾帯 内面：横方向のナデ	善	良好	灰褐色	Ⅱ b 2-1期 外面保存層
13	17 47	F 4東 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(56.1)	—	(4.2)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 2-1期
14	17 47	G 3 第6層	夾帯文土器 深 鉢	(19.8)	—	(8.4)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 2-1期
15	17 47	F 5東 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(25.6)	—	(5.6)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰色	Ⅱ b 2-1期 外面保存層
16	17 47	F 4東 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(23.5)	—	(8.2)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：釉・彫痕が現る横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 2-1期 内腔接合 外面保存層
17	17 47	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(3.9)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 2-1期 柱見Ⅱ式 内腔接合
18	17 47	F 4 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.7)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 2-1期 内腔接合
19	17 47	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(3.4)	外面：横方向のナデ 内面：ナデ	善	良好	茶灰色	Ⅱ b 2-1期
20	17 47	F 8 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(4.7)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良	茶灰色	Ⅱ b 2-1期 外面保存層
21	17 47	G 3 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.2)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	茶灰色	Ⅱ b 2-1期
22	17 47	H 4 第5層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.1)	外面：調整不明 内面：調整不明	善	良好	褐色	Ⅱ b 2-1期
23	17 47	G 3 第5層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.8)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰褐色	Ⅱ b 2-1期 内腔接合
24	17 47	H 4 第5層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.4)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰白色	Ⅱ b 2-1期 内腔接合
25	17 48	F 6・G 6西 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(21.2)	—	(5.8)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 4-1期 内腔接合
26	17 48	F 4 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(17.6)	—	(4.2)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰褐色	Ⅱ b 4-2期 外面保存層
27	17 48	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	(28.5)	—	(11.7)	外面：釉・彫痕が現る左上がりのナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 4-2期 内腔接合
28	17 48	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	(18.9)	—	(5.2)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-2期 内腔接合
29	17 48	品101	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.4)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰色	Ⅱ d 4-1期
30	17 48	F 2・G 2 第5層下層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.7)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰褐色	Ⅱ a 2-1期 内腔接合 外面保存層
31	17 48	G 4・H 4 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.4)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-1期
32	17 48	S D 3 0 1	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(2.8)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-1期
33	17 48	G 3 第6層	夾帯文土器 深 鉢	(23.5)	—	(3.4)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-1期
34	17 48	S E 3 0 2	夾帯文土器 深 鉢	(20.6)	—	(14.3)	外面：釉・彫痕が現る横方向のナデ 内面：釉・彫痕が現る横方向のナデ	善	良好	灰褐色	Ⅱ a 4-2期 内腔接合 外面保存層
35	17 48	G 3 第6層	夾帯文土器 深 鉢	—	—	(6.9)	外面：釉・彫痕が現る左上がりのナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 4-2期 内腔接合
36	18 48	F 4 第5層下層	夾帯文土器 深 鉢	(15.0)	—	(2.9)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ a 2-1期 内腔接合 外面保存層
37	18 48	F 5 第5・6層	夾帯文土器 深 鉢	(20.0)	—	(2.8)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	褐色	Ⅱ b 2-1期 内腔接合
38	18 49	S E 3 0 4	夾帯文土器 深 鉢	(06.4)	—	(7.0)	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	善	良好	灰褐色	Ⅱ b 2-1期 内腔接合 外面保存層

遺物 番号	探検 回数	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調査・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
39	18 49	1区 第6層	夾帯文土器 深鉢	07.0	—	07.0	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	灰茶褐色	番b2-1期 内臓統合 外面保存者
40	18 49	F6 第5・6層	夾帯文土器 深鉢	02.0	—	01.0	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	灰褐色	番b2-1期 内臓統合 外面保存者
41	18 49	G4・H4 第6層	夾帯文土器 深鉢	07.0	—	04.0	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ	密	良好	灰褐色	番b2-2期 内臓統合 外面保存者
42	18 49	G3 第6層	夾帯文土器 深鉢	03.0	—	06.0	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：へう状工具による横方向のナデ	密	良好	褐色	番b2-2期 内臓統合 外面保存者
43	18 49	F4東 第5・6層	夾帯文土器 深鉢	03.0	—	00.0	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	灰茶色	番b4-1期 内臓統合 外面保存者
44	18 49	SD301	夾帯文土器 深鉢	03.0	—	05.1	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	灰褐色	番b4-2期 内臓統合 外面保存者
45	18 —	SD301	夾帯文土器 深鉢	03.0	—	06.7	外面：釉い・磨痕が残る横・左上がりのナデ 内面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ	密	良好	褐色	
46	18 50	F5東 第5・6層	夾帯文土器 深鉢	—	—	02.3	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ、肩口突帯 内面：横方向のナデ	密	良好	褐色	
47	18 50	F6・G6西 第5・6層	夾帯文土器 深鉢	—	—	02.8	外面：調整不明、肩口突帯 内面：調整不明	密	良好	褐色	
48	18 —	H4 第6層	夾帯文土器 深鉢	—	—	03.0	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：縦方向のナデ	密	良好	褐色	内臓統合
49	18 —	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	—	—	05.0	外面：横方向のナデ、1条の沈線 内面：横方向のナデ	密	良好	茶色	B1期 内臓統合 外面保存者
50	18 —	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	06.0	—	03.0	外面：横方向のナデ、肩口突帯 内面：横方向のナデ	密	良好	褐色	B2期
51	18 50	F5 第5・6層	夾帯文土器 浅鉢	04.0	—	03.0	外面：横方向のナデ、肩口突帯 内面：横方向のナデ	密	良好	橙褐色	B2期
52	18 —	F6・G6西 第5・6層	夾帯文土器 浅鉢	09.1	—	02.8	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	褐色	B2期 口縁部磨削 鎌刃式
53	18 49	SD204	夾帯文土器 浅鉢	06.0	—	06.1	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
54	18 —	F6・G6西 第5・6層	夾帯文土器 浅鉢	08.8	—	03.8	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	褐色	B2期 内臓統合
55	18 49	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	08.2	—	06.2	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
56	18 —	F5 第5・6層	夾帯文土器 浅鉢	02.0	—	04.0	外面：釉い・磨痕が残る左上がりのナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	橙褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
57	18 49	H4	夾帯文土器 浅鉢	05.7	—	04.8	外面：釉い・磨痕が残る左上がりのナデ 内面：へう状工具による横方向のナデ	密	良好	赤褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
58	18 49	F5東 第5・6層	夾帯文土器 浅鉢	03.0	—	04.0	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	橙褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
59	18 49	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	08.2	—	06.0	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	灰茶色	B2期 内臓統合 外面保存者
60	18 —	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	00.0	—	05.3	外面：釉い・磨痕が残る左上がりのナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
61	18 49	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	03.2	—	06.0	外面：横方向のナデ 内面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ	密	良好	灰茶色	B2期 外面保存者
62	18 49	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	02.8	—	04.5	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	灰褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
63	18 49	F2・G2 第6層	夾帯文土器 浅鉢	07.2	—	04.0	外面：横方向のナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	橙褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
64	18 —	E3 第5・6層	夾帯文土器 浅鉢	—	—	03.0	外面：釉い・磨痕が残る左上がりのナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	茶褐色	B2期
65	18 49	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	00.0	—	07.1	外面：釉い・磨痕が残る左上がりのナデ 内面：横方向のナデ	密	良好	茶褐色	B2期 内臓統合 外面保存者
66	18 —	G4・H4 第6層	夾帯文土器 浅鉢	09.0	—	05.8	外面：釉い・磨痕が残る横方向のナデ、肩口突帯 内面：横方向のナデ	密	良好	茶褐色	B2期 内臓統合
67	18 —	SE303	縄文土器	—	—	02.0	外面：6条の平行沈線 内面：へう状工具による横方向のナデ	密	良好	灰褐色	東北系
1	19 30	E6・F5 第5・6層	弥生土器 灰白磁	04.0	—	02.3	外面：口縁部磨削 口縁部コナデ 内面：コナテ・磨損ケズリ	密	良	灰白色	
1	25 50	S1301	弥生土器 灰	08.8	—	05.0	外面：口縁部平行沈線、磨損コナテ 内面：口縁部コナテ、ミガキ 磨損ケズリ・ミガキ	密	良	灰褐色	
2	25 —	S1301	土師器 灰白磁	00.0	—	07.1	外面：ハケメ痕ナデ 内面：口縁部コナテ、磨損ケズリ	密	良好	橙褐色	
3	25 —	S1301	土師器 磁	00.0	—	05.2	外面：口縁部コナテ 内面：口縁部コナテ、磨損シボリ、磨損ケズリ	密	良好	灰茶色	

遺物 番号	押戻 回数	出土地 番号	種 別	寸法 (cm)			調 整 ・ 文 様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
				口 径	底 径	高 さ					
4	25	S1301	土師器 壺	φ7.0	—	φ5.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黒	良好	赤褐色	
5	25	S1301	土師器 壺	φ20.0	—	φ9.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部拍摩さえ 肩部ケズリ	黒	良好	淡褐色	
6	25	S1301	土師器 大型壺	φ32.0	—	φ6.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良	淡褐色	
7	25	S1301	土師器 壺	φ24.0	—	φ4.0	外面：口縁部湾状文、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良	褐色	
8	25	S1301	土師器 壺	φ50.0	—	φ5.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良	褐色	内外面保存着
9	25	S1301	土師器 壺	φ40.0	—	φ6.0	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	褐色	
10	25	S1301	土師器 壺	φ72.0	—	φ8.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	褐色	
11	25	S1301	土師器 壺	φ40.0	—	φ42.0	外面：口縁部ヨコナデ、肩部湾状文 体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 底部ケズリ、拍摩さえ	黒	良好	褐色	外面保存着
12	25	S1301	土師器 壺	φ62.0	—	φ25.0	外面：口縁部ヨコナデ、肩部湾状文 体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	灰褐色	外面保存着
13	25	S1301	土師器 底部	—	φ6.0	φ2.0	外面：ハケメ 内面：ケズリ後ナデ	黒	良	灰色	
14	25	S1301	土師器 底部	—	φ6.0	φ2.0	外面：ナデ 内面：ケズリ、拍摩さえ	黒	良好	灰褐色	
15	25	S1301	土師器 高 坏	φ65.0	—	φ6.0	外面：口縁部ハケメ、体部ナデ、底部ハケメ 内面：ナデ	黒	良好	褐色	
16	25	S1301	土師器 高 坏	φ21.0	—	φ5.1	外面：口縁部ミガキ後ナデ 体部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ミガキ、体部ナデ	黒	良好	褐色	
17	25	S1301	土師器 高 坏	φ23.0	—	φ6.0	外面：ハケメ後ナデ 内面：ハケメ後ナデ	黒	良好	褐色	
18	25	S1301	土師器 脱胎坏	φ1.8	—	φ3.0	外面：口縁部ナデ、体部ハケメ後ナデ 内面：ミガキ	黒	良	灰褐色	
19	25	S1301	土師器 脱胎坏	φ127.0	—	φ3.0	外面：ミガキ 内面：ミガキ	黒	良好	褐色	
20	25	S1301	土師器 脱胎坏	—	4.5	φ2.0	外面：ナデ 内面：ナデ、拍摩さえ	黒	良	灰褐色	
21	25	S1301	土師器 脱胎坏	—	0.0	φ2.0	外面：ハケメナデ 内面：口縁部ミガキ後ナデ、肩部ナデ	黒	良	灰白色	
22	25	S1301	土師器 脱胎坏	—	18.2	φ4.0	外面：ハケメ後ミガキ 内面：肩部ケズリ、底部ハケメ	黒	良	灰白色	
23	25	S1301	土師器 脱胎器台	—	—	φ8.1	外面：ヨコナデ 内面：受部ミガキ、脚部ケズリ	黒	良好	褐色	
24	25	S1301	土師器 脱胎器台	—	φ20.0	φ4.0	外面：ヨコナデ 内面：脚部ケズリ、肩部ナデ	黒	良好	褐色	
25	25	S1301	土師器 脱胎器台	—	φ16.0	φ4.0	外面：ヨコナデ、列点文 内面：脚部ケズリ、底部ナデ	黒	良好	褐色	
26	25	S1301	土師器 脱胎土器	—	—	φ62.0	外面：体部ハケメ、把手ナデ、拍摩さえ 内面：ケズリ	黒	良好	灰褐色	壊状把手
27	25	S1301	土師器 脱胎土器	—	—	φ9.0	外面：体部ハケメ、ヨコナデ 把手ナデ、拍摩さえ 内面：ケズル、ナデ、拍摩さえ	黒	良好	灰灰褐色	壊状把手
28	25	S1301	土師器 脱胎土器	—	—	—	外面：ナデ	黒	良好	灰褐色	壊状把手
1	27	S1302	赤土器 壺	φ7.0	—	φ4.0	外面：口縁部7条の縦溝、頸部列点文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良	灰褐色	
2	27	S1302	土師器 壺	φ9.0	—	φ3.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	灰色	
3	27	S1302	土師器 壺	φ9.0	—	φ5.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	褐色	
4	27	S1302	土師器 壺	φ38.0	—	φ15.7	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部拍摩さえ 肩部ケズリ後ミガキ	黒	良好	灰褐色	外面保存着
5	27	S1302	土師器 直口壺	φ10.0	—	φ7.1	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	褐色	
6	27	S1302	土師器 壺	15.6	—	φ7.7	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、拍摩さえ 肩部シボリ、肩部ケズリ	黒	良好	灰褐色	
7	27	S1302	土師器 壺	φ20.0	—	φ10.1	外面：口縁部ヨコナデ、肩部湾状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部シボリ 肩部ケズリ	黒	良好	灰褐色	
8	27	S1302	土師器 小型壺	—	—	φ6.0	外面：ハケメ後ミガキ、ナデ 内面：ナデ、拍摩さえ	黒	良好	赤褐色	脚台付
9	27	S1302	土師器 壺	φ07.0	—	φ5.0	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	赤褐色	外面保存着
10	27	S1302	土師器 壺	152.0	—	φ16.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ケズリ、拍摩さえ	黒	良好	灰褐色	
11	27	S1302	土師器 壺	130.0	—	φ6.0	外面：口縁部ミガキ 肩部ハケメ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	良好	灰褐色	

建物 番号	種別 区分	出土地 単位	種別 名称	法量 (cm)			調 整 ・ 文 様	胎土	焼成	色 調	備 考
				口 径	底 径	高 さ					
12	27	S 13 0 2	土師器 類	(14.8)	—	(7.2)	外面：口縁部ココナテ、前部輪飾平行線 内面：口縁部ココナテ、前部ケズリ	密	良好	褐色	
13	27	S 13 0 2	土師器 類	(17.3)	—	(7.1)	外面：口縁部ココナテ、前部波状文 内面：口縁部ココナテ、前部ケズリ	密	良好	灰褐色	
14	27	S 13 0 2	土師器 類	(14.2)	—	(10.8)	外面：口縁部ココナテ、前部列点文 体部ハケメ・ナテ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ	密	良好	茶褐色	
15	27	S 13 0 2	土師器 類	(13.7)	—	(11.3)	外面：口縁部ココナテ、前部輪飾平行線 体部輪状工具による文様 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ	密	良好	淡褐色	
16	27	S 13 0 2	土師器 類	04.2	—	06.4	外面：口縁部ココナテ、前部波状文 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、頸部シボリ 体部上半部ケズリ 体部下半部ケズリ・指押さえ	密	良好	褐色	外面腐付着
17	27	S 13 0 2	土師器 類	(15.3)	—	(16.8)	外面：口縁部ココナテ、前部波状文 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、前部ケズリ 体部ケズリ・指押さえ	密	良好	茶褐色	外面腐付着
18	27 31	S 13 0 2	土師器 類	(16.0)	—	(18.4)	外面：口縁部ココナテ、前部波状文 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、体部上半部ケズリ 体部下半部ケズリ・指押さえ	密	良好	褐色	
19	27 31	S 13 0 2	土師器 類	(17.0)	—	23.3	外面：口縁部ココナテ、前部波状文 体部ハケメ、底部ハケメ良ナテ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ 底部ケズリ・指押さえ	密	良好	茶褐色	外面腐付着
20	27 31	S 13 0 2	土師器 類	14.4	—	21.0	外面：口縁部ココナテ、前部列点文、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、頸部指押さえ 体部ケズリ、底部ケズリ・指押さえ	密	良	褐色	
21	27	S 13 0 2	土師器 類	(12.5)	—	(4.0)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、前部ケズリ	密	良好	褐色	外面腐付着
22	27	S 13 0 2	土師器 類	(10.9)	—	(7.5)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、前部ケズリ	密	良好	赤茶色	外面腐付着
23	28	S 13 0 2	土師器 有須弥蓋	(16.3)	—	38.2	外面：口縁部ココナテ、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ 内面：体部ケズリ・ナテ・指押さえ	密	良好	褐色	体部下部に穿 孔あり
24	28	S 13 0 2	土師器 高 杯	18.4	—	6.0	外面：ミヅキ・ハケメ 内面：ミヅキ	密	良好	灰褐色	
25	28	S 13 0 2	土師器 高 杯	(25.2)	—	(5.7)	外面：口縁部ココナテ、体部ミヅキ 内面：口縁部ココナテ、体部ミヅキ	密	良好	褐色	
26	28	S 13 0 2	土師器 高 杯	(23.2)	—	(5.8)	外面：口縁部ココナテ、体部ミヅキ 内面：ミヅキ・指押さえ	密	良好	褐色	
27	28	S 13 0 2	土師器 高 杯	(27.0)	—	(6.0)	外面：ハケメ 内面：ミヅキ	密	良好	茶褐色	
28	28	S 13 0 2	土師器 高 杯	(16.0)	—	(3.9)	外面：ミヅキ 内面：ミヅキ	密	良好	赤茶色	
29	28	S 13 0 2	土師器 高 杯	32.0	—	(6.9)	外面：ミヅキ 内面：ミヅキ・輪状工具痕	密	良好	茶褐色	
30	28	S 13 0 2	土師器 高 杯	—	(15.6)	(9.5)	外面：ハケメ 内面：腹部ケズリ、腹部ハケメ	密	良	灰茶色	
31	28	S 13 0 2	土師器 瓶形杯	—	7.4	(2.5)	外面：ナテ 内面：ナテ	密	良好	褐色	
32	28	S 13 0 2	土師器 瓶形杯	—	(8.2)	(3.4)	外面：ナテ 内面：杯部ミヅキ、腹部ナテ	密	良好	褐色	
33	28	S 13 0 2	土師器 瓶形杯	—	(7.5)	(3.1)	外面：ナテ 内面：杯部ミヅキ、腹部ナテ	密	良好	灰褐色	
34	28	S 13 0 2	土師器 瓶形杯	—	6.4	(3.9)	外面：杯部ミヅキ、杯部ハケメ 腹部ナテ 内面：杯部ミヅキ、腹部ナテ	密	良好	灰茶色	
35	28	S 13 0 2	土師器 瓶形杯	—	(10.3)	(5.1)	外面：ハケメ・ナテ・指押さえ 内面：杯部ミヅキ、腹部ケズリ	密	良好	褐色	内孔あり
36	28	S 13 0 2	土師器 鉢	(12.3)	—	(6.5)	外面：口縁部ココナテ、体部ハケメ 内面：ココナテ・指押さえ	密	良好	褐色	
37	28 32	S 13 0 2	土師器 片口鉢	15.4	—	7.5	外面：ミヅキ・指押さえ 内面：ミヅキ・指押さえ	密	良好	褐色	
38	28 32	S 13 0 2	土師器 片口鉢	16.5	—	7.0	外面：ハケメ・ミヅキ 内面：ミヅキ・指押さえ	密	良好	赤茶色	
39	28	S 13 0 2	土師器 腹形台	—	—	(5.5)	外面：ココナテ 内面：ミヅキ	密	良好	灰褐色	
40	28	S 13 0 2	土師器 腹形台	—	—	(5.4)	外面：ココナテ 内面：杯部ミヅキ、腹部ケズリ	密	良好	橙褐色	
41	28	S 13 0 2	土師器 腹形台	—	(17.0)	(6.7)	外面：ココナテ 内面：ケズリ	密	良好	褐色	
42	28	S 13 0 2	土師器 腹形台	—	(18.5)	(2.7)	外面：ココナテ 内面：ケズリ	密	良好	茶色	
43	28	S 13 0 2	土師器 腹形台	—	(19.1)	(5.3)	外面：ココナテ 内面：ケズリ	密	良好	褐色	
44	28	S 13 0 2	土師器 腹形台	—	(21.0)	(5.8)	外面：ココナテ 内面：腹部ケズリ、腹部ミヅキ	密	良好	褐色	
45	28	S 13 0 2	土師器 蓋	—	—	(2.5)	外面：ナテ 内面：ナテ	密	良好	褐色	
46	28	S 13 0 2	ミニチュア土師 甕 形	(8.3)	—	(4.0)	外面：ナテ・指押さえ 内面：ナテ	密	良好	灰褐色	

遺物 番号	神田 区版	出土地 番 位	種 別 種 類	寸 法 (cm)			測 量・文 様	胎 土	規 成	色 調	備 考
				口 径	底 径	高 さ					
47	28 52	S 1302	ミニチュア土器 形 形	—	—	6.9	外面：ナデ・指押さえ 内面：黒部ナデ、唇部ケズリ後ナデ 体部-底部ナデ・指押さえ	赤	良好	褐色	
48	28 52	S 1302	ミニチュア土器 高 杯 形	7.6	5.8	6.0	外面：ナデ・ミガキ 内面：杯底ミガキ、唇部ケズリナデ 唇部ミガキ・指押さえ	赤	良好	褐色	
49	28 52	S 1302	灰色青緑土器 短 瓶 形	—	—	0.7	外面：ミガキ 内面：ミガキ	赤	良好	灰色	
1	30 —	S 1303	赤土土器 壺	41.0	—	44.7	外面：口縁部平行隆線、黒部ナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	褐色	
2	30 —	S 1303	土器 壺	68.8	—	62.5	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ	赤	良	褐色	
3	30 —	S 1303	土器 壺	44.8	—	43.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	暗褐色	
4	30 —	S 1303	土器 壺	45.6	—	45.7	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	褐色	
5	30 —	S 1303	土器 大型壺	66.0	—	65.0	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	褐色	
6	30 —	S 1303	土器 壺	13.8	—	46.2	外面：口縁部ヨコナデ、唇部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、唇部指押さえ 唇部ケズリ	赤	良	褐色	外面残付着
7	30 —	S 1303	土器 壺	46.0	—	40.0	外面：口縁部ヨコナデ、唇部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ	赤	良	褐色	外面残付着
8	30 —	S 1303	土器 壺	44.0	—	45.7	外面：口縁部ヨコナデ 唇部ハケメ・1本の隆線 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ	赤	良	灰褐色	
9	30 —	S 1303	土器 高 杯	46.6	—	41.8	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ	赤	良	灰褐色	
10	30 52	S 1303	土器 高 杯	12.8	—	46.9	外面：ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	黄褐色	
11	30 52	S 1303	土器 高 杯	13.3	—	44.9	外面：ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	褐色	
12	30 —	S 1303	土器 高 杯	42.2	—	65.2	外面：ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	灰褐色	
13	30 —	S 1303	土器 高 杯	42.4	—	65.8	外面：ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	灰褐色	
14	30 52	S 1303	土器 高 杯	24.0	—	46.7	外面：口縁部ミガキ、底部ハケメ 内面：ミガキ	赤	良	灰褐色	
15	30 52	S 1303	土器 高 杯	23.4	—	42.3	外面：杯底ミガキ、唇部ハケメ 内面：杯底ミガキ、唇部ケズリ	赤	良	暗褐色	
16	30 —	S 1303	土器 瓶 形 杯	—	4.3	41.7	外面：ナデ 内面：杯底ケズリ後ナデ、唇部ナデ	赤	良	灰褐色	
17	30 —	S 1303	土器 瓶 形 杯	—	6.6	42.9	外面：ミガキ 内面：杯底ミガキ、唇部ナデ	赤	良	黄褐色	
18	30 —	S 1303	土器 瓶 形 杯	—	6.0	44.0	外面：杯底ハケメ後ナデ、唇部ナデ 内面：杯底ケズリ後ナデ、唇部ナデ	赤	良	灰褐色	
19	30 —	S 1303	土器 瓶 形 台	43.8	—	45.8	外面：ヨコナデ 内面：ミガキ	赤	良	灰褐色	
20	30 —	S 1303	土器 小型台	42.6	—	43.6	外面：ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	暗褐色	
21	30 —	S 1303	土器 壺	5.4	—	41.7	外面：ナデ 内面：ミガキ	赤	良	灰褐色	
1	32 —	S 1304	赤土土器 壺	49.0	—	43.9	外面：口縁部4本の縦内線後ナデ 唇部ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ	赤	良	褐色	
2	32 —	S 1304	土器 壺	44.4	—	43.6	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	灰褐色	
3	32 53	S 1304	土器 壺	47.6	—	40.8	外面：口縁部ヨコナデ、頸部斜状文 唇部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ 唇部ケズリ	赤	良	灰褐色	
4	32 53	S 1304	土器 壺	42.0	—	47.0	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ・斜状文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ	赤	良	褐色	
5	32 —	S 1304	土器 瓶 形 台	44.5	—	46.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 唇部ケズリ後ナデ	赤	良	灰白色	
6	32 —	S 1304	土器 大型壺	42.6	—	49.9	外面：口縁部ヨコナデ 唇部輪飾平行線、ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ	赤	良	褐色	
7	32 —	S 1304	土器 大型壺	43.6	—	45.0	外面：口縁部ヨコナデ 唇部波状文、輪飾平行線、ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ後ナデ	赤	良	赤褐色	
8	32 —	S 1304	土器 大型壺	49.6	—	42.7	外面：口縁部ヨコナデ 唇部波状文、輪飾平行線、ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ後ナデ	赤	良	褐色	
9	32 —	S 1304	土器 壺	43.8	—	46.8	外面：ヨコナデ、唇部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部工具痕 唇部ケズリ	赤	良	褐色	外面残付着
10	32 —	S 1304	土器 壺	46.2	—	41.9	外面：口縁部ヨコナデ、唇部波状文、ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ後ナデ	赤	良	灰褐色	外面残付着
11	32 53	S 1304	土器 壺	15.8	—	22.0	外面：口縁部ヨコナデ 唇部輪飾平行線、波状文、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、唇部ケズリ後ナデ 体部ケズリ・指押さえ	赤	良	灰色	

遺物番号	種別 D04	出土地 層位	種類 種	法量 (cm)			調査・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
12	32 53	S 1304	土師器 甕	16.3	—	23.5	外面：口縁部ココナテ 肩部胸指平行線・列点文、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ 体部ケズリ・指押さえ	密	良	黒褐色	体部中央穿孔
13	32 53	S 1304	土師器 甕	15.6	—	23.4	外面：口縁部ココナテ 肩部胸指平行線・列点文、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ 底部ケズリ・指押さえ	密	良	灰白色	底部穿孔
14	33 —	S 1304	土師器 甕	04.6	—	03.8	外面：口縁部ココナテ 肩部胸指平行線・列点文、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、肩部ケズリ	密	良	褐色	
15	33 —	S 1304	土師器 甕	04.6	—	02.8	外面：口縁部ココナテ 肩部胸指平行線・押引文、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、肩部ケズリ	密	良	褐色	
16	33 —	S 1304	土師器 有蓋系	05.6	—	6.0	外面：口縁部ココナテ、肩部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、肩部ケズリ	密	良	灰褐色	
17	33 —	S 1304	土師器 有蓋系	03.6	—	01.2	外面：口縁部ココナテ、肩部ハケメ 内面：口縁部ハケメ、底部指押さえ 体部ケズリ・指押さえ	密	良	褐色	外面煤付着
18	33 —	S 1304	土師器 底部	—	3.4	0.7	外面：ハケメ 内面：ケズリ	密	良	褐色	
19	33 53	S 1304	土師器 底部	—	0.9	0.4	外面：ミガキ・ケズリ 内面：ハケメ工具によるナテ	密	良	灰褐色	
20	33 53	S 1304	土師器 小型丸底甕	9.8	—	7.1	外面：口縁部ミガキ、底部ハケメ 体部ミガキ 内面：口縁部ケズリ後ミガキ 体部指押さえ後ハケメ	密	良	褐色	
21	33 —	S 1304	土師器 高 杯	01.4	—	0.9	外面：口縁部ハケメ後ナテ 底部ハケメ後ミガキ 内面：ミガキ	密	良	黒褐色	
22	33 —	S 1304	土師器 高 杯	04.8	—	0.9	外面：口縁部ハケメ工具によるナテ 体部ハケメ、底部ナテ 内面：ミガキ	密	良	褐色	
23	33 —	S 1304	土師器 高 杯	07.3	—	0.3	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ミガキ	密	良	褐色	
24	33 —	S 1304	土師器 高 杯	04.0	—	0.4	外面：口縁部ハケメ後ナテ、底部ミガキ 内面：ミガキ	密	良	灰白色	
25	33 —	S 1304	土師器 高 杯	—	0.8	0.1	外面：ケズリ後ハケメ後ミガキ 内面：膝上半部ケズリ、膝下半部ナテ 底部ハケメ	密	良	褐色	
26	33 53	S 1304	土師器 高 杯	19.5	12.0	12.5	外面：杯部ミガキ、脚部ケズリ後ミガキ 底部ミガキ 内面：杯部ミガキ、脚部ケズリ 底部ハケメ・指押さえ	密	良	褐色	
27	33 54	S 1304	土師器 高 杯	—	17.6	03.9	外面：ハケメ後ミガキ 内面：杯部ミガキ、脚部ナテ 底部ハケメ・指押さえ	密	良	灰褐色	
28	33 —	S 1304	土師器 高 杯	—	11.5	07.9	外面：ケズリ後ハケメ後ミガキ 内面：脚部ケズリ、底部ハケメ・指押さえ	密	良	灰黄色	
29	33 —	S 1304	土師器 器 台	—	—	8.0	外面：ココナテ、8条の沈線 内面：ケズリ	密	良	褐色	4方向に方形 通し 外面布着
30	33 —	S 1304	土師器 瓶形器台	02.0	—	0.0	外面：ミガキ 内面：受部ケズリ後ミガキ、脚部ケズリ	密	良	褐色	
31	33 —	S 1304	土師器 瓶形器台	—	13.4	08.7	外面：ココナテ 内面：脚部ケズリ後ミガキ、底部ナテ	密	良	褐色	
32	33 —	S 1304	土師器 瓶形器台	—	02.0	07.7	外面：ココナテ 内面：受部ナテ、脚部ケズリ後ナテ 底部ナテ	密	良	灰褐色	
33	33 —	S 1304	土師器 小型器台	0.8	—	0.8	外面：ミガキ 内面：ミガキ	密	良	灰褐色	
34	33 —	S 1304	土師器 蓋	—	—	0.9	外面：指押さえ後ハケメ 内面：ナテ	密	良	褐色	
35	33 —	S 1304	土師器 注口土師	—	—	0.9	外面：ケズリ後ハケメ・ミガキ 内面：ナテ	密	良	灰白色	
36	33 —	S 1304	土師器 丸 形	07.0	—	0.9	外面：ミガキ 内面：ナテ	密	良	褐色	
1	34 54	S 1305	弥生土器 甕	03.8	—	0.8	外面：口縁部平行沈線 肩部1条の沈線・列点文・ミガキ 内面：口縁部ミガキ、肩部ケズリ・ミガキ	密	良	褐色	
2	34 54	S 1305	土師器 甕	03.9	—	21.2	外面：口縁部ココナテ 肩部沈線文・列点文、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、底部ミガキ 体部ケズリ・指押さえ	密	良	褐色	
3	34 —	S 1305	土師器 甕	13.0	—	03.8	外面：口縁部ココナテ、肩部1条の沈線 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、肩部ケズリ後ナテ	密	良	灰褐色	外面煤付着
4	34 —	S 1305	土師器 甕	07.2	—	03.7	外面：口縁部ココナテ、肩部沈線文 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、肩部ケズリ	密	良	灰白色	外面煤付着
5	34 54	S 1305	土師器 甕	22.5	6.0	34.7	外面：口縁部ココナテ、肩部沈線文 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ 底部ケズリ・指押さえ	密	良	灰褐色	



遺物 番号	神田 区画	出土地 番号	種別 種類	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
6	34	S 1305	土師器 高 杯	25.6	—	22.1	外面：環部ミガキ 頸部ハケミ後ミガキ・指押さえ 内面：環部ミガキ 頸部ナデ、頸部ハケミ	赤	良	黒茶色	
7	34	S 1305	土師器 甕 杯	—	18.1	(12.8)	外面：ハケミ後ミガキ 内面：頸部ナデ、頸部ハケミ	赤	良	灰褐色	
8	34	S 1305	土師器 抗脚杯	18.5	5.3	7.2	外面：環部ハケミ後ミガキ、頸部ナデ 内面：環部ハケミ後ミガキ、頸部ナデ	赤	良	黒茶色	
1	37	S 1306	土師器 甕	(18.6)	—	(7.3)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ 肩部ナズリ	赤	良	褐色	内外面保付着
2	37	S 1306	土師器 甕	(10.8)	—	(3.8)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナズリ	赤	良	橙褐色	
3	37	S 1306	土師器 大甕	26.6	—	(6.1)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	灰褐色	
4	37	S 1306	土師器 甕	(17.0)	—	(4.1)	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケミ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナズリ	赤	良	褐色	
5	37	S 1306	土師器 甕	(13.8)	—	(5.3)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナズリ	赤	良	灰褐色	外面保付着
6	37	S 1306	土師器 甕	(15.0)	—	(5.8)	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケミ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナズリ	赤	良	灰褐色	外面保付着
7	37	S 1306	土師器 甕	(15.0)	—	(10.2)	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケミ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ 肩部ナズリ	赤	良	褐色	内外面保付着
8	37	S 1306	土師器 甕	(14.8)	—	(10.3)	外面：口縁部ヨコナデ、頸部ハケミ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ナズリ	赤	良	褐色	外面保付着
9	37	S 1306	土師器 甕	—	—	(22.8)	外面：ハケミ・ナデ 内面：頸部、腹部ナズリ・指押さえ 底部ナズリ	赤	良	灰褐色	
10	37	S 1306	土師器 抗脚杯	14.8	6.0	5.9	外面：環部ミガキ、頸部ナデ 内面：環部口縁部ミガキ、環部底部ナデ 頸部ナデ	赤	良	褐色	
11	37	S 1306	土師器 抗脚杯	(11.6)	—	(3.4)	外面：ハケミ後ナデ 内面：ナズリ後ナデ後ミガキ	赤	良	褐色	
12	37	S 1306	土師器 抗脚杯	—	5.6	(3.8)	外面：ナデ 内面：環部ミガキ、頸部ナデ	赤	良	褐色	
13	37	S 1306	土師器 抗脚杯	—	7.4	(3.3)	外面：ナデ 内面：環部ミガキ、頸部ナデ	赤	良	橙褐色	
14	37	S 1306	土師器 甕形貯台	—	—	(9.3)	外面：ヨコナデ 内面：受部ミガキ、頸部ナズリ	赤	良	灰褐色	
15	37	S 1306	土師器 小型貯台	(9.6)	—	(2.6)	外面：ハケミ後ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	褐色	
16	37	S 1306	土師器 小型貯台	(13.4)	—	(2.7)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	褐色	
17	37	S 1306	土師器 瓶形土器	(34.6)	—	(5.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケミ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナズリ	赤	良	橙褐色	
18	37	S 1306	土師器 瓶形土器	—	—	(4.1)	外面：ナデ 内面：ナズリ	赤	良	灰褐色	
1	38	S 1307	土師器 甕	(17.8)	—	(1.8)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	灰褐色	
2	38	S 1308	弥生土器 甕	(15.6)	—	(5.7)	外面：ヨコナデ・表伏文 内面：口縁部ナデ・指押さえ、肩部ナズリ	赤	良	灰白色	
3	38	S 1308	弥生土器 甕	—	—	(19.0)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケミ 内面：口縁部ナデ、肩部ナズリ	赤	良	灰褐色	外面保付着
4	38	S 1308	弥生土器 甕 部	—	(6.3)	(5.2)	外面：体部ミガキ、肩部表目直 内面：ナズリ・指押さえ	赤	良	橙褐色	
5	38	S 1308	弥生土器 甕 部	—	(5.0)	(1.5)	外面：ミガキ 内面：ナズリ後ナデ	赤	良	灰茶色	
6	38	S 1308	土師器 直口甕	10.8	—	(8.8)	外面：ハケミ後ナデ 内面：口縁部ナデ、肩部ナズリ	赤	良	褐色	
7	38	S 1308	土師器 小型甕	—	—	(6.5)	外面：肩部表伏文・駒橋平行線、体部ハケミ 内面：肩部ナデ、体部ナズリ	赤	良	灰褐色	外面保付着
8	38	S 1308	土師器 甕	(15.8)	—	(10.2)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケミ 肩部駒橋平行線・表伏文 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ 肩部ナズリ	赤	良	灰茶色	
9	38	S 1308	土師器 甕	16.4	—	(18.6)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケミ 肩部駒橋平行線・表伏文 内面：口縁部ナデ、肩部ナズリ	赤	良	橙褐色	外面保付着
10	38	S 1308	土師器 甕	(12.8)	—	(16.8)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケミ 肩部駒橋平行線・表伏文 内面：口縁部ナデ、肩部ナズリ	赤	良	橙褐色	外面保付着
11	38	S 1308	土師器 甕	(17.8)	—	(6.8)	外面：口縁部ヨコナデ、肩部駒橋平行線 内面：口縁部ナデ、肩部ナズリ	赤	良	灰褐色	
12	38	S 1308	土師器 甕	(16.2)	—	(9.1)	外面：口縁部ヨコナデ 内面：肩部表伏文・表伏文・ハケミ 内面：口縁部ナデ、肩部ナズリ	赤	良	灰褐色	
13	38	S 1308	土師器 甕 部	16.6	—	(7.3)	外面：口縁部ヨコナデ 肩部駒橋平行線・刺交文・ハケミ 内面：口縁部ナデ、肩部ナズリ	赤	良	褐色	外面保付着
14	38	S 1308	土師器 甕 部	—	2.6	(6.5)	外面：ハケミ 内面：ナズリ・指押さえ	赤	良	橙褐色	
15	38	S 1308	土師器 甕 部	—	2.4	(2.3)	外面：体部ハケミ、腹部ナデ後ハケミ 内面：ナズリ後ナデ	赤	良	灰茶色	外面保付着

遺物 番号	種別 ID順	出土地 層位	種別 名称	法量 (cm)			調査・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
16	38 50	S 1308	土師器 底 部	—	020	0.80	外周：体部ハケメ、底部ナデ 内周：ナデ、指押さえ	密	良	褐色	外面残付着 底部穿孔
17	38 —	S 1308	土師器 高 杯	0460	—	057	外周：口縁部ナデ後ミガキ 体部ハケメ後ミガキ 内周：ミガキ	密	良	褐色	
18	38 —	S 1308	土師器 高 杯	—	0460	0.41	外周：ハケメ 内周：頸部ナデ	密	良	灰白色	
19	38 —	S 1308	土師器 高 杯	—	—	068	外周：ミガキ 内周：ナズリ	密	良	褐色	
20	38 —	S 1308	土師器 高 杯	—	—	070	外周：ハケメ後ミガキ 内周：ナズリ	密	良	褐色	
21	38 —	S 1308	土師器 残部 残部	014	—	021	外周：口縁部ココナデ、体部ハケメ 内周：ミガキ	密	良	褐色	
22	38 —	S 1308	土師器 残部 残部	—	—	050	外周：ココナデ 内周：ココナデ	密	良	褐色	
23	38 —	S 1308	土師器 残部 残部	210	092	11.1	外周：ココナデ 内周：変部ミガキ、頸部ナズリ	密	良	褐色	
24	38 55	S 1308	土師器 残部 残部	0217	188	107	外周：ココナデ、変部縁周 内周：変部ミガキ、頸部ナズリ	密	良	橙褐色	
25	38 —	S 1308	土師器 残部 残部	—	198	000	外周：ココナデ、変部縁周 内周：変部ミガキ、頸部ナズリ	密	良	灰白色	
26	38 —	S 1308	土師器 残部 残部	—	080	090	外周：体部ハケメ、底部ナデ 内周：体部ナズリ、底部ナデ、指押さえ	密	良	橙褐色	
27	38 —	S 1308	土師器 残部 残部	—	—	030	外周：ハケメ後ナデ 内周：ナデ	密	良	褐色	
28	38 —	S 1308	土師器 残部 残部	—	—	063	外周：ナデ	密	良	褐色	
1	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	080	—	020	外周：ミガキ 内周：ハケメ・ナデ	密	良	褐色	
2	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	0540	—	043	外周：ココナデ 内周：ココナデ	密	良	灰褐色	
3	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	0720	—	040	外周：ココナデ 内周：ココナデ	密	良	黄灰褐色	
4	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	0500	—	002	外周：口縁部ココナデ、肩部列状文 体部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、肩部ナズリ	密	良	黄灰白色	
5	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	—	—	059	外周：明さ目 内周：頸部ココナデ、肩部ナズリ	密	良	褐色	
6	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	—	044	089	外周：体部ハケメ後ナデ・ミガキ 内周：ナズリ	密	良	灰褐色	
7	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	0118	—	040	外周：ミガキ 内周：ミガキ	密	良	橙褐色	
8	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	190	—	053	外周：ミガキ 内周：ミガキ	密	良	橙褐色	
9	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	0720	—	030	外周：ミガキ 内周：ミガキ	密	良	灰白色	
10	40 —	S 1309	土師器 残部 残部	—	098	029	外周：ココナデ 内周：ナズリ	密	良	暗灰色	
1	42 —	S 1311	土師器 残部 残部	0560	—	084	外周：口縁部ココナデ 肩部輪槽平行線・波状文 内周：口縁部ココナデ、肩部ナズリ	密	良	灰白色	
2	42 —	S 1311	土師器 残部 残部	0820	—	053	外周：口縁部ココナデ 内周：口縁部ココナデ、肩部ナズリ	密	良	灰褐色	
3	42 —	S 1311	土師器 残部 残部	0960	—	040	外周：ハケメ工具によるナデ 内周：ミガキ	密	良	褐色	
1	43 55	S 1310	土師器 残部 残部	0550	—	058	外周：ココナデ 内周：口縁部ココナデ、指押さえ 肩部ナズリ	密	良	橙褐色	
2	43 55	S 1310	土師器 残部 残部	0540	—	067	外周：口縁部ココナデ、頸部列状文 肩部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、頸部指押さえ 肩部ナズリ	密	良	灰白色	
3	43 55	S 1310	土師器 残部 残部	0480	—	059	外周：口縁部平行波線、頸部ココナデ 内周：口縁部ココナデ、頸部指押さえ 肩部ナズリ	密	良	灰褐色	
4	43 —	S 1310	土師器 残部 残部	—	060	019	外周：体部ハケメ、底部ナデ 内周：ナズリ後ナデ・ハケメ	密	良	灰白色	
5	43 —	S 1310	土師器 残部 残部	0680	—	022	外周：ココナデ 内周：口縁部ココナデ、指押さえ 肩部ナズリ後ミガキ	密	良	褐色	
6	43 —	S 1310	土師器 残部 残部	0940	—	074	外周：ココナデ 内周：口縁部ココナデ、肩部ナズリ	密	良	褐色	
7	43 —	S 1310	土師器 残部 残部	0900	—	079	外周：ココナデ 内周：ココナデ	密	良	褐色	
8	43 —	S 1310	土師器 残部 残部	0600	—	065	外周：ココナデ 内周：ココナデ	密	良	褐色	
9	43 55	S 1310	土師器 残部 残部	0380	—	069	外周：口縁部ココナデ、肩部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、肩部ナズリ	密	良	灰褐色	
10	43 —	S 1310	土師器 残部 残部	0780	—	054	外周：ココナデ 内周：口縁部ココナデ、肩部ナズリ	密	良	灰褐色	
11	43 —	S 1310	土師器 残部 残部	0580	—	003	外周：口縁部ココナデ、肩部列状文 体部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、体部ナズリ	密	良	灰褐色	

遺物番号	検出 位置	出土地 番号	種別 番号	質量 (g)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
12	43 55	S1310	土師器 甕	28.2	—	7.5	外面：口縁部波状文、肩部柳井字行線 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ 肩部ケズリ	善	良	灰白色	
13	43 —	S1310	土師器 甕	15.6	—	6.7	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良	赤褐色	
14	43 —	S1310	土師器 甕	24.4	—	6.7	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部指押さえ 肩部ケズリ	善	良	灰白色	
15	43 56	S1310	土師器 小型甕	138	—	14.0	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文 体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ケズリ・指押さえ	善	良	灰白色	
16	43 —	S1310	土師器 布置系甕	15.2	—	3.1	外面：ヨコナデ 内面：ハケメ後ミギキ	善	良	灰褐色	
17	43 —	S1310	土師器 小型丸底鉢	49.8	—	4.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 体部ケズリ後ミギキ	善	良	灰褐色	
18	43 —	S1310	土師器 高杯	24.6	—	6.7	外面：ハケメ 内面：ミギキ	善	良	灰褐色	
19	43 —	S1310	土師器 高杯	17.2	—	4.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ミギキ、体部ケズリ後ミギキ	善	良	灰白色	
20	43 —	S1310	土師器 高杯	15.8	—	6.8	外面：ミギキ 内面：ミギキ	善	良	灰白色	
21	43 —	S1310	土師器 高杯	—	—	7.0	外面：脚上半部ミギキ、脚下半部ハケメ 内面：ケズリ	善	良	灰褐色	
22	43 56	S1310	土師器 折脚杯	16.9	8.3	7.0	外面：杯部ハケメ後ミギキ、脚部ナデ 内面：杯部ケズリ後ミギキ、脚部ケズリ	善	良	灰白色	
23	43 —	S1310	土師器 折脚杯	14.0	—	3.7	外面：口縁部ヨコナデ後ミギキ 底部指押さえ 内面：ミギキ	善	良	灰褐色	
24	43 —	S1310	土師器 折脚杯	—	6.8	3.4	外面：杯部ヨコナデ後ミギキ、脚部ヨコナデ 内面：杯部ナデ後ミギキ、脚部ヨコナデ	善	良	褐色	
25	43 —	S1310	土師器 折脚杯	—	6.4	3.0	外面：ヨコナデ 内面：杯部ミギキ、脚部ケズリ後ナデ	善	良	褐色	
26	43 —	S1310	土師器 折脚器台	22.6	—	6.5	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ミギキ、受部ケズリ後ミギキ	善	良	褐色	
27	43 —	S1310	土師器 折脚器台	—	—	3.8	外面：ヨコナデ・波状文 内面：ケズリ後ミギキ	善	良	灰黑色	
28	43 —	S1310	土師器 折脚器台	—	—	6.1	外面：ヨコナデ 内面：受部ミギキ、脚部ケズリ	善	良	灰褐色	
29	43 —	S1310	土師器 折脚器台	—	17.8	6.0	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ	善	良	褐色	
30	43 —	S1310	土師器 小型器台	11.0	—	4.4	外面：口縁部ミギキ、体部ハケメ後ミギキ 内面：ケズリ後ミギキ	善	良	灰褐色	
31	43 —	S1310	土玉	直径 (mm) 2.0	重量 (g) 6.1	—	—	善	良	灰褐色	
1	45 —	S1312	弥生土師 甕	18.0	—	1.8	外面：ナデ・文様 内面：ナデ	善	良好	褐色	内面保存着
2	45 —	S1312	弥生土師 甕	15.5	—	3.8	外面：口縁部波状文・平行波線、頸部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	灰褐色	
3	45 —	S1312	弥生土師 甕	17.3	—	3.9	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ケズリ	善	良好	灰褐色	
4	45 —	S1312	弥生土師 甕	—	8.4	4.2	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ	善	良好	褐色	外面保存着
5	45 —	S1312	弥生土師 甕	—	9.8	2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	善	良好	灰褐色	
6	45 —	S1312	土師器 甕	16.4	—	6.5	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	褐色	内面保存着
7	45 —	S1312	土師器 甕	21.2	—	6.6	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	褐色	
8	45 —	S1312	土師器 甕	18.4	—	6.4	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	褐色	
9	45 —	S1312	土師器 小型丸底甕	49.7	—	6.5	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	褐色	
10	45 56	S1312	土師器 大型器台	33.5	—	7.5	外面：ハケメ後ミギキ 内面：ハケメ後ミギキ	善	良好	灰褐色	
11	45 —	S1312	土師器 小型器台	6.1	—	1.6	外面：ナデ 内面：ナデ	善	良好	褐色	
1	47 —	S1313	土師器 直口甕	10.3	—	6.6	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	灰褐色	外面保存着
2	47 —	S1313	土師器 甕	18.4	—	6.5	外面：ヨコナデ、頸部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、頸部ホリ 肩部ケズリ	善	良好	褐色	外面保存着
3	47 56	S1313	土師器 脚付甕	10.8	11.4	13.3	外面：ナデ後ミギキ 内面：口縁部ケズリ後ミギキ 脚部ケズリ後ハケメ状ノミ以上ナデ	善	良好	褐色	
4	47 —	S1313	土師器 甕	14.4	—	6.0	外面：口縁部ヨコナデ、肩部波状文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	褐色	
5	47 56	S1313	土師器 甕	16.0	—	3.1.5	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 底部ハケメ後ナデ・指押さえ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 底部ケズリ後ナデ・指押さえ	善	良好	褐色	体部中央部 小円孔
6	47 —	S1313	土師器 甕	17.2	—	6.5	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	善	良好	黒褐色	内面保存着

遺物 番号	探検 回数	出土地 単位	種別 種別	法量 (cm)			調査・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
7	47 56	S 13 1 3	土師器 類	(5)0	—	(2)2	外面：口縁部ココナテ、肩部波状文 体部ハケメ	密	良好	褐色	
8	47 —	S 13 1 3	土師器 類	07.0	—	(08.1)	外面：口縁部ココナテ、肩部斜状文 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、頸部ケズリ	密	良好	灰褐色	
9	47 —	S 13 1 3	土師器 類	(5)5.0	—	36.0	外面：口縁部ココナテ、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ 底部ケズリ後ナテ・指押さえ	密	良好	灰褐色	
10	47 —	S 13 1 3	土師器 類	(5)5.0	—	(14.0)	外面：口縁部ココナテ、肩部輪平行波 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ	密	良好	褐色	
11	47 —	S 13 1 3	土師器 類	(06.2)	—	(5)5	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、肩部ケズリ	密	良好	灰褐色	
12	47 —	S 13 1 3	土師器 類	(06.7)	(12.1)	16.9	外面：口縁部ココナテ、肩部波状文 体部ハケメ、底部ケズリ後ナテ 内面：口縁部ココナテ、底部ケズリ後ナテ 体部ケズリ後ナテ・指押さえ	密	良好	褐色	
13	48 56	S 13 1 3	土師器 高 杯	21.9	(10.5)	16.9	外面：肩部ミガキ、指押さえ 頸部ケズリ後ミガキ 体部ハケメ後ミガキ 内面：肩部ケズリ後ハケメ・ミガキ 頸部ケズリ	密	良好	灰褐色	4方に円形透 かし
14	48 56	S 13 1 3	土師器 高 杯	(2)0	(14)9	90	外面：肩部ミガキ、頸部ハケメ 内面：肩部ミガキ、指押さえ 頸部ケズリ後ハケメ	密	良好	褐色	4方に円形透 かし
15	48 —	S 13 1 3	土師器 高 杯	(12.7)	—	(6)4	外面：肩部ナテ後ミガキ、頸部ケズリ後ナテ 内面：肩部指押さえ後ナテ・ミガキ	密	良好	赤褐色	
16	48 —	S 13 1 3	土師器 高 杯	—	(13)5	(6)3	外面：頸部ハケメ、数条の横方向の工具痕 頸部ハケメ後ナテ 内面：頸部ナテ・シボリ 肩部ハケメ・ナテ	密	良好	褐色	
17	48 56	S 13 1 3	土師器 低脚杯	(17.5)	(6)2	82	外面：口縁部ハケメ後ミガキ、指押さえ 頸部ハケメ・ナテ 内面：口縁部ハケメ後ミガキ 頸部ケズリ・ナテ・指押さえ	密	良好	褐色	
18	48 —	S 13 1 3	土師器 低脚杯	—	9.1	(2)8	外面：ナテ 内面：ナテ	密	良好	褐色	
19	48 56	S 13 1 3	土師器 小形器台	10.2	(13.1)	99	外面：ハケメ後ミガキ 内面：肩部ミガキ 頸部ハケメ後ナテ・指押さえ	密	良好	灰褐色	内孔あり
20	48 57	S 13 1 3	土師器 小形器台	12.0	(11.2)	97	外面：ハケメ・ナテ・指押さえ 内面：口縁部ハケメ・ナテ・指押さえ 頸部シボリ 肩部ハケメ・ナテ・指押さえ	密	良好	灰褐色	
21	48 —	S 13 1 3	土 玉	直径 (cm) 1.5	重量 (g) 2.8			密	良	褐色	
1	49 —	S 13 1 6	土師器 類	(5)2.0	—	(6)2	外面：口縁部ココナテ、肩部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、頸部ケズリ	密	良	褐色	
2	49 —	S 13 1 4	灰生土器 底 部	04.0	—	(4)2	外面：口縁部平行波、頸部ココナテ 内面：口縁部ココナテ、頸部ケズリ	密	良	灰赤褐色	外面塚付着
3	49 —	S 13 1 4	灰生土器 底 部	—	(6)0	(4.1)	外面：ケズリ・指押さえ 内面：ケズリ・指押さえ	密	良	褐色	
4	49 —	S 13 1 4	土師器 類	07.0	—	(4)9	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、頸部ケズリ	密	良		外面塚付着
5	49 —	S 13 1 4	土師器 低脚器台	—	(19)8	(4)3	外面：ミガキ 内面：頸部ケズリ、肩部ミガキ	密	良	暗褐色	
6	49 —	S 13 1 5	土師器 器	(14.8)	—	(6)2	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、頸部ケズリ	密	良	褐色	
7	49 —	S 13 1 5	土師器 類	(13.6)	—	(3)5	外面：ココナテ 内面：ココナテ	密	良	褐色	
8	49 —	S 13 1 5	土師器 類	(13.0)	—	(5)8	外面：口縁部ココナテ、肩部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、肩部波状のため不明	密	良	褐色	
9	49 —	S 13 1 5	土師器 小形丸底鉢	(6.0)	—	(3.0)	外面：口縁部ココナテ、体部ミガキ 内面：ココナテ	密	良	灰褐色	
1	53 57	S B 3 0 1	灰生土器 器	04.2	—	(2.0)	外面：口縁部4条の円線、頸部ナテ 内面：ナテ	密	良	黄白色	
2	53 —	S B 3 0 1	灰生土器 器	(08.2)	—	(5)0	外面：ナテ 内面：口縁部ナテ、頸部ケズリ	密	良	褐色	P 1 0 出土
3	53 彩色6	S B 3 0 1	灰生土器 器	(13.0)	7.4	18.6	外面：ミガキ 内面：口縁部ミガキ、頸部ミガキ・指押さえ 体部ケズリ後ミガキ	密	良	赤褐色	外面赤彩 頸部2・5部に 穿孔
4	53 —	S B 3 0 1	灰生土器 器	(08.2)	—	(4)5	外面：ナテ 内面：ナテ	密	良	暗褐色	P 1 0 出土
5	53 —	S B 3 0 1	灰生土器 底 部	—	(6)0	(3.1)	外面：ナテ 内面：体部ケズリ後ナテ、底部指押さえ	密	良	暗褐色	底部穿孔
6	53 57	S B 3 0 1	灰生土器 器 台	—	—	(8)8	外面：肩部輪平行波 内面：肩部輪平行波 体部ケズリ後ミガキ、体部ナテ 内面：肩部ケズリ後ミガキ、体部ナテ	密	良	褐色	P 1 0 出土
7	53 —	S B 3 0 1	土師器 類	(13.0)	—	(5.1)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、頸部ケズリ	密	良	灰褐色	外面塚付着
8	53 —	S B 3 0 1	土師器 底 部	—	(3)6	(1.7)	外面：ハケメ 内面：ナテ	密	良	暗褐色	P 1 1 出土
9	53 57	S B 3 0 1	土師器 高 杯	17.8	11.0	10.8	外面：肩部ケズリ後ミガキ、頸部ハケメ 頸部ナテ 内面：肩部ミガキ、頸部ケズリ	密	良	黄褐色	

遺物 番号	埋戻 版数	出土地 番号	種 別	寸法 (cm)			調 整 ・ 文 様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
				口 径	底 径	高 さ					
10	53	SB301	土師器 浅鉢	212	—	65.0	外面：坏部ハケム後ミガキ、肩部ナデ 内面：坏部ミガキ、肩部ナデ	赤	灰	褐色	
11	53	SB301	土師器 浅鉢器台	126	—	66.3	外面：ヨコナデ 内面：ミガキ	赤	灰	褐色	
13	53	SB303	弥生土器 鉢	112.8	—	112.3	外面：口縁部斜削文、口縁部ナデ・波状文 体部ナデ 内面：ハケム後ミガキ	赤	灰	暗褐色	外面煤付着
14	53	SB303	土師器 空	112	—	63.9	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	灰	灰褐色	
15	53	SB303	土師器 空	136	—	43.3	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	黄褐色	外面煤付着
16	53	SB303	土師器 小型空	118	26	9.9	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰白色	
17	53	SB303	土師器 空	122	—	89.9	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケム 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ	赤	灰	褐色	
18	53	SB303	土師器 空	164	—	43.3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	灰	黄褐色	
19	53	SB303	土師器 空	170	—	115.0	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケム 斜削状文 内面：口縁部ヨコナデ 体部ケズリ後指押え	赤	灰	暗褐色	
20	53	SB303	土師器 空	128	—	100.0	外面：口縁部ミガキ、肩部ヨコナデ 肩部ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	黒褐色	
21	53	SB303	土師器 空	146	—	72.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケム・波状文 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰褐色	
22	53	SB303	土師器 高 杯	166	—	66.0	外面：ハケム後ミガキ 内面：ミガキ	赤	灰	褐色	
23	53	SB303	土師器 浅鉢	—	114.0	74.4	外面：ミガキ 内面：坏部ミガキ、肩部ケズリ	赤	灰	褐色	
24	53	SB303	土師器 浅鉢	—	117.0	63.3	外面：ハケム後ミガキ 内面：上部ケズリ、肩部ハケム	赤	灰	黄褐色	
25	53	SB303	弥生器 高 杯	—	9.8	89.9	外面：坏部斜削ナデ 坏部斜削ハケズリ、肩部斜削ナデ 内面：斜削ナデ	赤	灰	青灰色	
1	55	SB305	土師器 空	148	—	44.1	外面：口縁一部ヨコナデ、肩部ハケム 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケム 肩部ケズリ	赤	灰	褐色	P5出土 外面煤付着
2	55	SP302	土師器 空	110	—	89.9	外面：口縁部ヨコナデ後ミガキ、体部ミガキ 内面：口縁部ミガキ、体部ケズリ後ナデ	赤	灰	灰白色	
3	55	SP302	土師器 浅鉢器台	121.8	—	71.1	外面：ヨコナデ後ミガキ 内面：ケズリ後ミガキ	赤	灰	灰褐色	
4	55	SP303	土師器 空	186	—	73.8	外面：口縁一部ハケ状工具によるナデ 肩部ハケム 内面：口縁部ヨコナデ、肩部指押え 肩部ケズリ	赤	灰	灰茶色	
5	55	SP303	土師器 浅鉢器台	130.0	—	63.0	外面：ヨコナデ後ミガキ 内面：ミガキ	赤	灰	褐色	
6	55	SP304	土師器 空	121.8	—	68.8	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	灰	灰白色	
7	55	SP304	土師器 空	123.8	—	66.0	外面：口縁一部ハケ状工具によるナデ 肩部ケム 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰褐色	
1	58	SE301	弥生土器 空	140	—	69.9	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ミガキ 肩部ケズリ	赤	灰	褐色	外面煤付着
2	58	SE301	土師器 空	—	—	44.1	外面：4段の平行瓦溝 内面：ケズリ	赤	灰	橙褐色	
3	58	SE301	土師器 空	148	—	67.7	外面：口縁部ヨコナデ、肩部輪縁平行溝 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	褐色	
4	58	SE301	土師器 空	130	—	132.2	外面：口縁部ヨコナデ、肩部輪縁平行溝 体部ハケム 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰褐色	外面煤付着
5	58	SE301	土師器 空	—	—	62.4	外面：ナデ 内面：ナデ、指押え	赤	灰	橙褐色	
1	60	SE302	土師器 弥生器	—	—	43.8	外面：輪縁平行線・斜削文 内面：ミガキ後ナデ	赤	灰	黄褐色	
2	60	SE302	土師器 空	126	—	69.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰褐色	外面煤付着
3	60	SE302	土師器 空	148	—	43.3	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰褐色	外面煤付着
4	60	SE302	土師器 布文系	124	—	67.7	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	黒褐色	外面煤付着
5	60	SE302	土師器 布文系	144	—	49.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	褐色	外面煤付着
6	60	SE302	土師器 布文系	158	—	48.8	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	黄褐色	
7	60	SE302	土師器 布文系	158	—	89.0	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰褐色	
8	60	SE302	土師器 布文系	138	—	44.4	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	灰白色	
9	60	SE302	土師器 布文系	124	—	67.7	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	赤	灰	黄褐色	外面煤付着
10	60	SE302	土師器 小型丸底	100	—	71.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケム 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ	赤	灰	灰褐色	

遺物番号	探検回	出土層 層位	種別	法量 (cm)			調査・文様	出土	構成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
11	60	S E 3 0 2	土師器 高杯	—	—	(72)	外面：ハケメ後ノギキ 内面：ケズリ	世	貝	黄褐色	
12	60	S E 3 0 2	土師器 筒形器内	—	(166)	(36)	外面：ココナテ 内面：脚部ケズリ、裾部ココナテ	世	貝	黄褐色	
13	60	S E 3 0 2	土師器 楕円土師	—	0.02	(42)	外面：ココナテ 内面：ココナテ	世	貝	灰褐色	
14	60	S E 3 0 2	灰帯器 杯・蓋	0.02	—	(27)	外面：目線ナテ 内面：目線ナテ	世	貝	青灰色	
1	62	S E 3 0 3	赤生土器 類	(15.8)	—	(65)	外面：口縁部ココナテ、裾部輪平行線 内面：口縁部ココナテ、裾部 裾部ケズリ	世	貝	灰色	外面煤付着
2	62	S E 3 0 3	赤生土器 類	0.60	—	(44)	外面：ココナテ 内面：口縁部ノギキ・ハケメ後ナテ 裾部ケズリ	世	貝	灰褐色	外面煤付着
3	62	S E 3 0 3	土師器 大型器	(80.6)	—	(80)	外面：口縁部ココナテ、裾部輪状工具痕 内面：口縁部ココナテ、裾部ハケメ	世	貝	黄褐色	
4	62	S E 3 0 3	土師器 器	(14.3)	—	(83)	外面：口縁部ココナテ、裾部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、裾部シボリ 裾部ケズリ	世	貝	褐色	
5	62	S E 3 0 3	土師器 大型器	(33.0)	—	(67)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	黄褐色	
6	62	S E 3 0 3	土師器 類	(67.0)	—	(56)	外面：口縁部ココナテ、裾部波状文 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	灰褐色	
7	62	S E 3 0 3	土師器 類	(6.4)	—	(64)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	灰褐色	
8	62	S E 3 0 3	土師器 類	16.1	—	(48)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	灰褐色	
9	62	S E 3 0 3	土師器 類	(5.4)	—	(72)	外面：口縁部ココナテ、裾部輪平行線 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	黄褐色	
10	62	S E 3 0 3	土師器 く字口縁類	(21.0)	—	(81)	外面：口縁部ココナテ、裾部工具痕 裾部ケズリ	世	貝	褐色	
11	62	S E 3 0 3	土師器 小形丸底器	—	—	(94)	外面：頸部ココナテ 体部ハケメ・指押さえ 内面：頸部ココナテ、体部ケズリ後ナテ	世	貝	黄褐色	
12	62	S E 3 0 3	土師器 板脚杯	—	(110)	(48)	外面：脚部ナテ・指押さえ 内面：杯部ノギキ 脚部ナテ・指押さえ、シボリ	世	貝	灰褐色	
13	62	S E 3 0 3	土師器 板形器内	—	(190)	(70)	外面：ココナテ 内面：杯部ナテ、脚部ケズリ、裾部ココナテ	世	貝	黄褐色	
14	62	S E 3 0 3	移動式竈	(33.9)	幅 (cm) (38.4) 奥行 (cm) 40.2	37.0	外面：口縁部ハケメ後ナテ、体部ハケメ 体部下段工具痕 底部ハケメ・指押さえ 内面：口縁部ナテ、体部一底部ケズリ	世	貝	褐色	
1	63	S E 3 0 4	土師器 類	(13.6)	—	(42)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	灰褐色	
2	63	S E 3 0 4	土師器 類	(16.8)	—	(56)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	灰褐色	
3	63	S E 3 0 4	土師器 類	(15.5)	—	(88.0)	外面：口縁部ココナテ、裾部2段の波状文 体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	灰色	
4	63	S E 3 0 4	土師器 鉢	(19.0)	—	(114)	外面：口縁部ココナテ、体部上平ナギキ 体部下平ナテ・指押さえ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ後ナテ	世	貝	黄褐色	底部穿孔
1	64	S E 3 0 5	土師器 く字口縁類	(16.2)	—	(40)	外面：口縁部ココナテ、裾部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	黄褐色	
2	64	S E 3 0 5	土師器 瓶	(24.6)	—	(23.0)	外面：口縁部ナテ、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ	世	貝	灰褐色	
3	64	S E 3 0 5	土師器 瓶	(26.6)	—	(15.0)	外面：口縁部ナテ、体部ハケメ 内面：口縁部ココナテ、体部ケズリ	世	貝	灰褐色	
1	66	S E 3 0 6	土師器 類	(15.5)	—	(50)	外面：口縁部ココナテ 裾部輪平行線・ハケメ 内面：口縁部ココナテ、裾部指押さえ 裾部ケズリ	世	貝	黄褐色	
2	66	S E 3 0 6	土師器 類	(16.8)	—	(41)	外面：ココナテ 内面：ココナテ	世	貝	灰褐色	
3	66	S E 3 0 6	土師器 底 部	—	(60)	(34)	外面：ケズリ・指押さえ 内面：ハケメ後ナテ	世	貝	黄褐色	
4	66	S E 3 0 6	土師器 類	—	—	(82)	外面：頸部ココナテ、裾部波状文 体部ハケメ 内面：頸部ナテ、体部ケズリ 底部ケズリ・指押さえ	世	貝	褐色	
1	68	S E 3 0 7	赤生土器 類	(13.8)	—	(51)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	茶褐色	
2	68	S E 3 0 7	赤生土器 類	(17.0)	—	(35)	外面：平行波線 内面：ココナテ	世	貝	茶褐色	
3	68	S E 3 0 7	土師器 器	(19.2)	—	(83)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	褐色	
4	68	S E 3 0 7	土師器 類	(18.2)	—	(52)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ、裾部ケズリ	世	貝	黄灰色	
5	68	S E 3 0 7	土師器 類	(14.4)	—	(52)	外面：ココナテ 内面：口縁部ココナテ 裾部ケズリ・指押さえ	世	貝	黄褐色	
6	68	S E 3 0 7	土師器 板形器類	(15.0)	—	(27)	外面：ココナテ 内面：ココナテ	世	貝	黄褐色	

遺物 番号	埋戻 層位	出土地 番号	器 種	寸法 (cm)		調整・文様	胎土	焼成	色調	備考	
				口径	高さ						
7	68	SE307	土師器 底 部	—	(23)	(7.2)	外面：体部ハケメ・指押さえ、底部ナデ 内面：ケズリ・指押さえ	黒	黒	褐色色	
8	68	SE307	土師器 底 部	—	(1.0)	(0.9)	外面：ハケメ 内面：ケズリ・指押さえ	黒	黒	灰褐色	
9	68	SE307	土師器 山口土器	—	—	6.0	外面：7条の波線・何点文・斜文 ケズリ	黒	黒	灰褐色	
10	68	SE307	土師器 高 杯	(13.0)	—	(4.0)	外面：ハケメ・ミガキ・ナデ 内面：ハケメ・ミガキ・ナデ	黒	黒	褐色	
11	68	SE307	土師器 高 杯	(14.3)	—	(3.5)	外面：ハケメ・ミガキ・ナデ 内面：ハケメ・ミガキ・ナデ	黒	黒	褐色	
12	68	SE307	土師器 高 杯	—	(10.2)	(7.6)	外面：ミガキ 内面：脚部ケズリ、脚部ハケメ	黒	黒	褐色色	
13	68	SE307	土師器 高 杯	—	(17.2)	8.4	外面：ミガキ 内面：坯部ミガキ、脚部ケズリ 脚部ハケメ・指押さえ	黒	黒	褐色色	
14	68	SE307	土師器 胴部坏	(19.6)	—	(3.4)	外面：ミガキ 内面：ミガキ	黒	黒	灰白色	
15	68	SE307	土師器 取手付台	—	(15.8)	(4.6)	外面：ヨコナデ 内面：脚部ケズリ、脚部ヨコナデ	黒	黒	褐色色	
16	68	SE307	土師器 圧 差	(9.2)	—	(4.0)	外面：ヨコナデ・2段の斜交文 内面：ケズリ	黒	黒	褐色	
1	69	SD302	土師器 类	14.8	—	22.4	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 底部ケズリ・指押さえ	黒	黒	褐色色	外面煤付着
2	69	SD302	土師器 类	—	—	(22.3)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 底部ケズリ・指押さえ	黒	黒	褐色色	外面煤付着
1	71	SE308	赤土器 底 部	—	8.4	(13.8)	外面：体部ハケメ、底部ナデ後ハケメ 内面：ケズリ	黒	黒	灰褐色	
2	71	SE308	土師器 台付坏	—	—	(3.0)	外面：底部ケズリ後ミガキ、脚部 内面：ケズリ・工具痕	黒	黒	灰褐色	
3	71	SE308	土師器 类	(18.0)	—	(5.9)	外面：口縁部ヨコナデ、肩部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ 肩部ハケテ工具のナデ、肩部ケズリ	黒	黒	灰白色	
4	71	SE308	土師器 类	(17.6)	—	(6.8)	外面：口縁部ヨコナデ 肩部脛部平行線 内面：口縁部ヨコナデ、脚部指押さえ 肩部ケズリ後ミガキ	黒	黒	褐色色	
5	71	SE308	土師器 类	(20.0)	—	(18.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ 肩部脛部平行線、流状文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ・ナデ	黒	黒	灰白色	外面煤付着
6	71	SE308	土師器 类	(19.6)	—	(6.8)	外面：口縁部ヨコナデ 肩部脛部平行線 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ	黒	黒	褐色	
7	71	SE308	土師器 高 杯	(24.8)	—	(6.0)	外面：口縁部後ミガキ、底部ハケメ 内面：ミガキ	黒	黒	褐色色	
8	71	SE308	土師器 高 杯	(29.6)	—	(5.5)	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ミガキ	黒	黒	灰褐色	
9	71	SE308	土師器 碗	(14.2)	—	4.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ後ハケメ・ 底部ハケテ工具痕 内面：ケズリ後ナデ	黒	黒	灰褐色	
10	71	SE308	土師器 胴部坏	(13.6)	—	(4.0)	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ハケメ後ミガキ	黒	黒	灰褐色	
11	71	SE308	土師器 台付鉢	—	—	(3.4)	外面：ナデ・ミガキ 内面：底部ミガキ、台部ケズリ・工具痕	黒	黒	灰白色	
1	74	SK303	赤土器 类	(6.4)	—	(3.9)	外面：口縁部流状文、肩部ナデ 内面：ナデ	黒	黒	黒紫色	
2	74	SK303	土師器 瓶状土器	—	(16.6)	(9.5)	外面：何点文・ナデ 内面：ナデ	黒	黒	褐色	
3	74	SK306	赤土器 类	(15.8)	—	(5.4)	外面：口縁部平行流線、肩部ミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、肩部ミガキ	黒	黒	灰褐色	
4	74	SK306	赤土器 底 部	—	(4.0)	(2.5)	外面：体部ヨコナデ、底部ナデ後ハケメ 内面：ナデ・工具痕	黒	黒	黒紫色	
1	75	SK305	土師器 底 部	—	—	(3.2)	外面：ハケメ・何点文 内面：肩部ケズリ、肩部ケズリ	黒	黒	褐色色	
2	75	SK305	土師器 大形类	(50.0)	—	(12.5)	外面：口縁部ヨコナデ 肩部ハケメ・流状文・何点文 内面：口縁部ヨコナデ、脚部指押さえ 肩部ケズリ後ナデ	黒	黒	灰褐色	
3	75	SK305	土師器 类	(13.8)	—	(10.2)	外面：口縁部ヨコナデ、肩部流状文 体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ	黒	黒	灰褐色	外面煤付着
4	75	SK305	土師器 类	(18.2)	—	(5.3)	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	黒	黒	灰褐色	
5	75	SK305	土師器 类	(10.4)	—	(10.0)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ後ナデ	黒	黒	褐色色	外面煤付着
6	75	SK305	土師器 布留系类	(14.0)	—	(10.0)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	黒	黒	灰褐色	外面煤付着
7	75	SK305	土師器 布留系类	(17.0)	—	26.1	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 底部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	黒	黒	褐色色	
8	75	SK305	土師器 高 杯	(27.0)	—	(6.7)	外面：口縁部ハケメ・指押さえ 底部ハケメ後ミガキ 内面：口縁部ミガキ 底部ハケメ後ミガキ	黒	黒	褐色色	

遺物 番号	種別 図版	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調 査 ・ 文 様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
				口 径	底 径	高 さ					
9	75 -	SK305	土師器 鉄附杯	—	(46)	(21)	外面：ナデ 内面：杯部ミガキ、腹部ナデ	密	良	灰白色	
10	75 -	SK305	土師器 鐵彩土器	—	—	(44)	外面：ナズリ・ナデ 内面：ナズリ	密	良	灰褐色	模状把手
1	78 原色6	SD301	弥生土器 特殊壺	(22.0)	—	(62)	外面：口縁部4条の四隅 内面：口縁部4条の縦四隅、腹部ハケメ	密	良	褐色	内外面車削 古褐色
2	78 -	SD301	土師器 直口壺	(10.0)	—	(7.0)	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	黄褐色	
3	78 -	SD301	土師器 壺	23.0	—	(33)	外面：ミガキ 内面：ミガキ	密	良	褐色	
4	78 39	SD301	土師器 壺	—	8.5	(37.7)	外面：頸部ハケメ後ナデ、腹部ミガキ 内面：頸部ハケメ後ミガキ	密	良	褐色	
5	78 -	SD301	土師器 大罎	(23.2)	—	(13.0)	外面：口縁～頸部ココナデ、腹部波状文 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	褐色	
6	78 -	SD301	土師器 罎	(15.0)	—	(11.0)	外面：口縁部ココナデ、腹部ハケメ 内面：頸部波状文・轡橋平行線	密	良	灰白色	
7	78 -	SD301	土師器 罎	(15.2)	—	(8.1)	外面：口縁～頸部ココナデ、腹部ハケメ 内面：口縁部ココナデ	密	良	灰褐色	
8	78 -	SD301	土師器 罎	(13.4)	—	(9.5)	外面：口縁部ココナデ、腹部轡橋平行線 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	褐色	
9	78 -	SD301	土師器 罎	14.8	—	(9.4)	外面：口縁～頸部ココナデ、腹部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、腹部捺押さえ	密	良	灰褐色	外面煤付着
10	78 -	SD301	土師器 罎	(14.6)	—	(10.8)	外面：口縁部ココナデ、腹部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	灰褐色	外面煤付着
11	78 -	SD301	土師器 罎	(16.4)	—	(12.3)	外面：口縁部ココナデ、腹部波状文 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	灰褐色	
12	78 60	SD301	土師器 罎	13.9	—	(17.0)	外面：口縁部ココナデ、腹部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	淡黄色	
13	78 60	SD301	土師器 罎	(16.4)	—	(16.8)	外面：口縁部ココナデ、腹部轡橋平行線 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	灰褐色	外面煤付着
14	79 -	SD301	土師器 罎	(17.8)	—	(13.1)	外面：口縁部ココナデ、腹部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	褐色	
15	79 60	SD301	土師器 罎	18.7	11.5	18.0	外面：口縁部ココナデ、腹部波状文 内面：口縁部ココナデ	密	良	灰褐色	外面煤付着
16	79 60	SD301	土師器 罎	15.4	—	24.0	外面：口縁部ココナデ、腹部轡橋平行線・四角文 内面：口縁部ココナデ	密	良	黄褐色	
17	79 60	SD301	土師器 有蓋罎	14.4	—	(11.4)	外面：口縁部ココナデ、腹部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	灰褐色	
18	79 60	SD301	土師器 有蓋罎	12.7	—	17.0	外面：口縁部ココナデ、腹部ミガキ 内面：口縁部ココナデ	密	良	黄褐色	
19	79 -	SD301	土師器 有蓋罎	(15.4)	—	(8.1)	外面：口縁部ココナデ、腹部明き目後ハケメ 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	褐色	
20	79 -	SD301	土師器 く字形口罎	(15.4)	—	(20.0)	外面：口縁部ココナデ、腹部明き目 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	黒褐色	
21	79 -	SD301	土師器 短頸壺	(9.2)	—	(4.4)	外面：ミガキ 内面：口縁部ココナデ、腹部ミガキ	密	良	黄褐色	
22	79 -	SD301	土師器 小罎	(11.4)	—	(8.3)	外面：口縁部ココナデ、腹部捺押さえ 内面：口縁～頸部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	灰褐色	
23	79 60	SD301	土師器 小型丸底壺	9.0	—	9.8	外面：口縁部ココナデ、腹部ハケメ 内面：口縁部ココナデ、腹部ナズリ	密	良	灰黄色	
24	79 60	SD301	土師器 高 杯	(11.3)	—	(5.1)	外面：口縁部ミガキ、杯部ハケメ 内面：ミガキ	密	良	灰白色	
25	79 -	SD301	土師器 高 杯	19.2	(10.6)	12.5	外面：杯部口縁部ミガキ、 杯部底部ハケメ後ナデ 内面：杯部ミガキ、腹部ナズリ	密	良	灰褐色	脚部開口孔
26	79 61	SD301	土師器 高 杯	(21.0)	—	(5.8)	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ミガキ	密	良	灰白色	
27	79 61	SD301	土師器 高 杯	—	13.8	(8.2)	外面：腹部ミガキ、腹部ハケメ 内面：腹部ナズリ後ナデ	密	良	灰白色	
28	79 -	SD301	土師器 高 杯	—	(13.4)	(8.2)	外面：ハケメ後ミガキ 内面：腹部ナズリ	密	良	灰褐色	
29	79 -	SD301	土師器 高 杯	—	11.0	(7.3)	外面：腹部ハケメ後ミガキ、腹部ミガキ 内面：腹部ナズリ、腹部ナデ	密	良	褐色	脚部ミガキに 凹痕付着



遺物 番号	埋戻 版数	出土地 番号	種 別	寸法 (cm)			調 整 ・ 文 様	胎 土	焼 成	色 調	備 考
				口 径	底 径	高 さ					
30	79	SD301	土師器 洗刷杯	079	53	5.9	外面：坏部ハケメ後ミガキ、胴部ナデ 内面：坏部ミガキ、胴部ナデ	赤	良	灰白色	
31	79	SD301	土師器 洗刷杯	070	—	020	外面：ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	褐色	
32	79 61	SD301	土師器 洗刷杯	194	—	050	外面：ケズリ後ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	黄褐色	
33	79	SD301	土師器 洗刷杯	—	060	052	外面：ハケメ後ミガキ 内面：胴部ナデ・ケズリ、胴部ナデ	赤	良	灰褐色	円形浅小し
34	79	SD301	土師器 洗刷杯	—	58	024	外面：ナデ 内面：ナデ	赤	良	褐色	
35	79	SD301	土師器 洗刷器台	092	092	108	外面：ヨコナデ 内面：受部ケズリ後ミガキ、胴部ケズリ	赤	良	灰褐色	
36	79	SD301	土師器 洗刷器台	171	—	003	外面：受部ヨコナデ、胴部潤滑のため不明 内面：受部ミガキ、胴部ケズリ	赤	良	灰褐色	
37	79	SD301	土師器 洗刷器台	—	060	040	外面：ヨコナデ 内面：ケズリ	赤	良	灰白色	
38	80 61	SD301	土師器 小型器台	083	015	90	外面：受部ミガキ、胴部ハケメ後ミガキ 内面：受部ミガキ 胴部ケズリ	赤	良	褐色	
39	80	SD301	移動式甕	—	—	048	外面：ケズリ後ナデ 内面：貼り付け灰	赤	良	灰褐色	
40	80	SD301	土師器 甕	—	—	082	外面：ナデ 内面：ケズリ	赤	良	暗褐色	
1	81	SX301	土師器 甕	084	—	091	外面：口縁部ヨコナデ、胴部一部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部シボリ 胴部ケズリ	赤	良好	灰褐色	
2	81	SX301	土師器 甕	020	—	028	外面：口縁一部ヨコナデ、胴部ハケメ・指押さえ 内面：口縁一部ヨコナデ、 体部ケズリ・指押さえ	赤	良	黒茶色	
3	81	SX301	土師器 大型甕	016	84	569	外面：口縁部ヨコナデ、体部一部ハケメ 胴部潤滑文・輪付平行線 内面：口縁部ヨコナデ、胴部指押さえ 体部一部ケズリ	赤	良	灰白色	
4	81	SX301	土師器 甕	124	—	210	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 胴部ケズリ・指押さえ	赤	良	暗褐色	底部穿孔
5	81 61	SX301	土師器 甕	065	—	075	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ・ナデ 胴部潤滑文・輪付平行線・列点文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	赤	良	黒茶色	外面煤付着
6	82 61	SX301	土師器 甕	190	—	300	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 胴部列点文 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 胴部ケズリ・指押さえ	赤	良	黒茶色	外面煤付着
7	82	SX301	土師器 甕	178	—	287	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 胴部ケズリ・指押さえ	赤	良	暗褐色	
8	82	SX301	土師器 甕	064	—	001	外面：口縁部ヨコナデ、胴部潤滑文 体部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	赤	良	黒茶色	外面煤付着
9	82	SX301	土師器 布置系甕	042	—	029	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	赤	良	黒茶色	
10	82	SX301	土師器 高 坏	026	—	047	外面：口縁一部ミガキ 底部ハケメ後ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	灰褐色	
11	82	SX301	土師器 高 坏	028	—	059	外面：ハケメ後ミガキ 内面：ミガキ	赤	良	灰褐色	
12	82 61	SX301	土師器 高 坏	225	121	139	外面：坏部ミガキ後ハケメ、胴部ハケメ 内面：坏部ミガキ、胴部ハケメ 胴部ハケメ後ケズリ	赤	良	褐色	
13	82 61	SX301	土師器 洗刷杯	367	54	53	外面：坏部ハケメ、胴部ナデ 内面：坏部ミガキ、胴部ナデ	赤	良	褐色	
14	82 61	SX301	土師器 洗刷杯	198	—	053	外面：坏部ハケメ後ミガキ、胴部ナデ 内面：坏部ハケメ後ミガキ、胴部ナデ	赤	良	灰茶色	
15	82	SX301	土師器 洗刷杯	—	60	024	外面：坏部ミガキ、胴部ナデ 内面：坏部ミガキ、胴部ナデ	赤	良	淡黄色	
16	82 61	SX301	土師器 洗刷器台	210	191	103	外面：ヨコナデ 内面：受部口縁部ハケメ後工具によるナデ 受部下部ヨコナデ、胴部ケズリ	赤	良	褐色	
17	82 61	SX301	土師器 洗刷器台	0217	180	101	外面：ヨコナデ 内面：受部ミガキ、胴部ケズリ	赤	良	灰褐色	
18	82 62	SX301	土師器 洗刷器台	220	176	98	外面：ヨコナデ、受部一部列点文 内面：受部ミガキ、胴部ケズリ	赤	良	灰茶色	
19	82 62	SX301	土師器 洗刷器台	0207	195	117	外面：ヨコナデ 内面：受部口縁部ミガキ 受部下部ヨコナデ、胴部ケズリ	赤	良	黄褐色	外面煤付着
1	84 62	E3・F3東 第5・6層	赤土土師 長頸甕	050	—	059	外面：口縁部ヨコナデ、胴部潤滑 内面：ヨコナデ	赤	良好	灰褐色	
2	84 62	G4・H4 第6層	土師器 甕	084	—	071	外面：口縁部ヨコナデ、胴部一部ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ケズリ 胴部ハケメ後指押さえ	赤	良	灰褐色	
3	84 62	E8 第5・6層	土師器 甕	068	—	047	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ 胴部潤滑文・ハケメ 内面：口縁部ヨコナデ、胴部指押さえ 体部ケズリ	赤	良	黄褐色	

建群番号	棟号	出土地 区画	用途 種別	法量 (cm)			調 整 ・ 文 様	掘 土	規 成	色 調	備 考
				口 径	底 径	高 さ					
4	84 62	F 3 第5・6層	土留部 直口窓	00.0	—	(12.4)	外周：口縁部ミガキ、胴部ココナデ 体部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、胴部ナデ・指押さえ 体部タズリ	密	良	黄褐色	
5	84 62	G 3 第6層	土留部 直口窓	10.5	—	(16.9)	外周：口縁部ココナデ・ミガキ、体部ハケメ 胴部垂直平行溝、底部ナデ 内周：口縁部ココナデ・ミガキ 体部上半部タズリ後ナデ、下半部タズリ・指押さえ	密	良	灰褐色	
6	84 —	E 8 第5・6層	土留部 小型窓	65.2	—	(2.3)	外周：ミガキ 内周：ナデ	密	良	褐色	内孔2孔並列
7	84 —	D 9 第5・6層	土留部 小型窓	7.4	—	(9.0)	外周：口縁部ココナデ、体部ハケメ後ナデ 胴部ハケメ状工具によるナデ 内周：口縁部ココナデ、体部タズリ 胴部タズリ後ナデ・指押さえ	密	良	橙褐色	外面塚付着
8	84 —	H 6・1 6 第5層下層	土留部 小型窓	8.4	—	(6.5)	外周：口縁部ココナデ、体部ハケメ 内周：口縁部ココナデ 体部タズリ・指押さえ	密	良	灰褐色	
9	84 62	E 2・E 3 第5・6層	土留部 小型窓	—	—	(4.4)	外周：胴部竹管文、体部垂直溝文・ハケメ 内周：ココナデ	密	良	橙褐色	胴部内孔2孔
10	84 62	G 4・H 4 第6層	土留部 小型窓	(10.7)	—	(9.8)	外周：口縁部ミガキ、体部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、体部タズリ	密	良	灰褐色	外面塚付着
11	84 63	G 6 第6層	土留部 大型窓	00.0	—	(17.2)	外周：口縁部成状文、胴部ココナデ 胴部2段の成状文・横溝平行溝 体部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、体部タズリ 胴部タズリ後ナデ・指押さえ	密	良	淡赤褐色	
12	84 —	E 7 第5・6層	土留部 窓	(11.0)	—	(4.6)	外周：口縁部平行沈溝、胴部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、胴部タズリ	密	良	灰白色	
13	84 —	G 3 第5・6層	土留部 窓	(9.6)	—	(5.6)	外周：ココナデ 内周：口縁部ココナデ・指押さえ 胴部タズリ	密	良	灰褐色	
14	84 63	G 4・H 4 第6層	土留部 窓	13.0	—	21.0	外周：口縁部3条の平行沈溝、胴部ココナデ 体部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、体部上半部タズリ 体部下半部タズリ後指押さえ	密	良	灰褐色	外面塚付着 底部内面コケ 痕
15	84 62	H 4	土留部 垂直溝窓	(5.6)	—	(9.7)	外周：口縁部ココナデ、胴部タズリ後ハケメ 内周：口縁部ココナデ、胴部タズリ	密	良	褐色	外面塚付着
16	84 —	E 6 第5・6層	土留部 垂直溝窓	(14.2)	—	(7.6)	外周：口縁部ココナデ、胴部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、胴部タズリ	密	良	褐色	外面塚付着
17	84 —	H 6 第6層	土留部 く字形口縁窓	(33.0)	—	(7.7)	外周：ココナデ 内周：口縁部ココナデ、胴部タズリ	密	良	赤褐色	外面塚付着
18	84 —	E 7 第5・6層	土留部 く字形口縁窓	(14.0)	—	(9.7)	外周：口縁部ココナデ、胴部ハケメ 内周：口縁部ココナデ、胴部タズリ	密	良	黄褐色	外面赤部
19	84 63	G 6東 第6層	土留部 底 部	—	3.2	(1.8)	外周：体部タズキ、底部タズリ 内周：ハケメ	密	良	赤褐色	外面塚付着
20	84 —	F 6・G 6西 第5・6層	土留部 高 杯	(15.5)	—	(4.0)	外周：ミガキ 内周：ミガキ	密	良	橙褐色	
21	84 —	E 8 第5・6層	土留部 高 杯	(7.0)	—	(3.3)	外周：ミガキ 内周：ミガキ	密	良	赤褐色	内外面赤部
22	84 —	F 6・G 6東 第5・6層	土留部 高 杯	(14.6)	—	(3.6)	外周：口縁部ミガキ、環底部ハケメ後ミガキ 内周：ミガキ	密	良好	褐色	
23	84 —	H 4 第5層下層	土留部 高 杯	(15.8)	—	(3.8)	外周：口縁部ココナデ、体部ミガキ 環底部ナデ 内周：ミガキ	密	良好	褐色	内外面赤部
24	84 —	G 4・H 4 第6層	土留部 高 杯	28.0	—	(5.8)	外周：口縁部ミガキ、環底部ハケメ 内周：ミガキ	密	良好	灰白色	内外面塚付着
25	84 —	G 3 第6層	土留部 高 杯	(14.0)	—	(5.0)	外周：口縁部ミガキ、環底部へラ状工具痕 内周：ミガキ	密	良	橙褐色	
26	84 —	C 8 第5・6層	土留部 高 杯	(16.2)	—	(5.5)	外周：口縁部ナデ、環底部ハケメ後ナデ 内周：口縁部ナデ 環底部タズリ後ナデ・指押さえ 胴部ナデ	密	良	橙褐色	外周に2条の 変帯
27	85 63	D 9 第5・6層	土留部 拱形環	(5.6)	(3.6)	4.5	外周：環部ハケメ後ミガキ・指押さえ 胴部ナデ 内周：環部ハケメ後ミガキ・指押さえ 胴部ナデ	密	良	黄褐色	内外面一部 赤部
28	85 —	H 6・1 6 第6層	土留部 環	(12.4)	—	(4.2)	外周：口縁部ミガキ・ナデ 体部・底部ハケメ・ミガキ・指押さえ 内周：ハケメ後ミガキ	密	良好	橙褐色	
29	85 63	G 4・H 4 第6層	土留部 環	12.2	—	5.5	外周：口縁部ココナデ、底部ハケメ 内周：口縁部ココナデ 胴部タズリ後ハケメ・ナデ	密	良	赤褐色	内外面赤部
30	85 63	D 8 第5・6層	土留部 器 台	8.6	—	(5.4)	外周：ミガキ、口縁部1条の沈溝 内周：変帯ミガキ、胴部タズリ	密	良	褐色	
31	85 —	G 6東 第5・6層	土留部 器	—	—	(4.4)	外周：ナデ・ミガキ 内周：ナデ	密	良	暗灰白色	内孔2孔
32	85 63	F 7 第5・6層	土留部 器	7.0	—	2.9	外周：ミガキ 内周：ナデ	密	良	褐色	内孔2孔
33	85 63	E 9 第5・6層	土留部 器	(5.8)	—	2.9	外周：ハケメ 内周：ナデ・指押さえ	密	良	褐色	内孔4孔
34	85 —	F 2・G 2 第6層	土留部 器	(6.5)	—	3.3	外周：ミガキ 内周：ハケメ	密	良	灰褐色	天寿部内孔 3孔あり
35	85 63	F 7 第5・6層	ミニチュア土留 器環	(7.2)	—	(4.4)	外周：ミガキ 内周：ミガキ	密	良	褐色	

遺物番号	埋戻版	出土地 層位	種別 器種	寸法 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
36	85	E7 - 第5・6層	取皿土器	—	(3.6)	(4.3)	外面：ミガキ・指押え 内面：ナデ・指押え	善	良好	褐色	手捏成形
37	85	D8 - 第5・6層	土師器 平底土器	—	(8.0)	(3.8)	外面：体部ハケメ。底部ナデ 内面：ナデ	善	良好	褐色	外面塚付着
38	85	F4西 - 第5・6層	土師器 把平	—	幅(㎝) 3.3	4.6	外面：ナデ・指押え	善	良好	黄褐色	
39	85	E7 - 第5・6層	管状土師	長さ(cm) 4.2	幅(㎝) 3.6	重量(g) 62.1	外面：ナデ・指押え	善	良好	褐色	
40	85	G6西 - 第5・6層	管状土師	長さ(cm) 4.2	幅(㎝) 4.4	重量(g) 44.9	外面：ナデ	善	不良	褐色	
41	85	C9 - 第5・6層	土玉	直径(cm) 2.3	重量(g) 11.7			善	良好	褐色	
42	85	G3 第6層	土製品 彫刻か	長さ(cm) (3.5)	幅(㎝) (3.3)	厚さ(cm) 1.1		善	良好	灰褐色	
43	85	G4・H4 第6層	須恵器 坏蓋	136	—	46	外面：天井部回転ヘラケズリ 口縁・体部回転ナデ 内面：天井部ナデ。口縁・体部回転ナデ	善	良好	灰色	
44	85	G4・H4 第6層	須恵器 坏身	(126)	—	(4.1)	外面：口縁・体部回転ナデ 底部回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	善	良好	灰色	
45	85	H6・I6 - 第5層下層	須恵器 坏身	(128)	—	(2.6)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	青灰色	
46	85	D8 - 第5・6層	須恵器 坏身	—	—	(3.3)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	灰白色	
47	85	H6・I6 - 第6層	須恵器 坏身	—	—	4.0	外面：体部回転ナデ 底部回転ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ。底部ナデ	善	良好	灰色	
1	93	SK201	土師器 坏身	126	8.5	3.6	外面：口縁・体部回転ナデ。底部ヘラ起こし 内面：回転ナデ	善	良好	黄褐色	
2	93	SK201	須恵器 坏身	(123)	—	4.4	外面：口縁・体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：回転ナデ	善	良好	灰色	
1	96	SE201	埴輪式甕	(27.4)	幅(㎝) (28.7) 奥行(㎝) (25.1)	(25.6)	外面：口縁部ナデ。底上面ナデ 底下面ハケメ長ナデ・指押え。体部ハケメ 内面：口縁部ナデ。体部ナデ	善	良好	灰褐色	口縁部内面 塚付着
2	96	SE201	須恵器 坏身	(134)	—	(2.8)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	灰白色	
1	97	SK203	土師器 坏身	—	4.6	(9.9)	外面：体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：回転ナデ・ナデ	善	良好	灰褐色	
2	97	SD204	土師器 身	(130)	—	(5.2)	外面：ナデ・ミガキ 内面：ミガキ	善	やや良	黄褐色	
3	97	SD204	灰土土師 器	(30.0)	—	(8.0)	外面：ハケメ 内面：ハケメ	善	良好	灰色	外面塚付着
1	105	F3 - 第5層	須恵器 坏蓋	—	—	(4.4)	外面：天井部ナデ。体部回転ナデ 内面：天井部ナデ。体部回転ナデ	善	良好	灰色	天井部につまみ
2	105	G3 第6層	須恵器 坏蓋	(15.2)	—	(2.1)	外面：天井部回転ヘラケズリ 口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	青灰色	外面塚状の彫
3	105	E7 - 第5・6層	須恵器 坏身	(134)	—	(3.3)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	青灰色	
4	105	E8 - 第5・6層	須恵器 坏身	(134)	—	(3.0)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	灰色	
5	105	F2・G2 - 第5層下層	須恵器 坏身	(11.8)	—	(2.9)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	灰色	
6	105	G4・H4 第6層	須恵器 坏身	(11.0)	(8.0)	4.0	外面：口縁・体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：回転ナデ	善	良好	青灰色	
7	105	大塚土器 65設置時	須恵器 坏身	(11.8)	(8.0)	4.3	外面：口縁・体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：回転ナデ	善	良好	暗灰色	
8	105	F4 - 第5層下層	須恵器 坏身	(11.6)	(7.2)	4.1	外面：口縁・体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：回転ナデ	善	良好	灰白色	
9	105	F3 - 第5・6層	須恵器 坏身	(12.2)	(10.4)	4.3	外面：口縁・体部回転ナデ。底部回転糸切り 体部下ヘラケズリ 内面：口縁・体部回転ナデ。底部ナデ	善	良好	暗茶灰色	
10	105	F2・G2 - 第5層下層	須恵器 坏身	—	8.7	(1.2)	外面：体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：ナデ	善	良好	灰色	
11	105	F2・G2 - 第5層	須恵器 坏身	—	(8.6)	(2.3)	外面：体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：回転ナデ	善	良好	灰色	
12	105	H4 - 第6層	須恵器 坏身	—	(10.0)	(1.7)	外面：体部回転ナデ。底部回転糸切り 内面：回転ナデ	善	良好	灰色	
13	105	E7 - 第5・6層	須恵器 坏身	—	(7.2)	(2.4)	外面：体部回転ナデ。底部ナデ 内面：ナデ	善	良好	灰色	高台付
14	105	G4・H4 - 第6層	須恵器 坏身	—	(11.8)	(2.0)	外面：体部回転ナデ。底部 内面：体部回転ナデ。底部ナデ	善	良好	赤褐色	高台付
15	105	G3 第6層	須恵器 坏身	(9.6)	(11.8)	3.2	外面：口縁部回転ナデ。体部ナデ 底部回転糸切り 内面：口縁・体部回転ナデ。底部ナデ	善	良好	灰色	転用窯 内面彫刻 高台付
16	105	G3 第5層下層	須恵器 坏身	196	(15.0)	(3.7)	外面：口縁・体部回転ナデ。底部ナデ 内面：口縁・体部回転ナデ。底部ナデ	善	良好	青灰色	高台付
17	105	D9 - 第5・6層	須恵器 坏身	—	(15.4)	(1.9)	外面：体部ナデ。底部回転糸切り状ナデ 内面：ナデ	善	良好	灰色	高台付
18	105	E4・F4東 - 第5・6層	須恵器 坏身	—	(16.0)	(1.6)	外面：体部ナデ。底部回転糸切り状ナデ 内面：ナデ	善	良好	灰色	高台付
19	105	I区 6層	須恵器 短直筒	(4.4)	—	(7.3)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	善	良好	青灰色	

品物 番号	種別 図版	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			調査・文様	胎土	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ					
20	105 -	G4・H4 第6層	須恵型 梨形壺	(11.0)	—	(11.1)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	青灰色	
21	105 -	F2・G2 第5層	須恵型 壺	—	9.5	(4.0)	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	青灰色	高台付
22	105 45	H5 第5層	土師型 坏 身	(11.0)	(6.0)	3.7	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	灰褐色	内面残付着
23	105 -	H5・I5 第5層下層	土師型 坏 身	—	7.2	(2.5)	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	灰白色	
24	105 -	F2・G2 第5層	土師型 坏 身	—	7.0	(1.8)	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	灰褐色	内面残付着 高台付
25	105 -	F2・G2 第5層下層	土師型 坏 身	—	8.0	(2.5)	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良好	幅広い白色	底部穿孔 高台付
26	105 -	F4西 第5層	土師型 坏 身	—	7.2	(3.6)	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り・爪痕 内面：回転ナデ	密	良好	灰白色	内面残付着 高台付
27	105 -	F2・G2 第5層下層	土師型 壺	(5.0)	—	(7.5)	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ナズリ	密	良好	灰褐色	
28	105 45	G3 第6層	平瓦	長さ (cm) (32.7)	幅 (cm) (13.4)	厚さ (cm) 2.7	外面：布目直・ケズリ長ナデ 上面：雜目直	密	良	灰白色	側縁部面取り
1	115 -	高103	土師質土器 小 皿	(7.4)	(6.0)	13	外面：指押さえ 内面：回転ナデ	密	良	橙褐色	
2	115 -	高104	土師質土器 小 皿	(7.7)	(5.8)	10	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	褐色	
3	115 -	高104	土師質土器 坏 身	(12.0)	—	(2.9)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	褐色	
4	115 -	高104	土師質土器 坏 身	—	(5.0)	(2.4)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	褐色	高台付
5	115 45	高103	土師質土器 坏 身	(12.0)	6.2	3.9	外面：口縁～体部回転ナデ 体部下部輪状工具によるナデ 底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	橙褐色	
6	115 45	高103	土師質土器 坏 身	12.1	6.0	4.0	外面：口縁～体部回転ナデ 底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	褐色	口縁部内外面 残付着
7	115 45	湖北大明神	土師質土器 壺	(25.0)	—	(9.7)	外面：口縁～体部上半ナデ、体部下半ハケメ 内面：ハケメ	密	良	茶褐色	外面残付着
8	115 -	高104	土師質土器 壺	(34.0)	—	(3.3)	外面：ハケメ 内面：口縁部ナデ、体部ハケメ	密	良	灰白色	外面残付着
9	115 -	高101	須恵型 坏 身	(9.8)	—	(2.9)	外面：口縁～体部回転ナデ 天井部回転糸切り 内面：回転糸切り	密	良	青灰色	
10	115 -	高104	須恵型 坏 身	(8.0)	—	(2.5)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰色	
11	115 -	高104	須恵型 坏 身	(9.0)	—	(2.9)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰色	
12	115 85	高102	須恵型 罎	(14.6)	9.0	2.4	外面：口縁～体部回転ナデ 底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部磨面	密	良	青灰色	転用説
13	115 -	高105	須恵型 坏 身	(12.0)	—	(3.3)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	灰色	
14	115 -	高105	須恵型 坏 身	(11.0)	(8.0)	3.8	外面：口縁～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	灰色	
15	115 棕色6	高101	白 磁 罎	(16.0)	—	(5.1)	外面：ヘラ彫りによる産卵 内面：見込み大い流線状の段	密	良好	灰白色	森田健策
16	115 棕色6	高101	白 磁 罎	—	—	(2.3)	内面：見込み沈線	密	良好	灰白色	
17	115 棕色6	高102	白 磁 罎	(16.0)	—	(1.8)		密	良好	灰白色	森田口磨
18	115 棕色6	高103	青 磁 面取罎	(15.0)	—	(2.1)		密	良好	灰青リープ	
19	115 -	高104	管状土師 壺	長さ (cm) (21)	口径 (cm) 0.9	重量 (g) 1.80		密	良	紫灰色	
20	115 -	高105	管状土師 壺	長さ (cm) (28)	口径 (cm) 0.9	重量 (g) 2.30		密	良	褐色	
1	116 45	供瀝池 SD101	衛生土器 壺	(6.0)	—	(8.7)	外面：口縁部・頸部ナデ 口縁部・肩部縦内溝 内面：口縁部コナデ、肩部ハケメ、頸部ナズリ	密	良	灰褐色	
2	116 -	供瀝池 SD101	須恵型 罎	—	—	(8.9)	外面：指押さえ 内面：ナズリ	密	良	灰白色	
3	116 -	供瀝池 SD101	須恵型 坏 表	(5.2)	—	(4.8)	外面：口縁～体部回転ナデ 天井部回転ヘラケズリ 内面：口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	密	良	灰白色	
4	116 -	供瀝池 SD101	須恵型 坏 表	—	—	(4.9)	外面：口縁～体部回転ナデ 天井部回転ヘラケズリ 内面：口縁～体部回転ナデ、天井部ナデ	密	良	灰色	
5	116 -	供瀝池 SD101	須恵型 坏 身	—	(6.0)	(1.1)	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	密	良	灰色	
6	116 -	供瀝池 SD101	須恵型 高 坏	—	(14.6)	(3.0)	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良	青灰色	
7	116 -	供瀝池 SD101	須恵型 壺	21.2	—	(4.8)	外面：口縁部回転ナデ、肩部叩き 内面：口縁部回転ナデ、肩部当て具面	密	良好	幅広い白色	外面自然剥取
8	116 -	供瀝池 SD101	須恵型 壺	—	(8.0)	(2.0)	外面：体部回転ナデ・ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ・天井部ナズリ 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	

遺物番号	検出地	出土地	種別	法量 (cm)			調整・文様	胎土	焼成	色調	備考	
				長さ	幅	高さ						
9	116-65	既築地	SD101	形状土器	長さ (cm) 3.8	幅 (cm) 1.4	重量 (g) 8.3	黒	良好	灰白色		
10	116-65	既築地	SD101	形状土器	長さ (cm) 3.0	幅 (cm) 3.3	重量 (g) 28.3	黒	良好	灰白色		
1	117-1	F2-G2	納5層	青磁	—	—	0.25	外面：細か〜磨損 内面：体部凹みと文様	黒	良好	灰色	同安楽系1類
2	117-1	H5-G I5-G 納5層	土師質土器 杯	—	5.5	0.5	0.5	外面：体部凹みと文様 内面：底部回転糸切り	黒	良好	灰青色	内面保存着
3	117-1	F8 納6層	土師質土器 小皿	0.2	5.0	1.5	0.5	外面：口縁一体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	黒	良好	黄褐色	
4	117-1	C9 納5-G層	土師質土器 小皿	0.4	6.0	2.0	0.5	外面：口縁一体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	黒	良好	褐色	
5	117-1	F2-G2 納5層下層	土師質土器 小皿	0.2	8.6	2.4	0.5	外面：口縁一体部回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁一体部回転ナデ、底部ナデ	黒	良好	灰青色	
1	126-65	SD02	陶器 磁鉢	0.3	—	6.6	0.5	外面：回転ナデ 内面：12条1単位の襷目	黒	良好	暗赤褐色	黒灰唐津焼
2	126-65	SD05	陶器 磁鉢	—	0.2	0.9	0.5	外面：高台費付高脚、砂付着	黒	良好	灰白色	伊万里焼
4	126-65	SD06	土師質土器 灯明皿	0.0	4.4	1.9	0.5	外面：口縁一体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	黒	良好	黒褐色	口縁部外面 付着物あり
5	126-65	SD08	陶器 磁鉢	0.6	—	6.5	0.5	外面：口縁部2条の沈線、体部回転ナデ 内面：8条1単位の襷目	黒	良好	灰青色	
6	126-65	SD07	陶器 磁鉢	0.2	—	4.5	0.5	外面：二重線日文	黒	良好	灰白色	伊万里焼
7	126-66	SD07	磁器 磁皿	0.3	0.8	2.4	0.5	外面：5条の襷線、高台費付高脚、砂付着 内面：口縁一体部2条の襷線 見込みコンニヤ印付	黒	良好	灰色	伊万里焼
8	126-66	SD07	陶器 仏面鉢	—	4.1	0.3	0.5	外面：高台費付高脚	黒	良好	灰白色	伊万里焼
9	126-66	SD07	陶器 仏面鉢	—	4.6	0.5	0.5	外面：高台費付高脚	黒	良好	灰青色	京焼系
10	126-66	SD07	陶器 仏面鉢	—	4.2	0.6	0.5	外面：貫入、高台費付高脚 内面：貫入	黒	良好	浅灰色	京焼系
11	126-66	SD07	陶器 灯明皿	0.5	4.2	3.3	0.5	外面：口縁部輪飾、体部一体部高脚 内面：底面回転糸切り	黒	良好	赤褐色	立上がり部に 注口あり
12	126-66	SD07	土師質土器 灯明皿	0.5	4.6	4.2	0.5	外面：口縁一体部回転ナデ 内面：底部回転糸切り	黒	良好	灰白色	底部内面から 注口にかけて 付着物あり
13	126-66	SD07	土師質土器 灯明皿	0.6	4.6	1.9	0.5	外面：口縁一体部回転ナデ 内面：回転ナデ	黒	良好	灰黄色	底部内面 付着物あり
1	127-66	SD10	陶器 磁鉢	—	4.2	0.0	0.5	外面：貫入、高台費付高脚 内面：貫入	黒	良好	黄褐色	京焼系
2	127-66	SD10	陶器 磁鉢	—	4.7	0.1	0.5	外面：底面高脚 内面：測線輪、見込み線の目輪筋	黒	良好	外側：灰 白色	渡辺瓦葺
3	127-66	SD13	磁器 付付皿	1.0	6.2	2.9	0.5	外面：体部花唐草文、底部二重線 高台内一重線、虫文 内面：口縁部口紅装飾、口縁部文珠文、花文 体部斜め筋文、見込み二重線、人物・植物	黒	良好	明青灰色	伊万里焼
4	127-66	SD13	陶器 付付皿	0.9	—	0.0	0.5	外面：貫入、底面高脚 内面：貫入、底面高脚	黒	良好	オリーブ	石炭焼
5	127-66	SD15	土師質土器 灯明皿	0.8	6.0	2.2	0.5	外面：口縁一体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	黒	良好	黄褐色	口縁部下部 4枚の保存着

#### 木製品観察表

遺物番号	検出地	出土地	種別	法量 (cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
15	126-66	SD07	桶蓋板 or 底板	31.6	11.2	1.6	炭化した部分あり
16	126-66	SD07	桶蓋板 or 底板	42.6	10.2	2.6	目釘穴2ヶ所あり
17	126-66	SD07	桶蓋板 or 底板	30.9	11.9	1.8	目釘穴2ヶ所あり
18	126-66	SD07	建築材	28.0	8.2	8.0	ほぞ穴あり
19	126-66	SD07	杭	84.5	4.9	4.9	

#### 金属製品観察表

遺物番号	検出地	出土地	種別	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
33	26-52	S1301	不明鉄製品	0.7	2.9	0.35	7.7	鉄	
50	26-52	S1302	鉄 釧	0.8	2.0	0.6	11.0	鉄	
51	26-52	S1302	刀子	0.8	0.7	0.4	1.1	鉄	
52	26-52	S1302	刀子	0.8	1.0	0.2	1.1	鉄	
53	26-52	S1302	釘	0.9	0.45	0.8	1.4	鉄	

遺物番号	採回 図版	出土地 層位	種別 器種	法 量 (cm)			重量 (g)	材 質	備 考
				長 寸	幅	厚 寸			
23	30 -	S 1 3 0 3	ヘラ状製品小	G8	0.45	0.3	3.4	鉄	
24	30 -	S 1 3 0 3	針状製品	H8	0.3	0.3	1.8	鉄	
25	30 -	S 1 3 0 3	棒状製品	G4	0.5	0.4	1.4	鉄	
26	30 -	S 1 3 0 3	針状製品	G11	0.25	0.25	0.7	鉄	2点が結合
30	37 54	S 1 3 0 6	鉄 斧	G5	4.3	0.6	36.6	鉄	
21	37 -	S 1 3 0 6	刀 子	G11	1.1	0.2	1.8	鉄	
30	38 -	S 1 3 0 8	棒状製品	H3	0.4	0.3	2.3	鉄	
31	38 -	S 1 3 0 8	棒状製品	G8	0.5	0.4	1.7	鉄	
32	38 -	S 1 3 0 8	棒状製品	G4	0.5	0.2	0.7	鉄	
4	42 55	S 1 3 1 1	鉄 鏃	G11	1.0	0.3	1.2	鉄	
13	45 -	S 1 3 1 2	円筒状製品	G9	G9	0.1~0.2	3.1	鉄	
8	55 -	S P 3 0 1	鉄 鏃	H10	2.6	0.2	5.8	鉄	
9	55 -	S P 3 0 1	円筒状製品	G9	G2	0.1	1.4	鉄	
57	86 64	E 8 第5・6層	鉄 鏃	1.9	1.0	0.3	1.3	鉄	
58	86 64	S 1 3 0 6 - S 1 3 0 8 南北ベルト	鉄 斧	5.8	4.0	0.4~0.9	41.2	鉄	
59	86 -	F 6 - G 6 西 第5・6層	板状製品	(4.1)	G2.9	1.1	15.2	鉄	
60	86 -	E 3 第5層土層	鉄 鏃	(7.5)	2.6	0.4	16.8	鉄	直方鏃
61	86 -	C 9 第5・6層	鉄鏃小	(5.4)	2.2	0.1~0.2	9.4	鉄	磨削面に両り通しの ような痕跡あり
62	86 -	E 8 第5・6層	磨削小	(2.8)	1.1~1.8	0.3~0.4	153.9	鉄	
63	86 64	C 9 第5・6層	刀 子	(4.4)	0.7~1.4	0.6	6.3	鉄	
64	86 -	H 5 - 6, 1 3 - 6 第5層	棒状製品	2.9	0.2~0.4	0.6	1.8	鉄	近C字形に湾曲
65	86 -	F 2 - G 2 第6層	棒状製品	G4	0.35	0.4	1.6	鉄	
66	86 64	H 5 - 1 5 第6層	切取工具	G5	0.2~1.0	0.2~1.0	8.5	鉄	
3	126 65	S D 0 5	磨 管 地 口	6.0	直径(cm) 1.1	-	3.3	陶	
14	126 66	S D 0 7	磨 管	12.6	直径(cm) 0.2	-	8.7	陶	

#### 石製品観察表

遺物番号	採回 図版	出土地 層位	種別 器種	法 量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
				長 寸	幅	厚 寸			
2	19 50	G 4 - H 4 第6層	石 鏃	11.3	8.1	1.5	168.8	安山岩	
3	19 50	F 2 - G 2 第5層土層	石 鏃	7.6	5.7	2.5	149.0	安山岩	
4	19 50	C 8 第5・6層	磨製石斧	10.3	5.4	2.0	127.6	安山岩	破損後に楔として再利用
5	19 50	E 7 第5・6層	磨製石斧	14.0	5.9	4.5	644.0	閃緑岩	大型磨製石斧
29	26 51	S 1 3 0 1	磨 石	6.7	5.3	5.5	51.6	軽 石	表面・左右側面・下端面を使用
30	26 51	S 1 3 0 1	磨石・最石	8.3	6.0	3.0	177.3	ゲイサイト	表面に磨痕、上下端面に磨打痕
31	26 51	S 1 3 0 1	砥 石	6.0	3.6	1.5	31.1	凝灰岩	表面・左右側面を使用
32	26 -	S 1 3 0 1	自然石	9.2	6.6	4.5	39.2	軽 石	
22	30 -	S 1 3 0 3	砥 石	14.5	7.7	4.4	606.0	ゲイサイト	下部の両側縁に磨打痕
37	33 -	S 1 3 0 4	自然石	4.7	6.0	4.9	19.7	軽 石	
9	34 -	S 1 3 0 5	自然石	11.1	6.7	6.2	65.8	軽 石	
19	37 -	S 1 3 0 6	砥 石	8.1	5.4	4.5	272.8	安山岩	表面・左右側面を使用
29	38 図版6	S 1 3 0 8	磨 玉	1.2	0.3	0.3	0.4	磨 玉	

遺物番号	押印 図版	出土地 層位	種別 器種	法量 (cm)			重量 (g)	石 材	備 考
				長 さ	幅	厚 さ			
32	43 -	S1310	磁石	162	7.8	4.5	8570	アイサイト	上下端部に線打痕
12	45 -	S1312	磨石・磁石	φ9.3	9.4	5.1	5375	安山岩	表裏面に磨痕 下端部に線打痕
12	53 -	S1301	磨石・磁石	107	6.6	3.3	3213	アイサイト	表裏面に磨痕 上下端部に線打痕
48	85 原色石 -	F8 第5・6層	碧玉	22	0.6	0.6	89	シルト岩	
49	85 -	C9 第5・6層	磨石・磁石	10.3	7.5	3.5	3787	アイサイト	表面に磨痕。上端部・右側縁 に線打痕
50	85 -	F8 第5・6層	磁石	φ8.3	6.1	5.4	3147	花崗岩	表裏部・左右側面を使用 表裏面に線打痕
51	85 64	F8 第5・6層	磁石	φ9.7	5.0	4.3	2561	安山岩	表面・左右側面を使用
52	85 64	D8 第5・6層	磁石	(15.9)	(8.7)	6.0	10893	細粒花崗岩	表裏面・右側面を使用
53	86 64	E8 第5・6層	磁石	9.5	5.2	5.8	1220	凝灰岩	表裏面・左右側面・下端面を 使用
54	86 64	H5 第5層	磁石	φ9.9	5.3	5.2	1604	凝灰岩	表裏面・左右側面を使用
55	86 -	E8 第5・6層	磁石	14.1	6.4	1.8	2787	アイサイト	表裏面を使用
56	86 -	I区 第6層	片石	(11.2)	(11.2)	5.0	7805	アイサイト	表裏面に磨面

原 色 図 版





1区西壁地層断面第1～7層 (D地点)



1区東壁地層断面第1～7層 (E地点)



2区東壁地層断面第1～3層 (南から)



2区南部地層断面  
第4b～7層



1区北西部第7a層の砂礫



1区低湿地西端地層断面(合成)

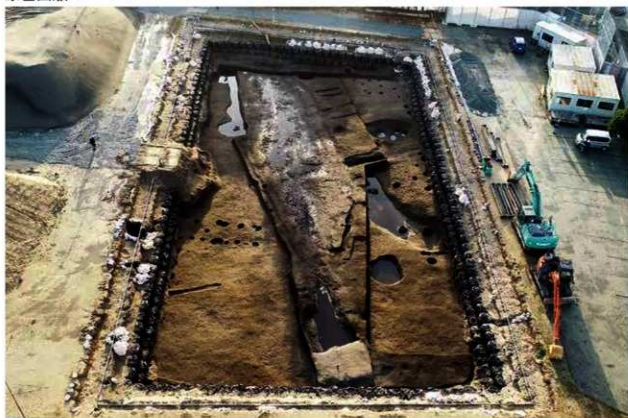


1区低湿地東端地層断面北部  
(合成)



1区低湿地東端地層断面南部(合成)

原色図版 4



1区弥生時代終末～古墳時代遺構全景（北西から）



2区弥生時代終末～古墳時代遺構全景（南西から）

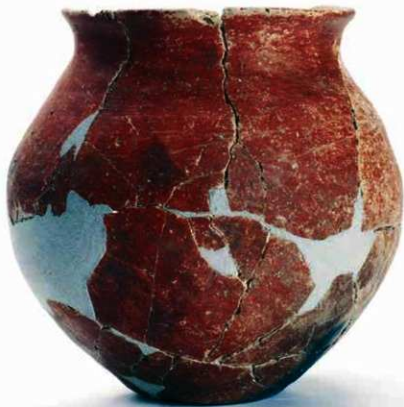




2区鎌倉～室町時代遺構全景（北東から）



1区江戸時代遺構全景・米子城遠景（北東から）

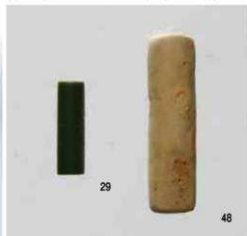


3 SB301 周边第 6a 层出土  
弥生土器赤彩壶

SD301 出土弥生土器特殊壶



管玉 (29:SI308、48:2 区第 5-6 层)



冢出土磁器碗 (白磁 15·16: 冢 101、17: 冢 102、青磁 18: 冢 103)

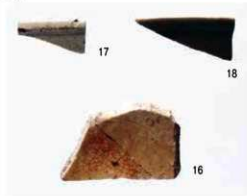


圖 版

2区東壁地層断面(南部)  
第3~4層



2区東壁地層断面(北部)  
第1~7層



1区東部地層断面  
第4a~7層







弥生時代終末～古墳時代遺構面の空中写真（合成）



2区北部第6b層上面遺構  
検出状況（東から）



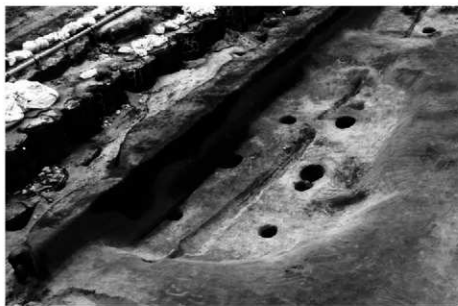
2区北部第6b層上面遺構  
検出状況（西から）



2区南部第6b層上面遺構  
検出状況（東から）



SI301・302 床面検出状況  
(南から)



SI301・302 完掘状況  
(西から)



SI303 床面検出状況  
(南から)

SI303 完掘状況  
(南から)



SI304 遺物出土状況  
(南から)



SI304・305 完掘状況  
(南から)





SI305 遺物出土状況  
(西から)



SI305 遺物 (5) 出土状況  
(南から)



SI304 柱穴 P2 (南から)  
SI305 床面の遺物 (8)

SI306~309 床面検出状況  
(東から)



SI306~309 完掘状況  
(西から)



SI310 床面検出状況  
(西から)





SI310・311 完掘状況  
(北東から)



SI310-P4 内礫出土状況



SI312 床面検出状況  
(西から)

SI312 遺物 (10) 出土状況  
(東から)



2区北部堅穴建物完掘状況  
(西から)



SI313~315 床面検出状況  
(北東から)







SI313 遺物出土状況  
(北東から)



SI313~315 完掘状況  
(東から)



2区第6b層上面検出遺構  
完掘状況 (東から)

SB301 検出状況 (北から)



SB301 完掘 (北から)



SB303 柱穴断面 (合成、南から)



SB303 周辺第 6a 層上面  
遺物出土状況 (北から)



SB304・305、SA301  
検出状況 (東から)



SB304・305、SA301  
完掘 (西から)



SE301 検出状況 (南から)



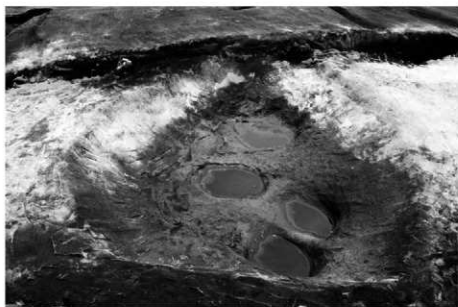
SE301 埋土断面 (南から)



SE302 検出状況 (西から)



SE302 埋土断面および底面  
検出状況 (北から)



SE302 完掘状況 (南から)



SE303・304 検出状況  
(北から)

SE303 埋土上部遺物 (14ほ  
か) 出土状況 (西から)

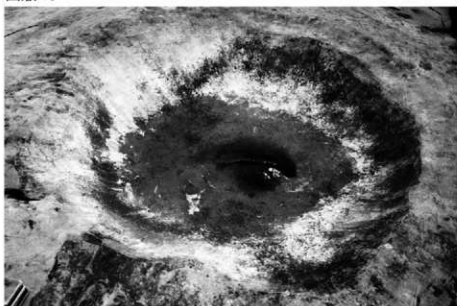


SE305 検出状況 (北から)



SE305 埋土断面 (南から)





SE306 完掘状況 (南から)



SE306 埋土断面 (合成、南西から)



SE306 底面水溜 (南東から)



SE306 底面水溜 (北から)



SE307 埋土断面 (西から)



SE307 完掘 (北から)



SD302 遺物 (1・2)  
出土状況 (南から)





SE308 埋土断面 (西から)

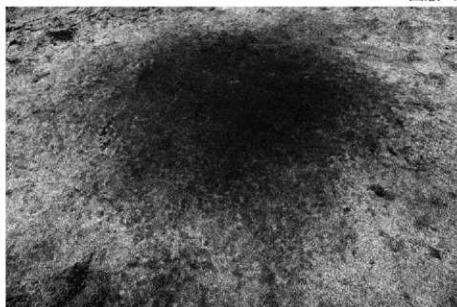


SE308 完掘 (西から)



SK301 埋土断面 (南西から)

SK302 検出状況 (西から)



SK302 埋土断面 (北東から)



SK303 埋土断面 (北から)





SK304 埋土断面 (南西から)



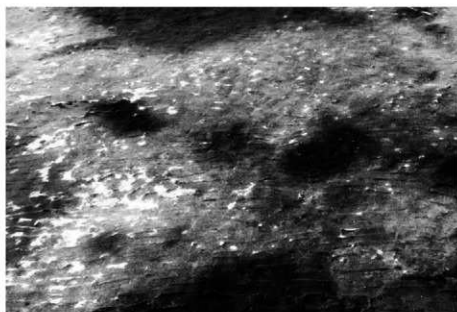
SK305 埋土断面 (東から)



SK306 埋土断面 (西から)



SK310 埋土断面 (南西から)



SK307 ~ 309 検出状況  
(東から)



SK307 埋土断面 (西から)



SK308 埋土断面 (南西から)



SK309 埋土断面 (南から)



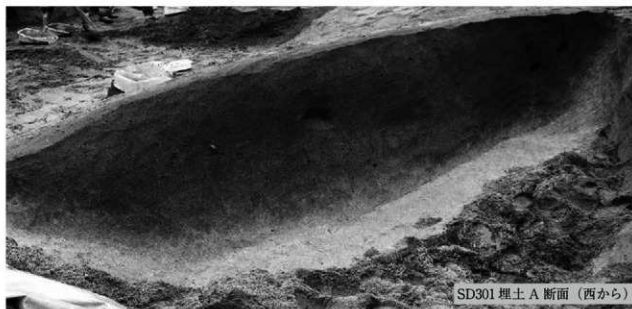
SD303 埋土断面 (南から)



SD301 検出状況 (南から)



SD301 完掘 (南西から)



SD301 埋土 A 断面 (西から)

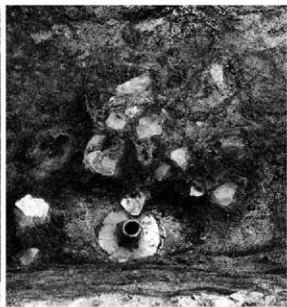


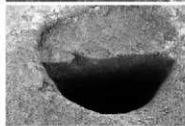
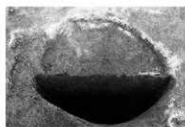
SD301 埋土 B 断面北側 (南から)



SD301 埋土 B 断面南部  
(西から)

SD301 東端 (SX301) 遺物出土状況 (西から)

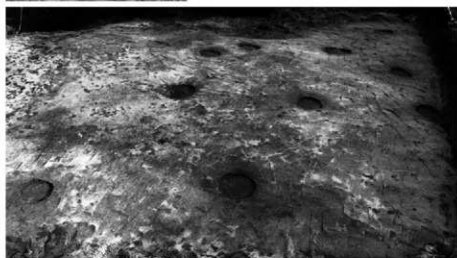




SB202  
(上から P1~3、南から)



SB201 検出状況 (東から)

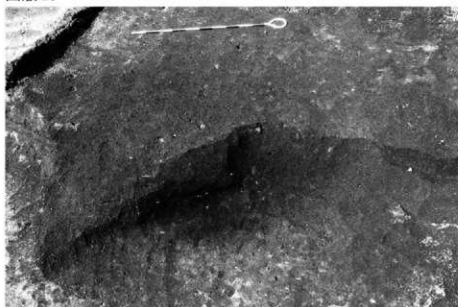


SB203・204 検出状況  
(南から)



SB203・204 完掘 (南から)

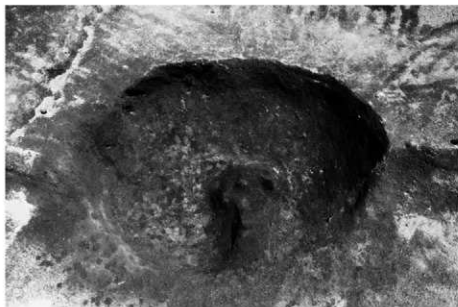




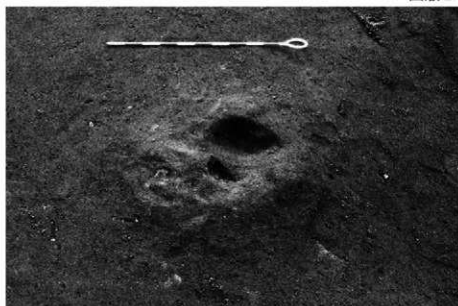
竈跡 SK201 検出状況  
(南から)



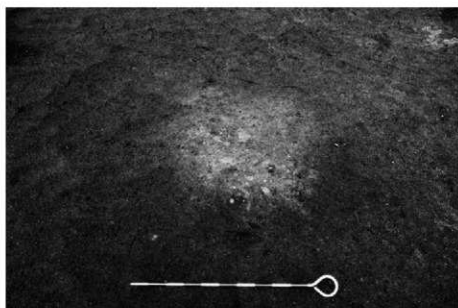
竈跡 SK201 埋土断面  
(南から)



竈跡 SK201 完掘 (南から)



硬化面 201 (北から)



硬化面 202 (南から)



SE201 (東から)



SE201 埋土断面 (西から)



SK203・SD201 (南から)



SK203 埋土断面 (南から)



SD203 (西から)



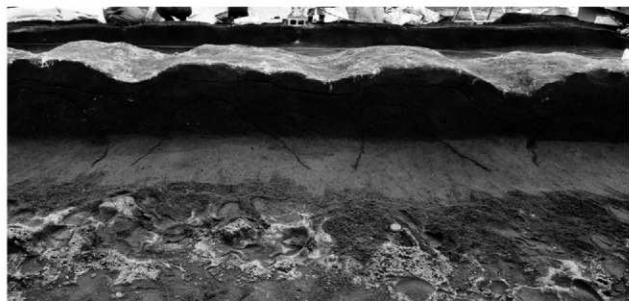
SD205 (南から)  
両側は第6b層まで掘り下  
げている。



SD204 (南から)



畝間溝群 201 と SD202  
(南から)



畝間溝群 201 の地層断面 (南から)



畝間溝群 202 (南西から)



鎌倉～室町時代遺構面の空中写真（合成）



畠 101・102 検出状況  
(南から)



畠 103 検出状況 (東から)



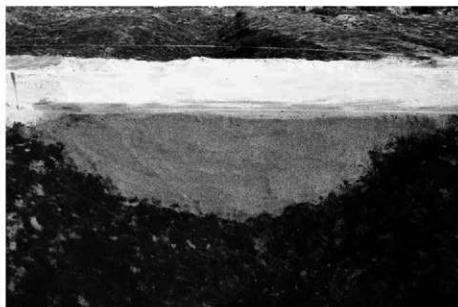
畠 104 検出状況 (東から)



畠 105 検出状況 (東から)



畠 102 畝間断面 (南から)



畠 102 畝間断面 (南から)





1区畠全景（東から）



畠 101 全景（西から）



畠 102 全景（北から）



畠 103 全景 (南西から)



畠 104 南部 (北西から)



畠 103 大型鳥状畝 (東から)



畠 102 造替え部分 (北から)



畠 102 造替え断面 (北から)



畠 102 造替え以前 (北から)



1区南北里道北部（東から）



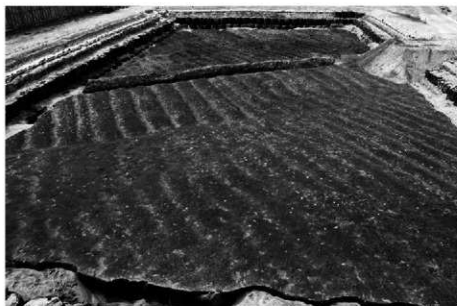
1区南北里道南部（南から）



南北里道北部の礫（南から）



畠 104 北部（南から）



畠 105 全景（北東から）



2 区東西大畦畔（東から）



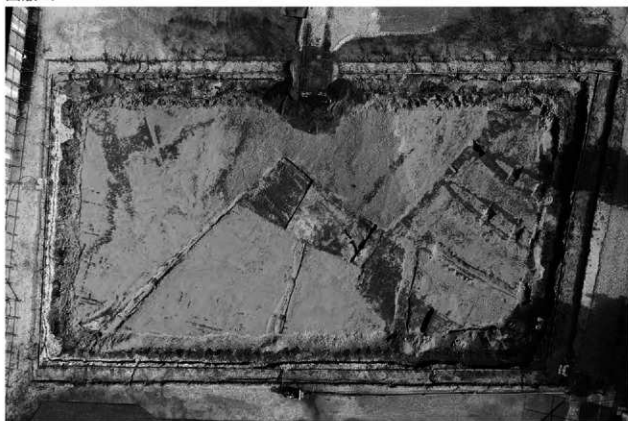
2区南北大畦畔（南から）



2区南北および東西大畦畔  
（南から）



畠 105内SD102（西から）



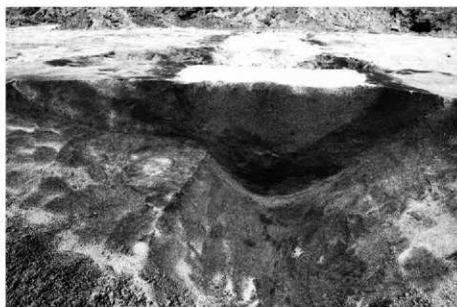
1区江戸時代遺構面の空中写真（左上が北）



2区江戸時代遺構（北東から）



SD01 検出状況 (南から)



SD01 埋土 A 断面 (南から)



SD02・03 検出状況 (南から)





SD02 埋土 D 断面 (南から)



SD03 埋土 E 断面 (南から)



SD07 土留め遺構 (南から)

SD07 土留め遺構 (西から)



SD07 水利管理遺構  
(東から)



SD07 水利管理遺構  
(西から)





2区北部第2・3層上面  
検出状況（西から）



2区第2・3層上面  
（南西から）



SD10 埋土断面（東から）



SD15埋土断面 (南から)



SD11・13合流部杭群  
(西から)



SD11・13合流部杭群  
(北から)



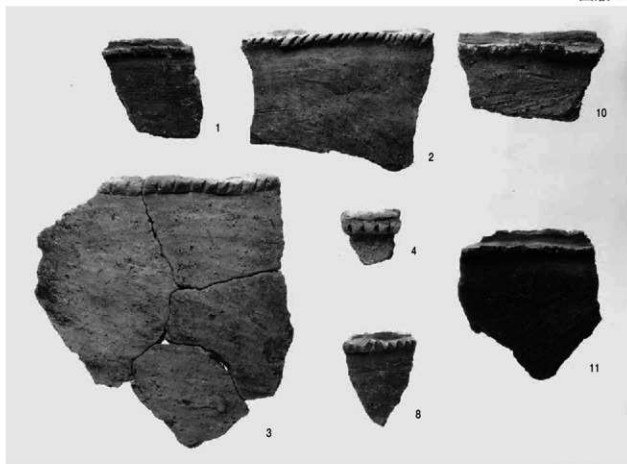
SD11 埋土断面  
(南東から、下部は第3層)



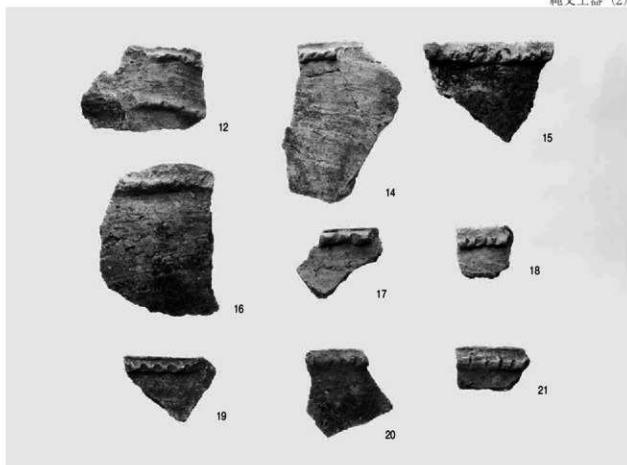
SD13 埋土断面  
(南東から、下部は第3・4層)

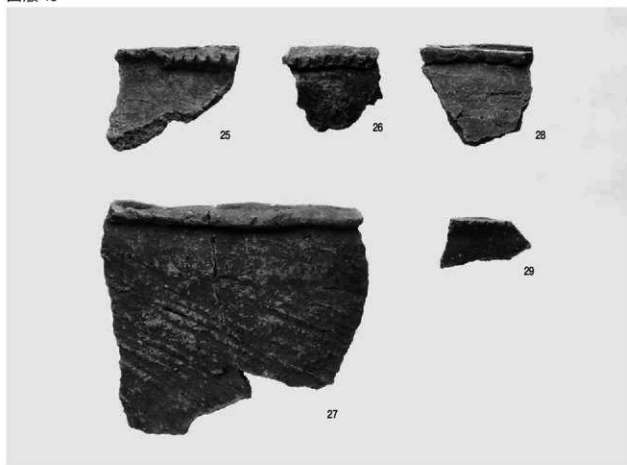


SK01 埋土断面 (東から)



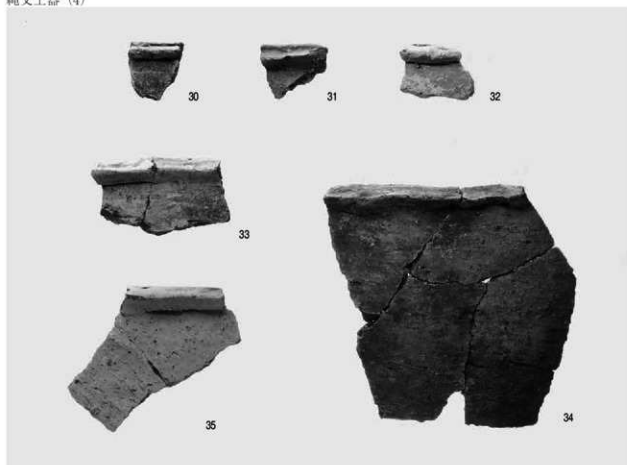
縄文土器 (1)  
縄文土器 (2)

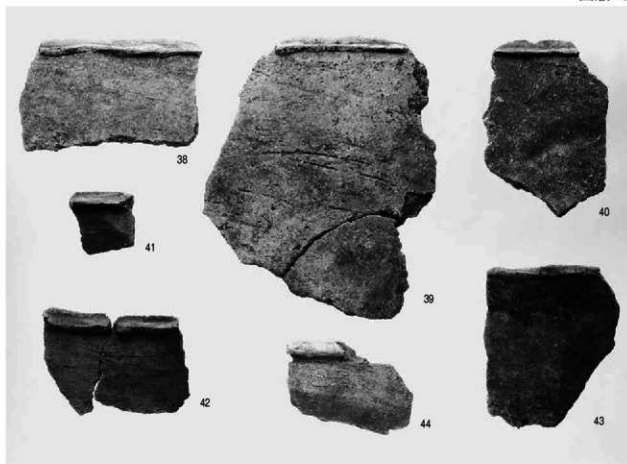




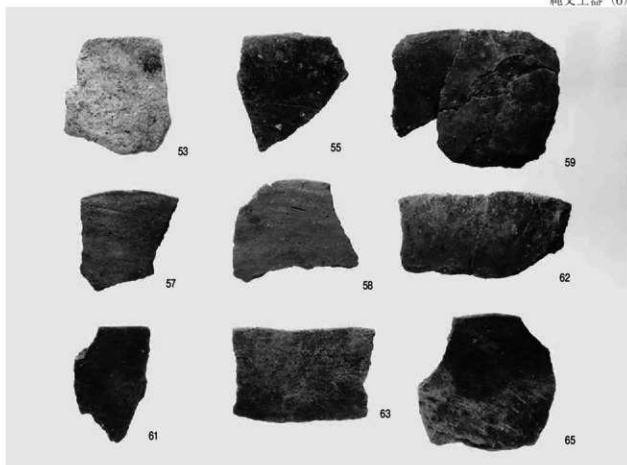
縄文土器 (3)

縄文土器 (4)



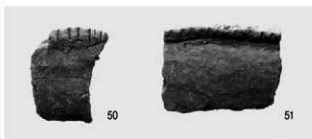
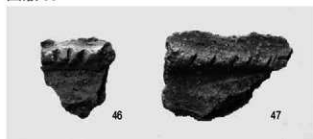


繩文土器 (5)  
繩文土器 (6)





図版 50



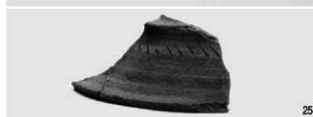
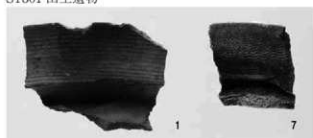
縄文土器 (7)



弥生土器・石器遺物

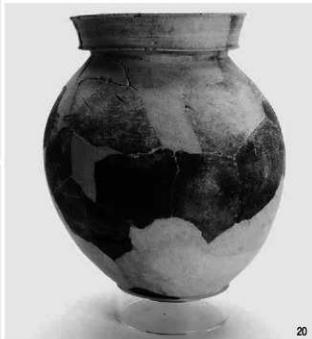


SI301 出土遺物





SI302 出土遺物

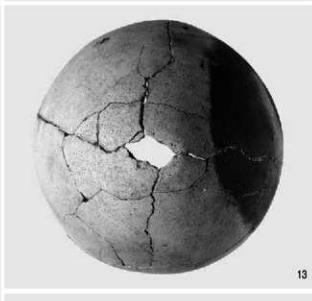




SI303 出土遺物



SI304 出土遺物





SI305 出土遺物

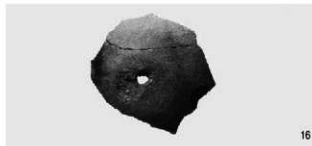


SI306 出土遺物



SI308 出土遺物





SI311 出土遺物



SI310 出土遺物





SI312 出土遺物

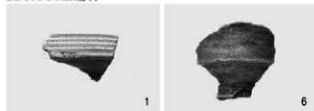


SI313 出土遺物





SB301 出土遺物



SE301 出土遺物



SB303 出土遺物



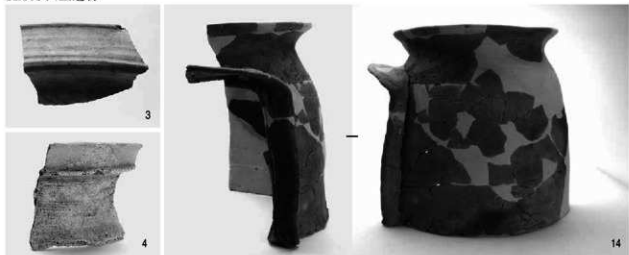
SE302 出土遺物





図版 58

SE303 出土遺物



SE304 出土遺物



SE305 出土遺物



SE306 出土遺物



SE307 出土遺物



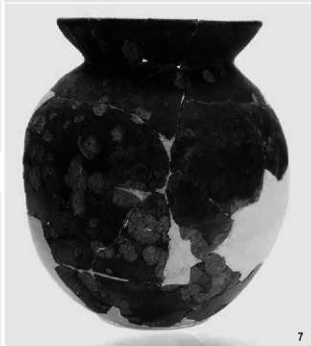
SD302 出土遺物



SK305 出土遺物



SE308 出土遺物



SD301 出土遺物



SK303 出土遺物





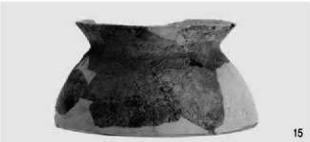


SX301 出土遺物





地層出土遺物 (1)





11



30



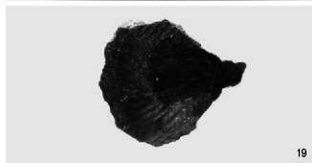
14



32



33



19



35

地層出土遺物 (2)



27



42



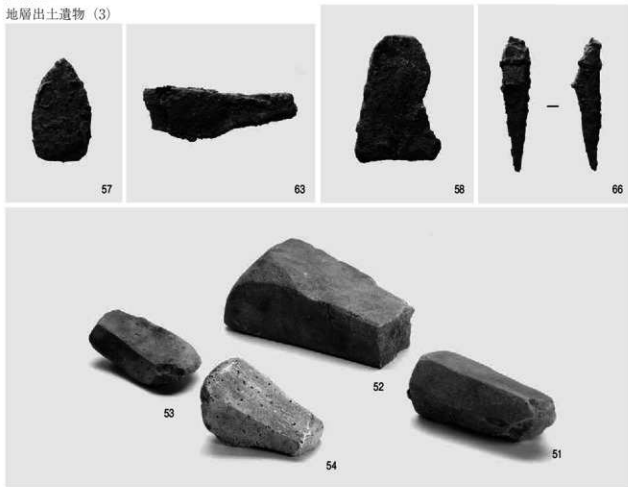
29



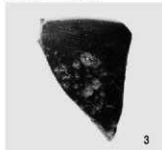
43

図版 64

地層出土遺物 (3)



SD204 出土遺物



SE201 出土遺物



SK201 出土遺物



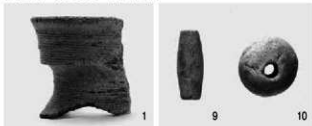
地層出土遺物



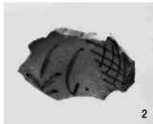
畠 101 ~ 105・南北大畦畔出土遺物



低湿地 (SD101) 出土遺物



SD05 出土遺物



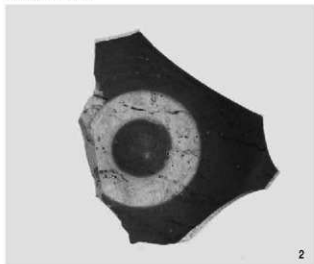


図版 66

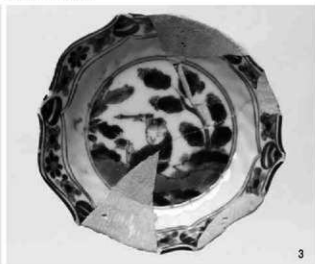
SD07 出土遺物



SD10 出土遺物



SD13 出土遺物



報告書抄録

ふりがな	ばくろうまちいせきに							
書名	博労町遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	25							
編著者名	高橋浩樹 京嶋 覚 渡邊正巳 酒井哲弥							
編集機関	一般財団法人 米子市文化財団 埋蔵文化財調査室							
所在地	〒683-0011 鳥取県米子市福市281番地 TEL・FAX 0859-26-0455 eメールアドレス yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp							
発行年月日	西暦2022年3月31日 令和4年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
博労町遺跡	鳥取県米子市 博労町4丁目	31202	米子市 663	35度	133度	2020年9月12日 ～ 2021年5月31日	3,000㎡	小学校校舎 等改築工事
				26分 10秒	20分 29秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
博労町遺跡	散布地	縄文時代晩期～ 弥生時代後期			縄文土器 弥生土器、石器			
	集落跡	弥生時代終末～ 古墳時代	竪穴建物、掘立柱建物 欄列、井戸、土坑、溝		弥生土器、土師器、須恵器 移動式甕、甕、石製品、鉄製品			
	集落跡	奈良～平安時代	掘立柱建物、竈、井戸		土師器、須恵器、移動式甕			
	生産遺跡	鎌倉～室町時代	土坑、溝、畝間溝状遺構		白磁、土師質土器			
	生産遺跡	江戸時代	畠跡、里道、畦畔		陶磁器、土師質土器、瓦質土器 漆桶、銅製品、木製品			
要 約								
<p>博労町遺跡は、JR米子駅の北約1.3kmの市街地に位置し、日野川の沖積作用などにより形成された海浜砂丘上に立地している。</p> <p>今回の調査では、弥生時代終末～江戸時代の遺構を検出した。</p> <p>弥生時代末～古墳時代は、竪穴建物16棟、掘立柱建物5棟、欄列1条、井戸10基、土坑6基、溝2条を検出した。</p> <p>奈良～平安時代は、掘立柱建物4棟、竈1基、井戸1基、土坑2基、溝6条を検出した。当該期には第1次調査では、官衙が確認されているが、本調査地では、掘立柱建物が存在するものの、官衙に関わる遺物が出土していないことから、本調査地までは官衙の範囲が広がらないと考えられる。</p> <p>鎌倉～室町時代は調査区全域にわたって畠跡と里道、畦畔を検出した。畠跡は南北方向にのびる低湿地と大畦畔及び東西方向にのびる里道によって大きく5区画に分けられている。また、花粉分析や種実同定の結果、イネ・ムギ・ソバ・アズキ・ナスが栽培されていたと推測される。</p> <p>江戸時代は溝15条、土坑1基を検出した。これらは平行あるいは直交するようにのびており、畠の区画あるいは用水として用いられたと考えられる。第1次調査では、総井戸と呼ばれる灌漑用の井戸が検出されているが、本調査地では1基しか検出されておらず、調査地の北東側を流れる米川から直接導水したと考えられる水路(SD13)が存在することから、主に用水路を用いて灌漑が行われたと考えられる。</p> <p>なお、遺構は検出されていないが、縄文時代晩期の突帯文土器と弥生時代中～後期の土器が出土した。第1次調査では、当該期の遺物は出土しておらず、調査地周辺での活動や集落の形成などが伺える。</p>								

一般財団法人米子市文化財団埋蔵文化財発掘調査報告書25

鳥取県米子市

## 博労町遺跡Ⅱ

2022年 3月 31日

編集・発行 一般財団法人 米子市文化財団

〒683-0011 鳥取県米子市福市 281 番地

TEL 0859-26-0455

印刷 勝美印刷株式会社